て國民派と神陵系幸派の屋倒的勝利に歸した當選者及び假當選者の左の如し

◇第一區（一名）

當選　一一一六票　津田守彦（國民派）
次點　四八六票　權藤貫一（國民派）

◇第二區（二名）

當選　二〇八八票　小野隆助（國民派）
當選　二〇五一票　香月恕經（國民派）
次點　一七七六票　多田作兵衛（自由派）
次點　一六五九票　藤金作（自由派）

◇第三區（一名）

當選　一六四五票　郡保宗（國民派）
次點　一二四四票　庄野金十郎（自由派）

◇第四區（一名）

當選　七五五票　佐々木正藏（國民派）
次點　四〇二票　池內虎太郎（自由派）

◇第五區（一名）

當選　一六六一票　中村彥次（國民派）
次點　七五七票　十時一郎（自由派）

◇第六區（一名）

大干渉總選擧後の議會は五月二日召集せられたが、我社はこの殺氣を孕んだ特別議會の報道を萬全ならしめるべく五月一日を期して紙面の刷新を斷行した。

——卽ち新に六號活字を購入して物價、叙任等にこの活字を用ひることゝし、電報を倍加して東京その他各地通信を豐富ならしめ、久留米、小倉をはじめ九州各地に通信員を增加し、編輯局には曩に一月、平田學（焦雨）を入社せしめて充實を圖つたが、更に四月、當時佐賀新聞に健筆敏腕を謳はれてゐた辰巳豐吉（敬民）及び西村義三郎（久留米特派員）の兩名を入社せしめ、編輯陣の完璧を期した。

これが爲に、曩に多大の犧牲を忍んで値下げした紙價を再び從前に復し、特別議會報道の萬全を期すべく社員益田祐之を東京に派遣して之に當らしめた。

二二、詔勅の煥發

國民の聲「橫暴淸國と一戰せざるべからず！」の濃度化につれて第三議會以降、民軍と政府軍との議會に於ける論爭は軍事費、就中海軍擴張問題に集中せられた。第四議會もこのために休會につぐ停會、遂に再び解散の外なき狀態となり、明治廿六年二月十日、畏くも明治大帝の勅語を賜はるに至つた。勅語の大意は、六ケ年間內廷の費を御省き遊ばされ、年々三十萬圓を御下賜、これを軍艦建造費に補足せよと仰せられたものであつた。

この有難き大御心を拜した國民の感激恐懼は非常なものであつた。わけても、頭山社長以下全社員、軍備充足の急務を叫んで、敢てこれに反對する民軍との一戰をも辭さなかつた我社の感激は絶頂點を示し、二月十三日附紙上に「聖詔を奉讀す」と題して左の如く記載してゐる。

（前略）—吾人は三たび聖詔を奉讀して

朕玆に內廷の費を省き六年の間每歲三十萬圓を下附し、以て製艦費の補足に充てしむ

に至りては、嘆ぜざらんと欲するも得ず、泣かざらんと欲するも得ず、覺えず憤然として激し決然として起つ、蓋し吾人は衆議院が國家軍防の必要に係る軍艦製造費の支出を拒みたる結果遂に陛下が內廷費を省き以て製艦費を補足せんとの勅語を發し給ふに至りたるを見て臣子の情、無限の感慨胸に湧き內閣の大臣に對し議會の議員に對し、口、言はんと欲つするもの、身行はんと欲つするもの一去一來遂に覺えず憤慨蹶起するには至れるなり（中略）

民黨議員が年々政府攻擊の武器に使用したる三事件は今や聖明の詔勅を以て一掃し去られたり、蓋し陛下の叡慮は則ち曰く憲法の施行正に初步に屬す、始を愼しみ終を善くし、端を今日に正し大成を將來に期せざるべからず、顧みるに宇內列國の進勢日一日より急なり、今の時に當り紛爭日を曠くし、終に大計を遺し以て國運進張の機を誤るが如きことあらば、祖宗の威靈に奉對するの志にあらず、また憲法の美果を收むる道に非ざるなり（中略）今日、陛下をして此の詔勅を發せしめ奉りたる原因に尋ね到るときは吾人は別に切齒憤慨に堪へざるものあり、矧んや陛下の內廷の費を省き之を以て製艦費に供充するといふが如き吾人忠良なる國民の豈堪へて忍び得る所ならんや、今よりの後、在廷大臣と帝國議會とが此の聖勅に對し奉るの所爲に於て些かにても不忠不臣の跡あるを見るに於ては鬼神其の罪を正し天誅立處に其の身に加はるものあるべし、嗚呼豈恐れて愼まざるべけんや、恭しく聖詔を奉讀して愚誠を吐露する事如斯

この議會でも、例によつて新聞紙條例改正案が問題となり、衆議院を通過して貴族院の修正を受けた。度々發行停止等の厄に遭遇した本紙は、これに就て左の如く論じてゐる。

新聞紙條例改正案の未來

現行の新聞紙條例中最も壓制的野蠻的の分子を包含するものはその第十八條の發行禁止及び停止の條項これ也。——何を以て野蠻的と謂ふ。曰く事由を明示せず人を懲罰に處するものなれば也。何を以て壓制的と云ふ曰く吏權を濫用し人の言語を杜塞するものなれば也。一あれば以て之を立憲政治の法條と爲すに足らず、然るを況や其の二を兼有する專制時代の遺物たる現行の新聞紙條例をや。新聞紙條例を改正するに非ざれば以て立憲治下に於て言論自由の精神を發揚すること能はざるなり。—改正案の成立せんことは吾人の亦最も希望する所なり、只發行禁止の如き發行停止の如き壓制的野蠻的の分子は飽迄之を除却して以て立憲的完美なる新聞紙條例の實行せられんことを將來に希望すといふに過ぎざるのみ、同業諸子は以て如何とするや。

續いて二月二十八日の兩院協議會は、貴族院の修正案「停止は其の事項を指示し日刊新聞にありては一週日以內、其の他にありては三回以內とし豫じめ其の期限又は回數を定むべし」を可決したが衆議院は本會議でその修正案を否決した。本紙は三月一日の紙上に「改正案の精神骨子ともいふべき彼の發行停止の一條を存するに於ては吾人は寧ろ衆議院の否決を賞でゝ今後に於

て本條削除の根本的改正を期せざる可からず」と評してゐる。

二三、安場知事の轉任と九州鐵道

明治十九年、九州探題の意味もあつて特に福岡縣知事として着任してより七ケ年、頭山社長との親交から我が社の創立にも盡力した從三位勳二等安場保和は、明治二十五年七月愛知縣知事に轉ぜられて辭職し、八月貴族院議員に任ぜられた。

安場は熊本縣の出身、小楠門下の逸材で、剛腹、決然、所信を斷行する男であつた。「ヤツキ組の隊長」「九州探題」が彼の綽名で「ヤツキ組の隊長」は、彼が國事縣治に當つてヤツキとなつて突進することから出た綽名である。

縣の殖産興業に盡した安場の功績は列擧の繁に堪へない。門司港の築港、炭礦の開發、運輸、土木建築事業の振興、水産、山林、農業等特に力を注いだが、就中特筆せねばならないのは九州鐵道の創始であつた。九州鐵道は彼の畫策によつて生れ彼の熱意によつて完成したと云つても過言ではないとされてゐる。

安場知事は着任と同時に、數年來行き惱みの狀態となつてゐる鐵道布設のことに着手し、先づ佐賀熊本兩縣知事を勸誘して、創業の任に當るべき發起人を求めて地方有志の勸說に力めた。彼と政論を異にする黨人等は、この大事業を安場の功績たらしめざるべく頻りに阻止運動を試みたが「ヤツキ組の隊長」は巍然として屈せず、九州產業開拓の爲に鐵道の必要を力說して遂に反對黨を屈服せしめ、明治廿一年一月廿一日、佐賀の協和館に於て、福岡、佐賀熊本三縣の創立委員の會議を開くに至り、會社の定款等を作成した。

門司より福岡久留米熊本を經て三角に至る線、西は肥前田代より分岐して佐賀を經て早岐港に至る線、南は肥後の宇土より分岐して八代迄、東は小倉より興津行橋に至る線を敷設することに確定し、其他の線は漸次敷設することゝして同月二十五日に請願書提出、前記三縣知事は請願委員となつて上京し、政府に運動すると共に他面民間資本家を說いた。かくて福岡に創立本部を置き佐賀、熊本に支部を設け事業計畫を進めつゝあつたが、長崎縣に於ても佐世保、長崎間の鐵道計畫があつたので之亦合併して二十一年三月、會社創立日起業の請願を爲し、社長高橋新吉と共に上京百方政府を說いた結果、同年六月二十七日會社設立の免狀及特別保護の免狀を得たものである。

安場の後任には正六位勳六等山田爲嗈が來任した。

二四、創刊五周年記念祝賀會

明治二十五年八月十一日は本紙創刊五周年に當るので社員、社友及び特別本社に緣故あるもの七十六名は四月十四日の日曜日を利用して博多氣儘亭に集まつて一席の賀筵を催し、福陵新報の發展を祝ひ將來の大飛躍を祈つた。當日の出席者を揭げて當時の本社の關係者を知ることゝする。

小野隆助、香月恕經、堤猷久、鹿野淳二、進藤喜平太、大神勳、久田金、吉富安之助、米澤生三、伊知地迁橘、浦上勝太郎、月成功太郎、牟田常儀、結城寅五郎、大岡九十郎、山本大右工門、池田保吉、上瀧萬藏、松野淸十郎、古野保吉、齊藤雅敏、井上定規、大石喜次郎、竹內與七郎、中島勝義、辰巳豐吉、益田祐之、大內義瑛、今村爲雄、平田學、岡喬、高松貞太、佐竹管根、元滿尙雄、松岡直幹、武田德太郎、葉石次郎、熊本福次郎、石原德、尾西要太郎、櫛橋規、笹岡磯丸、木末友太郎、梅野富枝、野村卯之助、的場鐵太郎、藤野磯雄、田代純人、小藤圓太、筒井木股、吉田守四郎、瓜田未樹、菊池鄰、大岡健之助、原繁雄、吉田駒雄、庄野俊次郎、一丸一定、牧熊次郎、淺田龜之助、高松勝三郎、有村重太郎、林龜太郎、中村熊太郎、今泉寅吉、廣渡秀雄、池上勵、吉田音次郎、臼杵久米藏、豐田敏、北原芳次郎、上野勘助、臼杵粂次郎、林市次郎、別府熊吉、原忠右工門

二五、第五回目の發行停止

明治二十六年一月十五日、第四議會開會中、又もや本紙は發行停止を命ぜられた。五度目の災厄である。發停處分の原因をなしたと思はれる記事は筑後川改修工事に關して山田知事を攻擊したものであつた。

卽ち、一月十一日の論說に「山田知事の治縣方針に對する運動」と題して「筑後川改修工事設計變更の處置について筑後地方民の山田知事に對する激昂は日に日に熾烈を極めつゝあり、——三潴郡大川町風浪神社に於て同問題を協議しつゝある地方民が偶々同地視察に赴きたる知事に面會を求めたるところ警官之に解散を命じたり。然れども人民は容易に解散せず、筑後の一天今や不穩の光景を現出しつゝあり」と前提して山田知事の施政を擧げて攻擊し（前略）——而して山田知事の治縣方針に反對の意思を表するもの豈たゞ筑後の一天地のみならんや。吾人は山田知事の爲に一日も早く急流勇退の意を決し以て我福岡一縣の幸福平寧を計らんことを企期の至りに堪へざる也。

蓋し山田知事も亦薩摩健兒なり、是も非も構はず其の方針を押し通して我縣の人心を壓服せんと欲さば請ふ試みに之を爲せ、吾人は山田知事の能く何事をか爲すを見ん。

次いで翌十二日の雜報欄に「福岡縣治の腐敗」「三潴郡に於ける大運動會の

安場は熊本縣の出身、小楠門下の逸材であつた。「ヤツキ組の隊長」「九州探題」が彼の綽名で「ヤツキ組の隊長」は、彼が國事縣治に當つてヤツキとなつて突進することから出た綽名である。

縣の殖産興業に盡した安場の功績は列擧の繁に堪へない。門司港の築港、炭礦の開發、運輸、土木建築事業の振興、水産、山林、農業等特に力を注いだが、就中特筆せねばならないのは九州鐵道の創始であつた。九州鐵道は彼の畫策によつて生れ彼の熱意によつて完成したと云つても過言ではないとされてゐる。

安場知事は着任と同時に、數年來行き惱みの狀態となつてゐる鐵道布設のことに着手し、先づ佐賀熊本兩縣知事を勸誘して、創業の任に當るべき發起人を求めて地方有志の勸說に力めた。彼と政論を異にする黨人等は、この大事業を安場の功績たらしめざるべく頻りに阻止運動を試みたが「ヤツキ組の隊長」は巍然として屈せず、九州産業開拓の爲に鐵道の必要を力說して遂に反對黨を屈服せしめ、明治廿一年一月廿一日、佐賀の協和館に於て、福岡、佐賀熊本三縣の創立委員の會議を開くに至り、會社の定欵等を作成した。

門司より福岡久留米熊本を經て三角に至る線、西は肥前田代より分岐して佐賀を經て早岐港に至る線、南は肥後の宇土より分岐して八代迄、東は小倉より興津行橋に至る線を敷設することに確定し、其他の線は漸次敷設することゝして同月二十五日に請願書提出、前記三縣知事は請願委員となつて上京

一四、倉升五周年記念祝賀會

明治二十五年八月十一日は本紙創刊五周年に當るので社員、社友及び特別本社に緣故あるもの七十六名は四月十四日の日曜日を利用して博多氣儘亭に集まつて一席の賀筵を催し、福陵新報の發展を祝ひ將來の大飛躍を祈つた。當日の出席者を揭げて當時の本社の關係者を知ることゝする。

小野隆助、香月恕經、堤猷久、鹿野淳二、進藤喜平太、大神勳、久田金、吉富安之助、米澤生三、伊知地辻橘、浦上勝太郎、月成功太郎、牟田常儀結城寅五郎、大岡九十郎、山本大右工門、池田保吉、上瀧萬藏、松野淸十郎、古野保吉、齊藤雅敏、井上定規、大石喜次郎、竹內與七郎、中島勝義辰巳豐吉、益田祐之、大內義瑛、今村爲雄、平田學、岡喬、高松貞太、佐竹管根、元滿尙雄、松岡直幹、武田德太郎、葉石次郎、熊本福次郎、石原德、尾西要太郎、櫛橋規、笹岡磯丸、木末友太郎、梅野富枝、野村卯之助的場鐵太郎、藤野磯雄、田代純人、小藤圓太、筒井木股、吉田守四郎、瓜田未樹、菊池鄰、大岡健之助、原繁雄、吉田駒雄、庄野俊次郎、一丸一定牧熊次郎、淺田龜之助、高松勝三郎、有村重太郎、林龜太郎、中村熊太郎今泉寅吉、廣渡秀雄、池上勵、吉田音次郎、臼杵久米藏、豐田敏、北原芳次郎、上野勘助、臼杵粂次郎、林市次郎、別府熊吉、原忠右工門

二五、第五回目の發行停止

明治二十六年一月十五日、第四議會開會中、又もや本紙は發行停止を命ぜられた。五度目の災厄である。發停處分の原因をなしたと思はれる記事は筑後川改修工事に關して山田知事を攻擊したものであつた。

卽ち、一月十一日の論說に「山田知事の治縣方針に對する運動」と題して「筑後川改修工事設計變更の處置について筑後地方民の山田知事に對する激昂は日に日に熾烈を極めつゝあり、——三潴郡大川町風浪神社に於て同問題を協議しつゝある地方民が偶々同地視察に赴きたる知事に面會を求めたるところ警官之に解散を命じたり。然れども人民は容易に解散せず、筑後の一天今や不穩の光景を現出しつゝあり」と前提して山田知事の施政を擧げて攻擊し（前略）——而して山田知事の治縣方針に反對の意思を表するもの豈たゞ筑後の一天地のみならんや。吾人は山田知事の爲に一日も早く急流勇退の意を決し以て我福岡一縣の幸福平寧を計らんことを企期の至りに堪へざる也。

蓋し山田知事も亦薩摩健兒なり、是も非も構はず其の方針を押し通して我縣の人心を壓服せんと欲さば請ふ試みに之を爲せ、吾人は山田知事の能く何事をか爲すを見ん。

次いで翌十二日の雜報欄に「福岡縣治の腐敗」「三潴郡に於ける大運動會の景況」「山田知事旅館前の大騷動」など筑後川改修工事計畫變更反對の地方民の運動の狀況を報道したのが當局の忌諱に觸れたものであつた。しかし、果して治安妨害の記事と認め得るか否かは疑問であつた。

本社の前主筆川村惇は、これに對して次の如き意味の「解停祝」の書狀を寄せてゐる。

——驚きて何故の停止かと停止兩三日前の新報を繰返し見たるに治安妨害らしき處は何としても見當らず、漸く見出したるは知事旅館前の喧嘩騷ぎなり、是か知らんと一度は膝を打ちしものゝ如何に地方官が治安妨害を濫用すればとて酒興の上の喧嘩騷ぎまで天下の治安を妨害するものと認むる筈もなし、この外には三潴郡に於ける運動會の景況より外にはこれと思はれる記事更になし、若し果して然りとすれば誠に怪しからぬ次第なり。若し運動會の景況を記載して發行停止の處分を爲さば何故に該運動會を許可したる當該警察署長を罰せざるや、運動會を公認し、その運動會の記事を記載したる新聞紙が罰せらる、天下の奇なりと謂ふべし。東京の朝野新聞、讀賣新聞も福陵新報と同樣なる記事を揭載したるも幸ひに山田知事に非ずして停止の厄を免れたり。

停止三週間、二月五日解停の通知に接したので七日附には停刊中の重要記事を滿載した數頁の附錄を發行して讀者に詫びたが、福陵新報停刊中新に福陵新報社內から發刊せられた「玄洋新報」の發刊祝辭に主筆中島勝義が「玄洋新報生る。余は汝の生誕を祝すると同時に、汝が野蠻的法理眼の爲めに發行停止の災厄に罹るの日あらんことを弔せざる可からず、健全なれや玄洋新報我れ汝の爲めに時日を借り、必ず發行停止の野蠻法律を破壞してくれん！」と激語してゐるごとく、今回の發停は餘程癪に障つたと見へて、解停當日の雜報欄に「國利民福を計り社會の治安を企圖する我が福陵新報は一、二官吏の目に治安妨害のものと反對に認められ、去月十五日より本月五日まで三七二十一日間分らずやに發行を停止され、讀者諸君に非常なる不便を與へ剩へわが社は營業上大妨害を蒙りたるは馬鹿げたと言はんか呆れたと云はんか、文明世界の暗黑法律、物の分らぬ人々に濫用せらるゝは眞に劍呑至極といふべし。されど既に解停の上は舊によりて直筆を揮ひ社會の害毒を攘ふは勿論發行停止の野蠻法律の如きは彼の分らずやの大將に一と泡吹かするも正に遠からざるうちなるべし。爰に福陵新報の萬歲を自祝す」と記載したが、これが又祟つて、時の福岡縣保安課長鈴木警部は「內務大臣を侮辱するものなり」と我が社の編輯人石原德を官吏侮辱罪で告訴した。二月廿五日福岡地方

裁判所で公判開廷、中島主筆は特別辯護人として滔々法廷を壓する雄辯を揮つたが、遂に重禁錮一ケ月十五日、罰金五圓の判決を受け、直に控訴し次いで大審院に上告したが五月十八日棄却されて原審どほり石原德は投獄された。

しかしながら、この月の廿八日には山田知事は大分縣に左遷され入れ代りに大分縣知事從四位勳四等岩崎小二郎が福岡縣知事として來任した。

二六、千島艦沈沒事件

明治二十五年十一月三十日、伊豫沖合に於ける千島艦沈沒事件が勃發した。千島艦は、日清開戰を前に我海軍が佛國に注文した新銳水雷驅逐艦で、四ケ年の歳月を閱して完成、佛國より東京へ廻航の途中、伊豫沖合に於て英國汽船ラベンナ號と衝突、乘組員七十餘名と共に海底の藻屑と消へたのであつた。

椿事勃發と共に我が社では乘組員遺族への義捐金を募つた結果、百七十二圓六十六錢二厘に達したので、內百五十圓を海軍省に托し、殘餘の二十二圓餘を以て翌二十六年三月二十日、箱崎宮に於て、香椎、筥崎兩宮の神官に依つて遭難者慰靈祭を嚴修したが、知事をはじめ官吏、軍人、各學校生徒及び一般の參列參拜者は境內を埋めた。

二七、中島町第一次移轉

躍進をつゞくる本社の社勢は、間もなく、橋口町の社屋をして狹隘ならしむるに至り、明治二十六年六月十一日、當時博多のメインストリート中島町六十一番地に第二回目の移轉を行つた。（現在の松島屋旅館の東二軒目）

移轉と同時に、陣容を改め、機械器具を增設整備し、題字を代へ全く面目を一新し、七月十六日付より新紙面がお目見得したが、改良の要點は

一、ロール機械を一臺購入、從來の一臺に加へ二臺となり、印刷能力を倍加したること

一、活字、二、三、四、五、六、七號を大量購入、其他これに伴ふ附屬品を揃へ、特にルビ付六號活字を倍加して婦女子の閱讀に便ならしめたこと

一、從來の五號二十四字詰一段五十八行、一頁五段制を改めて一行二十二字詰一段六十行とし、段數は再び六段制に復し、七號活字を加へた爲に從來に比して約一萬字以上の增加となつたこと

一、編輯局へ新に山陽鐵道の運輸課長で慶應義塾出身の理財學士林和太郎を入社せしめ、前主筆川村惇の外、川崎三郎、束松伊織、杉山虎雄等の社友が特別寄稿をなすことゝなり、九州の新聞界へ君臨する筆陣を布いて完璧を築いたこと

その他、東京には時勢に通曉した敏腕通信員を增員し、百般の整備充實を行つたが、當時の社告には「…福陵新報の論說は雄渾にして快活なり、其の記事報道は精確にして明瞭なり、其の小說は纖麗にして豐富なり」と揭げてゐる。編輯人は櫛橋矩が尾西要太郎と代り發行印刷人は熊本福次郎、講讀料は值上げしなかつた。

改良當日の紙上には「記者の抱負」と題して主筆中島勝義が左の如く氣焰を擧けてゐる。

覆天載地、森羅萬象、粹然トシテ襍ルモノ、雜然トシテ群ルモノ、收テ之ヲ一片ノ紙上ニ揭ゲ、新聞其物ノ領地、亦廣且大ニアラズ耶、吾人新聞記者、僭ヲ天ニ享ケテ、職ヲ世ニ盡スモノ、自ラ布衣ノ大臣ヲ以テ任ジ昂々然トシテ氣振ヒ意揚ル、其ノ政治ヲ論ズルヤ國家ヲ以テ地盤トシ、道理ヲ以テ武器トシ、中正ノ旗幟ヲ樹テ、利國福民ノ陣營ヲ張ル、天下復タ之ニ加フル者アラムヤ、其ノ社會百般ノ事項ヲ報ズルヤ論評以テ進步ヲ促シ警戒以テ注意ヲ惹カシメ實ヲ實トシ、虛ヲ虛トシ、敢テ苟モ筆ヲ扛ゲ心ヲ欺キ、以テ彼ノ阿世ノ徒ノ輩ニ做フ無シ、若夫レ水花鏡月ノ美想ト、物我有無ノ玄理ニ至リテハ、吾人時ニ之ヲ說イテ知己ヲ江湖ノ廣キニ待ツ而已蓋シ大言ハ俚耳ニ入ラズ、陽春白雲ハ和スルニ稀ナリ、吾人其レ將タ之ヲ奈何セム哉。

我ガ筑豐ノ山水秀靈ニシテ、古ヨリ多ク豪傑ノ士ヲ出セリ。而シテ今ヤ寥々トシテ絕テ聞ク所ノモノナキハ何ゾヤ。豈ニ山崩シ水腐シ士氣ノ索然トシテ滅廢シタル耶。否々、龍門ノ嶽英彥ノ山、巍然トシテ雲表ニ出デ、鬱々タリ、蒼々タリ。玄界ノ洋、有明ノ海、蕩然トシテ際涯ナク、汪々タリ、洋々タリ。今ノ筑豐三國、亦古ノ筑豐三國ト相同ジク然ルノミ。想フニ豪傑ノ士、其レ必ズ此間ニ在リテ吾人ノ言ニ首肯セム。但我レ未ダ之ヲ知ラズ。

吾人ハ新聞記者トシテ廣大ナル領地ヲ有スル無位ノ一天官ナリ、吾人ノ身ハ殺スベシ、吾人ノ筆ハ奪フ可ラズ、吾人ノ舌ハ拔クベシ、吾人ノ思想ハ奪フ可ラズ、今ヤ吾人三國ノ士ヲ友トシ、國家的自由ノ說ヲ唱道シ以テ福陵新報ノ新詞壇ニ立ツ、來者ハ拒マザル也、去者ハ追ハザル也。吾人ハ只ダ國家ヲ重ヨリ是等友人ノ恩ニ酬ユル所以ノモノ亦能ク其ノ本然ノ天職ヲ盡スニ外ナラザルヲ信ズル也。

社告を揭げた福陵紙

この改良で目立つのは、この頃からそろ〳〵今日の大見出しの萠芽を見せてゐることである。從來本文と見出しは同號の活字を用ひ二號活字の見出しを用ふることは年に三回か四回といつた程度であつたが、改良記念號には一項毎に二號活字の見出しを用ひてゐる。

記念號は二頁增頁し、數千部を增刷して福岡縣下各地に配布進呈した

二八、移轉式

移轉式は、紙面改良當日の十六日（日曜日）午後一時から博多東中洲共進館で盛大に擧行された。

―式場の表裏には國旗を交叉し門內には「權倒一世之智勇」「拓開萬古之心胸」と大書したる二旒の白旗颺風に飜り、更に進めば大きな竹門あり、其上に「福陵新報移轉式」と分書したる八箇の提燈を吊し、紫の幔幕を張り、階上階下無數の提燈及彩旗を掛け聯ね、階上正面にも國旗二旒を叉して式場の體裁總べて缺ぐる外なく備はりぬ―

當日の式場の模樣である。

千島艦は、日淸開戰を前に我海軍が佛國に注文した新銳水雷驅逐艦で、四ケ年の歲月を閱して完成、佛國より東京へ廻航の途中、伊豫沖合に於て英國汽船ラベンナ號と衝突、乘組員七十餘名と共に海底の藻屑と消へたのであつた。

椿事勃發と共に我が社では乘組員遺族への義捐金を募つた結果、百七十二圓六十六錢二厘に達したので、內百五十圓を海軍省に托し、殘餘の二十二圓餘を以て翌二十六年三月二十日、箱崎宮に於て、香椎、筥崎兩宮の神官に依つて遭難者慰靈祭を嚴修したが、知事をはじめ官吏、軍人、各學校生徒及び一般の參列參拜者は境內を埋めた。

二七、中島町第一次移轉

躍進をつゞくる本社の社勢は、間もなく、橋口町の社屋をして狹隘ならしむるに至り、明治二十六年六月十一日、當時博多のメインストリート中島町六十一番地に第二回目の移轉を行つた。(現在の松島屋旅館の東二軒目)

移轉と同時に、陣容を改め、機械器具を增設整備し、題字を代へ全く面目を一新し、七月十六日付より新紙面がお目見得したが、改良の要點は

一、ロール機械を一臺購入、從來の一臺に加へ二臺となり、印刷能力を倍加したること

一、活字、二、三、四、五、六、七號を大量購入、其他これに伴ふ附屬品を

その他、東京には時勢に通曉した敏腕通信員を增員し、百般の整備充實を行つたが、當時の社告には「…福陵新報の論說は雄渾にして快活なり、其の記事報道は精確にして明瞭なり、其の小說は纖麗にして豐富なり」と揭げてゐる。編輯人は櫛橋矩が尾西要太郎と代り發行印刷人は熊本福次郎、講讀料は値上げしなかつた。

改良當日の紙上には「記者の抱負」と題して主筆中島勝義が左の如く氣焰を擧げてゐる。

覆天載地、森羅萬象、粹然トシテ樸ルモノ、雜然トシテ群ルモノ、收テ之ヲ一片ノ紙上ニ揭ゲ、新聞其物ノ領地、亦廣且大ニアラズ耶、吾人新聞記者、爵ヲ天ニ享ケテ、職ヲ世ニ盡スモノ、自ラ布衣ノ大臣ヲ以テ任ジ昂々然トシテ氣振ヒ意揚ル、其ノ政治ヲ論ズルヤ國家ヲ以テ地盤トシ、道理ヲ以テ武器トシ、中正ノ旗幟ヲ樹テヽ、利國福民ノ陣營ヲ張ル、天下復タ之ニ加フル者アラムヤ、其ノ社會百般ノ事項ヲ報ズルヤ論評以テ進步ヲ促シ警戒以テ注意ヲ惹カシメ實ヲ實トシ、虛ヲ虛トシ、敢テ苟モ筆ヲ扛ゲ心ヲ欺キ、以テ彼ノ阿世ノ徒ノ輩ニ做フ無シ、若夫レ水花鏡月ノ美想ト、物我有無ノ玄理ニ至リテハ、吾人時ニ之ヲ說イテ知己ヲ江湖ノ廣キニ待ツ而已蓋シ大言ハ俚耳ニ入ラズ、陽春白雲ハ和スルニ稀ナリ、吾人其レ將タ之ヲ奈何セム哉。

我ガ筑豐ノ山水秀靈ニシテ、古ヨリ多ク豪傑ノ士ヲ出セリ。而シテ今ヤ寥々トシテ絕テ聞ク所ノモノナキハ何ゾヤ。豈ニ山崩シ水腐シ士氣ノ索然トシテ滅廢シタル耶。否々、竈門ノ嶽英彥ノ山、巍然トシテ雲表ニ出デ、鬱々タリ、蒼々タリ。玄界ノ洋、有明ノ海、蕩然トシテ際涯ナク、汪々タリ、洋々タリ。今ノ筑豐三國、亦古ノ筑豐三國ト相同ジク然ルノミ。想フニ豪傑ノ士、其レ必ズ此間ニ在リテ吾人ノ言ニ首肯セム。但我レ未ダ之ヲ知ラズ。

社告を揭げた福陵紙

吾人ハ新聞記者トシテ廣大ナル領地ヲ有スル無位ノ一天官ナリ、吾人ノ身ハ殺スベシ、吾人ノ筆ハ奪フ可ラズ、吾人ノ舌ハ拔クベシ、吾人ノ思想ハ奪フ可ラズ、今ヤ吾人三國ノ士ヲ友トシ、國家的自由ノ說ヲ唱道シ以テ福陵新報ノ新詞壇ニ立ツ、來者ハ拒マザル也、去者ハ追ハザル也。吾人ハ只ダ國家ヲ重ンジ、國民利福ヲ共ニシテ以テ外ニ國光ヲ宣揚スルノ目的ヲ達セザレバ止マザラムトスル也。豈ニ他有ラム哉。我レ吾ガ天職ニ答フルアラバ足ル矣

福陵新報ハ、獨立獨行、現在ノ黨派以外ニ超然タル新聞紙ナリ。實業家モ之ヲ友トシ、政治家モ之ヲ友トシ、文學家、宗教家、法律家、教育家、凡ソ世ニ有リトアラユル各階級各種族ノ人々、皆我ガ福陵新報ノ友人ニアラザル莫シ。福陵新報ノ領地ノ廣且大ナル所以、亦皆是等多數友人贊助ノ賜ニアラザルハ莫シ。寔ニ謝セザル可ケム哉。然リト雖ドモ福陵新報ガ今ヨリ是等友人ノ恩ニ酬ユル所以ノモノ亦能ク其ノ本然ノ天職ヲ盡スニ外ナラザルヲ信ズル也。

この改良で目立つのは、この頃からそろ〳〵今日の大見出しの萠芽を見せてゐることである。從來本文と見出しは同號の活字を用ひ二號活字の見出しを用ふることは年に三回か四回といつた程度であつたが、改良記念號には一項毎に二號活字の見出しを用ひてゐる。

記念號は二頁增頁し、數千部を增刷して福岡縣下各地に配布進呈した

二八、移轉式

移轉式は、紙面改良當日の十六日(日曜日)午後一時から博多東中洲共進館で盛大に擧行された。

—式場の表裏には國旗を交叉し門內には「權倒一世之智勇」「拓開萬古之心胸」と大書したる二旒の白旗颯風に飜り、更に進めば大きな竹門あり、其上に「福陵新報移轉式」と分書したる八箇の提燈を吊し、紫の幔幕を張り、階上階下無數の提燈及彩旗を掛け聯ね、階上正面にも國旗二旒を叉して式場の體裁總べて缺ぐる外なく備はりぬ—

當日の式場の模樣である。

參會者は岩崎福岡縣知事を始め諸官廳官吏、小野、津田、郡の三代議士、縣會議員、實業家等、官民四百餘名に上つた。式後祝宴は音樂隊の奏樂裡に博多花街の藝妓七十餘名斡旋した。

一方、中島町の本社では社屋に數百の提灯を吊るし、その頃博多には珍奇な「電燈」を社前に點したが、この「電燈」を見物せんと押しかけた人々で社前は黑山を築き通行止になる難踏であつた。この電燈は、東京電氣學會々員花藤要といふ人が蓄電池によつて點したものであつた。

須崎舊臺場、博多棧橋、龍華院土堤、住吉土堤の數ケ所からは景品券入、（浴衣地一反、福陵新報購讀券）の煙火を打揚けて興趣を添へた。

祝辭、祝電の主なるものは左の如し。

福陵新報社長　頭山滿

（進藤喜平太代讀）

△祝電＝金子堅太郎、安場保和、添田壽一、佐々木正義、香月恕經、武井忍助、大阪每朝、馬關每日、大分日報、宮崎新報、大阪每日門田正經、毛里保太郎、西川通徹、廣瀨千麿、野田卯太郎、中村彦次、堤猷久、豐前銀行神崎從藏、三宅通俞、古谷滿二郎、久野春次郎、谷口默次、吉田宗三郎、他多數

△祝辭＝岩崎小二郎、小野隆助、郡保宗、津田守彦、權藤貫一、小野隆太郎江藤正澄、黑瀨純貞、九州日々新聞代表山田珠一、鹿兒島每日、山本盛房川崎三郎、川村惇、眞崎吉太郎、玄洋社々長進藤喜平太、他多數

頭山社長の自祝の辭　膽識宏濶、異同を打し物我を合し以て坤球の面を一拭す。丈夫の本事畢究當に此の如けむ、我福陵新報玄海の濱に生れ年を經ること已に七年、國家的自由主義を偶述して個人の私を其中に包容し保守に僻せず進歩に踣せず世を憂ひ身を忘れ或は藩閥の弊政を刺して立憲の根本に培ひ或は對外の輿論を定めて國家の將に危からんとするを救ふ、蓋し福陵新報の自期する所常に國家千萬年の隆昌を贊畫せんとするに在る也。彼の朝季の夕乎紛々たる蝸角蠻觸の小爭は我徒冷眼、只之を兒戲視せむのみ、抑も近年士氣の衰廢は內に在りて己に風敎道德の泉源を枯涸せしめ政爭政派の軋轢、外に向ひて遂に我國人民の滋養を吸收するの遑なし。嗚叫我が新報の論じて天下に向ふ所其れ斯に在る乎、其れ斯に在る乎、若夫れ我社の本領更に廣且大なる者有り焉。天下知己ありて其れ必ず之を知らむ。一言を記して祝詞に代ゆ

明治二十六年七月十六日

當日、本社前に揭けた電燈は福博全市の興味を聚めたものであつたが、これに就いて本紙は左の如き興味ある記事を揭けてゐる。

本社前の電氣燈　都會は無論地方に因りては電燈も古めかしけれど、當地にては只だ電燈の談話のみ聞き未だ實物を見られざる人々も多かめればとて東京電氣學會員花藤要氏の勞を煩はして本夜（午後八時より十二時迄）我が社前に電燈を點し福博市街の人々の縱覽に供することゝせり。

扨て此の電燈は四燭光三個を白銀蓮花の中に三燭光一個を蓮の葉に見立てたる鏡面の上に仕掛け、合計四箇十五燭光の光力を綜合して福陵新報社の額上より市街を映射せしむるものなり其の光力は一燭光につき洋蠟直徑七分位ひのものに點火したると同じく、又日本蠟二十匁掛けのものに比敵すると云へば十五燭光の光力は隨分鮮やかなるものならん、右に用ふる所の電池は花藤氏の新考案に係る輕便强流電池にして八時より十二時迄の四時間に八十個を要し（二時間に四十個づゝ）藥品は硫酸五ポンド、硝酸五ポンドを消費する迄なり

若し數年の後、我が福博市街各戶に電氣燈を採用することゝならんか、我が福陵新報社は實に電燈點用の元祖にして、花藤氏亦た電燈紹介者の名譽を貽すべきなり、本夜我が社擔頭の球燈には故らに點火せず、電燈の光明を亂さんことを恐るゝが爲なり。

二九、福陵新報の終刊（日清戰爭と本社）

日清戰爭は、明治二十七年七月二十五日、豐島沖の海戰で火蓋を切つた。これより先「橫暴淸國を膺懲すべし！」と輿論の先頭に立ち、これに備へるためには流血の慘事も意とせずして民軍の壓伏に奔命した我が社及び社長頭山滿の率ゐる玄洋社は、陸軍の川上參謀次長、外務大臣陸奧宗光等と默契して弱腰の政府鞭韃につとめ來つた。頭山社長や玄洋社の平岡浩太郎、的野半介等が主唱となつて組織した日淸戰爭の火附け役「天佑俠」が朝鮮に於ける活躍は、日淸戰役裏面秘史の華である。後の社長大原義剛は、內田良平と共に天佑俠の勇士であつた。

したがつて、愈よ日淸火蓋を切るや、我社の活氣は橫溢した。殆んど連日號外を發行して戰況を審にし、或ひは又現地に在つて特別任務に活躍しつゝある玄洋社員の事を揭け、大本營を廣島に進め給ふや大內義暎（劍俠生）を廣島に派遣し、出帥の關門、馬關には早川方明を派遣し、戰地特派員としては奈良崎八郎、藤本磯雄、本庄掬水（以上陸軍に從軍）海軍從軍記者としては末永節が軍艦扶桑に乘組み、臺灣攻略には淺井守敏、奈須義貞を特派從軍せしめて生々しい實戰記事を揭け、戰場スケツチの木版畫を挿入して報道の萬全を盡くした。

軍艦扶桑に乘組んで威海衛攻擊に參加した末永特派員の記事「雲濤日錄」の一節を左に揭ける。

「——待ちに待ちし一月二十八日は來りぬ、予は鉛筆を削り手帳を開きて風雲の變化を待てり、ア、戰意勃々たる帝國軍艦は奈邊に駛走して何等の活ざりけり、それはその筈なり、一方は地上に据付けたる砲臺より狙ひ擊ち我は一時間幾哩の速力を以て走り且つ水上波浪の動搖に上下左右せられ標準標的を狙はんとす、熟練錬達の士に非ざれば能はざるなり、而して我海軍よく熟達し大抵命中點を誤まらずと雖も惜むらくは我艦の如きは彈達三千五百餘メートル、四千五百餘メートルの砲臺に達するを得ず彈丸多くは水際に落ちて其の達するもの僅に三發に過ぎず、唯高雄は新式砲にして彈達よく機を得る。

予はこの日檣樓にありて之を見る、高樓千里、能く彼我の戰況を察すべし聞く彈丸の空を掠むるや人必ず腰を折り首を縮むと、予遂にその機を知らず、敵彈一發、我艦尾百米の海中に落ち拳大の彈片倒さに飛んで我艦左舷の上甲板を碎きぬ、されども幸に一人の負傷者も見ず、後これを拾ふて驗するに二十一珊以上の巨丸なるべしとの鑑定つきぬ、危ふかりしことなり（中略）——戰鬪に臨む前汁粉出來たりとて卓上皆椀を捧げて佳味に飽く、又頃來小說十數種を贈り來れるを以て皆之を讀むに忙しく、時としては一室皆冊をのべて一心凝視、更に一人の談話を試むるなく無人の境に在る如きことあり、從容として逼らず、騷がざるところ眞に場所馴れたりといふべし。

他多數

△祝辭＝岩崎小二郎、小野隆助、郡保宗、津田守彦、權藤貫一、小野隆太郎、江藤正澄、黒瀬純貞、九州日々新聞代表山田珠一、鹿兒島每日、山本盛房、川崎三郎、川村惇、眞崎吉太郎、玄洋社々長進藤喜平太、他多數

頭山社長の自祝の辭　膽識宏濶、異同を打し物我を合し以て坤球の面を一拭す。丈夫の本事畢究當に此の如けむ、我福陵新報玄海の濱に生れ年を經ること已に七年、國家的自由主義を偶述して個人の私を其中に包容し保守に僻せず進歩に踣せず世を憂ひ身を忘れ或は藩閥の弊政を刺して立憲の根本に培ひ或は對外の輿論を定めて國家の將に危からんとするを救ふ、蓋し福陵新報の自期する所常に國家千萬年の隆昌を贊畫せんとするに在る也。彼の朝季の夕乎紛々たる蝸角蠻觸の小爭は我徒冷眼、只之を兒戲視せむのみ、抑も近年士氣の衰廢は內に在りて己に風敎道德の泉源を枯涸せしめ政爭政派の軋轢、外に向ひて遂に我國人民の滋養を吸收するの遑なし。嗚叫我が新報の論じて天下に向ふ所其れ斯に在る乎、其れ斯に在る乎、若夫れ我社の本領更に廣且大なる者有り焉。天下知己ありて其れ必ず之を知らむ。一言を記して祝詞に代ゆ

明治二十六年七月十六日

東京電氣學會員花藤要氏の勞を煩はして本夜(午後八時より十二時迄)我が社前に電燈を點し福博市街の人々の縱覽に供することゝせり。

扨て此の電燈は四燭光三個を白銀蓮花の中に三燭光一個を蓮の葉に見立てたる鏡面の上に仕掛け、合計四箇十五燭光の光力を綜合して福陵新報社の額上より市街を映射せしむるものなり其の光力は一燭光につき洋蠟直徑七分位ひのものに點火したると同じく、又日本蠟二十匁掛けのものに比敵すると云へば十五燭光の光力は隨分鮮やかなるものならん、右に用ふる所の電池は花藤氏の新考案に係る輕便强流電池にして八時より十二時迄の四時間に八十個を要し(二時間に四十個づゝ)藥品は硫酸五ポンド、硝酸五ポンドを消費する迄なり

若し數年の後、我が福博市街各戶に電氣燈を採用することゝならんか、我が福陵新報社は實に電燈點用の元祖にして、花藤氏亦た電燈紹介者の名譽を貽すべきなり、本夜我が社擔頭の球燈には故らに點火せず、電燈の光明を亂さんことを恐るゝが爲なり。

二九、福陵新報の終刊（日清戰爭と本社）

日清戰爭は、明治二十七年七月二十五日、豐島沖の海戰で火蓋を切つた。これより先「橫暴清國を膺懲すべし！」と輿論の先頭に立ち、これに備へるためには流血の慘事も意とせずして民軍の壓伏に奔命した我が社及び社長頭山滿の率ゐる玄洋社は、陸軍の川上參謀次長、外務大臣陸奥宗光等と默契して弱腰の政府鞭韃につとめ來つた。頭山社長や玄洋社の平岡浩太郎、的野半介等が主唱となつて組織した日清戰爭の火附け役「天佑俠」が朝鮮に於ける活躍は、日清戰役裏面秘史の華である。後の社長大原義剛は、內田良平と共に天佑俠の勇士であつた。

したがつて、愈よ日清火蓋を切るや、我社の活氣は橫溢した。殆んど連日號外を發行して戰況を審にし、或ひは又現地に在つて特別任務に活躍しつゝある玄洋社員の事を揭げ、大本營を廣島に進め給ふや大內義暎(劍俠生)を廣島に派遣し、出帥の關門、馬關には早川方明を派遣し、戰地特派員としては奈良崎八郎、藤本磯雄、本庄掬水(以上陸軍に從軍)海軍從軍記者としては末永節が軍艦扶桑に乘組み、臺灣攻略には淺井守敏、奈須義貞を特派從軍せしめて生々しい實戰記事を揭げ、戰場スケツチの木版畫を挿入して報道の萬全を盡くした。

軍艦扶桑に乘組んで威海衞攻擊に參加した末永特派員の記事「雲濤日錄」の一節を左に揭ける。

「——待ちに待ちし一月二十八日は來りぬ、予は鉛筆を削り手帳を開きて風雲の變化を待てり、ア、戰意勃々たる帝國軍艦は奈邊に駛走して何等の活劇を演ぜんとするか、計らざりき「出發見合せ」の命を耳にせんとは……予は呆然半餉、心平かなる能はず、窓外を窺へば風雲漫々波際の漣檣影動搖して時に白鷗の無心に舷頭に舞ふを見るのみ、晩餐の時は來れり、各々一堂に會す、笑語嘻々(中略)：我隊は劉公島砲臺に向つて砲擊を始めぬ、敵は砲臺及び四隻の軍艦より打出し盛んに累發して近寄るべからず、八月三十五分旗艦より信號あり、第二陣形を造る九時半「陸軍は威海衞砲臺を占領せり」との報知あり、更に「第二遊擊隊は月島劉公島を砲擊せよ」の命令に接しやがて十二時頃まで双方擊合ひけるが何時勝負のつくとも見えざりけり、それはその筈なり、一方は地上に据付けたる砲臺より狙ひ擊ち我は一時間幾哩の速力を以て走り且つ水上波浪の動搖に上下左右せられ標準標的を狙はんとす、熟練錬達の士に非ざれば能はざるなり、而して我海軍よく熟達し大抵命中點を誤まらずと雖も惜むらくは我艦の如きは彈達三千五百餘メートル、四千五百餘メートルの砲臺に達するを得ず彈丸多くは水際に落ちて其の達するもの僅に三發に過ぎず、唯高雄は新式砲にして彈達よく機を得る。

予はこの日檣樓にありて之を見る、高樓千里、能く彼我の戰況を察すべし聞く彈丸の空を掠むるや人必ず腰を折り首を縮むと、予遂にその機を知らず、敵彈一發、我艦尾百米の海中に落ち拳大の彈片倒さに飛んで我艦左舷の上甲板を碎きぬ、されども幸に一人の負傷者も見ず、後これを拾ふて驗するに二十一珊以上の巨丸なるべしとの鑑定つきぬ、危ふかりしことなり(中略)—戰鬪に臨む前汁粉出來たりとて卓上皆椀を捧げて佳味に飽く、又頃來小說十數種を贈り來れるを以て皆之を讀むに忙しく、時としては一室皆冊をのべて一心凝視、更に一入の談話を試むるなく無人の境に在る如きことあり、從容として逼らず、騷がざるところ眞に場所馴れたりといふべし。

日清戰爭開始から終末まで、本紙は各戰地特派員の記事で紙面を飾つてるが、左にその一端を揭げる。

丁提督の降服　二月十三日威海衞に於て　扶桑乘組　末永節

二月十一日午前六時敵艦鎭北は白旗を揭げて來り旗艦松島に就て乞ふ所あらんとす、提督丁汝昌病に伏するの故を以て廣丙艦長程璧光代つて來れるなり、其乞ふ所未だ悉知すべからずと雖も左の數條件なりといふ。

一、軍艦砲臺は勿論兵器彈藥等は貴下に致さん

一、將士の死を免じて一人をも誅戮したまふ勿れ、死を宥されざれば寧ろ兵器彈藥を燒棄し軍艦を破壞して身も亦た焦土たらんのみ

一、捕虜となることを免ぜられよ、捕虜となれば寧ろ誅せられるに若かず而して我は明日十二日午前十時迄に決答すべき事を約せり、程壁光は頗る辯才あり外國語に巧みなり、年紀四十に滿たず官位は我少佐に相當す、鎭北は粤東艦隊の一部にして四百噸なり、程壁光は中々話せる男にて淸國には珍らしき人物なりと云ふ、降服談判の際、頗る快話洒落にして能く大事を決するに足るの敏腕を示せり、彼は黃海戰爭の寫眞を一覽したしと乞ふなど洒落た事を云へり、生憎松島には此の寫眞なかりしを以て遂に之を見せることを得ざりしは遺憾、それより我は大山陸軍大將及び伊東海軍中將より送達せし勸降書は如何せしやと問ひしに程答へて曰ふ、丁汝昌は之れを受けて潛然涙を絞り扨て將士を一堂に會して右の書翰を朗讀せり、丁汝昌は人心の皆降服に傾けるを見て愧然涙を呑み、切齒して曰く、諸君降らんと欲せば則ち降れ、日本には余が知己親友ありて斯の如く親切なり、諸君降ると雖も決して之れを殺さゞらん、諸君降らんと欲せば則ち降れ、然れども汝昌は氣骨を具するの男兒なり、勢窮して此に到るも豈に祖宗の國土を甘じて之れを敵人に付せんや、臣子の分當死のみ、人情豈に死を樂しみ生を惡むものならんや、諸君にして若し降らんと欲せば先づ汝昌の頭を斬れ、汝昌にして猶ほ存する以上は敢て降を言ふを許さずと、是に至つて將士同心奮つて死生を共にせんことを誓ふ、既にして丁汝昌又曰く、友誼に於ては誠に感ずる所ありと雖も報國の義務は余之を棄つる能はず余や只一死あるのみと、ア、壯なる哉、烈なる哉、敵ながらも天晴れの丁提督

明くれば十二日、我は丁提督の降伏を許容せり、劉公島の守備兵及び外人等は一切解放することゝなりぬ、城を枕にして死せんと誓ひたる丁汝昌は臣が事畢るとて十三日午前十一時遂に自殺を遂げぬ、嗚呼丁汝昌、苦守力拒すること二週日、我が二十餘隻の艦隊と三萬有餘の精兵とを以て容易に之を拔くこと能はず、遂に力屈し彈丸つきて後止む、汝昌一たび去つて淸國又海軍なし、渤海の關門は縱橫他の航行に任す、天津一驅して達すべく、第一軍の糧食は直ちに之を牛莊より送達すべく、牛莊の兵は天津に送るべく、威海の兵は牛莊に移すべく、威海衞破れて天津北京指顧の中に定むべき也。素牛白馬、面縛して降を軍門に乞はしむる豈に三月を出でんや威海衞の敵艦は之を本國に致すべく十一隻の水雷艇は皆以て用ふるに足る其中第一の大形水雷艇福龍は直ちに我第二艇隊の司令艇に編制せられたり明日(十四日)は愈よ敵艦及劉公島を占領して旭日の旗章翻々、海風に飜へるを見ん。

遼雲燕雨　榮城灣にて　奈良崎八郎

櫻花國の上國を離れ朔漢の蠻地に急げば、寒氣は已に上國の客を迎へて皮膚の中堅を衝かんとす、火何かあらん、水何かあらん、況や寒氣何物ぞ二月五日の今日の寒さも我征胡大義軍の盛意を反省すれば活氣縱橫塞氣何ものぞ、午後四時船の西南に陸地の歷々たるを見しば是れ我が大義軍が新に上陸を了へて前進し永く戰史と歷史とを有すべき山東の盛山角榮城灣にぞある。船は明日未明大連灣に着すべき豫定なれば、船中にては別れの言の葉にや下士卒の發起によりて軍夫の內より藝あるものを撰び法螺祭文、都々逸、義太夫等を演ぜしめたり、同じくこれ天涯の人、相逢ふても何ぞ曾て相識るの人ならんや、然れども同じ出征の途に上る、同胞の各附屬部隊は四散する身なれば一陰、一流今更別を告ぐるも無理ならじ(二月七日第三回目の從軍記)

南征錄　膨湖島公城にて　奈須義質

(前略)　我軍が占領せしよりこゝに二旬餘コレラ患者を出すこと千五百餘名、內死亡者千二百十名、卽ち殆んど一大隊以上の兵員を失ひ、余等一行(從軍記者)の內四名までもこの惡疫に罹りて今は病床に無念の涙を咬みつつあり、由來花國武夫の本色として國難一度到るに及んでは身を棄て家を忘れて血河屍山は物の數かは彈丸雨飛の間を驅して寸步も退かざる勇士も噫今はこの猛烈なる惡疫のために次ぎ〳〵に斃れゆく、恐るべきは蕃人にあらず、この魔軍なり(以下略)

第六師團の勇戰　馬關にて　早川方明

(前略)　嗚呼我九州の勇兵が一度足を投ずれば萬丈の堅堤も立所に粉碎し二度手を擧ぐれば千仞の鐵壁も爲めに鏖滅し、天下の强兵として世界に畏敬さるゝに至りしは豈啻だに我九州の名譽のみならずして實に大日本帝國の最大面目なりとす、曩には關東半島の朔風に凜たる聲明を轟かし今亦た山東省頭の皚雪に烈たる勳功を樹つ、素より我帝國の健丈夫何れに優劣あるに非ずと雖も然れども玆に第六師團勇兵の壯快なる戰鬪記を草するに臨み、劈頭先づ特筆して國家の干城を形るの最も優勢なるを誇稱せんとするなり、只だ恨むらくは拙筆の克く其眞況を寫す能はざるを。

一月三十日は實に淸國が陸軍の銳と海軍の精を蒐めたる威海衞陷落に就て最も直接なる近因を示せしの朔日にして、一月三十日敵戰の結果なり

(中略)＝午前七時、前衞なる第十三聯隊第二大隊は其開進地より駈足を以て急斜面を馳下り一旦兵を纏めて直ちに進擊、摩天嶺を目標として急行す、敵は我軍の近づくを見るや摩天嶺、揚峯嶺の二砲壘より巨彈を連發して之を防制せんとす、卽ち第八、第五兩中隊は砲壘の死角に進入して敵の右翼に逼り、第六中隊は摩天嶺の正面に向つて突進す戰機既に熟し、距離益す近づく、敵は第六中隊が五百メートルの間隔に來るや八珊のクルツプ砲門を開き已に猛烈なる發射を試み、地雷も所々に爆裂して偏へに之を喰ひ止めんとす、(中略)苦戰難鬪に惱まされたる第六中隊の勇兵は砲彈銃丸霰下雨飛の激流を遡つて皷神一番、敵壘を距る二百メートルの所まで來りぬ爾後の運命最早知るべきのみと直ちに兵を整へ是より摩天嶺砲壘に對つて突擊せり。敵は此有樣を見るや驚懼と狼狽とを俱にして降りくる彈丸は又もや劇甚、傷を負ふもの卽座に僵るゝもの工兵小隊に八名、第一小隊に五名、第二小隊に三名。然れども勇みに勇み猛りに猛りし健兒の群、障害物を飛び越え乘り越え、一氣呵成逼つて壘內に闖入し玆に占領の第一旭章旗を摩天嶺の壘上に飜へせり(以下略)。

山縣中尉の奮死　海城に於て　玄洋生

など洒落た事を云へり、生憎松島には此の寫眞なかりしを以て遂に之を見るを見ん。

遼雲燕雨　　榮城灣にて　奈良崎八郎

櫻花國の上國を離れ朔漢の蠻地に急げば、寒氣は已に上國の客を迎へて皮膚の中堅を衝かんとす、火何かあらん、水何かあらん、況や寒氣何物ぞ二月五日の今日の寒さも我征胡大義軍の盛意を反省すれば活氣縱橫寒氣何ものぞ、午後四時船の西南に陸地の歷々たるを見しば是れ我が大義軍が新に上陸を了へて前進し永く戰史と歷史とを有すべき山東の盛山角榮城灣にぞある。船は明日未明大連灣に着すべき豫定なれば、船中にては別れの言の葉にや下士卒の發起により軍夫の內より藝あるものを撰び法螺祭文、都々逸、義太夫等を演ぜしめたり、同じくこれ天涯の人、相逢ふても何ぞ曾て相識るの人ならんや、然れども同じ出征の途に上る、同胞の各附屬部隊は四散する身なれば一陰、一流今更別を告ぐるも無理ならじ（二月七日第三回目の從軍記）

南征錄　　膨湖島公城にて　奈須義質

（前略）我軍が占領せしよりこゝに二旬餘コレラ患者を出すこと千五百餘名、內死亡者千二百十名、卽ち殆んど一大隊以上の兵員を失ひ、余等一行（從軍記者）の內四名までもこの惡疫に罹りて今は病床に無念の淚を咬みつつあり、由來花國武夫の本色として國難一度到るに及んでは身を棄て家を忘れて血河屍山は物の數かは彈丸雨飛の間を驅して寸步も退かざる勇士も噫今はこの猛烈なる惡疫のために次ぎ〳〵に斃れゆく、恐るべきは蕃人にあらず、この魔軍なり（以下略）

第六師團の勇戰　　馬關にて　早川方明

（前略）嗚呼我九州の勇兵が一度足を投ずれば萬丈の堅堤も立所に粉碎し二度手を擧ぐれば千仞の鐵壁も爲めに鏖滅し、天下の强兵として世界に畏敬さるゝに至りしは豈啻だに我九州の名譽のみならずして實に大日本帝國の最大面目なりとす、曩には關東半島の朔風に凜たる聲明を轟かし今亦た山東省頭の皚雪に烈たる勳功を樹つ、素より我帝國の健丈夫何れに優劣あるに非ずと雖も然れども茲に第六師團勇兵の壯快なる戰鬪記を草するに臨み、劈頭先づ特筆して國家の干城を形るの最も優勢なるを誇稱せんとするなり、只だ恨むらくは拙筆の克く其眞況を寫す能はざるを。

一月三十日は實に淸國が陸軍の銳と海軍の精を蒐めたる威海衞陷落に就て最も直接なる近因を示せしの期日にして、一月三十日激戰の結果は卽ち威海衞占領の快報を齎らせし門戶を開きしなり、而して該勝鬪に從事して一擊の下に勝利者の桂冠を戴きしは全く我が第六師團の勇士なりとす、三十日は北所總攻擊（北所とは摩天嶺砲壘附近の總稱）の當日、午前一時頃師團命令は儼爾として戰捷を未發の機微に現はすものゝ如く下りぬ。

（中略）

‖部署既に定まり、將卒俱に勇躍して劍鳴り銃跳り意氣軒昂威風地を覆ひ銳肝天を衝き、午前三時前哨線內に集合し殺氣既に迸る。

（中略）‖午前七時、前衞なる第十三聯隊第二大隊は其開進地より駈足を以て急斜面を馳下り一旦兵を纏めて直ちに進擊、摩天嶺を目標として急行す、敵は我軍の近づくを見るや摩天嶺、揚峯嶺の二砲壘より巨彈を連發して之を防制せんとす、卽ち第八、第五兩中隊は砲壘の死角に進入して敵の右翼に逼り、第六中隊は摩天嶺の正面に向つて突進す戰機既に熟し、距離益す近づく、敵は第六中隊が五百メートルの間隔に來るや八珊のクルップ砲門を開き已に猛烈なる發射を試み、地雷も所々に爆裂して偏へに之を喰ひ止めんとす、（中略）苦戰難鬪に惱まされたる第六中隊の勇兵は砲彈銃丸霰下雨飛の激流を遡つて皷神一番、敵壘を距る二百メートルの所まで來りぬ爾後の運命最早知るべきのみと直ちに兵を整へ是より摩天嶺砲壘に對つて突擊せり。敵は此有樣を見るや驚懼と狼狽とを俱にして降りくる彈丸は又もや劇甚、傷を負ふもの卽座に僵るゝもの工兵小隊に八名、第一小隊に五名、第二小隊に三名。然れども勇みに勇み猛りに猛りし健兒の群、障害物を飛び越え乘り越え、一氣呵成逼つて壘內に闖入し茲に占領の第一旭章旗を摩天嶺の壘上に飜へせり（以下略）。

山縣中尉の奮死　　海城に於て　玄洋生

敵情偵察の良否は直ちに全軍の進退成敗に關す、故に此の任務を受けたるものは常に必生の汗血を其の間に灑ぎ、往々偉大の勳動を奏すると同時に、又た敵陣に觸接し死を見る事鴻毛の輕きよりも輕く、命を重んずること泰山の重きより重からざるべからず、我軍碧蹄を遠征の路上に躍らして以來、彼の朱染亭上松露濃やかなる所に忠魂毅魄を止め永く皇軍前途の犧牲となりし町口中尉、竹內少尉を初めとし其任務に殪れたる將校已に數名の多きに達す、嗚矣至難なる哉其任其務、而して今や又職を第三師團第〇〇隊、第〇〇隊に奉じ、第〇〇隊の二人好漢と稱せられ驍名全軍に洽ねか

りし我が福岡の出身、陸軍歩兵中尉山縣駒喜氏其任務に殪れ、遠く軍人の譽れを絶域天涯の地に輝やかし芳魂長へに護國の忠鬼と化するに至る噫。

中尉が所屬たる第〇〇隊は去る五日、前哨〇隊の任務を帶び海城西方一里强なる牛莊街道の傍團山子と云ふ村落に至る、中尉も亦一小隊を率ゐて其中にあり、此日敵四大子に竄入したりとの報に接し前哨〇隊は殊に警戒を加へ、中隊長以下厄寒の雪風を凌ぎ夜を徹して敵來を警めたり。

明れば六日午前六時、曉氣未だ濃やかに奉天原野の風常に倍して肌寒く四顧寂寥として烏雀さへ猶ほ未だ翼を振はざるの時、中尉は中隊長より二分隊を率ゐ其前方大凡二里强なる小馬頭村附近敵情偵察の任務を受く、中尉は勇躍、見るも勇ましき日本刀の霜を拂ひ腕撫で下ろして甲斐々々しく部下を率ひて團山子の陣地をぞ出發しぬ。ア、死生は知らず那邊の所、生きては義勇公に奉じ、死しては忠魂皇天を護る、一に是れ我軍人の名譽、軍人の精華。

此時、中隊長村山大尉は團山子村端れに在る小高き丘に上り豫て用意の兩眼鏡を腰の邊に取り出し、前方數千米突の雪野を肅々として進み行く山縣中尉以下を望み見て、其勞、其苦を思ひ遣り人知らず戰袍をこそ濕しぬ

（中略）

＝再び進行を起して村の入口に今や足踏み掛けんとするの際右側の土壁より二人の支那人首を伸ばして窺ひ見たり、瞬く間もあらばこそ彼の首早や已に影を收めて又見るべからず、元來支那人の服裝は支那兵の服裝、支那兵の服裝は支那人の服裝にて、土民やら兵士やら孰れか慥かに見分けの付くべき筈もなく殊に支那各村落の習慣として此村も又悉く土壁を以て取圍み、瞰望少しも自由ならず、左れど此時中尉の胸中には一種の疑ひ蓬然として浮び出でぬ、是に於て中尉は傍の喇叭手を顧み其土壁內を窺ふ事を命じ、自らは步を連け其村に進入する數步、命を受けたる喇叭手又其傍なる土壁內を窺はんとする其時其際、危機、危機、危機は實に其一刹那にあり、壁內に埋伏したる敵兵數十、銃口を壁上に据ゑ付け閧を作つて擊掛けたり、ソレッと云ふ間もあらばこそ震天動地、悲風慘愴、偵察隊の前方數步の三叉路より四百に餘る敵兵、銃、太刀、槍などを提げ、潮を逆卷き鯨波を擧げて一時にドッと吶喊したり、如何に勇武の軍人なればとて僅か二十四名の勢を以て優勢四百の大敵に當る事を得べき（以下略）

征淸の役は我軍連勝して終末に近づき淸國媾和使節李鴻章の一行は三月十九日、禮裕號、ランギー號に搭乘して馬關に來り、我が全權伊藤博文と會して二十一日より春帆樓に於て媾和談判を開始した。

本社はこれより先、開戰以來早川方明を馬關に派して出征歸還の關門に於て戰況報道に活躍せしめたが、媾和談判開始に先だつて十五日更に記者辰巳豐吉を馬關に特派して談判及び兩全權一行の報道に當らしめた。

談判開始四日目、卽ち三月二十四日辰巳特派員より左の如き飛電があり、本社は直に號外を發行した。

只今當地に於て容易ならざる事起れり、暫らく讀者に報道するに忍びず。（註、記者曰く）右の事實は關門特派員の詳しく電報せしものあれども日本人として之を公言するに忍びざる所なり、且つ其の誤りならんことを希ふて止まざれば暫くこれを揭げず（午後五時發電）

この號外を見て人々は何事の勃發かと心配したが、こは史上有名な李鴻章の遭難事件で、李鴻章はその日の談判を了へて旅館引接寺に歸還の途中、郡馬縣人小山六之助のために短銃で狙擊されたのであつた。

當時滯關中の新聞記者團は早速慰問狀に三十圓ばかりの雉を籠に入れて贈り、慰問の意を表した。

本紙は續いて事件內容報道の號外を出し、更に廿六日號外には左の如く國民の不安を一掃し將來を戒めるの文を揭げた。

嗚呼、世人は今や將さに迷はんとす、且つ媾和談判の進行を疑はんとす、然りと雖も國と個人との差別を忘るゝ勿れ、談判は國と國との談判なり個人と個人の關係は常法によるのみ、未だ國際談判の進行を妨げず、唯誠に悲しむべきは兇漢六之助輩を櫻花國民中に出したる事なり、一兇漢の爲に列國人民の信用を失墜し櫻花國の名譽を毀損したる幾何ぞ、豈に將來を戒めざるべけんや。

かくて媾和會議は圓滿に終了し休戰條約締結されて四月十七日李鴻章の一行は歸國の途につき、平和克復の詔勅煥發せられ、四月二十七日、大本營は京都に移さるゝに至つた。

全國を擧けて戰勝氣分に醉ふたのも暫らく、五月五日の我が社の京都電報はたゞならぬことを報じ、號外となつて國民へ不安を投け與へた。

（京都電報）　四日午後より京都在留の各大臣及び將星は陸奥外相の御旅館に於て秘密會議を開きのち午前會議ありそれより又外務大臣の旅館に於て會議を開き本日（五日）午前三時に至りて漸く退散せり。

この重要會議は六日まで續けられ、在京の各大臣、樞密顧問官なども急遽召電に接して參列したが、これが「三國干涉」の重要會議であつた。

會議の結果は悲痛極まる「讓地還附」の詔勅となり、戰勝に醉ふ全國民を悲挫を忘るゝ勿れ。

頓挫して遂に恢復の志なき國民は卑屈の國民にして、自暴自棄の行爲あるのみ、實に覺醒せざるべけんや。故に政黨も一致せよ、先進の士も後進の士も握手せよ、都門の人も田舍の人と提携せよ、然り全國民は上下良く一致して帝國が將に達せんことを期する大目的を速かに達せしめよ」

三〇、朝鮮事變と臺灣土匪事件

明治二十八年十月八日、韓國に所謂「閔妃事件」が勃發し、翌二十九年へ引續いて各地に暴動起り日、韓、露の重大問題化すに至つた。この事件報道に關する我が社は實に獨壇場の觀があり、豫て玄洋社の大陸伸張を主義の一つとする我が社は、事件の報道に萬全を盡し、京城特派員石禪生の記事に加へて、事件に就いての解說を試み斷然他紙を壓する豪華版を連續せしめて、さすが福陵新報本來の眞面目を發揮した。

二十九年一月、新版圖臺灣に土匪蜂起して亂をなし、征討軍の出帥となつた。本社は社友武內與七、萩原速之助を特派從軍せしめて報道の萬全を盡くした。

分隊を率る其前方大凡二里強なる小馬頭村附近敵情偵察の任務を受く、中尉は勇躍、見るも勇ましき日本刀の霜を拂ひ腕撫で下ろして甲斐々々しく部下を率ひて團山子の陣地をぞ出發しぬ。ア、死生は知らず那邊の所、生きては義勇公に奉じ、死しては忠魂皇天を護る、一に是れ我軍人の名譽、軍人の精華。

此時、中隊長村山大尉は團山子村端れに在る小高き丘に上り豫て用意の兩眼鏡を腰の邊に取り出し、前方數千米突の雪野を肅々として進み行く山縣中尉以下を望み見て、其勞、其苦を思ひ遣り人知らず戰袍をこそ濕しぬ

（中略）

＝再び進行を起して村の入口に今や足踏み掛けんとするの際右側の土壁より二人の支那人首を伸ばして窺ひ見たり、瞬く間もあらばこそ彼の首早や已に影を收めて又見るべからず、元來支那人の服裝は支那兵の服裝、支那兵の服裝は支那人の服裝にて、土民やら兵士やら孰れか慥かに見分けの付くべき筈もなく殊に支那各村落の習慣として此村も又悉く土壁を以て取圍み、瞰望少しも自由ならず、左れど此時中尉の胸中には一種の疑ひ蓬然として浮び出でぬ、是に於て中尉は傍の喇叭手を顧み其土壁內を窺ふ事を命じ、自らは步を連け其村に進入する數步、命を受けたる喇叭手又其傍なる土壁內を窺はんとする其時其際、危機、危機、危機は實に其一刹那にあり。

本社はこれより先、開戰以來早川方明を馬關に派して出征歸還の關門に於て戰況報道に活躍せしめたが、媾和談判開始に先だつて十五日更に記者辰巳豐吉を馬關に特派して談判及び兩全權一行の報道に當らしめた。

談判開始四日目、卽ち三月二十四日辰巳特派員より左の如き飛電があり、本社は直に號外を發行した。

只今當地に於て容易ならざる事起れり、暫らく讀者に報道するに忍びず。（註、記者曰く）右の事實は關門特派員の詳しく電報せしものあれども日本人として之を公言するに忍びざる所なり、且つ其の誤りならんことを希ふて止まざれば暫くこれを揭げず（午後五時發電）

この號外を見て人々は何事の勃發かと心配したが、こは史上有名な李鴻章の遭難事件で、李鴻章はその日の談判を了へて旅館引接寺に歸還の途中、郡馬縣人小山六之助のために短銃で狙撃されたのであつた。

當時滯關中の新聞記者團は早速慰問狀に三十圓ばかりの雉を籠に入れて贈り、慰問の意を表した。

本紙は續いて事件內容報道の號外を出し、更に廿六日號外には左の如く國民の不安を一掃し將來を戒めるの文を揭げた。

嗚呼、世人は今や將さに迷はんとす、且つ媾和談判の進行を疑はんとす、然りと雖も國と個人との差別を忘るゝ勿れ、談判は國と國との談判なり個人と個人の關係は常法によるのみ、未だ國際談判の進行を妨げず、唯誠に悲しむべきは兇漢六之助輩を櫻花國民中に出したる事なり、一兇漢の爲に列國人民の信用を失墜し櫻花國の名譽を毀損したる幾何ぞ、豈に將來を戒めざるべけんや。

かくて媾和會議は圓滿に終了し休戰條約締結されて四月十七日李鴻章の一行は歸國の途につき、平和克復の詔勅煥發せられ、四月二十七日、大本營は京都に移さるゝに至つた。

全國を擧げて戰勝氣分に醉ふたのも暫らく、五月五日の我が社の京都電報はたゞならぬことを報じ、號外となつて國民へ不安を投げ與へた。

（京都電報） 四日午後より京都在留の各大臣及び將星は陸奥外相の御旅館に於て秘密會議を開きのち午前會議ありそれより又外務大臣の旅館に於て會議を開き本日（五日）午前三時に至りて漸く退散せり。

この重要會議は六日まで續けられ、在京の各大臣、樞密顧問官なども急遽召電に接して參列したが、これが「三國干涉」の重要會議であつた。

會議の結果は悲痛極まる「讓地還附」の詔勅となり、戰勝に醉ふ全國民を悲憤せしめた。所謂「臥薪嘗膽」はこれより日本國民の心奧深く銘刻せられて、報復の日のために刻苦することゝなつた。

本紙は左の社說を揭げて國民の自暴自棄を戒め、上下一體他日を期すべきを強調した。

「（前略）…想ふに、國民の一致すべきは戰時に於てよりも、戰後に於て最も必要を感じ、且つ最も強調なるべき也。況んや國民が忘れんと欲するも毫も忘るゝ能はざる一頓挫を生じたる今日に於てをや、國民よ、この一頓挫を忘るゝ勿れ。

頓挫して遂に恢復の志なき國民は卑屈の國民にして、自暴自棄の行爲あるのみ、實に覺醒せざるべけんや。故に政黨も一致せよ、先進の士も後進の士も握手せよ、都門の人も田舍の人と提携せよ、然り全國民は上下良く一致して帝國が將に達せんことを期する大目的を速かに達せしめよ」

三〇、朝鮮事變と臺灣土匪事件

明治二十八年十月八日、韓國に所謂「閔妃事件」が勃發し、翌二十九年へ引續いて各地に暴動起り日、韓、露の重大問題化すに至つた。この事件報道に關する我が社は實に獨壇場の觀があり、豫て玄洋社の大陸伸張を主義の一つとする我が社は、事件の報道に萬全を盡し、京城特派員石禪生の記事に加へて、事件に就いての解說を試み斷然他紙を壓する豪華版を連續せしめて、さすが福陵新報本來の眞面目を發揮した。

二十九年一月、新版圖臺灣に土匪蜂起して亂をなし、征討軍の出帥となつた。本社は社友武內與七、萩原速之助を特派從軍せしめて報道の萬全を盡くした。

三一、第九議會

日淸役の戰後經營に第九議會は興奮し、遼東還付、朝鮮事變に關して伊藤內閣の責任を追及し、伊藤首相の軟弱外交を攻撃して囂々たるものがあつた。しかしながら政府彈劾の上奏案は否決せられ、結局陸軍擴張費一千五百萬圓、海軍擴張費九千五百萬圓の大豫算を通過せしめるに及び、本紙は三月三十一日の社說に「伊藤侯萬歲」の題下に外交の軟弱を攻め、自由黨との結托を皮肉つてゐる。

「（前略）…公然藤侯を主人と仰ぎ奉り、藤侯の臣屬となり、議會開會の初

日より終始忠勤を盡したる自由黨は正に公々然明々地、伊藤侯萬歳を唱ふべきなり（中略）―幾多の人を殺し幾多の財を糜し百戰百敗、終に叩頭謝罪して遼東を我に讓與せし淸國は袖を懷にして其の版籍を收め得ぬ。思ふに當時淸人は遙かに伊藤侯を頌しゝなるべし（中略）―夫れ外交の勝敗は只單に國家の面目に關するのみならず、國民元氣の盛衰に關し又實業の消長に關す（中略）第八、第九議會に於ける伊藤內閣の外交は卽ち如何、嗟吁第九議會の任は啻に軍備擴張其他世の所謂戰後經營を勉むるのみにあらざりしなり。（中略）第九議會は伊藤侯の意のまゝに終りしなり、外に於ては遼東の豕、韓北の鵞共に侯の萬歳を祝せるならん。嗚呼藤侯萬歳、知らず國民は能く之に和するや否や。」

間もなく伊藤內閣更迭して松方內閣となるや、本紙は「軍族に在るの心を以て政務を執れ」と松方首相を激勵鞭撻した。

（前略）文官の責任は恰も負債を見るが如し、幾多の過失を重ねるも一度職を退き官を辭すれば最早や責任解消したるが如く考ふ。これ官紀紊亂、失政續出、政務澁滯の弊を作るものなり。然るに武人の軍族にある常に死を以て其職を守る。怠慢粗漏少しく大なれば罪大く死に當る。斯の如くあらざれば武事決して其功を奏せず、武事の成敗まことに然り、文事豈獨り然らずとせんや。吾儕故に曰く文官も亦軍族に在るの心を以て政務を執れ！

三二、第十議會

第十議會は平穩であつた。特筆すべきことは金本位貨幣法の制定と新聞紙條例の改正であつた。

本紙は一ケ月餘に亘つて「金本位論」「本邦幣制の變遷」「金銀比價の變動」など論述して金本位貨幣法に就いての啓發運動を試み更に「幣制改革論」の題下に益田孝、中上川彦次郎、大倉喜八郎、阪谷芳郎、濱田光哲、園田孝吉、末延道成など當時の權威者の論文を揭載して壓卷の陣を誇示した。松方內閣は、從來の慣例を破り、廣く人材を登用して地方政治の革新を期せんといふ立前から知事十五名を被免して地方官の大異動を行ひ、衆議院議員を縣知事に任ずる等の英斷を行つたが、福岡縣選出の權藤貫一は長野縣知事に、同中村彦次は島根縣知事に任ぜられた。權藤代議士は筑前協會派、中村彦次は筑後同志會派で共に頭山本社長を中心とする國民派（福陵新報派）の代議士であるが、本紙はこの事に就いて左の如く論評してゐる。

從來の諸內閣が嚴に登龍門を鎖し硬く人材登用の道を塞ぎ庶政の權勢を一門同類に壟斷して獨り官憲の瑤臺に眠り、敢て政績の擧否を顧みず、敢て邦家の安危を念とせず、敢て人民の禍福を省みず、只圖る所は自家一門同類の休戚のみなりしこと久し――（中略）今回新任の知事、悉く果して其材たり其器たるや否やは固より吾儕の未だ明知するを得ざる所なるも今回の更迭は從來の更迭の如く只官職の變更あるのみにして人物の刷新を見ざるの更迭にあらず、只人物の配置の變革あるのみにして人物の淘汰を見ざるの更迭にあらず、官職の更迭と同時に人物の刷新を行ひ新材器を擧用したるの更迭なり（中略）現內閣若し今般の方針を以て進行し、新材器の撰擇を過たず、野の遺賢を選拔し政府部內從來の庸劣を淘汰し、情實の弊に沈淪し萎微し盡したる庸劣政治を一新し仁賢政治と爲さば必ず人心を一新し庶政の刷新を行ひ以て政効を奏し國運を進め民福を加ふるを得ん！。

三三、第十一議會

第十一議會は解散、明治三十一年一月松方內閣は再び伊藤內閣と代つて、伊藤內閣の下に總選擧が行はれた。

福岡縣ではこれより先明治三十年夏、筑前協會と筑前自由黨とが一丸となつて筑前倶樂部を組織し「教育、殖產及び共の他公益增進の爲」和親協力することゝなり、會長に舊藩主黑田長成侯を仰ぎ幹事には兩派の幹部、平岡浩太郎、進藤喜平太、小野隆助、多田作兵衛、庄野金十郎、平山能忍、山中立木、森田正路、北島淸三郎等が之に當り、黨派抗爭を止めることを申し合せてゐたので、前回血で爭つた選擧も、筑前部では兩派各二名の候補者を立て、平和協調裡に行はれた。

當選者左の如し。

第一區	平岡浩太郎	第三區	多田作兵衛
第二區	進藤喜平太	第四區	佐々木正藏
	小野隆助	第五區	野田卯太郎
	金作	第六區	永江純一
		第七區	久良知寅次郎
		第八區	征矢野半彌

三四、產業の指導

地方產業興隆發展の指導は本社の重大な使命の一つである。從つて創刊以來、幼稚未開發の九州產業のために絕えざる指導者の役割を演じ來つたことは勿論、石炭が「文明の母」なるを敎へて、率先して筑豐炭田の寶庫開發を叫

博多實業家に望む

虎に翼を生ぜしめ、鬼に鐵棒を持たしめば、優に勝者の位置を占むべし。戰勝後の日本國は國狀、位置の二點より觀察するも、東洋工業の牛耳を採るに足れり、（中略）此恰好なる日本國の工業家たるものは前途多望にして幸福なるものと謂ふべし殊に九州は恰好の地步を占むるものなり。九州中殊に我福岡縣の如きは最も前途多望なるものなり。この福岡縣の骨髓たる博多にして一つの盛大なる工業の振起せざるは吾人の大に疑ふ所なり。戰勝の影響、我國の事物に刺戟を與ふること決して僅少ならず、他府縣は姑く措き、我縣下の如きも鐵道、築港、海運、造船の類簇出するもの一にして足らず、然るに我博多にして一の工業振起せざるは何ぞや、是れ吾儕の大聲疾呼、博多實業家の反省を喚起せんと欲する所以なり。

博多には煙筒高く聳え、黑烟天に漲るものなきにあらずと雖も多くは精米機械にして他に見るべき工業なく、隨つて勞働者の需用僅々にして、細民は益す貧困に陷り、無賴して乞食の徒を生じ、其結果實に憂慮に堪へざるものあるは吾儕の親しく目擊する所なり、此の卑むべき陋態は、必竟彼等の惰性に因ると雖も、又彼等の勞力を使用する工場なきに依らずんばあらず、目下博多織ありて幾分か此弊を救助するを得ると雖も、尙ほ未だ充分ならず、然れば博多の工業を振起せしめ、博多の富を增し併せて細民を救

ては遼東の豕、韓北の鷲共に侯の萬歳を祝せるならん。嗚呼藤侯萬歳、知らず國民は能く之に和するや否や。」

間もなく伊藤内閣更迭して松方内閣となるや、本紙は「軍族に在るの心を以て政務を執れ」と松方首相を激勵鞭撻した。

（前略）文官の責任は恰も負債を見るが如し、幾多の過失を重ねるも一度職を退き官を辭すれば最早や責任解消したるが如く考ふ。これ官紀紊亂、失政續出、政務澁滯の弊を作るものなり。然るに武人の軍族にある常に死を以て其職を守る。怠慢粗漏少しく大なれば罪大く死に當る。斯の如くあらざれば武事決して其功を奏せず、武事の成敗まことに然り、文事豈獨り然らずとせんや。吾儕故に曰く文官も亦軍族に在るの心を以て政務を執れ！

三二、第十議會

第十議會は平穏であつた。特筆すべきことは金本位貨幣法の制定と新聞紙條例の改正であつた。

本紙は一ケ月餘に亘つて「金本位論」「本邦幣制の變遷」「金銀比價の變動」など論述して金本位貨幣法に就いての啓發運動を試み更に「幣制改革論」の題下に益田孝、中上川彦次郎、大倉喜八郎、阪谷芳郎、濱田光哲、園田孝吉、

彼等の論門同類に壟斷して獨り官憲の璫臺に眠り、敢て政績の擧否を顧みず、敢て邦家の安危を念とせず、敢て人民の禍福を省みず、只圖る所は自家一門同類の休戚のみなりしこと久し——（中略）今回新任の知事、悉く果して其材たり其器たるや否やは固より吾儕の未だ明知するを得ざる所なるも今回の更迭は從來の更迭の如く只官職の變更あるのみにして人物の刷新を見ざるの更迭にあらず、只人物の配量の變革あるのみにして人物の淘汰を見ざるの更迭にあらず、官職の更迭と同時に人物の刷新を行ひ新材器を擧用したるの更迭なり（中略）現内閣若し今般の方針を以て進行し、新材器の撰擇を過たず、野の遺賢を選拔し政府部内從來の庸劣を淘汰し、情實の弊に沈淪し萎微し盡したる庸劣政治を一新し仁賢政治と爲さば必ず人心を一新し庶政の刷新を行ひ以て政効を奏し國運を進め民福を加ふるを得ん——。

三三、第十一議會

第十一議會は解散、明治三十一年一月松方内閣は再び伊藤内閣と代つて、伊藤内閣の下に總選擧が行はれた。

福岡縣ではこれより先明治三十年夏、筑前協會と筑前自由黨とが一丸となつて筑前倶樂部を組織し「教育、殖産及び其の他公益增進の爲」和親協力することゝなり、會長に舊藩主黒田長成侯を仰ぎ幹事には兩派の幹部、平岡浩太郎、進藤喜平太、小野隆助、多田作兵衛、庄野金十郎、平山能忍、山中立木、森田正路、北島清三郎等が之に當り、黨派抗爭を止めることを申し合せてゐたので、前回血で爭つた選擧も、筑前部では兩派各二名の候補者を立て、平和協調裡に行はれた。

當選者左の如し。

第一區	平岡浩太郎	
第二區	藤金作	
第三區	小野隆助	
第四區	多田作兵衛	
第五區	佐々木正藏	
第六區	野田卯太郎	
第七區	永江純一	
第八區	久良知寅次郎	
	征矢野半彌	

三四、産業の指導

地方産業興隆發展の指導は本社の重大な使命の一つである。從つて創刊以來、幼稚未開發の九州産業のために絶えざる指導者の役割を演じ來つたことは勿論、石炭が「文明の母」なるを教へて、卒先して筑豐炭田の寶庫開發を叫び來つた。小説にも「久留米絣」「博多織」などの題名を用ひて地方産業を巧に取り入れたものを連載して本社は、その發達のために傾倒を怠らなかつた。

——日清戰役後、全國事業界は勃然として活氣を呈し、會社組織による合同大事業は各地に企てられた。地の利と天惠とを有しながら福岡縣各地がこの氣運に立ち遲れやうとした時、本紙は明治廿九年の年頭に「博多實業家に望む」と題して、戰勝後の實業界の現狀を說いて先づ地元福博實業家の覺醒を叫び警鐘を打ち鳴らした。

博多實業家に望む

虎に翼を生ぜしめ、鬼に鐵棒を持たしめば、優に勝者の位置を占むべし。戰勝後の日本國は國狀、位置の二點より觀察するも、東洋工業の牛耳を採るに足れり、（中略）此恰好なる日本國の工業家たるものは前途多望にして幸福なるものと謂ふべし殊に九州は恰好の地歩を占むるものなり。九州中殊に我福岡縣の如きは最も前途多望なるものなり。この福岡縣の骨髓たる博多にして一つの盛大なる工業の振起せざるは吾人の大に疑ふ所なり。戰勝の影響、我國の事物に刺戟を與ふること決して僅少ならず、他府縣は姑く措き、我縣下の如きも鐵道、築港、海運、造船の類簇出するもの一にして足らず、然るに我博多にして一の工業振起せざるは何ぞや、是れ吾儕の大聲疾呼、博多實業家の反省を喚起せんと欲する所以なり。

博多には煙筒高く聳え、黒烟天に漲るものなきにあらずと雖も多くは精米機械にして他に見るべき工業なく、隨つて勞働者の需用僅々にして、細民は益す貧困に陷り、無賴して乞食の徒を生じ、其結果實に憂慮に堪へざるものあるは吾儕の親しく目擊する所なり、此の卑むべき陋態は、必竟彼等の惰性に因ると雖も、又彼等の勞力を使用する工場なきに依らずんばあらず、目下博多織ありて幾分か此弊を救助するを得ると雖も、尚ほ未だ充分ならず、然れば博多の工業を振起せしめ、博多の富を增し併せて細民を救助する一擧兩得の策は、第一着手として紡績會社を興すにあるなり。

紡績糸の需用は日に〳〵增進しつゝあり、現に博多には岡山倉敷、玉嶋及び三池、久留米の各紡績會社より輸入し、其他大阪よりも輸入せり、之を防禦するには、是非共博多に五千錘以上乃至一萬錘位の紡績會社を興さざるべからず、然るに是れ博多地方の需用を充たすのみ、況んや竿頭一歩を進めて之を支那内地に輸出し、西洋人と雌雄を決せんと欲せば、其紡績會社を振起せしむること、煙筒の林立を見る曉にあらざれば能はざるなり

福岡縣殊に博多の如き前途多望の地にして此の洪益ある紡績會社の一もなきは痛歎の至りにあらずや。博多の如きは既に恰好の地歩を占め此際に充分の潜勢力を養ひ、勃興すべきの時機なるを信じて疑はず。

吾儕亦深く有志者に企望を逃べざるべからざるものあり。紡績會社を興すと同時に聯帶して絹糸紡績を起さんこと是れなり。絹糸紡績の如きは、西京江州にあるのみにして其他には未だ之れあらず、我が九州の屑繭の如きは盡く之れを横濱に送り、横濱より外人の手に渡りて而して彼等の手に依りて調理せられ再び輸入品となりて故郷なる我國の需用を充たす如きは、工業國を以て自任する我國の恥辱にあらずや。

殊に九州の如きは、風土氣候とも最も養蠶に適すれば、養蠶は日に月に進歩すべし、然らば絹糸紡績の如きは國家經濟上よりするも焦眉の急務と云ふも決して過言にあらず、是れ吾儕の大聲疾呼、博多有志者の反省を促す所以なり。有志者首肯するや否や。

續いて一月十一日の紙上には「共同的事業の勃興に就いて」と題して過去に於ける福岡縣下の「共同的會社」の失敗の原因を擧げ實業家の反省を促し、——今や從來の弊風を打破して一大革新の時機將に來らんとす、此時此際前車の覆轍を履み、將に生ぜんとする萌芽を戮賊して實業界をして寂莫たらしむること勿れ、我が福岡縣が九州の商權を壟斷するは日本に雄飛する基なり。日本に雄飛するは東亞に雄飛する基なればなり。故に永く福岡縣の實業界をして雌伏せしむること勿れ、是れ博多實業家の責任にして吾儕先づ汽船株式會社及び紡績會社に向つて望を囑する所以なりと警告し奮起を促してゐる。

事業の勃興に伴ふ港灣政策については、築港計畫の必要を力説し、博多灣築港計畫の急務を說いて倦まなかつた本紙は、明治廿九年十月三日、特別輸出入港として博多灣が指定せられるに及び、同八日社說に左の如くこれを論じた。

博多灣修築の機漸く熟す

（前略）今後十分に九州の農工商を發達せしめ、鑛業の便利を圖り、貨殖の道を進めんには必ずや此種の港灣を九州の地に造らざるべからず。九州の經濟上に於ける急務の一は確かに築港に存す。是れ蓋し近時港灣修築の企圖九州の地に續起する所以ならんか。

九州の沿岸屈曲凸凹、港灣少しとせず、然れども目下九州經濟機運の俟てる所の港灣即ち各地方門戸の中心港各地方交通運輸の中央地たるべきの資格を標準として各港灣の良否を視察せよ、九州全般の門戸たるべき大港良灣果して那邊にか存す、長崎の港古來互市場たり、然れども其地僻在、九州の經濟、商に工に又鑛業に舊時に比して其範圍を擴張し、大に形勢を更めたるの今日、既に九州の大門戸たるを得ず。直接臺灣に面せる鹿兒島の灣、自ら臺灣九州間の海漕利ありと雖も、之を擁せる薩隅日の地方は到底工商の地にあらず、肥後の三角、稍々九州間の富原筑肥の中腹に在るも規模大ならず、位地尚ほ僻在の嫌あり、内は乃ち商工の中心地に位し外に對しては直接に九州と支那朝鮮との交通運搬を連絡し又本邦中土との交通運搬を連絡するの港灣は門司、博多、假屋三港なり。

然るに門司は海峽狹く且つ軍事上の要港たり、假屋又少しく一方に僻在す。眞に九州商工地の中腹に位し内外交通運搬の要衝たるべきの地は博多灣なり。加之、博多灣は九州の好門戸として他に一頭地を拔ける門司假屋の中間に位す。九州の經濟社會と博多灣との關係を概述すれば斯の如し。單に九州の内外に對する博多灣の形勢を見れば蓋し何人も博多灣を以て將來九州の大門戸地となさん、吾儕の卑見亦然り。只憾む灣内遠淺にして船舶碇泊の便を缺ぐのみ、西戸崎築港の企圖夙に起れる所以必ず此に存せん。

（中略）博多港は去る三日の勅令に依りて特別輸出入港たるを得たり、九州の經濟機運は内外に對する地利の點に於て夙に博多灣に對し望を屬するに九州の大門戸を以てせり。

（中略）博多港將來の隆昌を圖るの道は唯港の缺點を去るにあり。換言すれば只築港の成否に存す（中略）この指定によりて博多灣築港の機運漸く熟せり。

翌九日は博多港の特別輸出入港指定について詳細に論じ、十一月一日は博多港特別輸出入港指定の實施期日に當るので「博多港萬歲」と題して博多港の前途を祝福し福博人の奮起を促したが、これが、後の博多大築港の發足點である。

十一月一日既に來りぬ。此の日是れ何の日ぞ、是れ實に我博多港の一進期なり。是れ實に我博多將來の記念日ならずんばあらず。此の日福岡の人士相會して祝盃を擧げ博多將來の繁榮を祈る。此擧決して偶然の擧にあらず此擧決して尋常一樣の擧にあらず。吾儕亦福博人士と共に博多港の萬歲を三唱し併せて將來の昌運を祈らん。（中略）。——當局者既に九州の經濟事情に照し内外の關係に考へ、我博多港を以て特別輸出入港と爲す、當局者の意中豈更に進んで他日我博多を以て開港場と爲さんと欲するものなからんや、吾人夙に這般の希望を有す。吾人は今既に我博多の港格を進めて特別輸出入港と爲すことを得たり。願くば更に進んで他日開港場と爲し以て吾人の素望を遂げよ。

吾人能く築港を成就し、這般の權利を利用せば我福博の地は正に九州中心市場たり、又能く石炭を利用せば天下の大工業地たらん—吾人願くは博多港の面目を一新し小にしては縣下の利を加へ大にしては九州の貨殖を隆にし國利民福の增進を扶掖し永く今日を以て博多港進運の記念と爲さん。

明治廿九年十月、熊本市に於て九州の農業について

——本邦各地農業の度を推せば九州の地正に天下に冠たるべし。本邦の農は九州に在りと謂ふべし。然るに其の實に至りては未だ然らず、米麥の質、其の收穫の割合、其の耕作の法皆未だ他に比して著るしく優るものあらず、九州に於ける天惠の厚き以て十分に農を興すべし——九州人士之を以て滿足すべきか、國家貨殖の急務たるを知了し九州農利の大なるを知了し加ふるに進取の氣に富める九州人士の遺憾蓋し大ならん。——九州の地蠶業の無きにはあらざるも其の業尚極めて幼稚、中樞地區の盛大なるに比すれば及ばざること甚だし。九州の茶業稍其の體を成し九州の茶として天下に知らるゝも、靜岡、京都、奈良、兵庫等に比すれば及ばざる亦遠し、然るに九州の地を眺むれば蠶茶の業を擴張し以て貨殖を圖るべきの餘地十分に存す。——故に吾人として少しく奮勵せば將來必ず蠶茶の二業共に其の盛を期すべし。

りて調理せられ再び輸入品となりて故郷なる我國の需用を充たす如きは、工業國を以て自任する我國の恥辱にあらずや。

殊に九州の如きは、風土氣候とも最も養蠶に適すれば、養蠶は日に月に進歩すべし、然らば絹糸紡績の如きは國家經濟上よりするも焦眉の急務と云ふも決して過言にあらず、是れ吾儕の大聲疾呼、博多有志者の反省を促す所以なり。有志者首肯するや否や。

續いて一月十一日の紙上には「共同的事業の勃興に就いて」と題して過去に於ける福岡縣下の「共同的會社」の失敗の原因を擧げ實業家の反省を促し、

——今や從來の弊風を打破して一大革新の時機將に來らんとす、此時此際前車の覆轍を履み、將に生ぜんとする萌芽を戮賊して實業界をして寂莫たらしむること勿れ、我が福岡縣が九州の商權を壟斷するは日本に雄飛する基なり。日本に雄飛するは東亞に雄飛する基なればなり。故に永く福岡縣の實業界をして雌伏せしむること勿れ、是れ博多實業家の責任にして吾儕先づ汽船株式會社及び紡績會社に向つて望を囑する所以なり

と警告し奮起を促してゐる。

事業の勃興に伴ふ港灣政策については、築港計畫の必要を力說し、博多灣築港計畫の急務を說いて倦まなかつた本紙は、明治廿九年十月三日、特別輸出入港として博多灣が指定せられるに及び、同八日社說に左の如くこれを論てる所の港灣即ち各地方門戸の中心港各地方交通運輸の中央地たるべきの資格を標準として各港灣の良否を視察せよ、九州全般の門戸たるべき大港良灣果して那邊にか存す、長崎の港古來互市場たり、然れども其地僻在、九州の經濟、商に工に又鑛業に舊時に比して其範圍を擴張し、大に形勢を更めたるの今日、既に九州の大門戸たるを得ず。直接臺灣に面せる鹿兒島の灣、自ら臺灣九州間の海漕利ありと雖も、之を擁せる薩隈日の地方は到底工商の地にあらず、肥後の三角、稍々九州間の富原筑肥の中腹に在るも規模大ならず、位地尙ほ僻在の嫌あり、內は乃ち商工の中心地に位し外に對しては直接に九州と支那朝鮮との交通運搬を連絡し又本邦中土との交通運搬を連絡するの港灣は門司、博多、假屋三港なり。

然るに門司は海峽狹く且つ軍事上の要港たり、假屋又少しく一方に僻在す。眞に九州商工地の中腹に位し內外交通運搬の要衝たるべきの地は博多灣なり。加之、博多灣は九州の好門戸として他に一頭地を拔ける門司假屋の中間に位す。九州の經濟社會と博多灣との關係を概述すれば斯の如し。單に九州の內外に對する博多灣の形勢を見れば蓋し何人も博多灣を以て將來九州の大門戸地となさん、吾儕の卑見亦然り。只憾む灣內遠淺にして船舶碇泊の便を缺ぐのみ、西戸崎築港の企圖夙に起れる所以必ず此に存せん。

（中略）博多港は去る三日の勅令に依りて特別輸出入港たるを得たり、九州の經濟機運は內外に對する地利の點に於て夙に博多灣に對し望を屬するに九州の大門戸を以てせり。

（中略）博多港將來の隆昌を圖るの道は唯港の缺點を去るにあり。換言すれば只築港の成否に存す（中略）この指定によりて博多灣築港の機運漸く熟せり。

翌九日は博多港の特別輸出入港指定について詳細に論じ、十一月一日は博多港特別輸出入港指定の實施期日に當るので「博多港萬歲」と題して博多港の前途を祝福し福博人の奮起を促したが、これが、後の博多大築港の發足點である。

十一月一日既に來りぬ。此の日是れ何の日ぞ、是れ實に我博多港の一進期なり。是れ實に我博多將來の記念日ならずんばあらず。此の日福岡の人士相會して祝盃を擧げ博多將來の繁榮を祈る。此擧決して偶然の擧にあらず此擧決して尋常一樣の擧にあらず。吾儕亦福博人士と共に博多港の萬歲を三唱し併せて將來の昌運を祈らん。（中略）。——當局者既に九州の經濟事情に照し內外の關係に考へ、我博多港を以て特別輸出入港と爲す、當局者の意中豈更に進んで他日我博多を以て開港場と爲さんと欲するものなからんや、吾人夙に這般の希望を有す。吾人は今既に我博多の港格を進めて特別輸出入港と爲すことを得たり。願くば更に進んで他日開港場と爲し以て吾人の素望を遂げん。

吾人今より能く彼を利用し此を利用せば以て商業益んにすべく以て興業起すべし。只憾むべきは港灣の缺點のみ。然れども之等は築港の一事を以て救ふべし。而して港灣修築の一事は吾人の發企を以て能く之を成就すべし。亦何の嘆ずる所ぞ、一片の銳氣を皷すれば大獄尙穿つべし、況んや九州の大門戸として廣く海內同胞の注意を引ける博多港の築港に於てをや、要は吾人の發奮熱心にあるのみ。

吾人能く築港を成就し、這般の權利を利用せば我福博の地は正に九州中心市場たり、又能く石炭を利用せば天下の大工業地たらん——吾人願くは博多港の面目を一新し小にしては縣下の利を加へ大にしては九州の貨殖を隆にし國利民福の增進を扶掖し永く今日を以て博多港進運の記念と爲さん。

明治廿九年十月、熊本市に於て九州の農蠶茶及び畜產業の聯合大會が催された。九州各縣よりの參集者千二百餘名、九州農事の振興策を討議したが、本紙は同月十四日紙上に九州の農業について

——本邦各地農業の度を推せば九州の地正に天下に冠たるべし。本邦の農は九州に在りと謂ふべし。然るに其の實に至りては未だ然らず、米麥の質、其の收穫の割合、其の耕作の法皆未だ他に比して著るしく優るものあらず、九州に於ける天惠の厚き以て十分に農を興すべし——九州人士之を以て滿足すべきか、國家貨殖の急務たるを知了し九州農利の大なるを知了し加ふるに進取の氣に富める九州人士の遺憾蓋し大ならん。——九州の地蠶業の無きにはあらざるも其の業尙極めて幼稚、中樞地區の盛大なるに比すれば及ばざること甚だし。九州の茶業稍其の體を成し九州の茶として天下に知らるゝも、靜岡、京都、奈良、兵庫等に比すれば及ばざる亦遠し、然るに九州の地を眺むれば蠶茶の業を擴張し以て貨殖を圖るべきの餘地十分に存す。——故に吾人として少しく奮勵せば將來必ず蠶茶の二業共に其の盛を期すべし。

と改良の法を研究し、振作の道を講ずべきことを記載してゐる。

八幡製鐵所は、日淸役後、我國製鐵事業の獨立を期せんがために明治二十九年度に四ケ年の繼續事業として四百九萬餘圓の經費を以て開始されたものであつたが、製鐵所八幡誘致の功勞者安川敬一郎、平岡浩太郎、的野半介の三人共に玄洋社員で、平岡は本社二代目社主であり、的野は二代目社長であり、安川は終始變らざる本社の後援者の一人であることも、本社が地方產業

開發に卒先し、地方發達に盡瘁した一端を示すものといふことが出來るであらう。

八幡製鐵所は明治三十年六月一日開廳されたが、本紙は當日の紙面に左の如く掲げて洞海灣の發展を豫言した。

博多灣築港の完成と云ひ、洞海灣の發達と云ひ、尊い輝きを有つ本紙の豫言であり卓見である。

製鐵所の開廳を祝す

上下の議、國家百年の大計を考へて其の設立を決定したる製鐵所の建設地はさきの日、本縣遠賀郡八幡村に確定し、爾來開廳の準備に忙しかりしが其の準備已に整成を告げ、茲に本日を以て愈よ開廳するに至れり、是れ眞に大にしては國家の慶事、小にしては本縣の慶事なり

（中略）―製鐵所は素と東洋製鐵の主權を握るの處、一方には從來國家が免るべからざりし不經濟を防ぎ以て國家の富強を進め、他方には大和民族天賦獨特の工藝的智能を利用し以て製鐵の基礎を鞏からしむるものならずや、請ふ試みに既往數ケ年に於て我國が海外より供給を仰ぎし鐵類の輸入を看よ、年々歳々其の增加著るしく、明治二十七年度の如きは十三萬噸に增加し同二十八年度には十五萬四千二百三十噸に達したるにあらずや

（中略）―夫れ遠賀郡八幡村に於る製鐵所の建設區域たる、官有地九千餘坪、寄附地一萬九千餘坪、買收地二十萬餘坪、總計二十二萬八千餘坪の廣きに亘り、後に巍峨たる檣山を負ひ、前は汪洋たる洞海に枕み、若松港を距る水上僅かに里許、小倉町を距る陸路二里、黒崎、戸畑への距離は國道に添ふて左右各々里許、水陸交通運輸の便利兼ね備はらざるなく、尚ほ不日、九州鐵道の支線路、黒崎より八幡村を經て戸畑に至り、築港會社は製鐵所の建設區域に沿へる洞海の澪湘を浚泄すべければ製鐵所の事業にして將來如何に擴張せらるゝも、決して不便不利を見る無かるべし。

三六、最初の野球記事

本紙に野球記事を掲げた最初は明治三十年四月六日であつた。左にその全文を掲げて參考とする。

野球競技を觀る

櫻花將に開かんとして春光漸く旺す、此の好時節に乘じて長肥健兒の野球競技を試む、豈骨鳴り肉躍るの慨に堪へんや。

競技場は舊福岡臺場、開演は四月四日午後一時よりと定めらる。

夜來の風雨跡を收めて天色拭ふが如く、和風面を吹いて輕塵颺らず、朝まだきより臺場を指して行くもの三々伍々、正午頃には場內殆んど人の山を築きて九州勢の技倆は如何に、中國方の擧動は如何になど打囁きて控へける。

見渡せば場の南方に控へたるは山口高等學校の一隊にして高く赤旗を掲げたり、今回修學旅行を機として野球競技を熊本第五高等學校に申し込みたるもの、流石に中國勢の溫雅典淡なる平家方の靑侍と見受けられるも鍛へ上げたる鐵腕容易に侮るべからず、西の一帶は卽ち第五高等學校の職員生徒にして面色鐵よりも黒く、打ては響かん双腕の力瘤凄じく威風あたりを拂ふて見へにける。

午後一時は來りぬ、場內何となくドヨメキ渡りて今か今かと待受ける內に山口方の選手九名熊本方の選手九名互ひに近寄りて恭しく一禮し和氣靄々の裡に引退るや、抽籤の結果によつて最初の打手は熊本方と報告されたり。是に於て赤帽を頂きたる山口方は各番に就き、白布を纏ひたる熊本方は打手の位置に移る。源氏勝つか平家負くるか堅唾を呑んで打たる双方の面色、分けて今日を晴れの大勝負に一方の榮辱を擔ふて立てる九名の胸中果して如何、南無や八幡護らせ給へと心に念じて衆目環視の中に立ちしは左の諸氏にぞありける。

投手	田川	熊本方	山口方	今田	投手
捕手	萩原			小池	捕手
ショルト・ストップ	小川齋藤				ショルト・ストップ
第一ベース	中島河内				第一ベース
第二ベース	今井			坪井	第二ベース
第三ベース	森谷			西田	第三ベース
右側	尾崎			多田	右側
左側	丸山			瀧口	左側
センター・フキルド	橋本			河野	センター・フキルド

審判者は山口高等學校教頭土井助三郎氏、兩者の位置定まるを見計らひて遊戯球を與ふ。

次第に傾き毬て二名のアウトを生じて茲に第一回の終りを告げぬ。第二回は始まれり、此の度は兩者の位置轉換して山口方は打手に、熊本方の各番に一人も逃がすまじの面色勇ましく山口方の沈着も三人續けて失敗したるは何ぼう本意なかりし事なりけめ（中略）――茲に當日の一大呼び物となりて熊本勢の長く其の功勞を忘るべからざるは肥前島原の住人、當時第五高等學校法科第二年生中島の章氏にぞありける、六尺有餘の大兵而も筋骨逞しく技術に秀で常に第一ベースにありて一騎打の功名に敵を壓すこと夥しく、源氏大勝の功最も其の多きに掛るといふ。

毬てアンパイアの宣告あり、熊本二十一に對する山口方の二、卽ち十九の多數を以て殆んど全勝の好成績を得たり。彼我の選手各九名は始めの如く進み寄り一揖の下に相笑つて散會せしは側の見る目も床しかりき、時に午後四時を過ぐる頃なりけり。

想ふに今回山口方の失敗を招きしは主として第一ベースの未熟練に歸せざるべからず、次は走方の拙劣、次は組內の一致を缺ぎし嫌ひなきを得るか、而して熊本方の長所とも云ふべきは辷りの巧妙なると打球に練熟したるとに在り、飛球の如きも確にその得意とする所ならんか左に掲ぐる勝負一覽表は元來正式のものに非ずと雖も今は通俗を主とし○印を通過、●印をアウト、△印をスタンヂングとして一目瞭然たらしむ。（鬼眼坊記す）

第一回（熊本）○○○●○○●△●

上下の議、國家百年の大計を考へて其の設立を決定したる製鐵所の建設地はさきの日、本縣遠賀郡八幡村に確定し、爾來開廳の準備に忙しかりしが其の準備已に整成を告げ、茲に本日を以て愈よ開廳するに至れり、是れ眞に大にしては國家の慶事、小にしては本縣の慶事なり

（中略）―製鐵所は素と東洋製鐵の主權を握るの處、一方には從來國家が免るべからざりし不經濟を防ぎ以て國家の富强を進め、他方には大和民族天賦獨特の工藝的智能を利用し以て製鐵の基礎を鞏からしむるものならずや、請ふ試みに既往數ケ年に於て我國が海外より供給を仰ぎし鐵類の輸入を看よ、年々歲々其の增加著るしく、明治二十七年度の如きは十三萬噸に增加し同二十八年度には十五萬四千二百三十噸に達したるにあらずや

（中略）―夫れ遠賀郡八幡村に於る製鐵所の建設區域たる、官有地九千餘坪、寄附地一萬九千餘坪、買收地二十萬餘坪、總計二十二萬八千餘坪の廣きに亘り、後に巍峨たる檣山を負ひ、前は汪洋たる洞海に枕み、若松港を距る水上僅かに里許、小倉町を距る陸路二里、黑崎、戸畑への距離は國道に添ふて左右各々里許、水陸交通運輸の便利兼ね備はらざるなく、尙ほ不日、九州鐵道の支線路、黑崎より八幡村を經て戸畑に至り、築港會社は製鐵所の建設區域に沿へる洞海の澪湘を浚泄すべければ製鐵所の事業にして將來如何に擴張せらるゝも、決して不便不利を見る無かるべし。

本紙に野球記事を掲げた最初は明治三十年四月六日であつた。左にその全文を掲げて參考とする。

野球競技を觀る

櫻花將に開かんとして春光漸く旺す、此の好時節に乘じて長肥健兒の野球競技を試む、豈骨鳴り肉躍るの慨に堪へんや。

競技場は舊福岡臺場、開演は四月四日午後一時よりと定めらる。

夜來の風雨跡を收めて天色拭ふが如く、和風面を吹いて輕塵颺らず、朝まだきより臺場を指して行くもの三々伍々、正午頃には場內殆んど人の山を築きて九州勢の技倆は如何に、中國方の擧動は如何になど打囁きて控へける。

見渡せば場の南方に控へたるは山口高等學校の一隊にして高く赤旗を揭げたり、今回修學旅行を機として野球競技を熊本第五高等學校に申し込みたるもの、流石に中國勢の溫雅典淡なる平家方の靑侍と見受けられるも鍛へ上げたる鐵腕容易に侮るべからず、西の一帶は卽ち第五高等學校の職員生徒にして面色鐵よりも黑く、打ては響かん双腕の力瘤凄じく威風あたりを拂ふて見へにける。

午後一時は來りぬ、場內何となくドヨメキ渡りて今か今かと待受ける內に山口方の選手九名熊本方の選手九名互ひに近寄りて恭しく一禮し和氣靄々の裡に引退るや、抽籤の結果によつて最初の打手は熊本方と報告されたり。是に於て赤帽を頂きたる山口方は各番に就き、白布を纏ひたる熊本方は打手の位置に移る。源氏勝つか平家負くるか堅唾を呑んで打たる双方の面色、分けて今日を晴れの大勝負に一方の榮辱を擔ふて立てる九名の胸中果して如何、南無や八幡護らせ給へと心に念じて衆目環視の中に立ちしは左の諸氏にぞありける。

	熊本方		山口方	
投手	田川		今田	
捕手	萩原	小池	小川	齋藤
ショルト・ストップ				
第一ベース	中島		河内	
第二ベース	今井		坪井	
第三ベース	森谷		西田	
右側	尾崎		多田	
左側	丸山	瀧口		
センター・フヰルド	橋本	河野		

審判者は山口高等學校教頭土井助三郎氏、兩者の位置定まるを見計らひて遊戲球を與ふ。

眞ツ先の打手は熊本方に於ても名代の老練家萩原氏、氣を鎭め心を平かにして打球の姿勢を取る。敵もさるもの、此の一人を逃がすべからずと要所々々の注意嚴かに人々掌に汗握る程こそあれ、投手の投げ出す球見事に受流して各難關を通過し、踵いで橋本、今川の兩氏も難なくホームに還り熊本勢の營喜抑ふべからず、帽を振り聲を放つて暫しは鳴りも止まざりける。實にや一勝一敗は物の數とて第四番森谷氏に至りて失敗し源氏の旗色次第に傾き軈て二名のアウトを生じて茲に第一回の終りを告げぬ。第二回は始まれり、此の度は兩者の位置轉換して山口方は打手に、熊本方の各番に一人も逃がすまじの面色勇ましく山口方の沈着も三人續けて失敗したるは何ぼう本意なかりし事なりけめ（中略）―茲に當日の一大呼び物となりて熊本勢の長く其の功勞を忘るべからざるは肥前島原の住人、當時第五高等學校法科第二年生中島の章氏にぞありける、六尺有餘の大兵而も筋骨逞しく技術に秀で常に第一ベースにありて一騎打の功名に敵を殪すこと夥しく、源氏大勝の功最も其の多きに掛るといふ。

軈てアンパイアの宣告あり、熊本二十一に對する山口方の二、卽ち十九の多數を以て殆んど全勝の好成績を得たり。彼我の選手各九名は始めの如く進み寄り一揖の下に相笑つて散會せしは側の見る目も床しかりき、時に午後四時を過ぐる頃なりけり。

想ふに今回山口方の失敗を招きしは主として第一ベースの未熟練に歸せざるべからず、次は走方の拙劣、次は組內の一致を缺ぎし嫌ひなきを得るか、而して熊本方の長所とも云ふべきは辷りの巧妙なると打球に練熟したるとに在り、飛球の如きも確にその得意とする所ならんか左に揭ぐる勝負一覽表は元來正式のものに非ずと雖も今は通俗を主とし○印を通過、●印をアウト、△印をスタンヂングとして一目瞭然たらしむ。（鬼眼坊記す）

第一回	（熊本）	○○○●○○●△●
第二回	（山口）	●●●
第三回	（熊本）	●●△△●
第四回	（山口）	●●△△●
第五回	（熊本）	●○●○△○
第六回	（山口）	●●●
第七回	（熊本）	○●△●●
第八回	（山口）	○●●●●

第九回	（熊本）	●●●
第十回	（山口）	●●△●
第十一回	（熊本）	●●●
第十二回	（山口）	●●●
第十三回	（熊本）	○○○○○○○●●●
第十四回	（山口）	●△○●●
第十五回	（熊本）	○○●●○●
第十六回	（山口）	●△●●
第十七回	（熊本）	○○○△●△●●
第十八回	（山口）	●●●

三六、當時の本社陣容

川村惇の後を襲ふて第二代の主筆となり、慷慨の健筆と雄辯を以て本紙の紙價を高からしめた中島勝義は、日清役の終末と共に臺灣に去り、代つて日本新聞で知られた久留米出身の淺野陽吉（後の代議士）が迎へられて第三代の主筆となり、福陵新報最後の筆陣を飾つた。二十九年劈頭の本社の陣容は、編輯局には創刊當時よりの今村外園、佐竹菅根をはじめとして平田學、津田喜太郎、津原順吉、元滿尚雄、池元範之助、士師正直、河內久吉、植山愼太郎等があり、營業局には監督久田全を始め尾西要太郎、宗久吉、竹內惣右衛門、櫛橋矩、青柳勝彥、工場には工場長笹岡磯丸の下に野村卯之助、木末友太郎、久野茂松、惠利惠、中村熊太郎、廣渡今緒等が中堅であつた。

淺野主筆は此の年三月入社し續いて五月には北海道北門新報に在つた宮川五郎三郎が歸福して編輯局に入り、六月には永田成美久留米支社の主任となり、八月池元範之助退社し、次いで十月には庶務監督として平岡德次郎、主幹として井原勳が入社し、編輯局「經濟殖産係」に加來市之助が入つて陣容を整備した。

翌三十年には新に遠山竹茂、安永東之助、早川方明、宮崎來城、石井天崖以志田小禪、今村秀夫等が編輯局に加はつた。

三七、戰後、紙價の改正と二頁增頁斷行

明治二十九年七月一日、紙價及び勞銀の騰貴による廣告料の値上を、福岡日日新聞と共に行つた。改正料金は普通廣告料一行一回十錢、二回以上四回以內八錢五厘、五回以上七錢、特別廣告料一行一回二十五錢であつた。

かくて翌三十年の新春初刷號から紙面の大改良を行つて紙幅二頁增頁を斷行して六頁とした。本紙の歷史上の第一の劃期であるこの增頁斷行は、時勢の進運に伴ふ施設であつたが、本社が此の爲に拂つた犧牲は莫大であつた。

——先づ工場設備の大改革を行つて印刷場を新築し、活字を一新し、印刷機械を購入したが、創刊以來、印刷部員を惱まし、多大の勞力を要してゐた手廻しによる印刷をこの時から新鋭設備に成る蒸氣汽鑵に代へたので印刷能力は驚異的增大を示した。

二頁增頁による改正定價並に廣告料は左の如くであつた。

購讀料一部二錢、一ケ月二十八錢△廣告料、普通一行一回十二錢、二回以上四回以內十錢、五回以上九錢、特別一行一回三十錢

しかしながら、戰後の物價騰貴は停止するところを知らず止むを得ず福岡日日新聞と協議して再び購讀料及び廣告料金の改正を行つた。

購讀料一ケ月三十錢△廣告料普通一行一回十五錢、二回以上四回以內十三錢、五回以上十一錢、特別一行一回三十錢、

今村外園の「當直日誌」の一部を揭げて當時の社內の一部を窺ふの資としよう。

紳士ものすといふ日記を貧書生もして見むとて強ち氣取るにはあらねど昨夜は當直と一週一度は免れぬ順番なれば、豫て覺悟の上ながら編輯局に獨り取遺されけるぞ我ながら憫然なる、局は二階にありて階下は植字部なれば、植字場に懸けわたしたる數十のらんぷの晝を欺く報酬として其のガスは盡く當直者の呼吸に迫りて鼻の孔の黑くなるを、東海道を通したる汽車の客にも似たり、折しもあれ受付より持ち來る電報數通、さらでだに暗號不明に頭痛さへ斜ならざる最中へ、手間取りてはタイプの間に合ひませぬと出船を急ぐ番頭もどきに植字場の督促尋常ならず、一ト汗になりて漸く譯文を授け心儀かに歸り仕度して時計を眺むれば正にこれ十一時三十分さしも繁華な中島街頭も今は更ける夜に寂れ果て途絶へがちなる往來の人の下駄音高く冴へて軒燈既に眠り按摩の笛遠く去つて深夜の風情轉濃かなるを見る。お供はなりませ盡くすことゝなり、左の記者を特派し、始めての試みである書報通信を揭げ記事と相俟つて異彩を放つた。

△特派員

監軍部付	宮川五郎三郎	
第五師團司令部付	辰己豐吉	
同	今村外園	
第六師團司令部付	遠山竹茂	
同	安永東之助	
書報通信	山田一廣	

當時の福岡市天神町通り

三九、終刊の辭

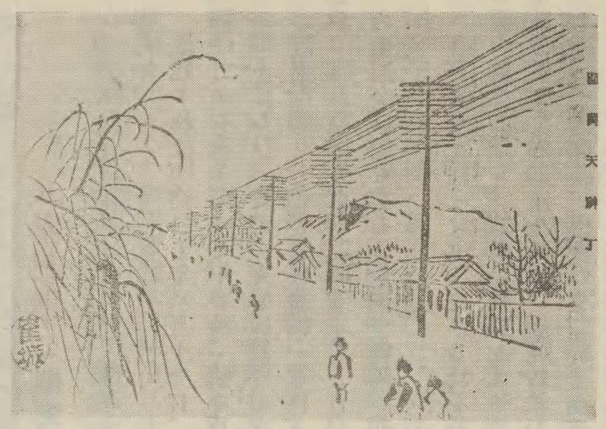
征淸役を劃期として躍進をつゞけた本社は、明治三十一年の正月には初刷一萬八千部といふ驚異的躍進を示し、更に十六頁印刷機二臺を增設して增大する讀者の要求に應へ、初刷號には今村外園、平田蕉雨、佐竹秋帆、元滿樂水、士師耕月、福田皆山、石井天崖、以志田小禪等の健筆を揃へて詩歌隨筆を揭げ、はちきれんばかりの幸先を思はしめたが、一月九日には主筆淺野陽吉が「小生聊か感ずる所あり、玆に福陵新報紙上の別を江湖諸彥に告ぐ」との一片の辭を殘して退社し、續く二月七日には本社創立以來の今村外園をはじめ平田蕉雨、福田皆山等の幹部どころが「都合により福陵新報社を退く」の

第十七回（熊本）○○○△●●△●●●
第十八回（山口）●●●

三六、當時の本社陣容

川村惇の後を襲ふて第二代の主筆となり、慷慨の健筆と雄辯を以て本紙の紙價を高からしめた中島勝義は、日清役の終末と共に臺灣に去り、代つて日本新聞で知られた久留米出身の淺野陽吉（後の代議士）が迎へられて第三代の主筆となり、福陵新報最後の筆陣を飾つた。二十九年勞頭の本社の陣容は、編輯局には創刊當時よりの今村外園、佐竹菅根をはじめとして平田學、津田喜太郎、津原順吉、元滿尙雄、池元範之助、士師正直、河內久吉、植山愼太郎等があり、營業局には監督久田全を始め尾西要太郎、宗久吉、竹內惣右衛門、櫛橋矩、青柳勝彥、工場には工場長笹岡磯丸の下に野村卯之助、木末友太郎、久野茂松、惠利惠、中村熊太郎、廣渡今緒等が中堅であつた。

淺野主筆は此の年三月入社し續いて五月には北海道北門新報に在つた宮川五郎三郎が歸福して編輯局に入り、六月には永田成美久留米支社の主任となり、八月池元範之助退社し、次いで十月には庶務監督として平岡德次郎、主幹として井原勳が入社し、編輯局「經濟殖産係」に加來市之助が入つて陣容を



當時の福岡市天神町通り

昨夜は當直と一週一度は免れぬ順番なれば、豫て覺悟の上ながら編輯局に獨り取遺されけるぞ我ながら愕然なる、局は二階にありて階下は植字部なれば、植字場に懸けわたしたる數十のらんぷの晝を欺く報酬として其のガスは盡く當直者の呼吸に迫りて鼻の孔の黑くなるを、東海道を通したる汽車の客にも似たり、折しもあれ受付より持ち來る電報數通、さらでだに暗號不明に頭痛さへ斜ならざる最中へ、手間取りてはタイプの間に合ひませぬと出船を急ぐ番頭もどきに植字場の督促尋常ならず、一ト汗になりて漸く譯文を授け心饒かに歸り仕度して時計を眺むれば正にこれ十一時三十分さしも繁華な中島街頭も今は更ける夜に寂れ果て途絶へがちなる往來の人の下駄音高く冴へて軒燈既に眠り按摩の笛遠く去つて深夜の風情轉濃かなるを見る。お供はなりませぬかと辻待車の勸めを男らしう肱にしたるは近頃金錢てふ野卑しきものを取扱はぬ故ぞかし——

三八、筑豐の大演習

明治三十年十一月、廣島第五師團と熊本第六師團とが筑豐の野に相見へて日清役後最初の大機動演習が擧行された。我社はこの年恰も創立十周年に相當するので盛大な祝典準備中であつたが、これを取止めて演習報道に全力を

かくて翌三十年の新春初刷號から紙面の大改良を行つて紙幅二頁增頁を斷行して六頁とした。本紙の歷史上の第一の劃期であるこの增頁斷行は、時勢の進運に伴ふ施設であつたが、本社が此の爲に拂つた犧牲は莫大であつた。

——先づ工場設備の大改革を行つて印刷場を新築し、活字を一新し、印刷機械を購入したが、創刊以來、印刷部員を惱まし、多大の勞力を要してゐた手廻しによる印刷をこの時から新鋭設備に成る蒸氣汽罐に代へたので印刷能力は驚異的增大を示した。

二頁增頁による改正定價並に廣告料は左の如くであつた。

購讀料一部二錢、一ケ月二十八錢△廣告料、普通一行一回十二錢、二回以上四回以內十錢、五回以上九錢、特別一行一回三十錢

しかしながら、戰後の物價騰貴は停止するところを知らず止むを得ず福岡日日新聞と協議して再び購讀料及び廣告料金の改正を行つた。

購讀料一ケ月三十錢△廣告料普通一行一回十五錢、二回以上四回以內十三錢、五回以上十一錢、特別一行一回三十錢、

今村外園の「當直日誌」の一部を揭げて當時の社內の一部を窺ふの資としよう。

紳士ものすといふ日記を貧書生もして見むとて強ち氣取るにはあらねど盡くすことゝなり、左の記者を特派し、始めての試みである書報通信を揭げ記事と相俟つて異彩を放つた。

△特派員

監軍部付　宮川五郎三郎
第五師團司令部付　辰己豐吉
同　今村外園
第六師團司令部付　遠山竹茂
同　安永東之助
書報通信　山田一廣

三九、終刊の辭

征淸役を劃期として躍進をつゞけた本社は、明治三十一年の正月には初刷一萬八千部といふ驚異的躍進を示し、更に十六頁印刷機二臺を增設して增大する讀者の要求に應へ、初刷號には今村外園、平田蕉雨、佐竹秋帆、元滿樂水、士師耕月、福田皆山、石井天崖、以志田小禪等の健筆を揃へて詩歌隨筆を揭げ、はちきれんばかりの幸先を思はしめたが、一月九日には主筆淺野陽吉が「小生聊か感ずる所あり、玆に福陵新報紙上の別を江湖諸彥に告ぐ」との一片の辭を殘して退社し、續く二月七日には本社創立以來の今村外園をはじめ平田蕉雨、福田皆山等の幹部どころが「都合により福陵新報社を退く」の辭を告げて退社してしまつた。編輯局の總帥たる主筆を失ひ、幹部記者を失つた福陵新報は、果然紙面の精彩を失ひ、創刊以來十一ケ年、中正主義を高く揭げ、硬言直筆を以て天下を叱咤した福陵新報も經營の難局に直面しては凋落の兆が日一日と濃くなつた。明治三十一年五月七日、この日こそ過去十一ケ年に亘る福陵新報の荊棘の途が終ると共に、新代議士として野心滿々の風雲兒平岡浩太郎を社主とし、的野半介を社長とし古島一雄を主筆とし「九州日報」としての第一步を踏み出す記念せらるべき日である。終刊紙上には

「福陵新報の述懐」と題して萬感深き終刊の辭と更生への希望に充ちた社告を掲げてゐる。

終刊號の題字

歳月人をして巨人たらしむ、時勢の寵兒たる新聞豈に大新聞たらざるを得んや。

憶起すれば明治二十年八月十一日、福陵新報が社會の搖籃に呱々の聲を擧けてより歳を閲する十春秋、號を重ねる三千百卅三、政治に經濟に雄渾の筆を振るひ、教育に文學に篤厚の文を飛ばし、尚社會問題に向つて精細の觀察を施せしこと實に幾何一片稜々の鯁骨亦奇禍を購ひしこと無きに非ず、卽ち發行停止の厄に遭ふこと五回、編輯人の獄に下ること亦五回、其の他罰金に處せらるゝ數回、嗚呼、福陵新報は毅然逆境に處し今日に及べり。

福陵新報は自ら社會に於ける功を誇らず、然りと雖、福陵新報が今や時勢の趨歩に鑑み、筆硯の征戰を九州日報に讓り九州日報をして新にして猶且つ重大なる責任を負ひ、福陵新報が夙夜汲々の福祉を企圖して止まざりし福岡縣は無論、內外外交に於て殖產興業に於て、竟に帝國の牛耳を執るべき九州に向つて一大貢獻を爲さんとするに際し吾人同志は懷舊の情に堪へざるものなくんばあらず。

誠に憶へ、福陵新報は吾人同志が天下に對する主張の唯一機關にあらずや、而して福陵新報が得意の時代は之を謂はず、其の逆境に處して幾多の艱難に際會するも、侃々の議、諤々の論、吾人同志の主張をして往々九鼎大呂の重きを有せしめしことを想へば吾人同志たるもの痛く今昔の感に打たれざらんや。

然れども、歳月人をして巨人たらしむ、時勢の寵兒たる新聞豈に大新聞たらざるを得んや、福陵新報は今や舞臺を辭すと雖も、大なる舞臺は更に九州日報を迎へん。福陵新報は此に任務を去ると雖も大なる任務は當に九州日報の上にあり、福陵新報が筆硯の聖戰を九州日報に讓りしは、一に時勢の趨歩已むべからざるによるものにして、吾人同志は福陵新報に惜別の情を表すると共に、又九州日報を歡迎すべきなり、本日の終刊に臨み福陵新報の述懐は舊希望より新希望に移るべき眞理を示せり

かくて、八、九の兩日休刊して五月十日から九州日報に更生した

第二章　改題飛躍篇

一、平岡と的野

頭山滿の後を承けて本社の第二代社主となつた平岡浩太郎、同じく第二代社長となつた的野半介は共に玄洋社員であり、平岡は玄洋社第一代の社長である。

平岡は、箱田六輔、頭山滿と共に「玄洋社三傑」と稱せられて聰敏、機略從横、快男子中の快男子であつた。若くして幕軍追討の奥羽の戰爭に參加し、明治十年の亂に加はり、玄洋社の社長を辭して「軍用金調達」と稱して實業界に飛び込んでは、豐國、赤池等の大炭坑の經營に成功し、或ひは東洋運輸會社を起し、或ひは彼の素懷である大陸經營に就いての運動については枚擧に遑なく、上海東亞同文書院の前身をなす東洋學館の建設を援助して子弟養成に專念したのも彼であり、征韓義勇軍を組織して大西郷の遺志を繼がんとしたこともあり、日清役の裏面に活躍した有名な天祐俠の活動も彼の援助によるものであり、軍事探偵に從事した志士の多くは彼の門下の人々であつた。福岡縣第一區より立候補して代議士たること明治二十七年より終焉の明治三十九年まで、代議士としての平岡の名は日本最初の政黨內閣である隈板內閣を彼が盟主となつて組織せしめたことにより、日本憲政史上燦然たる輝きをとゞめてゐる。

的野半介は平岡の義弟(妹婿)で、やはり後の代議士である。福岡藩の輕輩の子として生れ、振出しは長崎縣巡査であつた。彼はその青年時代、盟友來島恒喜と共に悽慨悲歌、國事に奔走し、九州鐵道、筑豐鐵道の敷設、筑豐炭田の解放開拓、製鐵所八幡誘置に努力した彼の功績は莫大である。殊に洞海灣政策については畢生の努力を傾注した。又「江藤南白傳」を著述してその贈位に奔走したことも人の知るところである。

改題と決定した福陵新報は、明治三十一年五月一日の第一面に左の如き物々しい改題の「緊急社告」を掲げて讀者を驚かした。

二、九州日報（福陵新報の大革新）

り、進みて九州全體の正確なる豫言者を以て自ら居らむと欲つする所以なり、然り九州日報は此の希望と此の抱負とを懷きて本月十日愈よ社會に起ち、敏腕達識の記者、能才純良の庶務員をして從横に其の技倆を揮はしめ器械を增し、活字を新にし、熱練の職工、神速の配達夫を置き以て專ら世人の囑望を滿すべし、而して我社の相談役及評議員は旣に內定し居ると雖も之を發表當日の紙上に讓り先づ內部の組織を記せば

社長　的野半介
監督　平岡德次郎
編輯局主筆　古島一雄
井上次郎
平田學
佐竹菅根
福田喜太郎
植山愼太郎
宮崎滔夫
（外數名）
庶務部主任　今村爲雄
石井勇造
元滿尙雄

歲月人をして巨人たらしむ、時勢の寵兒たる新聞豈に大新聞たらざるを得んや。

憶起すれば明治二十年八月十一日、福陵新報が社會の搖籃に呱々の聲を擧げてより歲を閲する十春秋、號を重ねる三千百卅三、政治に經濟に雄渾の筆を振るひ、教育に文學に篤厚の文を飛ばし、尚社會問題に向つて精細の觀察を施せしこと實に幾何一片稜々の鯁骨亦奇禍を購ひしこと無きに非ず、卽ち發行停止の厄に遭ふこと五回、編輯人の獄に下ること亦五回、其の他罰金に處せらるゝ數回、嗚呼、福陵新報は毅然逆境に處し今日に及べり。

福陵新報は自ら社會に於ける功を誇らず、然りと雖、福陵新報が今や時勢の趨歩に鑑み、筆硯の征戰を九州日報に讓り九州日報をして新にして猶且つ重大なる責任を負ひ、福陵新報が夙夜汲々の福祉を企圖して止まざりし福岡縣は無論、內外外交に於て殖産興業に於て、竟に帝國の牛耳を執るべき九州に向つて一大貢献を爲さんとするに際し吾人同志は懷舊の情に堪へざるものなくんばあらず。

誠に憶へ、福陵新報は吾人同志が天下に對する主張の唯一機關にあらずや、而して福陵新報が得意の時代は之を謂はず、其の逆境に處して幾多の情を表すると共に又九州日報を歡迎すべきなり、本日の終刊に臨み福陵新報の述懷は舊希望より新希望に移るべき眞理を示せり

かくて、八、九の兩日休刊して五月十日から九州日報に更生した

第二章 改題飛躍篇

一、平岡と的野

頭山滿の後を承けて本社の第二代社主となつた平岡浩太郎、同じく第二代社長となつた的野半介は共に玄洋社員であり、平岡は玄洋社第一代の社長である。

平岡は、箱田六輔、頭山滿と共に「玄洋社三傑」と稱せられて聰敏、機略從橫、快男子中の快男子であつた。若くして幕軍追討の奥羽の戰爭に參加し、明治十年の亂に加はり、玄洋社の社長を辭して「軍用金調達」と稱して實業界に飛び込んでは、豐國、赤池等の大炭坑の經營に成功し、或ひは東洋運輸會社を起し、或ひは彼の素懷である大陸經營に就いての運動については枚擧に遑なく、上海東亞同文書院の前身をなす東洋學館の建設を援助して子弟養成に專念したのも彼であり、征韓義勇軍を組織して大西鄕の遺志を繼がんとしたこともあり、日淸役の裏面に活躍した有名な天祐俠の活動も彼の援助によるものであり、軍事探偵に從事した志士の多くは彼の門下の人々であつた。福岡縣第一區より立候補して代議士たること明治二十七年より終焉の明治三十九年まで、代議士としての平岡の名は日本最初の政黨內閣である隈板內閣を彼が盟主となつて組織せしめたことにより、日本憲政史上燦然たる輝きをとゞめてゐる。

的野半介は平岡の義弟(妹婿)で、やはり後の代議士である。福岡藩の輕輩の子として生れ、振出しは長崎縣巡査であつた。彼はその青年時代、盟友來島恒喜と共に悽愴悲歌、國事に奔走し、九州鐵道、筑豐鐵道の敷設、筑豐炭田の解放開拓、製鐵所八幡誘置に努力した彼の功績は莫大である。殊に洞海灣政策については畢生の努力を傾注した。又「江藤南白傳」を著述してその贈位に奔走したことも人の知るところである。

改題と決定した福陵新報は、明治三十一年五月一日の第一面に左の如き物々しい改題の「緊急社告」を掲げて讀者を驚かした。

緊急社告 九州は帝國西南の巨鎭にして我筑豐三州の地は實に其の樞要に位し天賦の富は人爲の富と伴ひ政治、經濟、教育、文學其の他社會必須の事業既に九州の原動力たり、夫の改正條約實施せられ、內地雜居の曉に至らば福岡縣は頓に內外人競爭の焦點となり、應接是れ日も足らざるに至らむされば社會の耳目を以て任ずる新聞紙の如きは卒先之れに對する大任を盡くすに努めざるべからず、是れ我が社が一大革新を福陵新報に加へて題を九州日報と改め、自今以往卓厲風發、退いて福岡縣の忠實なる指南者となり、進みて九州全體の正確なる豫言者を以て自ら居らむと欲つする所以なり、然り九州日報は此の希望と此の抱負とを懷きて本月十日愈よ社會に起ち、敏腕達識の記者、能才純良の庶務員をして從橫に其の技倆を揮はしめ器械を增し、活字を新にし、熱練の職工、神速の配達夫を置き以て專ら世人の囑望を滿すべし、而して我社の相談役及評議員は旣に內定し居ると雖も之を發表當日の紙上に讓り先づ內部の組織を記せば

社長 的野半介
監督 平岡德次郎
編輯局主筆 古島一雄
井上次郎
平田學
佐竹菅根
福田喜太郎
植山愼太郎
宮崎滔夫
(外數名)
庶務部主任 今村爲雄
石井勇造
元滿尙雄
井上定規

古島氏は日本新聞創立以來同社に在りて硯筆を揮ひ、東都文壇の宿將として最も斯業の經驗に富み、井上氏は夙に實業社會に奔走して名あり、今や我が社の爲め臺北米穀取引所支配人の職を辭して平生の蘊蓄を紙上に漏らさむとす、宮崎氏は多年支那に在りて風雲の氣胸中に鬱勃たり我社は隨時氏を淸韓の地に特派して東方問題の眞相を描かしむる所あらむ、平田氏以下の數氏は旣に久しく斯業に從事して其の名世間に著る、今絮說するの要

なし、各々雄渾奇拔の筆を呵して九州日報の爲異彩を放つ可きなり。

尙ほ通信は我社が最も大に力を致さむとする所にして、九州東西の關門たる門司、長崎の兩港に外國語に精通せる有力の記者を特派し、以て內外の報道に任ぜしむるのみならず、縣下著名の市町村にも相當の通信員を設けて各地の出來事巨細之を本社に致さしめんとす、卽ち

門司出張所主任　辰巳豐吉

をして筑豐四郡に於ける坑業其の他諸事業の報道を宰らしめ

長崎港特派記者　玉眞操

をして領事軍艦の訪問を爲し、刻下海外事情を報道せしむべし。

加之、露國に內田甲氏あり、支那に末次節氏あり、朝鮮に西川蛻江氏あり邏羅に益田三郎氏あり、臺灣に奈良崎八郎氏及び雪溪氏あり、各々卓拔の觀察を以て特殊の筆を揮ひ、東方問題の活機を紙上に收め來らむとす。

三、改題第一號

かくて、明治三十一年五月十日福陵新報の舊殼を破つて「九州日報」は誕生した。この日の改題記念號は十二頁、第一面に的野社長の「九州日報の抱負」と題する宣言を揭げ、第二面には新主筆古島一雄及び井上次郎の「入社の辭」があり、その他各面には內外のニュースも豐富に、名士關係者の祝詞祝文を揭げ、この頃からやうやく社員執筆以外の小說として揭げ始めた双龍齋貞鏡の講談「一心太助」や孤桐作「飛龍傳」の外に、改題第一號から宮崎滔天作の「淸國革命黨領袖孫逸仙、幽囚錄」を揭げることになつた。

的野社長の宣言は左の如くである。

山川秀靈、風土順適、炭田富み良港多く土地豐饒にして鱗介亦海に繁殖し獨り天然の利福を專らにして人口の大吸收を始め風俗人情自ら活氣を帶びて政治敎育に殖產興業に雄を天下に誇るもの是れ豈に我が九州に非ずして將た何ぞや。試みに九州の形勢を相せんか九州は南に臺灣の在るあり。西に淸國と隣し雞林半島の風雲之を一衣帶水に臨み絕束有事の日に會せば九州は直に其の要衝に當りて帝國の運命を保持すべきなり。然り而して時の平和に際しては運輸なり交通なり又商業に工業に悉く列國と競爭の地步を占むべき最も重大の關繫を有す。噫九州の前途や誠に多望なるかな。顧みて我福岡縣は如何、抑も福岡縣は筑豐三州を統轄し政治思想大いに進み、敎育事業大いに振ひ石炭なり農產物なり全國に冠して亦比儔を見ず、殖產興業の機關は運輸交通の機關と共に併進し製罐紡績織物其他各種の製造日に月に勃興し鐵路縱橫、船舶輻輳、經濟機關の整備は諸般會社の設立踵を接し天賦の富は人爲の富と伴ひ社會總べての事物、福岡縣は優に覇を關の以西に構へて實に九州爾餘の六縣に於ける原動力たる中心點と爲れり。加へて福岡縣の地勢たる北は玄洋に瀕して博多、若松の二良港あり南は九州諸縣と接して鐵路の交通を助くるあり。西に船越灣あり東に門司の輸出入港あり自然は斯の如く無上の惠澤を福岡縣に施すと共に又大に人爲の福岡縣に待つべきものなくんばあらず。卽ち將に誘導せらるべき九州の文物は福岡縣先づ之を制し九州の殖產興業は福岡縣先づ之を謀り九州の內地雜居は福岡縣先づ之を引受け悉く之を呑吐消化して九州諸縣に分秘營養せしめざるべからず。

想ふに今や福岡縣の趨勢は九州の趨勢を支配し九州の趨勢は帝國の趨勢を左右せんとす、此の趨勢に乘じて以て政治に實業に其他諸般事業の發達進捗を企圖するは實に識者の當世に懷く志ならずや、然も時世の產物たる事件を紹介して世人の判斷を促し尙之を論評して社會の向背を敎ふるはカーライルの所謂英雄的業務に屬せり。吾人の微才薄識なる敢て其任に當らずと雖、一片耿々、愛時慨世、世道公益を稗補するの志なからんや、然り吾人は進んで福岡縣の福祉を求め及ぼして九州の利益を謀り人爲の作用毫も天賦の賜物乖かざらんことを期し九州の趨勢を善導するの抱負を有す。我が九州日報は蓋し此の抱負に依て社會に紹介せらるるものなり、換言すれば九州日報の抱負は公明なる政治の忠告者となり忠實なる實業の味方となり純良なる敎育の援護者と爲り正大なる文學の奬勵者と爲り且つ社會の淸朗を謀り家庭の和樂を求め又近きより遠きに及ぼし字內の出來事は無論新智識、新發明苟も世人の參考に資すべきもの悉く之を一幅の紙上に描寫するに在り。而して吾人が最も力を致さんとするには自省自戒記事の公平を保ち報道の迅速に努め從來新聞事業の一弊害たる中央と地方の疎隔を接近せしめ新聞と實業家と握手せしめ新聞と同志と契合せしめ以て新聞そのものをして社會交詢の歡迎者たらしむるに存す。

吾人は九州日報の抱負を實際に遂行するの方針に則り社內の諸機關に全く革新を加へ新聞主腦の要素たる編輯、庶務の兩部に健筆達識の記者、能才敏腕の事務員を得、長所に鑑みて各自の擔を定め爾今以往大に其の技倆を試ましめんとす。若し夫れ九州日報の抱負にして着々步武を進め九州秀靈の山川に文壇の異彩を添ふるを得ば吾人亦他に何をか望まんや。

主筆古島一雄の入社の辭

九州日報の主義本領は吾人既に之を告白する、諸君再び聽くを欲せざるべし、新聞記者の責任は諸君既に之を知る、吾人必ずしも說くを須ひざるなり、今や外は歐洲列强虎狼の慾を逞くして東亞の均勢を破り內は外交財政其宜しきを失して國運の進捗を阻む、此秋に當りて九州日報は如何にして

治三十一年十一月初旬に竣工した。

新社屋は新樣式二階建の木造西洋館で表階下が庶務部、表階上が編輯部、文撰植字場は裏階上でその階下が印刷部であつた、當時博多目貫街の一偉容を示す堂々たる社屋であつた。新社屋への移轉は十一月十三日から始められ汽罐ロール機械の据ゑ付、活字臺の配置等一切を完了したのは十八日であつた。かくて二十三日新嘗祭の佳辰を卜して盛大な移轉式及び祝賀會を擧げた。——この日は特に十頁の新聞を發行し、他に東京小川一眞の製版になる福岡縣下十二勝景地の美麗な寫眞を附錄として共に數萬部印刷、九州各地に配布した。

移轉祝賀式は水茶屋集成館に於て行はれたが、翌日の新聞には左の如く記載されてゐる。

本社の景況——棟上の破魔弓曉風に飜り無數の球燈四方に吊るされて社頭の綠門露滴るが如く博多料理組合の寄附にかゝる積樽は數十挺の菰樽高く積上げられて社前の威勢を加へ表通りの裝飾全く成り玄關の入口には受付係の面々卓を列ねて賓客の雲來を待つ間程なく午前十時といふに東より西より三々伍々車を驅るもの徒步するもの踵を次ぎ來賓章を受取りたるものは案內係の先導に依りて編輯、庶務、植字、ステロー、印刷其の他各部を縱覽し通常門より出で當日の式場たる集成館を指し繰込みたり、是より先

をして領事軍艦の訪問を爲し、刻下海外事情を報道せしむべし。

加之、露國に內田甲氏あり、支那に末次節氏あり、朝鮮に西川蛻江氏あり遲羅に益田三郎氏あり、臺灣に奈良崎八郎氏及び雪溪氏あり、各々卓拔の觀察を以て特殊の筆を揮ひ、東方問題の活機を紙上に收め來らむとす。

三、改題第一號

かくて、明治三十一年五月十日福陵新報の舊殼を破つて「九州日報」は誕生した。この日の改題記念號は十二頁、第一面に的野社長の「九州日報の抱負」と題する宣言を揭げ、第二面には新主筆古島一雄及び井上次郎の「入社の辭」があり、その他各面には內外のニュースも豐富に、名士關係者の祝詞祝文を揭げ、この頃からやうやく社員執筆以外の小說として揭げ始めた双龍齋貞鏡の講談「一心太助」や孤桐作「飛龍傳」の外に、改題第一號から宮崎滔天作の「淸國革命黨領袖孫逸仙、幽囚錄」を揭げることになつた。

的野社長の宣言は左の如くである。

山川秀靈、風土順適、炭田富み良港多く土地豐饒にして鱗介亦海に繁殖し獨り天然の利福を專らにして人口の大吸收を始め風俗人情自ら活氣を帶びて政治教育に殖產興業に雄を天下に誇るもの是れ豈に我が九州に非ずして將た何ぞや。試みに九州の形勢を相せんか九州は南に臺灣の在るあり。西を接し天賦の富は人爲の富と伴ひ社會總べての事物、福岡縣は優に覇を關の以西に構へて實に九州爾餘の六縣に於ける原動力たる中心點と爲れり。加へて福岡縣の地勢たる北は玄洋に瀕して博多、若松の二良港あり南は九州諸縣と接して鐵路の交通を助くるあり。西に船越灣あり東に門司の輸出入港あり自然は斯の如く無上の惠澤を福岡縣に施すと共に又大に人爲の福岡縣に待つべきものなくんばあらず。卽ち將に誘導せらるべき九州の文物は福岡縣先づ之を制し九州の殖產興業は福岡縣先づ之を謀り九州の內地雜居は福岡縣先づ之を引受け悉く之を呑吐消化して九州諸縣に分秘營養せしめざるべからず。

想ふに今や福岡縣の趨勢は九州の趨勢を支配し九州の趨勢は帝國の趨勢を左右せんとす、此の趨勢に乘じて以て政治に實業に其他諸般事業の發達進捗を企圖するは實に識者の當世に懷く志ならずや、然も時世の產物たる事件を紹介して世人の判斷を促し尙之を論評して社會の向背を教ふるはカーライルの所謂英雄的業務に屬せり。吾人の微才薄識なる敢て其任に當らずと雖、一片耿々、愛時慨世、世道公益を稗補するの志なからんや、然り吾人は進んで福岡縣の福祉を求め及ぼして九州の利益を謀り人爲の作用毫も天賦の賜物乖かざらんことを期し九州の趨勢を善導するの抱負を有す。

我が九州日報は蓋し此の抱負に依て社會に紹介せらるるものなり、換言すれば九州日報の抱負は公明なる政治の忠告者となり忠實なる實業の味方となり純良なる教育の援護者と爲り正大なる文學の奬勵者と爲り且つ社會の淸朗を謀り家庭の和樂を求め又近きより遠きに及ぼし宇內の出來事は無論新智識、新發明苟も世人の參考に資すべきもの悉く之を一幅の紙上に描寫するに在り。而して吾人が最も力を致さんとするには自省自戒記事の公平を保ち報道の迅速に努め從來新聞事業の一弊害たる中央と地方の疎隔を接近せしめ新聞と實業家と握手せしめ新聞と同志と契合せしめ以て新聞そのものをして社會交詢の歡迎者たらしむるに存す。

吾人は九州日報の抱負を實際に遂行するの方針に則り社內の諸機關に全く革新を加へ新聞主腦の要素たる編輯、庶務の兩部に健筆達識の記者、能才敏腕の事務員を得、長所に鑑みて各自の擔を定め爾今以往大に其の技倆を試ましめんとす。若し夫れ九州日報の抱負にして着々步武を進め九州秀靈の山川に文壇の異彩を添ふるを得ば吾人亦他に何をか望まんや。

主筆古島一雄の入社の辭

九州日報の主義本領は吾人既に之を告白する、諸君再び聽くを欲せざるべし、新聞記者の責任は諸君既に之を知る、吾人必ずしも說くを須ひざるなり、今や外は歐洲列強虎狼の慾を逞くして東亞の均勢を破り內は外交財政其宜しきを失して國運の進捗を阻む、此秋に當りて九州日報は如何にして其主義本領を遂行し吾人は如何にして新聞記者たるの責任を盡すべきや、吾人は百言の一行に如かざるを知る故に必ずしも大方に訴へず、僕昨日を以て九州に入り今日を以て初めて諸君と相見る、行李勿々未だ旅裝を解くの遑あらず一言以て入社の辭と爲す

四、新社屋の建築成る

改題飛躍と同時に中島町二番地、中島橋畔に建築に着手された新社屋は明治三十一年十一月初旬に竣工した。

新社屋は新樣式二階建の木造西洋館で表階下が庶務部、表階上が編輯部、文撰植字場は裏階上でその階下が印刷部であつた、當時博多目貫街の一偉容を示す堂々たる社屋であつた。新社屋への移轉は十一月十三日から始められ汽罐ロール機械の据ゑ付、活字臺の配置等一切を完了したのは十八日であつた。かくて二十三日新嘗祭の佳辰を卜して盛大な移轉式及び祝賀會を擧げた。——この日は特に十頁の新聞を發行し、他に東京小川一眞の製版になる福岡縣下十二勝景地の美麗な寫眞を附錄として共に數萬部印刷、九州各地に配布した。

移轉祝賀式は水茶屋集成館に於て行はれたが、翌日の新聞には左の如く記載されてゐる。

本社の景況——棟上の破魔弓曉風に飜り無數の球燈四方に吊るされて社頭の綠門露滴るが如く博多料理組合の寄附にかゝる積樽は數十挺の菰樽高く積上げられて社前の威勢を加へ表通りの裝飾全く成り玄關の入口には受付係の面々卓を列ねて賓客の雲來を待つ間程なく午前十時といふに東より西より三々伍々車を驅るもの徒步するもの踵を次ぎ來賓章を受取りたるものは案內係の先導に依りて編輯、庶務、植字、ステロー、印刷其の他各部を縱覽し通常門より出で當日の式場たる集成館を指し繰込みたり、是より先本社の建築方小林伊助以下七十餘名は格の如く上棟の式を行ひ終つて餅撒きを始めたるに社前の群集はいふに及ばず中島町各店は殊に本社の移轉式を祝する爲め當日業を休みて幔幕を絞り各戶挿花一臺宛を寄附せられたれば之を看んとて來集する者亦頗る夥しく一時は通行も出來兼る程なりき、式場の光景——當日の式場たる水茶屋集成館には入口に大綠門を造り國旗を交叉し此處にも又受付係を設けて一々來賓の名刺を受取りたるが正午頃には千七百五十二名の多きに達し、階下及び三階を以て其の休憩所に充てたるも尙狹隘を感ずるに至れり、軈て煙火三發大空に轟くや同館の左手廣

庭に於て典式を始め博多音樂隊の奏樂起ると共に社長的野半介先づ壇に進み

「來賓諸君、我九州日報の新築落成致しましたに付今日新宇祭の佳辰を卜し茲に移轉式を行ふに當り諸君は路の遠近を厭はず斯くも盛んに御賁臨の榮を賜はりしは諸君が九州日報に對する御同情の深厚なるに因らずんばあらずとし社員一同に代り不肖半介が深く感謝する所でござります、尚ほ今日の光榮は我社の歷史に特筆して他日の記念としたく存じます、且つ新聞紙上の萬事は主筆古島一雄に一任しあれば舊に倍して御眷顧を仰ぎます」

と述べ終りて、主筆古島一雄挨拶の辭を述べ、次で曾我部知事を始め山本寛太（佐賀自由記者）石坂音彌太（九州新聞社總代）岡茂平（久留米絣同業組合取締役）四氏の祝詞、川野如矢（九州商業銀行取締役）松本健次郎（若松鑛業家）二氏の演說權藤貫一氏（前長野縣知事）の祝詞あり、最後に古島主筆社員一同に代りて答辭を述べ式の終りを告ぐ、時に煙火三たび空中に轟きて宴會の始まりを報ずるや博多及び筑紫音樂隊の奏樂喇吶たる間に來賓一同二階の宴會場に入る、さしもに廣き大廣間も千七百名以上の多人數が一時に込合ひたる事とて暫しは非常の混雜を極めたるが三廓の紅裙其の間に周旋して酒稍酣なるや松本健次郎氏場の中央に突き立ち「諸君本日は新營祭の佳辰なれば茲に謹んで天皇陛下萬歲を三呼せん」と呼ばはりしに孰れも贊成〳〵の聲の下に然らばとて松本氏の發聲にて陛下萬歲を三呼し、續いて九州日報萬歲を三呼せられ大館爲めに搖るがんとす、夫れより各自思ひ〳〵に痛飮健啖し三々伍々小隊を形造りて東公園なる園遊會場に向へり

竣工せる當時の新社屋正面

園遊會の賑合——園遊會場に入れば汁粉屋、酒屋、ビール店、茶屋、田樂店、饂飩屋、搗餅、水菓子、鰻屋、珈琲店等の設けあり、孰れの店方も六、七名の紅裙一對の赤前垂れに襷掛の姿漓々しくお客の光來を待つ（中略）日沒頃までの雜踏實に名狀すべからず、又園內の踊り舞臺には相生及び柳町藝妓の手踊り及び博多俄師連の滑稽劇夜に入りて益す熾んに煙火は晝夜とも數十發絕へず發揚し別に仕掛花火等の設けもありたれば老若男女の集まり來るもの夥しく園內一時は人の山を築きたる如くにて、博多高砂連の寶船、片土居町の梅に鶯、下土居の菖蒲、柳町の山車等を始め諸種の曳き物來るあり非常の景氣を添へたり、夜に入りては十六箇所に篝火を焚き人出も一層多かりしかば午後十時踊り舞臺も押倒さんず有樣に止むなく俄を中止したればボツ〳〵人足薄らぎ全く退散せしは午後十一時を過ぎる頃なりき。

五、新築祝詞

改題、新築と二重に祝賀の意味をこめて、移轉式當日の祝詞祝電は數百通の多きに上つたが、左にその二、三を揭ぐれば

平岡浩太郎祝詞

衣の用は寒を防ぐにあり、食の用は飢を凌ぐにあり、家の用は雨露を蔽ふにあり、人の社會に貢獻するに於て抑も何の足らざるを憂へむ、況んや飾衣を着け高樓に住み、美味を貪ぼるに於てをや、其の盡すところの責また隨つて大ならざるべからざるは勿論のみ、九州日報の前日を思ふて今日の九州日報を見れば諸君如何の感かある、此の如くにして尚且つ何等社會に貢獻する所なくんば吾人は寧ろ九州日報の爲に之を恥づ、新築落成を聞き贈るに頌を以てせずして規を以てす

朴泳孝祝詞

頃接、華翰以悉、貴社夙察時宜、務圖公益、移築土木、轉擴規模、操筆公正、必不負贊揚、文明之大旨、華事博洽、亦可爲開發才智之捷徑、可期日以繁昌月以增盛、將以九州日報有作四海之珍也、貴社此擧出獨爲、貴社慶也、寔可爲、貴邦賀也、貴社茲有盛筵之設、而?賜折柬之招敢下翼如手擎賀杯耶、專此仰復敬陳賀意、統希、亮照不具

東海散士の祝詞

散士往歲九州に遊び、雨筑悲歌の士と交を締し深く望を此地に屬す、爾來多々幾星霜、世事窒しく變遷して轉た隔世の想無き能はず、比日舊識の士九州日報擴張の事有り、日本新聞社中の古島一念氏を招き之に宰たらしめ續いて新築の祝典を擧ぐるを報じ、辭を散士に徵す、散士感生して想新に鎭西の天を仰ぎ古句を誦して曰く

良弓難張、然可以及高入深、良馬難乘、然可以任重政遠、……江河之水非一源也、千鎰之裘非一狐之白也、見故天地不昭昭大水不滾滾、大火不燎燎き者に似たり

而して「紙」の中に就て最も廣汎にして有力なるもの如何と問はば直に新聞紙を擧げて之に應ずること涵養有る紳士の揖を一にする所なりとす、新聞紙は何故に爾く社會の最高目標たる乎、

曰く其文明平和の社會に於けるは恰も古昔武士道が封建社會に於けると同じく正議公道を代表する人心の歸着なれば也。

古島君九州日報を宰り若し能く新聞紙の這般眞面目を貫かば其風格直に王侯大臣を凌ぐに足らむ、

予往年此業に歷る所有り今乃ち平生の所見を叙して以て益友に告げ併せて日報の首途を祝す

犬養毅祝詞

大聲不入里耳、俗論却て衆に迎へらる、新聞記者の業は人生最苦心の業たり、今や九州日報新に擴張の事を擧ぐるは大に祝すべしと雖も、前途の多難を思へば轉た諸君の爲に同情の感なき能はず、諸君若し斯業の難きは臺閣一拭の事と讓らざるを覺悟して自重遠きに任へば吾人庶幾くは爲に大杯を擧けむ耳、友人古島君は多年斯業に經驗あるもの、我れ日報が其人を得たるを喜ぶ

本寛太(佐賀自由記者)石坂音彌太(九州新聞社總代)岡茂平(久留米絣同業組合取締役)四氏の祝詞、川野如矢(九州商業銀行取締役)松本健次郎(若松鑛業家)二氏の演說權藤貫一氏(前長野縣知事)の祝詞あり、最後に古島主筆社員一同に代りて答辭を述べ式の終りを告ぐ、時に煙火三たび空中に轟きて宴會の始まりを報ずるや博多及び筑紫音樂隊の奏樂喇喨たる間に來賓一同二階の宴會場に入る、さしもに廣き大廣間も千七百名以上の多人數が一時に込合ひたる事とて暫しは非常の混雜を極めたるが三廓の紅裙其の間に周旋して酒肴酣なるや松本健次郎氏場の中央に突き立ち「諸君本日は新嘗祭の佳辰なれば玆に謹んで天皇陛下萬歲を三呼せん

竣工せる當時の新社屋正面

五、新築祝詞

改題、新築と二重に祝賀の意味をこめて、移轉式當日の祝詞祝電は數百通の多きに上つたが、左にその二、三を掲ぐれば

平岡浩太郎祝詞

衣の用は寒を防ぐにあり、食の用は飢を凌ぐにあり、家の用は雨露を蔽ふにあり、人の社會に貢獻するに於て抑も何の足らざるを憂へむ、況んや飾衣を着け高樓に住み、美味を貪ぼるに於てをや、其の盡すところの責また隨つて大ならざるべからざるは勿論のみ、九州日報の前日を思ふて今日の九州日報を見れば諸君如何の感かある、此の如くにして尙且つ何等社會に貢獻する所なくんば吾人は寧ろ九州日報の爲に之を恥づ、新築落成を聞き贈るに頌を以てせずして規を以てす

朴泳孝祝詞

頃接、華翰以悉、貴社夙察時宜、務圖公益、移築土木、轉擴規模、操筆公正、必不負贊揚、文明之大旨、華事博洽、亦可爲開發才智之捷徑、可期日以繁昌月以增盛、將以九州日報有作四海之珍也、貴社此擧出獨爲、貴社慶也、寔可爲、貴邦賀也、貴社玆有盛筵之設、而?賜折柬之招敢下翼如手擎賀杯耶、專此仰復敬陳賀意、統希、亮照不具

東海散士の祝詞

散士往歲九州に遊び、雨筑悲歌の士と交を締し深く望を此地に屬す、爾來多々幾星霜、世事空しく變遷して轉た隔世の想無き能はず、比日舊識の士九州日報擴張の事有り、日本新聞社中の古島一念氏を招き之に宰たらしめ續いて新築の祝典を擧ぐるを報じ、辭を散士に徵す、散士感生して想新に鎭西の天を仰ぎ古句を誦して曰く

良弓難張、然可以及高入深、良馬難乘、然可以任重政遠、……江河之水非一源也、千鎰之裘非一狐之白也、見故天地不昭昭大水不滾滾、大火不燎燎之有る哉福岡人士が異鄉の奇才古島予を禮騁して一方を寄托することや、蓋し新聞一社の業必ずしも大なりとせず、然れども福岡人士が長に下り材を愛むの意や多とす可し、嗚呼一團不潰の精神を有せば楚三戶と雖も以て秦を滅す可し

尾崎咢堂祝詞

「電鐵」時代謝して「紙」の時代に歸せるは文明世界の實情として疑ふ所莫き者に似たり

而して「紙」の中に就て最も廣汎にして有力なるもの如何と問はば直に新聞紙を擧げて之に應ずること涵養有る紳士の揖を一にする所なりとす、

新聞紙は何故に爾く社會の最高目標たる乎、

曰く其文明平和の社會に於けるは恰も古昔武士道が封建社會に於けると同じく正議公道を代表する人心の歸着なれば也。

古島君九州日報を宰り若し能く新聞紙の這般眞面目を貫かば其風格直に王侯大臣を凌ぐに足らむ、

予往年此業に歷る所有り今乃ち平生の所見を叙して以て益友に告げ併せて日報の首途を祝す

犬養毅祝詞

大聲不入里耳、俗論却て衆に迎へらる、新聞記者の業は人生最苦心の業たり、今や九州日報新に擴張の事を擧ぐるは大に祝すべしと雖も、前途の多難を思へば轉た諸君の爲に同情の感なき能はず、諸君若し斯業の難きは臺閣一拭の事と讓らざるを覺悟して自重遠きに任へば吾人庶幾くは爲に大杯を擧けむ耳、友人古島君は多年斯業に經驗あるもの、我れ日報が其人を得たるを喜ぶ

福本日南祝詞（巴里より）

今日貴柬を手にす、新築も追て落成の由結構々々、平賀君三四日來此地に來り、三日の遊を重ねし今日發信日なるに氣付きたるも時遲れたればはがきに托し候、小生目下此ツール、デツフェルの塔下に住し候、千九百年の大博覽會は此塔下に催す筈にて日夜準備しつゝあり、社中の二三子と相携へて此千尺塔に上り下界の寸人豆馬を眺望し玉はずや、是又人生の愉快か馬鹿わざかにあらずといふ可からず餘は後信に評述すべし

俳人**正岡子規**は「新聞雜詠」として編輯、論說、雜報、廣告、配達に分ち左の五句宛を寄せた、

編　輯

蓬萊にテーブル狹き硯かな
永き日や雜報書きの耳に筆
一人居る編輯局や五月雨
記者會す天長節の菊の酒
新築の窓に墨つく寒さかな

論　說

聖德を頌する文や筆はじめ
ぎよう〳〵と地租を論ずる蛙哉
蚊に喰はれ政黨論を草しけり
內閣を絲瓜にたとへ論ずべく
筆に聲あり霰の竹を打つ如し

雜　報

元日の雨を記すや屠蘇の醉
雜報子報ず公園のさくら咲く
新米の下落政府の瓦解かな
行く年の警察種や三ページ

廣　告

恭賀新禧一月一日日野昇
葡萄酒の蜂の廣告や一ページ
蚤とり粉の廣告を讀む牀の中
廣告や菊人形の園ひらき
黑わくに知る人を見る寒さ哉

配　達

新聞を門で受け取る初日かな
春雨や配達叱る十時過ぎ
配達の別れ行く辻明けやすき
あさかほや新聞配る鈴の音
山茶花に新聞遲き場末かな

河東碧梧桐の新築十句

床の間は荒壁にして水仙花
炭の香や爐も炭取も新らしき
新築の祝ひの酒を火鉢かな
壯嚴の甍も出來て降る霰
普請成りて雪にとり去る板圍ひ
多の拂を其儘にしてよき普請かな
餅を撒く普請出來たる祝かな
煤拂ひ今年はせずも可なるべし
板の間の汚れわびしき寒さ哉
梟も河豚もまじりし祝ひ哉

六、隈板內閣と平岡

明治三十一年六月、自由黨と改進黨とは多年の宿怨を捨てゝ合同し、伊藤內閣を斃つて所謂隈板內閣を組織した。この事は、我國に於ける最初の政黨內閣として憲政史上、意味深いものであるが、改進黨と自由黨とを握手合同せしめた盟主は實に我が社の社主、代議士平岡浩太郎であつた。炭鑛經營によつて獲得した豐富な財力と、豪快機略の才幹とによつてこの事を成し遂げた平岡の得意は想ふべしで、彼に合同して組織された憲政黨結黨式に臨み、萬雷の拍手を浴びて「我れ盟主となりて兩黨を合同せしめたり」と豪語し、入閣を懇請されても「俺は扇ならば要ぢや、大臣になるのは骨どころで結構」と呵々一笑したといふ逸話は有名なものである。

當時、得意の平岡は、古島本社主筆宛左の如く通信してゐる。

多忙の爲無沙汰多謝、本日發電の如く伊藤內閣は總辭職と相成り候、昨夜(廿五日)隈板兩伯は伊藤官邸に會し內閣組織せられたき旨伊藤より懇談有之たる旨鷄鳴に至りて急報に接し、直に大石正巳氏と同伴早朝隈板二伯を訪ひ早速內閣組織引受の旨御決答可然旨御勸め候得共、板伯は內閣總理は大隈伯に一任し自分は憲政黨の在野總理を好み、林以下若年のみを內閣に入れ內外上下相應じて憲政の實を擧けんとの希望を主張し、なかなか動かざる折柄幸ひにも林、杉田兩氏も來合せ兩人よりも板伯入閣の必要を說き夫より帝國ホテルにて隈板及び政務委員大石正巳及び小生等會合致し種々談合致候得共板伯は熱心に前說を主張せられ、小生等は江東八千の子弟の爲に死するの決心にて入閣を請ふ旨を强制したるより遂に板伯も承諾致したるに付き只今大隈は伊藤侯に引受の返事に出かけ申し候

斯る大變動を來したる原因は全く憲政黨結黨式の盛況と又一つは〇〇を取込めば白票の四十六を得べく又山下俱樂部の過半も致すを得べく、實業家國民協會も味方となるを以て大丈夫となると存じ候ひしに、斷然刎ねつけたるより政府の心算大いに齟齬し、其所に伊東巳代治などはそれ見た事かと云はぬ許りに突込み候より俄に伊東侯も決心致候次第にて、侯の決心定まるや伊東巳代治は大石正巳に人を遣はし急に談合の結果、小生と談合

改題第一號の題字

憲政黨成立と同時に福岡縣の各派も擧縣これに入黨し、縣支部發會式は七月十四日、水茶屋集成館に於て擧行された。平岡浩太郎、小野隆助、藤金作多田作兵衛、野田卯太郎、永江純一、久良知寅次郎、征矢野半彌等創立委員の顏觸れは呉越同舟であつた。從つて八月の總選擧には左の如く當選した。

第一區平岡浩太郎、第二區多田作兵衛、藤金作、第三區許斐應介、第四區野田卯太郎、第五區佐々木正藏、第六區永江純一、第七區千早正二郎、第八區征矢野半彌

右のうち第七區の千早正二郎は當選後期限內に承諾の屆出を爲さなかつた爲に失格し、再選擧の結果山本貴三郎が當選した。

しかしながら、隈板內閣は、尾崎文相辭任後の後任文相問題で進歩、自由兩派正面衝突して瓦解するに至つたので、福岡縣憲政黨も平岡、山本、許斐

聖德を頌する文や筆はじめ
ぎよう〳〵と地租を論ずる蛙哉
蚊に喰はれ政黨論を草しけり
內閣を絲瓜にたとへ論ずべく
筆に聲あり霰の竹を打つ如し

雜報

元日の雨を記すや屠蘇の醉
雜報子報ずや公園のさくら咲く
新米の下落政府の瓦解かな
行く年の警察種や三ページ

廣告

恭賀新禧一月一日日野昇
葡萄酒の蜂の廣告や一ページ
蚤とり粉の廣告を讀む牀の中
廣告や菊人形の園ひらき
黑わくに知る人を見る寒さ哉

配達

炭の香や爐も炭取も新らしき
新築の祝ひの酒を火鉢かな
壯嚴の蔓も出來て降る霰
普請成りて雪にとり去る板圍ひ
冬の拂を其儘にしてよき普請かな
餅を撒く普請出來たる祝かな
煤拂ひ今年はせずも可なるべし
板の間の汚れわびしき寒さ哉
梟も河豚もまじりし祝ひ哉

六、隈板內閣と平岡

明治三十一年六月、自由黨と改進黨とは多年の宿怨を捨てゝ合同し、伊藤內閣を斃つて所謂隈板內閣を組織した。この事は、我國に於ける最初の政黨內閣として憲政史上、意味深いものであるが、改進黨と自由黨とを握手合同せしめた盟主は實に我が社の社主、代議士平岡浩太郎であつた。炭鑛經營によつて獲得した豐富な財力と、豪快機略の才幹とによつてこの事を成し遂げた平岡の得意は想ふべしで、彼に合同して組織された憲政黨結黨式に臨み、萬雷の拍手を浴びて「我れ盟主となりて兩黨を合同せしめたり」と豪語し、入閣を懇請されても「俺は扇ならば要ぢや、大臣になるのは骨どころで結構」と呵々一笑したといふ逸話は有名なものである。

當時、得意の平岡は、古島本社主筆宛左の如く通信してゐる。

多忙の爲無沙汰多謝、本日發電の如く伊藤內閣は總辭職と相成り候、昨夜(廿五日)隈板兩伯は伊藤官邸に會し內閣組織せられたき旨伊藤より懇談有之たる旨鷄鳴に至りて急報に接し、直に大石正巳氏と同伴早朝隈板二伯を訪ひ早速內閣組織引受の旨御決答可然旨御勸め候得共、板伯は內閣總理は大隈伯に一任し自分は憲政黨の在野總理を好み、林以下若年のみを內閣に入れ內外上下相應じて憲政の實を擧けんとの希望を主張し、なかなか動かざる折柄幸ひにも林、杉田兩氏も來合せ兩人よりも板伯入閣の必要を說き夫より帝國ホテルにて隈板及び政務委員大石正巳及び小生等會合致し種々談合致候得共板伯は熱心に前說を主張せられ、小生等は江東八千の子弟の爲に死するの決心にて入閣を請ふ旨を强制したるより遂に板伯も承諾致したるに付き只今大隈は伊藤侯に引受の返事に出かけ申し候

斯る大變動を來したる原因は全く憲政黨結黨式の盛況と又一つは〇〇を取込めば白票の四十六を得べく又山下俱樂部の過半も致すを得べく、實業家國民協會も味方となるを以て大丈夫となると存じ候ひしに、斷然刎ねつけたるより政府の心算大いに齟齬し、其所に伊東巳代治などはそれ見た事かと云はぬ許りに突込み候より俄に伊東侯も決心致候次第にて、侯の決心定まるや伊東巳代治は大石正巳に人を遣はし急に談合の結果、小生と談合ひ、憲政の過度時代なれば斷然この際我々に於て內閣を引受くべしと答へ遂にこの運びに至り申候、一昨日伊東巳代治氏は板垣伯を訪ひ候も要領を得ず談は大石氏等の間に熟したるを以て夫より林氏に話申候ひしは昨日の午後位に有之候、斯の如く極々少數の間に掛引致候より至極秘密に成功致し、閣員と雖も一昨日までは全く知らざる有樣に有之候、小生の目的は是にて先づ實行せられ候間早此の上は正直に直進致候得ば國家の利益と奉存候。

憲政黨成立と同時に福岡縣の各派も擧縣これに入黨し、縣支部發會式は七月十四日、水茶屋集成館に於て擧行された。平岡浩太郎、小野隆助、藤金作多田作兵衛、野田卯太郎、永江純一、久良知寅次郎、征矢野半彌等創立委員の顏觸れは呉越同舟であつた。從つて八月の總選擧には左の如く當選した。

第一區平岡浩太郎、第二區多田作兵衛、藤金作、第三區許斐鷹介、第四區野田卯太郎、第五區佐々木正藏、第六區永江純一、第七區千早正二郎、第八區征矢野半彌

右のうち第七區の千早正二郎は當選後期限內に承諾の屆出を爲さなかつた爲に失格し、再選擧の結果山本貴三郎が當選した。

改題第一號の題字

しかしながら、隈板內閣は、尾崎文相辭任後の後任文相問題で進歩、自由兩派正面衝突して瓦解するに至つたので、福岡縣憲政黨も平岡、山本、許斐佐々木等と多田、藤、野田、永江、征矢野等と分裂して舊態に歸つた。かくて平岡等は同じ水茶屋集成館に於て十二月一日憲政本黨福岡支部の發會式を擧行し、幹事に岩谷貴四郎、田中新吾、高瀨九三治、中村利貞、進藤喜平太大原義剛等七名が擧げられ、當日の參會者は縣下代表六百餘名であつた。

第十三議會に上程された地價修正——地租增徵案は全國的に反對運動を捲き起し、福岡縣下では遠賀郡から先づ火の手が擧げられ、粕屋、宗像、糸島

と燎原火の情勢を示すに至つた。福岡市には「福岡縣減税同盟會本部」が設けられ大いに戰つたが、本紙も亦連日このことを論じて先頭に立つた。

然しながら全國を擧げての反對も効なく增税が斷行され、同時に議員自ら歳費を增加して從來の二倍半としたので本紙は三月十四日の紙上に烈々たる義憤を漏らしてゐる。

「國民には苛重の惡税を負擔せしめ自己の歳費は增加して憚らざる私利私慾の徒、不正不義の議員は今朝天より盛裝して歳費を受取り閉院式に臨み夫より山縣首相の招待會に列席し意氣揚々たるものゝ如し。嗚呼彼等の眼前には富貴利祿のみありて而して國家人民あらざるなり。」

七、關西新聞雜誌社春季大懇親會

例年春秋二季、各縣交代當番の下に開催され來つた名古屋以西の關西新聞雜誌社八十二社(當時)の大懇親會は、明治三十二年の春季開催地は福岡と決定、福岡縣各社の當番となつたので、本社並に福日、門司新報の三代表新聞社から四名宛の委員を出して準備をすゝめた。

福岡日々新聞社　猪俣爲治、濱地禎造、野田廣、丁吉次
九州日報社　古島一雄、今村爲雄、平田學、野村秀
門司新報社　毛里保太郎、水町理三郎、隅田廣吉、右田喜太郎

懇親會は四月二十三日、福岡市西公園で盛大に開催された。

馬關以東の各新聞社は門司で落合ひ、二十二日同市の市制祝賀會に列席し翌二十三日午前九時門司發の列車に九鐵が特に增結した一等車で博多に乘り込んだ。福日も本紙も當日は共に休刊して大會の斡旋につとめたが、一行博多乘込みの膜樣は左の如く記されてゐる。

門司出帳の接待員は一同を案内し廿三日午前九時發列車にて門司を出發せり、列車は特に一行の爲めに一等客車を增し樂隊を乘込ましめて斷えず奏樂せしめ幇間亦客室を往來して車中の怠屈を癒し、午後零時五分汽車の博多に着するや狼煙一發、先づ着車を報じ、出迎への幹事社員は此の停車場構内プラツトホームに迎へ、狼煙に引續きて奏樂到着を祝し、車中の樂隊又これに和し、一同の下車するや豫て用意せし百二十餘輛の腕車を停車場前に屛列し、教導先發となり樂隊これに次ぎ任意これに續き、出迎へ員前後に加はり直に出發、車輛輪々轍を連らねて博多上祇園町を經て東西中島橋を越え福岡六丁筋を走り通り町四ツ角より西公園に達するや狼煙高く天に轟き一同下車、嚠喨たる音樂隊の吹奏に連れて坂路を進む—

この見物人で、沿道は黑山を築いたと記載されてゐる。

——定刻、幹事を總代して本社古島主筆挨拶を述べ、福日の猪股爲治氏は福岡縣代表三新聞社の意見書を提出し、次回開催地を熊本と決定した。

意見書

一、新聞共通の利害問題は聯合して當ること、例＝電報料、郵税新聞紙料の如き

二、黨派問題を離れた、社會問題公共問題等は聯合一體となりて運動を爲し輿論の喚起に力むること

三、新聞社の品位向上の爲に制裁規定を設けること、例へば不法の新聞社は之を除名して天下に公表する等が如し

四、商工農の資料調査等には相互に扶助すること

この提出案は次回迄に研究し社論を決定して出席することゝなつて閉會荒津山上から博多灣の風光を賞でつゝ中食を攝り再び車を連ねて東公園の皆松館に於ける宴會場に繰込み、古島本社主筆の挨拶があつて開宴、翌二十四日は若松、直方等筑豐礦業の中心地をはじめ縣下の名勝舊蹟、商工業地を視察して散會した。大會に於る古島本社主筆の挨拶要旨左の如し。

(前略)—幹事等は此の好機會に於て我が福岡縣下を諸君に紹介し併せて天下に紹介するを得たるを甚だ喜ぶと同時に、幹事等が平素福岡縣下の爲め其の前途に向ひ杞憂を懷き居る事柄をも提供して之に對する諸君の高見名論を拜聽したき事あり、昨日門司に赴き明日若松若くは筑豐三池の炭山に赴かるゝ諸君は福岡縣下に於ける富の發達實業の進歩が如何に著大なるやを認識せらるゝべく、此の原動力が石炭なるを知らるゝと共に此の石炭が如何なる方法に依て採掘せられ運搬せらるゝやを知らるべし。石炭は我が福岡縣下に於ける唯一の原動力なり、然れども此の石炭は果して能く現今の炭價を將來に保ち得べきや否やは當業者のみならず吾人三新聞社の常に憂ひつゝある問題なり、二百方里に餘るボルネオの重油は石炭の頸敵として今や東洋の市場に現はれ、日本內地の鐵道會社にては既に之を採用しつゝあるなり、其の他水力電氣の應用は日に月に進歩して石炭の爲には大敵たるを免れず、此の如く諸種の大敵が現はるゝと同時に日本の石炭は能く現今の炭價を將來に保ち得べき乎、此の問題の如何に依つて我が縣下の總ての事業は少からぬ影響を蒙るに至るは必然の勢ひなり、故に吾人は諸君が之を筑豐の問題とせずして日本國富の問題として親切に叮嚀に之を吟味せられん事を望まざるを得ず。

第二に、筑豐に於ける無限の富力が物質的文明の進歩に向つて非常の速度を加へつゝあるは爭ふ可らざる事實にして駸々乎たる此の勢力の進歩は時としては社會の秩序を根底より破壞しつゝある現象を見出す事あり、凡そ物質的文明の進歩と精神的の進歩とは相行し難きは古今の通患なれども此の二つの併行せざる進歩は却て恐るべき結果を社會高級の上に生ずる

八、博多山笠問題

古島主筆着任して間もなく明治三十一年七月「博多山笠問題」が勃發した。縣警察部から吉例の博多山笠中止が發令され、市會もこれが中止を決議したことに發端して、氣負ひ立つ博多ツ兒と縣市當局との爭ひとなつたものである。中止の理由は、白晝裸體で練り歩くのは風紀を紊すし、蠻風も甚だしい、冷酒を呷り水をガブ〳〵飲んで衛生に惡い、電線が架設されて妨害となる…等々であつたが、この博多の傳統的風俗を一期半期の役人共に踏みにじられて堪るものかと博多各町は各町連署の歎願書を再三に亘つて提出し、中止反對の猛運動を續けたが無効、文明開化の新理窟と役人風に壓伏せられて手も足も出ず、永い傳統を誇る博多の吉例山笠も此の年を期して消滅せねばならぬことになつて來た。こゝに奮ひ立つたのが九州日報であつた。東京操觚界に健筆を謳はれること多年、一介の地方長官など小兒のごとく眼中になかつた古島主筆は、社員を率ゐて起ち上り、官尊民卑の當時、さすが强豪の編輯局員も二の句のつげぬほど大膽な筆を揮つて縣市當局との戰端を開始した

「——酒や水を飲むことは殊更祭禮の場合に限つたことではない。それでも惡ければ飲まぬやうに注意したらよいではないか。裸が不可なければ揃ひのハツピを被せるとか何とか方法があらう。大きな山笠は小さくすれば

前には富貴利祿のみありて而して國家人民あらざるなり。」

七、關西新聞雜誌社春季大懇親會

例年春秋二季、各縣交代當番の下に開催され來つた名古屋以西の關西新聞雜誌社八十二社(當時)の大懇親會は、明治三十二年の春季開催地は福岡と決定、福岡縣各社の當番となつたので、本社並に福日、門司新報の三代表新聞社から四名宛の委員を出して準備をすゝめた。

福岡日々新聞社　猪俣爲治、濱地禎造、野田賡、丁吉次
九州日報社　古島一雄、今村爲雄、平田學、野村秀
門司新報社　毛里保太郎、水町理三郎、隅田廣吉、右田喜太郎

懇親會は四月二十三日、福岡市西公園で盛大に開催された。

馬關以東の各新聞社は門司で落合ひ、二十二日同市の市制祝賀會に列席し翌二十三日午前九時門司發の列車に九鐵が特に增結した一等車で博多に乘り込んだ。福日も本紙も當日は共に休刊して大會の斡旋につとめたが、一行博多乘込みの模樣は左の如く記されてゐる。

門司出帳の接待員は一同を案內し廿三日午前九時發列車にて門司を出發せり、列車は特に一行の爲めに一等客車を增し樂隊を乘込ましめて斷えず奏樂せしめ幣間亦客室を往來して車中の怠屈を癒し、午後零時五分汽車の——定刻、幹事を總代して本社古島主筆挨拶を述べ、福日の猪股爲治氏は福岡縣代表三新聞社の意見書を提出し、次回開催地を熊本と決定した。

意見書

一、新聞共通の利害問題は聯合して當ること、例＝電報料、郵稅新聞紙料の如き
二、黨派問題を離れた、社會問題公共問題等は聯合一體となりて運動を爲し輿論の喚起に力むること
三、新聞社の品位向上の爲に制裁規定を設けること、例へば不法の新聞社は之を除名して天下に公表する等が如し
四、商工農の資料調査等には相互に扶助すること

この提出案は次回迄に研究し社論を決定して出席することゝなつて閉會荒津山上から博多灣の風光を賞でつゝ中食を攝り再び車を連ねて東公園の皆松館に於ける宴會場に繰込み、古島本社主筆の挨拶があつて開宴、翌二十四日は若松、直方等筑豐礦業の中心地をはじめ縣下の名勝舊蹟、商工業地を視察して散會した。大會に於る古島本社主筆の挨拶要旨左の如し。

(前略)—幹事等は此の好機會に於て我が福岡縣下を諸君に紹介し併せて天下に紹介するを得たるを甚だ喜ぶと同時に、幹事等が平素福岡縣下の爲め其の前途に向ひ杞憂を懷き居る事柄をも提供して之に對する諸君の高見名論を拜聽したき事あり、昨日門司に赴き明日若松若くは筑豐三池の炭山に赴かるゝ諸君は福岡縣下に於ける富の發達實業の進歩が如何に著大なるやを認識せらるゝべく、此の原動力が石炭なるを知らるゝと共に此の石炭が如何なる方法に依て採掘せられ運搬せらるゝやを知らるべし。石炭は我が福岡縣下に於ける唯一の原動力なり、然れども此の石炭は果して能く現今の炭價を將來に保ち得べきや否やは當業者のみならず吾人三新聞社の常に憂ひつゝある問題なり、二百方里に餘るボルネオの重油は石炭の頸敵として今や東洋の市場に現はれ、日本內地の鐵道會社にては既に之を採用しつゝあるなり、其の他水力電氣の應用は日に月に進歩して石炭の爲には大敵たるを免れず、此の如く諸種の大敵が現はるゝと同時に日本の石炭は能く現今の炭價を將來に保ち得べき乎、此の問題の如何に依つて我が縣下の總ての事業は少からぬ影響を蒙るに至るは必然の勢ひなり、故に吾人は諸君が之を筑豐の問題とせずして日本國富の問題として親切に叮嚀に之を吟味せられん事を望まざるを得ず。

第二に、筑豐に於ける無限の富力が物質的文明の進歩に向つて非常の速度を加へつゝあるは爭ふ可らざる事實にして駸々乎たる此の勢力の進歩は時としては社會の秩序を根底より破壞しつゝある現象を見出す事あり、凡そ物質的文明の進歩と精神的の進歩とは相行し難きは古今の通患なれども此の二つの併行せざる進歩は却て恐るべき結果を社會萬般の上に生ずるの虞れあるを常とす、吾人三新聞社の如き此の間に立ちて操觚の業に從ひ聊か社會の耳目先導を以て自ら任ずるものゝ爲には此の問題こそ實に至難至大の事なるが故に諸君が此の問題に就いて如何にして相調和し以て相併進せしむべきやの方法を研究せられんことを望む(以下略)

八、博多山笠問題

古島主筆着任して間もなく明治三十一年七月「博多山笠問題」が勃發した。縣警察部から吉例の博多山笠中止が發令され、市會もこれが中止を決議したことに發端して、氣負ひ立つ博多ッ兒と縣市當局との爭ひとなつたものである。中止の理由は、白晝裸體で練り歩くのは風紀を紊すし、蠻風も甚だしい、冷酒を呷り水をガブ〳〵飲んで衛生に惡い、電線が架設されて妨害となる…等々であつたが、この博多の傳統的風俗を一期半期の役人共に踏みにじられて堪るものかと博多各町は各町連署の歎願書を再三に亘つて提出し、中止反對の猛運動を續けたが無効、文明開化の新理窟と役人風に壓伏せられて手も足も出ず、永い傳統を誇る博多の吉例山笠も此の年を期して消滅せねばならぬことになつて來た。こゝに奮ひ立つたのが九州日報であつた。東京操觚界に健筆を謳はれること多年、一介の地方長官など小兒のごとく眼中になかつた古島主筆は、社員を率ゐて起ち上り、官尊民卑の當時、さすが强豪の編輯局員も二の句のつげぬほど大膽な筆を揮つて縣市當局との戰端を開始した

「——酒や水を飲むことは殊更祭禮の場合に限つたことではない。それでも惡ければ飲まぬやうに注意したらよいではないか。裸が不可なければ揃ひのハッピを被せるとか何とか方法があらう。大きな山笠は小さくすれば電線の妨害にはならない。禁止するとは怪しからぬではないか、山笠は博多の傳統的祭禮の催しであるこんな理由で傳統を破壞するとは以ての外だ——殊に、山笠の「流れ」といふのは方面團體として、平時は公共事業をやり共同貯金をやり、納稅の共同納入など自治的活動をなしてゐる。——」

戰ふこと一と月餘り、完全に九州日報の主張は貫徹されて博多ッ兒歡呼の中にその年の山笠は擧行された、このために九州日報の人氣は全博多を壓し各町の有志は戶別訪問して「博多のもんな九州日報バ讀め」と觸れ歩いた。

左はその攻撃記事のうちの一つ「雜報欄」に掲げられたものである、再び山笠に就て

◇山笠の願書には七十二個町の主なる者が悉く判を押してゐる。卽ち博多の輿論である。中には一、二の非建設的建白を出したものがあるとの噂あれどソレハ一己の私見だ。一己の私見を採用して輿論を棄つると云ふ行政の仕方がドコに在る。新內閣は輿論を重んずべき內閣だ、此の內閣の下に働く地方官は固より輿論を重んずべき筈だ。愈よ輿論を尊敬せぬとあらばソウいふ官吏は新內閣の主義本領に反抗するものと認めて之れが更迭を促せばよいのだ。

◇東京の神田祭、西京の加茂祭、祇園祭、長崎の諏訪祭、馬關の先帝祭太宰府のうそ替、筥崎の玉競、博多の山笠、松囃子は日本にて有名なる祭事として海內に知られてゐる。此の祭事が不知不識の間に一種の感化をを其の地方人民に與へつゝあるは當局者は知らないか、之れが分らん樣では形而上に人民を感化することは出來ない。

◇只有名なる祭事と言ふ點丈けにても之を保存するに足るべき大なる理由がある。博多に山笠をやらせぬといふことは日本から富士山をタヽキコワして仕舞へといふことゝ同じだ。一國の美質美性を發達せしめることが文明の進歩である。

◇コヽがいつも爲政家の議論の岐れ目となる點だ。一時は何でもかでも西洋の風俗とあれば日本固有の國粹を破りても輸入するが文明國となる捷徑だと信じた。所謂歐化論者が其の主義であつた。其の後色々議論があつて時の當局者も考へ直して今では國論も略ぼ一定した。日本固有の美術の發達も政府が奬勵し、古社寺保存法と曰ふ立派な法律まで出來たことを見れば山笠の非建設論者も少しは目が醒めるであらう。吾人が此の事に就いて爭ふのは啻に博多人民の爲めばかりではない、之を小にしては官民の權利問題ともなり、之を大にしては主義の爭ひともなるからだ。

◇人民が熱心なる而かも道理ある願意を政府の一部が聞かぬとあれば立派な官民間の問題である。吾人は道理に味方する。其の官たると民たるとを問はないのである。人民は良習慣だと曰ひ政府の一部は野蠻だと曰へば是も誠に立派な問題である。山笠の祭事に對して知事、警部長、警察署長が眞個に蠻風だと思ふのなら其の所信を貫ぬくがよいのだ。何も櫛田神社に七百や八百の人が寄つたとて驚く事はない筈だ。吾人は博多人の願意を道理あるものと認める。何時でも相手になるのを嫌はないのである。

◇夫故に吾人は若し之を許さぬとあらば許さぬ理由を公表して貰ひたいコンナ事に警察の機密も糞も無い筈、之をもし機密だなんぞと曰ふならば夫れこそ人民に對し其の職責に對して不親切極まると曰はねばならぬ。然し今の地方官にはコンナ「分らず屋」はない筈だ。

九、社長、主筆の更迭

改題後最初の主筆古島一雄は、在任滿一ケ年、明治三十二年五月九日退社して、後任には豐後中津の出身、當時珍重された東京帝大出の文學士白河次郎(鯉洋)が六月廿四日入社して本社第五代の主筆を繼いだ。

「――十年の遊子、思はざりき竟に故山に歸りて黨鄕先輩諸君に見うるを得るに至らんとは。吾れ洵に榮とし且つ畏るゝ所也。

思ふに帝國の歷史は每に九州に依りて動く、而して九州の士氣は每に福岡縣に萃まる、今や政界に、文壇に、殖產に、工業に、吾が縣の重きを天下に有すること、既に江湖の普ねく識認する所、往者既に然り、來者又知るべきのみ。而して全國を九州に代表し、九州を全國に代表し、其の萃まる所の士氣を發揮し皷吹すべき九州日報の天職も亦大なる哉。吾が淺學不才を以て筆を此に執る吾が榮とし且つ畏る所以や益す大也。

吾今入社に際して多く言ふことを須るず、唯今後黽勉努力以て事に當るべきを誓うて足れりとせん。若し夫れ九州日報の天分と主張とに至りては典章既に儼として存す、吾黨鄕先輩諸君と天下の知巳とに背かんや。

白河次郎、入社の辭である。かくて、古島一雄は幾多の功績と逸話を殘して九州日報を去り福岡を去つた。

左は、博多水茶屋常盤館の名物女將であつた「お常さん」の古島一雄に關する思ひ出話である。

「最初平岡さんが古島さんを主筆に聘ばれるとき和田維四郎さん(製鐵所長官)に相談されると「そりや結構だ、然し古島を連れてゆくと金がかゝるぞ」と云はれたさうです、成るほどその通りで古島さんの「遊び」は豪奢なものでした。金使ひが荒くて盆暮にはお茶代を五十圓も出されたものでした。明治三十一二年頃の五十圓といへば仲々大したものでした。私達は新聞社の金を流用してをられるのではあるまいかとひそかに心配してゐたほどでありましたが、さうではなくて高利貸から借りたりして凡て身錢を切られたものださうで、その點は大變に几帳面なもので感心させられました」

この年、同じく五月には元滿尙雄、石井勇藏が退社して福岡市內の本紙の大取次店を開き、六月には小倉の主任尾西要太郎及び平田學が退社した、今村外園は左の「惜別の辭」を紙上に揭げて平田學の退社を惜んだ。

「墨堤の柳條、裊娜として子を招くか、筑波峯の翠色滴らんとして子を待されど其の期する所を叩けば再び書生の昔に歸りて破帽短褐の生活に三年を送らん、或ひは函根の山中に氷を碎きて寒谷の月をも掬すべく或ひは高尾の深林に嵐を負ふて暮山の枝をも拾ふべし、辛酸豫じめ期する所にして一意以て斯文の薀奥をも究めばやといふ。豈に健氣ならずや。然らば卽ち、啻に私情を以て留むべからず。墨堤の揚柳、さては筑波峯の翠色悉く是れ蕉雨氏が詩腸を養ふべき滋味たるを思はゞ余輩なか〳〵に喜んで、此に子が東行を送ると同時にあらゆる周圍の事情の爲に初一念を挫くなからんことを望むものなり。

其の聲に雲突破れ郭公

十二月に入つて社長的野半介退き、宮川武行が第三代の社長となつた。

一〇、平岡の世界漫遊と豐國炭坑の爆發

社主平岡浩太郎は、明治三十二年五月廿六日橫濱解纜のエンプレス・オブ・ジヤパン號で世界漫遊の旅に上つた。北米、歐洲で石炭と工業狀態を視察調査するのが主要目的で、同時に先進各國の政狀文化施設視察を兼ね、彼の旅行券に記された國々は米、英、佛、獨、露、伊の各國をはじめ、瑞西、土耳古、波斯、埃及、印度、南洋諸國及び濠洲であつた。

同船で、同じく渡航した人々はハーヴアート大學から特に贈られる「名譽

ばゝウいふ官吏は新內閣の主義本領に反抗するものと認めて之れが更迭を促せばよいのだ。

◇東京の神田祭、西京の加茂祭、祇園祭、長崎の諏訪祭、馬關の先帝祭太宰府のうそ替、筥崎の玉競、博多の山笠、松囃子は日本にて有名なる祭事として海內に知られてゐる。此の祭事が不知不識の間に一種の感化をを其の地方人民に與へつゝあるは當局者は知らないか、之れが分らん樣では形而上に人民を感化することは出來ない。

◇只有名なる祭事と言ふ點丈けにても之を保存するに足るべき大なる理由がある。博多に山笠をやらせぬといふことは日本から富士山をタゝキコワして仕舞へといふことゝ同じだ。一國の美質美性を發達せしめることが文明の進歩である。

◇コゝがいつも爲政家の議論の岐れ目となる點だ。一時は何でもかでも西洋の風俗とあれば日本固有の國粹を破りても輸入するが文明國となる捷徑だと信じた。所謂歐化論者が其の主義であつた。其の後色々議論があつて時の當局者も考へ直して今では國論も略ぼ一定した。日本固有の美術の發達も政府が奬勵し、古社寺保存法と曰ふ立派な法律まで出來たことを見れば山笠の非建設論者も少しは目が醒めるであらう。吾人が此の事に就いて爭ふのは啻に博多人民の爲めばかりではない、之を小にしては官民の權道理あるものと認める。何時でも相手になるのを嫌はないのである。

◇夫故に吾人は若し之を許さぬとあらば許さぬ理由を公表して貰ひたいコンナ事に警察の機密も糞も無い筈、之をもし機密だなんぞと曰ふならば夫れこそ人民に對し其の職責に對して不親切極まると曰はねばならぬ。然し今の地方官にはコンナ「分らず屋」はない筈だ。

九、社長、主筆の更迭

改題後最初の主筆古島一雄は、在任滿一ケ年、明治三十二年五月九日退社して、後任には豐後中津の出身、當時珍重された東京帝大出の文學士白河次郎(鯉洋)が六月廿四日入社して本社第五代の主筆を繼いだ。

「——十年の遊子、思はざりき竟に故山に歸りて黨鄉先輩諸君に見うるを得るに至らんとは。吾れ洵に榮とし且つ畏るゝ所也。

思ふに帝國の歷史は每に九州に依りて動く、而して九州の士氣は每に福岡縣に萃まる、今や政界に、文壇に、殖產に、工業に、吾が縣の重きを天下に有すること、既に江湖の普ねく識認する所、往者既に然り、來者又知るべきのみ。而して全國を九州に代表し、九州を全國に代表し、其の萃まる所の士氣を發揮し皷吹すべき九州日報の天職も亦大なる哉。吾が淺學不才を以て筆を此に執る吾が榮とし且つ畏る所以や益す大也。

吾今入社に際して多く言ふことを須るず、唯今後眞勉努力以て事に當るべきを誓うて足れりとせん。若し夫れ九州日報の天分と主張とに至りては典章既に儼として存す、吾黨鄉先輩諸君と天下の知巳とに背かんや。

白河次郎、入社の辭である。かくて、古島一雄は幾多の功績と逸話を殘して九州日報を去り福岡を去つた。

左は、博多水茶屋常盤館の名物女將であつた「お常さん」の古島一雄に關する思ひ出話である。

「最初平岡さんが古島さんを主筆に聘ばれるとき和田維四郎さん(製鐵所長官)に相談されると「そりや結構だ、然し古島を連れてゆくと金がかゝるぞ」と云はれたさうです、成るほどその通りで古島さんの「遊び」は豪奢なものでした。明治三十一二年頃の五十圓といへば仲々大したものでした。私達は新聞社の金を流用してをられるのではあるまいかとひそかに心配してゐたほどでありましたが、さうではなくて高利貸から借りたりして凡て身錢を切られたものださうで、その點は大變に几帳面なもので感心させられました」

この年、同じく五月には元滿尙雄、石井勇藏が退社して福岡市內の本紙の大取次店を開き、六月には小倉の主任尾西要太郎及び平田學が退社した、今村外園は左の「惜別の辭」を紙上に揭げて平田學の退社を惜んだ。

「墨堤の柳條、裊娜として子を招くか、筑波峯の翠色滴らんとして子を待つか。曷ぞ其れ行くことの急にして且つ速かなるやしばしだに別れと言へば物憂きぞ怪しき。六年以來同じ編輯局に椅子並べつゝ雪の朝に句を探り月の夕に文を論じて笑言日に親しみ、友誼月に濃やかに、兄とも弟とも思ひ思はれつる平田蕉雨、今日といふ今日の午後博多發の汽車に便りして遠く東上の途につかんとす。行く春の梢に、胡蝶の翩飜たるは花の名殘を惜めばならん。若葉の蔭に啼鳥の嚶々たるも尙且つ友を呼ぶの聲なり。余輩惜別の情なからずやは。

されど其の期する所を叩けば再び書生の昔に歸りて破帽短褐の生活に三年を送らん、或ひは嶋根の山中に氷を碎きて寒谷の月をも掬すべく或ひは高尾の深林に嵐を負ふて暮山の枝をも拾ふべし、辛酸豫じめ期する所にして一意以て斯文の蘊奥をも究めばやといふ。豈に健氣ならずや。然らば卽ち、啻に私情を以て留むべからず。墨堤の揚柳、さては筑波峯の翠色悉く是れ蕉雨氏が詩腸を養ふべき滋味たるを思はゞ余輩なか〳〵に喜んで、此に子が東行を送ると同時にあらゆる周圍の事情の爲に初一念を挫くなからんことを望むものなり。

其の聲に雲突破れ郭公

十二月に入つて社長的野半介退き、宮川武行が第三代の社長となつた。

一〇、平岡の世界漫遊と豐國炭坑の爆發

社主平岡浩太郎は、明治三十二年五月廿六日橫濱解纜のエンプレス・オブ・ジヤパン號で世界漫遊の旅に上つた。北米、歐洲で石炭と工業狀態を視察調査するのが主要目的で、同時に先進各國の政狀文化施設視察を兼ね、彼の旅行券に記された國々は米、英、佛、獨、露、伊の各國をはじめ、瑞西、土耳古、波斯、埃及、印度、南洋諸國及び濠洲であつた。

同船で、同じく渡航した人々はハーヴアート大學から特に贈られる「名譽大博士」の授與式に參列せんとする金子堅太郎をはじめ、これも世界的大旅行を企てた鶴原定吉や、有賀法學博士、和田製鐵所長官、九州鐵道會社の技師等であつた。本社は諸名士の視察調査は工業福岡の將來のため慶賀に堪へずと賞讃して、特に外國語に通じた記者辰巳豐吉を平岡の通譯を兼ねしめて渡航せしめ、先進各國の國狀と各地に印せられる一行の足跡とを紙面に紹介せしむることにした。

辰巳記者は、新橋驛發車、橫濱出航の盛大な模樣を報じて船中の模樣を次

の如く通信してゐるが、平岡の豪快な一面を語るものであらう。

（前略）――一千圓を投じて獨占せる平岡氏の特別上等室は、喫煙室以外一の日本人倶樂部となり、朝に夕に紳士來り青年集まり東談西話、甲論乙唱津々たる興味を添へずんばあらず、然れば讀書に倦まんか將亦風黑く波白く雲湧き雨飛ぶときは平岡氏は眞に日本人倶樂部の主人公として常に諸賓を歡迎せり（以下略）

一行は六月七日バンクーバーに上陸、平岡は聖ポール、ヅルースシカゴ、紐育、ボストンと各地を視察して四月十九日ヒツツバーグ市のデユケンホテルに宿泊したがこの時、配達された電報こそ、彼の經營する豐國炭礦の有名な大爆發を報ずるものであつた。

「豐國炭坑瓦斯破裂、二百名を亡ひ跡火無し、事務員恙なく事業恢復しつつあり」

この飛電に接した時の平岡の心情を辰巳記者は次の如く述べてゐる。

――豪邁義俠の氏、實に今回の兇變より生ずる巨額の損失を秋毫も憂へんや、唯颯爽たる眉目の間に俄然愁點を畫きしものは氏が子視せし勞働者の不幸と遺族の悲痛とに對する同情にてありしなり。嚴父たり長上たる氏は平生人に長たる德義上の恩念に堪へ難く、萬里の天涯實に彼等の爲に心に喪服をつけたり。

平岡は、玆に於て、一切の壯圖を擲ち、急遽歸朝の途につき七月廿三日、横濱へ歸着、鄕里へ急行した。

――平岡及び山本貴三郎の經營になる豐國炭坑は福岡縣田川郡弓削田村字川宮にあつて、俗に縮緬八尺と云はれる炭層を有する有名な炭坑であつた。瓦斯爆發と共に坑內作業中の二百十三名は無慘な犧牲者となり、悲報天聽に達して畏くも御內帑金五百圓を下賜あらせられた。

本社では事件勃發と同時に記者和田庫太郎を現地に特派し數日に亘つて詳報を掲載したが、同時に罹災者遺族の救助義捐金募集を行ひ、二千百七圓七十三錢の同情金を集めて炭坑當局に分配方を依賴した。

左は和田特派員の爆發慘狀を記した記事の一部である。

（前略）――此の未曾有の大椿事は實に十五日午前零時十五分に發せり、唯看る四顧寂寞として非番の者は何れも南柯の夢を結ばんとする折しも坑內に當り轟然萬雷の一時に落つるが如き大音響を發せしかば同礦に從事するものは言はずもがな弓削田全村は愚か隣村近礦の驚愕一方ならず、スワ一大事ぞ起りたれと一同蹶起して坑口に馳せ集まれば這は如何に竪坑及び横坑口より激烈なるガスの臭氣鼻を劈くばかりなる上、白煙天を掩ひて物凄く加之坑口よりは草鞋、乃至は衣類の切端しなど二、三十尺の空中に跳上るさま、容易ならざる變事なるより、コハ坑內の炭酸ガスが火氣の爲めに爆裂せしものならんと早くも察し稻石坑長は事務員以下を指揮して坑內深く駸入せり（以下略）。

一一、宮川社長時代（八頁制度）

第三代社長宮川武行は警察官出身、休職臺灣警察部長であつた。嘗て福岡縣に警部として奉職中は乘馬趣味の旺んなことから「馬警部」の異名があり、風彩堂々、あつぱれの偉丈夫であつた。

宮川武行を社長に、平岡浩太郎の實弟平岡德次郎を監督に、陣容を新にした本紙明治三十三年劈頭の初刷號は三十二頁の特輯とし、內四頁は青紙を用ゐるなど新味を見せ、一月廿二日を期して紙面の增大を發表し、從來の六頁に添附した半頁大の「物價附錄」を廢して本紙を八頁に增頁した。この增頁に依る紙代の値上げは當分行はぬことゝし、福日紙と協議して廣告料一行五錢値上げに留めたので本社が拂ふ犧牲に代る讀者の賞讃は甚だしく、發行部數はぐん〳〵增加した。

六月には義和團の蜂起があり、翌三十四年一月十七日には鄕土教育の資料として鄕土史募集を行ひ二月には從來よりの投書欄「壁訴訟」の外に「衛生相談」欄を設け衛生思想の普及に力めることゝなつた。

四月七日は本紙創刊四千號に達したので、二十八頁の記念號を發行した。當日の記念號は記事內容は平日と變らず、廣告のみの增頁としたが、その理由を社說に左の如く記載してゐる。

吾九州日報は、社會の進步と讀者の眷顧とに依りて、玆に創刊以來第四千號を發行するに及べり、されど四千號に達したればとて、吾人は何等の感想だもなき也。固より過去十數年の久しき、經營慘憺殆んど寧日なかりき、今にして之を追憶すれば今日の九州日報は大に祝すべきが如しと雖も將來の經營慘憺は遙かに過去に勝るものあらん、十數年の年子、長しと云へば長しと雖も、遠き未來は雲濤渺茫吾人の抱負を行ひ、吾人の所懷を現實にせんと欲せば、既往の短日月と小慘憺とは寧ろ尋常の事のみ、而して吾人微力と雖も必ず抱負を行ひ所懷を現實にせんことを期するが故に、未だ必ずしも此の時に及びて自ら祝意を表して一呼吸を爲さんとは欲せざる也。今僅かに四千號に達して一階級を經たりと雖も、是昨日の今日に遷りて一號を加へたるのみ、尙ほ今日の明日に遷りて一號を加ふるのみ、今日にして祝すべくんば、昨日も祝すべく明日も亦祝すべしとせん、何となれば吾人若し祝意を表すとせば、自家の四千號に達したるを祝するに非ずして、其の之れに達せしめたる社會の進步と讀者の眷顧とを祝すべきものなら以て祝すべしとなすに至らば、必ずや驚天動地の事をなして大いに讀者と共に祝せん。何となれば、吾人の祝すべしとなすの日は、從來の經營に幾倍の慘憺を經て、吾人の抱負と所懷とが現實にされ、社會の進步と讀者の眷顧とが、愈よ進みて全く吾人と合一したる時なれば也。讀者よ、餘りに放言壯語に過ぐとなすなかれ、吾人同人の所志は全く此の如き也。

本日の新聞紙は、特に平素眷顧を寄せられつゝある實業家諸君の廣告を紹介する爲め紙幅を大にしたるも、其の內容は全く平日の新聞紙なり、讀者よ、絢爛の美なきを怪しむなかれ、吾人は本日を以て特に絢爛を裝ふの要なきを信ずれば也。

又世間操觚者の例として、此くの如き時に際して新聞紙の一新を公言するが如しと雖も、吾人は最も此くの如きを陋なりとするものなり、社會の進步の終息なき以上は、新聞紙も亦絕えず進步すべき也。吾人の心事は卽ち此くの如し。

明治三十四年六月九日、本紙が物々しい社告と共に開始した「善行募集」の「人の鑑」欄新設は、本紙が理想した如く、當時の社會面記事への一つの劃期をなしたといふことが出來るであらう。卽ち社告の前文には左の如く記してある。

な大爆發を報ずるものであつた。

「豐國炭坑瓦斯破裂、二百名を亡ひ跡火無し、事務員恙なく事業恢復しつつあり」

この飛電に接した時の平岡の心情を辰巳記者は次の如く述べてゐる。

——豪邁義俠の氏、實に今回の兇變より生ずる巨額の損失を秋毫も憂へんや、唯颯爽たる眉目の間に俄然愁黙を畫きしものは氏が子視せし勞働者の不幸と遺族の悲痛とに對する同情にてありしなり。嚴父たり長上たる氏は平生人に長たる德義上の恩念に堪へ難く、萬里の天涯實に彼等の爲に心に喪服をつけたり。

平岡は、玆に於て、一切の壯圖を擲ち、急遽歸朝の途につき七月廿三日、横濱へ歸着、鄉里へ急行した。

——平岡及び山本貴三郎の經營になる豐國炭坑は福岡縣田川郡弓削田村字川宮にあつて、俗に縮緬八尺と云はれる炭層を有する有名な炭坑であつた。瓦斯爆發と共に坑內作業中の二百十三名は無慘な犧牲者となり、悲報天聽に達して畏くも御內帑金五百圓を下賜あらせられた。

本社では事件勃發と同時に記者和田庫太郎を現地に特派し數日に亘つて詳るさま、容易ならざる變事なるより、コハ坑內の炭酸ガスが火氣の爲めに爆裂せしものならんと早くも察し稻石坑長は事務員以下を指揮して坑內深く駸入せり(以下略)。

一二、宮川社長時代（八頁制度）

第三代社長宮川武行は警察官出身、休職臺灣警察部長であつた。嘗て福岡縣に警部として奉職中は乘馬趣味の旺んなことから「馬警部」の異名があり、風彩堂々、あつぱれの偉丈夫であつた。

宮川武行を社長に、平岡浩太郎の實弟平岡德次郎を監督に、陣容を新にした本紙明治三十三年勞頭の初刷號は三十二頁の特輯とし、內四頁は青紙を用ゐるなど新味を見せ、一月廿二日を期して紙面の增大を發表し、從來の六頁に添附した半頁大の「物價附錄」を廢して本紙を八頁に增頁した。この增頁に依る紙代の値上げは當分行はぬことゝし、福日紙と協議して廣告料一行五錢値上げに留めたので本社が拂ふ犧牲に代る讀者の賞讃は甚だしく、發行部數はぐん〳〵增加した。

六月には義和團の蜂起があり、翌三十四年一月十七日には鄉土教育の資料として鄉土史募集を行ひ二月には從來よりの投書欄「壁訴訟」の外に「衛生相談」欄を設け衛生思想の普及に力めることゝなつた。

四月七日は本紙創刊四千號に達したので、二十八頁の記念號を發行した。當日の記念號は記事內容は平日と變らず、廣告のみの增頁としたが、その理由を社說に左の如く記載してゐる。

吾九州日報は、社會の進步と讀者の眷顧とに依りて、玆に創刊以來第四千號を發行するに及べり、されど四千號に達したればとて、吾人は何等の感想だもなき也。固より過去十數年の久しき、經營慘憺殆んど寧日なかりき、今にして之を追憶すれば今日の九州日報は大に祝すべきが如しと雖も將來の經營慘憺は遙かに過去に勝るものあらん、十數年の年子、長しと云へば長しと雖も、遠き未來は雲濤渺茫吾人の抱負を行ひ、吾人の所懷を現實にせんと欲せば、既往の短日月と小慘憺とは寧ろ尋常の事のみ、而して吾人微力と雖も必ず抱負を行ひ所懷を現實にせんことを期するが故に、未だ必ずしも此の時に及びて自ら祝意を表して一呼吸を爲さんとは欲せざる也。今僅かに四千號に達して一階級を經たりと雖も、是昨日の今日に遷りて一號を加へたるのみ、尙ほ今日の明日に遷りて一號を加ふるのみ、今日にして祝すべくんば、昨日も祝すべく明日も亦祝すべしとせん、何となれば吾人若し祝意を表すとせば、自家の四千號に達したるを祝するに非ずして、其の之れに達せしめたる社會の進步と讀者の眷顧とを祝すべきものなればなり。故に本日の四千號に達したりとも、吾人は此の紙上に何等の祝意を寄せず、祝電祝文を乞はず、特に寄せられたるものありしも、其の好意を多として厚く其の志しに酬ゐるの外、一文一章も之れを紙上に揭載する能はざるを憾みとす、然りと雖も、吾人亦固より祝事を喜ばざるに非ず但し祝すべきに至りて祝し、祝すべからざるを祝せざるのみ。若し吾人自ら以て祝すべしとなすに至らば、必ずや驚天動地の事をなして大いに讀者と共に祝せん。何となれば、吾人の祝すべしとなすの日は、從來の經營に幾倍の慘憺を經て、吾人の抱負と所懷とが現實にされ、社會の進步と讀者の眷顧とが、愈よ進みて全く吾人と合一したる時なれば也。讀者よ、餘りに放言壯語に過ぐとなすなかれ、吾人同人の所志は全く此の如き也。

本日の新聞紙は、特に平素眷顧を寄せられつゝある實業家諸君の廣告を紹介する爲め紙幅を大にしたるも、其の內容は全く平日の新聞紙なり、讀者よ、絢爛の美なきを怪しむなかれ、吾人は本日を以て特に絢爛を裝ふの要なきを信ずれば也。

又世間操觚者の例として、此くの如き時に際して新聞紙の一新を公言するが如しと雖も、吾人は最も此くの如きを陋なりとするものなり、社會の進步の終息なき以上は、新聞紙も亦絕えず進步すべき也。吾人の心事は卽ち此くの如し。

明治三十四年六月九日、本紙が物々しい社告と共に開始した「善行募集」の「人の鑑」欄新設は、本紙が理想した如く、當時の社會面記事への一つの劃期をなしたといふことが出來るであらう。卽ち社告の前文には左の如く記してある。

善行募集

人を雇へる人に望む
人を敎ふる人に望む

新聞紙が社會の方面に就いて傳ふる所の記事が多くは暗黑に關するものなるは我社の平生最も遺憾とする所なりし、暗黑に關する記事は惡を懲らすの點に於ては固より價値ありと雖も未だ善を奬むるの上に於ては大いに缺如せる所なくんばあらず新聞紙報道の趨勢が此れに缺けて彼れに多きは

元これ讀者が斯くの如き事を見聞するを喜ぶが爲めなるよりと雖も亦之れが材料を供給するの機關に缺けたるが爲めならずとせんや、今や世は汚下して澆季に屬すと雖も赫々たる善行豈少しとせんや我社は切に此點に心ある人士の援助を乞ひて左の諸項に關する記事を掲載せんとす

模範學生
模範男工
模範女工

其他坑夫、店員、郵便配達夫等の如き總て世に所謂雇はれ人の模範たるべきもの

一二、第十四議會

第十四議會は、鐵道國有法案、宗教法案、選擧法改正案が主な問題であつたが、選擧法改正法案が辛ふじて議會を通過し、山縣內閣の面目丸潰れであつた。

本紙は閉院式當日(明治三十三年二月廿四日)の紙上に「一平凡無味、單調乾燥、獨り議員濱職に關する尾崎咢堂の演說を除きては何等の雄辯もなく、何等の波瀾もなく、休會に次ぐに休會を以てして空しく三ケ月を徒費したり眞率に言へば吾人は第十四議會の經過を報ずるにすら懶し、其の功罪の如きは今問ふことを須ひず、何となれば、大體に於て意氣の銷沈したる第十四議會は、國運の進捗に對つて何等の貢獻する所もなかりければ也」と論じ、この年の九月十三日自由黨が解散して伊藤侯の下に立憲政友會として生れ代るに及び、同月十六日付「自由黨亡ぶ」と題して左の如く論じた。

明治三十三年九月十三日、自由黨亡ぶ。

託言して曰く、憲政の完美の爲めに姑らく大同に趨る也と。其の實は積年の主張と歷史と精神とを擧けて、先輩の熱血と生命と意氣とを擧けて、悉くこれを一炬に付し、二、三子の私營を遂けしめんが爲めに、十萬の黨與を以てこれを侯爵伊藤博文に献じたる也。

正に是れ一葉落ちて秋の憐れを知りそむるの時。思へば「板垣死すとも自由は死せじ」凛然たる一語今將た聞くべからず、古往今然、何事も南柯一場の夢なれや、嗚呼、板垣終に死して自由も亦死せんとするか、所謂彼も一時此も亦一時、吾人殆んど茫然自失せんとす。さりとては自主自由、人權尊重の觀念が初めて暗黑の一層に浸漸して、茲に娼婦をして猛然「自由」を叫びて奮ひ起たしめたるのとき十萬の自由黨員は遂に一人の娼婦にだも及ぶものなき耶。

立憲政友會、換言すれば「伊藤黨」の標幟が左の三大主張に存することは其の宣言と政綱とに於て明々白々たる也、一曰く政黨內閣の排擊、二曰く獵官運動並に情實請託の杜絶、三曰く會(黨)內紀律秩序の明整、卽ちこれ正面より自由黨の主張と行動とを叱咤したるものにあらずや、而かも自由黨が耳を蔽ひ目を蔽ひ、面縛して降を伊藤侯の門に乞ふの狀に至りては何ぞ憐れむべきの甚しきや。

伊藤侯は依然として超然主義者なり、侯は主義若くば政策の爲めに這般の政黨を創設したるにはあらず、侯は唯侯自身の經綸を行はんが爲めに侯の幕下に羅拜せんとするものを集めたるのみ、所謂伊藤黨のみ、主義黨にはあらず、解黨意見書は旣に此の點に於て全く謬まる。(以下略)

續いて十月五日には娼妓自由令が發布され「人權の一大進歩にして明治文化史に特筆大書すべき美事也」と賞揚してゐる。

一三、東宮殿下九州行啓

明治三十三年十月十九日は、東宮殿下(大正天皇)が御召艦千歳に御搭乘、九州行啓の第一歩を門司港に御到着あらせられた記念すべき日であつた。本紙は謹んで奉迎文を掲げて赤誠を表し、門司、小倉に辰巳豐吉、久留米に吉野英夫、佐世保に渡邊五郎の各記者を特派して殿下御巡啓の御模樣を謹記速報し奉つた。福岡市へは御歸途廿七日から三日間御滯在あらせられ、西公園筥崎宮、香椎宮、太宰府神社、觀世音寺、都府樓跡など御巡啓遊ばされた。左は、東宮殿下御來福當日の本紙奉迎の辭である。

寫眞は奉迎當日謹載の東宮殿下御肖像と御旅館

奉迎鶴駕稔穀野に充ち瀕氣天に彌るの時我が天縱神武なる
皇太子殿下は親しく治化の洽ねきを知ろしめし兼ねて風物の新たなるをみそなはさんとして鶴駕を九州の地に枉けさせ給ひ過ぐる一週餘日或は武を海峽の間に講ざせ給ひ或は古を肥筑の野に訪ね給ふ高く令聖德愈よ高く賀益明かに、山川卽ち恩露に浴誠意を受けさせ給はんことを、敢て侍臣に由りて謹みて奉迎の微衷を奉ると云爾

明治三十三年十月廿七日　　臣九州日報社員某某頓首頓首

一三、北淸事變と本社

明治三十二年九月の唐有爲等一派の淸朝改革兵亂に續いて、史上有名な北淸事變は明治三十三年六月に勃發した。

日本からは、列國と共に取敢ず海軍陸戰隊を上陸せしめて聯合軍に參加せしめ、更に廣島第五師團に出動令が下つて、派遣部隊は堂々、列國の先頭に立つて義和團匪を攘ひ、北平城に入城して籠城の各國人を救つた。

この事變に關する本社の活躍はさながら、北淸に於ける各國聯合軍中の日本軍隊のごとく、全國新聞紙を完全に壓倒して、さすが大陸政策に一つの創立の趣旨傳統を有する本社の眞面目を發揮して餘すところがなかつた。

事變勃發と同時に、大陸各地に遊ぶ玄洋社關係の本社々友等は期せずして本社を中心に自發的通信員の役目を引受け各地滯在の社員と連絡して時々刻々の狀況を電報し、本社から更に當時來福中の白川主筆の親友田岡嶺雲及び記者吉野英夫等を相次いで現地に特派し、支那各地に滯在中の社員、社友と連絡せしめて報道陣容を強化した。當時本社の事變に關する特派陣容は左の

一二、第十四議會

第十四議會は、鐵道國有法案、宗教法案、選擧法改正案が主な問題であつたが、選擧法改正法案が辛ふじて議會を通過し、山縣内閣の面目丸潰れであつた。

本紙は閉院式當日(明治三十三年二月廿四日)の紙上に「一平凡無味、單調乾燥、獨り議員濱職に關する尾崎咢堂の演說を除きては何等の雄辯もなく、何等の波瀾もなく、休會に次ぐに休會を以てして空しく三ケ月を徒費したり眞率に言へば吾人は第十四議會の經過を報ずるにすら懶し、其の功罪の如きは今問ふことを須ひず、何となれば、大體に於て意氣の銷沈したる第十四議會は、國運の進捗に對つて何等の貢獻する所もなかりければ也」と論じ、この年の九月十三日自由黨が解散して伊藤侯の下に立憲政友會として生れ代るに及び、同月十六日付「自由黨亡ぶ」と題して左の如く論じた。

明治三十三年九月十三日、自由黨亡ぶ。

託言して曰く、憲政の完美の爲めに姑らく大同に趨る也と。其の實は積年の主張と歷史と精神とを擧げて、先輩の熱血と生命と意氣とを擧げて、立憲政友會、換言すれば「伊藤黨」の標幟が左の三大主張に存することは其の宣言と政綱とに於て明々白々たる也、一曰く政黨内閣の排擊、二曰く獵官運動並に情實請託の杜絕、三曰く會(黨)内紀律秩序の明整、卽ちこれ正面より自由黨の主張と行動とを叱咤したるものにあらずや、而かも自由黨が耳を蔽ひ目を蔽ひ、面縛して降を伊藤侯の門に乞ふの狀に至りては何ぞ憐れむべきの甚しきや。

伊藤侯は依然として超然主義者なり、侯は主義若くば政策の爲めに這般の政黨を創設したるにはあらず、侯は唯侯自身の經綸を行はんが爲めに侯の幕下に雜拜せんとするものを集めたるのみ、所謂伊藤黨のみ、主義黨にはあらず、解黨意見書は既に此の點に於て全く謬まる。(以下略)

續いて十月五日には娼妓自由令が發布され「人權の一大進步にして明治文化史に特筆大書すべき美事也」と賞揚してゐる。

一三、東宮殿下九州行啓

明治三十三年十月十九日は、東宮殿下(大正天皇)が御召艦千歲に御搭乘、九州行啓の第一步を門司港に御到着あらせられた記念すべき日であつた。本紙は謹んで奉迎文を揭げて赤誠を表し、門司、小倉に辰巳豐吉、久留米に吉野英夫、佐世保に渡邊五郎の各記者を特派して殿下御巡啓の御模樣を謹記速報し奉つた。福岡市へは御歸途廿七日から三日間御滯在あらせられ、西公園宮崎宮、香椎宮、太宰府神社、觀世音寺、都府樓跡など御巡啓遊ばされた。左は、東宮殿下御來福當日の本紙奉迎の辭である。

寫眞は奉迎當日謹載の東宮殿下御肖像と御旅館

奉迎鶴駕稔穀野に充ち瀛氣天に瀰るの時我が天縱神武なる皇太子殿下は親しく治化の洽ねきを知ろしめし兼ねて風物の新たなるをみそなはさんとて鶴駕を九州の地に枉げさせ給ひ過ぐる一週餘日或は武を海峽の間に講ぜさせ給ひ或は古を肥筑の野に訪ね給ふ聖德愈よ高く令賀益明かに、山川卽ち恩露に浴し蒼生新に仁雨に沐す、嗚呼昭代の盛事誰か感泣せざるものあらんや、本日又玆に鶴駕を福岡に迎へ、臣民をして親しく仰ぎ視るを得せしめ給ひ更に殊恩を垂れ給ひて駐蹕三日に及ばせ給ふ、古忠臣の武勇を玄海の濱に懷はせ給ひ、乃神祖の聖慮を香椎の丘に偲ばせ給ふも將に近きにあらんとす、敵國降伏の威德頓に高きを加へ和魂漢才の明知更に光りを添ふ、此の日此の時生きて此の地の民たる嗚呼亦何の光榮ぞや、俯して願はくば蹕駕御恙なく四民の誠意を受けさせ給はんことを、敢て侍臣に由りて謹みて奉迎の微衷を奉ると云爾

明治三十三年十月廿七日　　臣九州日報社員某某頓首

一三、北淸事變と本社

明治三十二年九月の唐有爲等一派の淸朝改革兵亂に續いて、史上有名な北淸事變は明治三十三年六月に勃發した。

日本からは、列國と共に取敢ず海軍陸戰隊を上陸せしめて聯合軍に參加せしめ、更に廣島第五師團に出動令が下つて、派遣部隊は堂々、列國の先頭に立つて義和團匪を攘ひ、北平城に入城して籠城の各國人を救つた。

この事變に關する本社の活躍はさながら、北淸に於ける各國聯合軍中の日本軍隊のごとく、全國新聞紙を完全に壓倒して、さすが大陸政策に一つの創立の趣旨傳統を有する本社の眞面目を發揮して餘すところがなかつた。

事變勃發と同時に、大陸各地に遊ぶ玄洋社關係の本社々友等は期せずして本社を中心に自發的通信員の役目を引受け各地滯在の社員と連絡して時々刻々の狀況を電報し、本社から更に當時來福中の白川主筆の親友田岡嶺雲及び記者吉野英夫等を相次いで現地に特派し、支那各地に滯在中の社員、社友と連絡せしめて報道陣容を强化した。當時本社の事變に關する特派陣容は左の如くであつた。

天津、北京　田岡嶺雲　　吉野英夫
南京　安永東之助　　上海　久留島彥
香港　上田務　　廣東　原口聞一
漢口　佐藤正作　　門司　辰巳豐吉
佐世保　古莊毅　　長崎　和田庫太郎
廣島　筑紫本吉

これ等、支那通の特派員に依つて報道される戰況は一日數回の號外となり或ひは「腥乾坤」「風雲觀」「砲臺内の二日」「北路天津に入る」「天津片信」「北平籠城記」「清國朝野の人物」等々の戰況讀み物となつて紙上を飾つたが、特に本紙が絶對他紙を壓して光彩を放つたものは事變勃發から事變後にかけて數ケ月間殆んど毎日挿入した挿し繪圖解であつた。

卽ち本紙關係者はさすが支那通、大陸問題の權威者揃ひを誇つてゐるだけに、事變勃發と同時に掲載され始めた北清一帶の圖解及び北清事變關係者の肖像畫は實に詳細を極め、西太后を始め支那の事變關係者、ドイツ皇帝及び事變に殺害されたドイツ公使を始め英、米、獨、佛、露各國の事變關係者、並に日本公使、日本派遣軍司令官以下將兵、在留邦人等の肖像は數百に及んで詳細を極め、殊に北清一帶の詳細地圖、北清各地の要地、建物、風俗のスケツチ、砲臺や城門の圖解寫生等、讀者をして「これに依つて北清の全貌を知り得たり」と感激せしめるほど詳細を盡くしたものであつた。

左は北清事變當時、美文を以て本紙を飾り讀者を熱狂せしめたと記錄されてゐる特派員田岡嶺雲の記事の一部拔萃である。

大忙中の閑趣

天津砲火中の二日　於太沽沖肥後丸（七月六日）

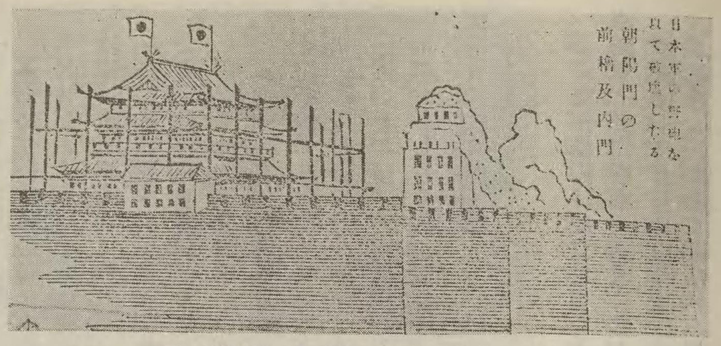
田岡嶺雲

三日、四日天津に止まりたり、此の二日は我が生涯に新しき經驗を加へたり、我は初めて戰地に入りて軍營の裡に起臥せるなり、而かも我は今大忙中に於ける大閑の趣きを味あへり、陣中常にホーマーを手にせりといふ古英雄の俤をも會得しえたり、此の地には水道あり、太沽の渴に苦しみたるに比してたぎりたる湯も茶も常に卓上に在り、殊に茶の支那製の紅茶なりしは我に嬉く、事あれば喚べば僕あり、二人應と答へて直に辨ず、難を避けて此の家の一隅に隱れ居たるものを我等の先着者が錢にて誘ひ出したるなりとぞ、其の上室は藁を褥の昨日に異りて洋風の大小二間、壁には備へ付の暖爐すら備はれり、卓もあり椅子もあり粗末なれども寢臺も二あり小き間には簀子を敷きて座すべくしつらふ、太沽の時に比すれば此の地は極樂なり、牕前に小圃あり花を植ゆ、葵の紅きが今を盛りに白き蝶の其の上に戲るゝ軍中なりとも覺えぬ閑趣也、二十一日より少寧なりしといふ敵の砲擊は精銳なる馬軍旣に加はりたりと聞こえて予が着したる翌日より復猛烈を加へたれど晨は猶さまでならざりしかば我等は相伴ふて街に出づ、空は昨宵の雨は纔に晴れたり、公園の蒼樹鬱として翠掬す可し、哨兵あれば入らずして已む、房に還りし頃より砲聲漸く急なり、彈は殆んど五分時毎に我等が談笑する屋上に飛ぶ、相謔れていふ鐵砲丸も午飯だと、忽ち轟然一聲屋うごき牕の玻璃震ふ、是れ我等の在る處と遠からぬ炊事場に落ちたるもの、負傷者ありたりといふ、此れより砲聲又益す急也。イヤ冷嘲から鐵砲丸が怒つたのだと相笑ふ、かゝる間にも長閑なるは我等なり、戰に出るにもあらねば酒は麥酒ブランデー欲するまゝなり、同じく在るもの金を醵して買ふ、此の日午僕小麥粉を圓形にうすく燒きたる點心をつくりきたる、甘きに飢えたる一同、下戸も上戸も皆指を染めて瞬く間につきぬ、かゝる間にはかゝる事も贅澤のやうに感じて一興也。午後よりは砲射猛烈の故を以て我等の外に出づるを許さず、酒は夕に至らざるに全く罄きたれど買うに途なし、晩餐の卓はさびしく終りたり、せめて一杯なりともと望む上戸黨ありて種々の手段はつくされたれど終に得ず、不滿の間に早く寢たり、これに懲りたれば翌日は起き出づるや勞頭に提出されたるは酒を買ひ來るの案也。朝餐を終るや否や砲兵の營所に阪大尉を訪ふて昨日の戰況を聞き、二手に分れて買物係となりて我等は洋舖にゆけり、ブランデー二瓶、麥酒一ダースを購ふ――（以下略）

白石大尉を見る

七月一日　於太沽砲臺　田岡嶺雲

吾太沽砲臺占領の狀をきゝ併せて「勇猛白石」の名を耳にし其の人を見んとするの情を禁ずる能はず、御用船より上陸せる翌日、陸軍の司令部と相隣れる陸戰隊本部に至り福井指揮官を見る、傍ら一人あり、年三十ばかり、短身黎面疎鬚あり、眉宇の內自ら俊英の態あり、卽ち白石大尉也。汚れたる白衣をつけ無雜作に椅子に倚る、之と語れば率直親しむべく所謂勇猛の所を見る能はず、叩くに砲臺占領當時の狀を以てするに敢て自ら誇るの色なく唯いふ敵壘門側、砲丸に中りて壞れたる所あり、之を足場とするを得たるは僥倖のみと、また其の他をいはず予等通信者の一行愛宕艦を訪はんとす、幸ひに白石大尉の事を以て水雷艇隼にいたるに同乘を許され河を溯る途上左右を指點して諄々當日の狀を語る、大尉の先發せし砲臺は右岸に在り、河に向ふて壘門あり高さ一丈計り、大尉指しいふ是なり、果然門を見て左側にある所其の半ばより壞れたるを望み得べし、門



寫眞は當時掲載せる爆破前の朝陽門の圖

一四、露清秘密條約の素つ破抜き

北清事變で斷然他紙を壓倒した本紙は、事變後、殉職者北京公使館書記生杉山彬の遺兒五人のために教育資金を募集したり、佐世保海軍病院に在る聯合各國の傷病兵に見舞品贈呈の義捐金を募集したりしたが、間もなく明治三十四年十月二十三日には北清事變後の滿洲問題に關する「露清秘密條約」を素つ破抜いて、東漸するロシヤに對して神經を過敏ならしめてゐた當時の日本朝野に一大衝擊を投げ、同時に大陸問題に關する本社の權威を決定的ならしめた。

その「秘密條約」は左の五ケ條より成るもので、通信者の氏名は特に秘せられ、記事には「禁轉載」と物々しく記載されたものであつた。

▲滿洲開放に伴ふ談判を開くべきことは、單に清廷の希望なるのみならず、外交的巨眼を有する露國は、滿洲問題の不解決は徒らに列國の猜疑を招き、何時紛擾を醸すやも計り知れず、寧ろ此の際解決を速かにして國家百年の利益を壟斷するに如かずとし、新任公使着任と同時に李鴻章と秘密の談判を開きしは旣に旬日以前の事にて、談判の進行模樣の如き一切之を秘密に附し、之を知る者は彼此兩者のみなりといふ。

一、滿洲に於ける鑛山の開掘及び占有の權利は露國永遠に之を所有し、

で詳細を極め、殊に北清一帶の詳細地圖、北清各地の要地、建物、風俗のスケッチ、砲臺や城門の圖解寫生等、讀者をして「これに依つて北清の全貌を知り得たり」と感激せしめるほど詳細を盡くしたものであつた。

左は北清事變當時、美文を以て本紙を飾り讀者を熱狂せしめたと記錄されてゐる特派員田岡嶺雲の記事の一部拔萃である。

大忙中の閑趣

天津砲火中の二日　於太沽沖肥後丸（七月六日）

田岡嶺雲

三日、四日天津に止まりたり、此の二日は我が生涯に新しき經驗を加へたり、我は初めて戰地に入りて軍營の裡に起臥せるなり、而かも我は今大忙中に於ける大閑の趣きを味あへり、陣中常にホーマーを手にせりといふ古英雄の俤をも會得しえたり、此の地には水道あり、太沽の渴に苦しみたるに比してたぎりたる湯も茶も常に卓上に在り、殊に茶の支那製の紅茶なりしは我に嬉く、事あれば喚べば僕あり、二人應と答へて直に辨ず、難を避けて此の家の一隅に隱れ居たるものを我等の先着者が錢にて誘ひ出したるなりとぞ、其の上室は藁を褥の昨日に異りて洋風の大小二間、壁には備

寫眞は當時掲載せる爆破前の朝陽門の圖

するの情を禁ずる能はず、御用船より上陸せる翌日、陸軍の司令部と相隣れる陸戰隊本部に至り福井指揮官を見る、傍ら一人あり、年三十ばかり、短身黎面疎鬚あり、眉宇の內自ら俊英の態あり、卽ち白石大尉也。汚れたる白衣をつけ無雜作に椅子に倚る、之と語れば率直親しむべく所謂勇猛の所を見る能はず、叩くに砲臺占領當時の狀を以てするに敢て自ら誇るの色なく唯いふ敵壘門側、砲丸に中りて壞れたる所あり、之を足場とするを得たるは僥倖のみと、また其の他をいはず予等通信者の一行愛宕艦を訪はんとす、幸ひに白石大尉の事を以て水雷艇隼にいたるに同乘を許され河を溯る途上左右を指點して諄々當日の狀を語る、大尉の先發せし砲臺は右岸に在り、河に向ふて壘門あり高さ一丈計り、大尉指しいふ是なりと、果然門を見て左側にある所其の半ばより壞れたるを望み得べし、門前蘆葦叢り生ふ、大尉いふ戰後死屍此邊に狼籍たりと、猶喪家の狗の人肉をあさつて河岸を徘徊するを見る、當日の激鬪を想ひ更に大尉の挺身奮躍門に登るの狀を想ふ、而も顧みて大尉を見れば只一個眇然たる小身の人、魁梧勇猛の態を見ず、舟愛宕に至り乃ち相別る、靄然の裡一種犯す可らざるの氣あり、吾人は大に望みを氏の後來に囑するを禁ずる能はず

一四、露清秘密條約の素つ破拔き

北清事變で斷然他紙を壓倒した本紙は、事變後、殉職者北京公使館書記生杉山彬の遺兒五人のために教育資金を募集したり、佐世保海軍病院に在る聯合各國の傷病兵に見舞品贈呈の義捐金を募集したりしたが、間もなく明治三十四年十月二十三日には北清事變後の滿洲問題に關する「露清秘密條約」を素つ破拔いて、東漸するロシヤに對して神經を過敏ならしめてゐた當時の日本朝野に一大衝撃を投げ、同時に大陸問題に關する本社の權威を決定的ならしめた。

その「秘密條約」は左の五ケ條より成るもので、通信者の氏名は特に秘せられ、記事には「禁轉載」と物々しく記載されたものであつた。

▲滿洲開放に伴ふ談判を開くべきことは、單に清廷の希望なるのみならず、外交的巨眼を有する露國は、滿洲問題の不解決は徒らに列國の猜疑を招き、何時紛擾を釀すやも計り知れず、寧ろ此の際解決を速かにして國家百年の利益を壟斷するに如かずとし、新任公使着任と同時に李鴻章と秘密の談判を開きしは既に旬日以前の事にて、談判の進行模樣の如き一切之を秘密に附し、之を知る者は彼此兩者のみなりといふ。

一、滿洲に於ける鑛山の開掘及び占有の權利は露國永遠に之を所有し、現在及び將來に於て他國に許可すべからず

二、大遼河の東部滿洲に於ける鐵道にして現在敷設せられをるものは勿論、未來敷設さるべきものと雖も露國の專有たらしむべし

三、滿洲に於ける淸國兵の訓練は總て露國に一任し決して他國に依頼すべからず

四、滿洲現在の露國兵は二箇年の後全數の二分一を撤退し殘餘は三箇年の後滿洲の情勢に因り撤退すべし

五、關外鐵道は條約成立と同時に淸國に還附すべし、然りと雖も今後英國の軍隊輸送權若くは管理權を許可すべからず、而し若し之が支線を敷設する等の場合は必ず露國と協定するを要す

▲蓋し此の條約の正文は知るに由なきも要領は全く前記の如くなるが此の條件提出につき露國の手段は出來得べきだけ淸國主權に杆格するを避け其の面目を保たしむるに努めたると同時に尙ほ彼の十二箇條の滿洲條約の精神を埋沒せしめざるやうに勉めたるものにして實に巧妙極まれりと謂ふべし

▲初め新任露國公使より斯の條件提出せらるゝや、李鴻章は直に皇帝に奏問せしところ、皇帝は御前會議を開かせられ、左の意味の決議を經て李鴻章に勅令あらせられたりとの說あり

「新條約に對する露國提出條件の爲め列國をして均霑的の申出を爲さしめざる方針に據り妥協するところあれ」

而して此の御前會議には西太后も垂聽あらせられしとぞ

▲露國は其の目的を達せんため非常に努力し、談判開始と共に山海關の駐屯部隊を半減せしのみならず、天津開放に盡瘁し且つ將來淸國主權の確立のため大いに力を効すべきことをも申し出で、以て痛く淸國君臣の感情を溫めしかば、淸國君臣亦た露國の意志を諒し、只列國の均霑的提議の餘地無からしむる底に妥協するの方針なれば新條約の成立無論見込あり、否既に双方內意一致しをりて列國の揷言を避くるの手段をのみ講じつゝあるが如し(以下略)

この秘密條約は成立に至らず、このために西太后は死を決したと傳へられ李鴻章は密約廢棄の訓電に接してその夜喀血遂に逝去した。

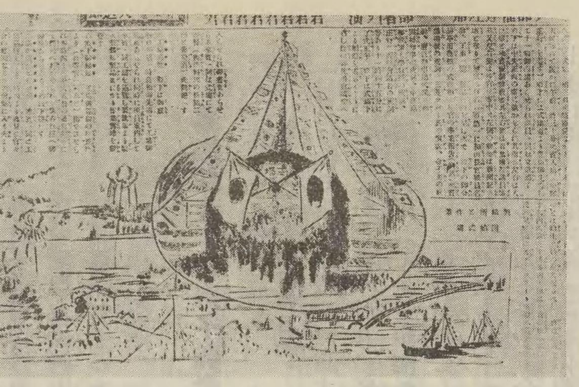
本紙は十月廿七日の社說に「露淸密約に就いて、再び滿洲問題を論ず」といふ題で「―露國は明らかに滿洲占領の名を避けて其の實を收むるものと謂はざる可らず、―吾國の自衛權に危害を與へ、東洋に於ける列國權力の平均を失せしめ延いて東洋の平和を害し世界の安寧を攪亂するが如き國家に對しては敢然我國は起つて干涉せざる可らず――」と抗議の權我れに在りと叫んだが、この密約成立せず、李鴻章の死が報ぜられるに及んで十一月十日から三日間「李伯死去後の支那」の題下に支那を舞臺とする各國の野心や支那の政狀を論じてゐる。その一節に「―彼に滿洲條約を締結するの日子を與へざりしもの、天は頗る東亞に惠む所あるが如きか」と述べてゐる

一五、當時の社會面記事

この頃の社勢は、改題によるその名の示す如く九州各地に擴大され、明治三十三年七月、佐世保に設けられた肥前支社は佐賀、長崎兩縣下を管轄し、專屬通信員を兩縣下各地、壹岐、對馬まで配置して通信網を完備し、翌八月一日には熊本市塩原町裏一番町に肥後支社を開設するに至つたので、小倉の豐前支社、久留米の筑後支社と合せて四つの支社を有し、記事內容豐富を極めた。同時に編輯方針技術なども非常な飛躍を示し、威容を誇るに至つた。此の頃の試みの一として、記事と記事との區劃代りに傍罫で圍んだ俳句、和歌、格言の類を挾んでゐるのも面白い

左は「三面記事」と云はれた當時(明治三十四年)の社會面記事二、三の拔萃である。

戀故に放火　深く契りし男の心變りを恨みて身は棄鉢の粉微塵に破れて儚き土となり浮名を諞はるゝも戀、又は女の薄情を憤りては腥き血を流し又放火して鐵窓に繫がれ盛相飯に昔を偲ぶも戀なれや、戀よ戀よといふ字は來いよの來るも夜〳〵忍び會ふ果敢なき中に樂しみあり、此の樂しみ偏に、永かれと七重八重に腰を折り八百萬の神々に願ひ上けけるは山門郡宮



寫眞は伏見宮殿下御臺覽を仰ぎたる八幡製鐵所開所

蒲船津士族堤寅次郎といふ男なり、肩書の堅きと其の名の恐ろしきには似ず此の女故ならば己が苗字の堤に穿りて死ぬるとも更に恨みはなしと現なく惚れ込まれ居る相手は同村阿志賀駒次郎が長女イネといふ者なり、遠き隔ての取除けられて嬉しい交情になりてより恐ろしい事も何とも思はず垣の外から蒟蒻投げて相圖して忍ぶ戀路に憂身をやつし居たりしが先方は差程にも思はぬか此の頃に至りて女の素振がらりと變り、とかく男を袖にする擧動さへ見ゆるに寅次郎は口惜がり、或夜の逢瀨を幸ひに女に向ひ汗もやお前と我の其の仲は他から水さす人あるとも裂かるゝ樣な浮いたる戀ではなければ何時まで恁うして嬶曳せんより公然養子となりて緣組みなば人の知らぬ苦勞もせで可かるべし、最もお前故ならば如何なる苦勞も厭はぬ我心底なれど一層夫婦になりて共に白髮の生ゆる迄末の松山穩かに波も立たせず睦まじく暮らさんは又一入の樂しみなるべしと去る廿四日の夜の事なり、日頃馴れたる忍びの術、見つけられじとイネが家近く忍び寄り、四邊の藁を拾ひ集め、我は戀故身を焦がす汝は此の火に燒けて死ねよマッチを摺りて今や焚き付けんとする折柄他に見咎められ遂に目的は果さず、益す憤怒の情に身を蹶きながら警察に引かれ行きけり。

行燈部屋修業　博多蓮池町九番地山口種嗣(二一)と云ふ小僧は法華寺、法性寺の小僧にして而も困つた小僧なり、身は苟くも佛の弟子小僧にありながら經を讀むことよりも怪しき女の文を讀むことを好み、お題目を唱ふるよりも都々逸を呻る方慥かに上達し、末恐ろしき小僧よと檀家の者も笑止がり、師の耳に入れまいと窃に意見を加ふるものもありたれど何の効もなく、馬の耳に念佛無間禪天魔、眞言亡國律國賊、吾佛貴しと頗なで廻して此の頃題目繡衣圓頂の身ながら頻りに容子を作りて遊女町をそゞろ歩き俄に宗旨を女宗に代へ、去る二十二日夜女宗本山柳町に浮かれ込み花屋本店に上りて娼妓玉事木村ハツと云へるを相手として藝妓をも呼んで一座陽氣の底拔け騷ぎに愉快を盡くして部屋に入りしがやがて勘定をと仲居が持ち來るを明朝に延ばし、仲居は夜明けて再び支拂ひの請求をなせし所小僧本來の無一物、空々寂々に打ちも過ごされず仲居はサア頂きませう拂ふて吳れよ如何に〳〵の問答頻りなれども彼の蒟蒻屋の禪に倣ふて眼の下を指ざし無造作に追ひ拂はん由もなく、其の日は尙も娼妓を上げて流連し手紙

鴻章に勅令あらせられたりとの說あり

「新條約に對する露國提出條件の爲め列國をして均霑的の申出を爲さしめざる方針に據り妥協するところあれ」

而して此の御前會議には西太后も垂聽あらせられしとぞ

▲露國は其の目的を達せんため非常に努力し、談判開始と共に山海關の駐屯部隊を半減せしのみならず、天津開放に盡瘁し且つ將來淸國主權の確立のため大いに力を効すべきことをも申し出で、以て痛く淸國君臣の感情を溫めしかば、淸國君臣亦た露國の意志を諒し、只列國の均霑的提議の餘地無からしむる底に妥協するの方針なれば新條約の成立無論見込あり、否既に双方內意一致しをりて列國の挿言を避くるの手段をのみ講じつゝあるが如し(以下略)

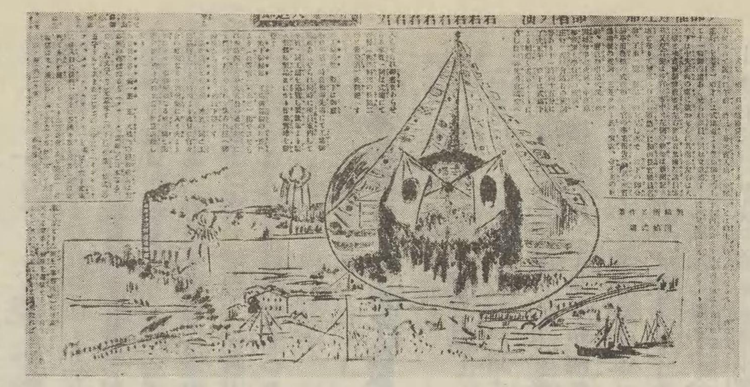
この秘密條約は成立に至らず、このために西太后は死を決したと傳へられ李鴻章は密約廢棄の訓電に接してその夜喀血遂に逝去した。

本紙は十月廿七日の社說に「露淸密約に就いて、再び滿洲問題を論ず」といふ題で「一露國は明らかに滿洲占領の名を避けて其の實を收むるものと謂

この頃の社勢は、改題によるその名の示す如く九州各地に擴大され、明治三十三年七月、佐世保に設けられた肥前支社は佐賀、長崎兩縣下を管轄し、專屬通信員を兩縣下各地、壹岐、對馬まで配置して通信網を完備し、翌八月一日には熊本市鹽原町裏一番町に肥後支社を開設するに至つたので、小倉の豐前支社、久留米の筑後支社と合せて四つの支社を有し、記事內容豐富を極めた。同時に編輯方針技術なども非常な飛躍を示し、威容を誇るに至つた。此の頃の試みの一として、記事と記事との區劃代りに傍罫で圍んだ俳句、和歌、格言の類を挾んでゐるのも面白い

左は「三面記事」と云はれた當時(明治三十四年)の社會面記事二、三の拔萃である。

戀故に放火　深く契りし男の心變りを恨みて身は棄鉢の粉微塵に破れて儚き土となり浮名を讐はるゝも戀、又は女の薄情を憤りては腥き血を流し又放火して鐵窓に繫がれ盛相飯に昔を偲ぶも戀なれや、戀よ戀よといふ字は來いよの來るも夜〳〵忍び會ふ果敢なき中に樂しみあり、此の樂しみ偏に、永かれと七重八重に腰を折り八百萬の神々に願ひ上けるは山門郡宮



寫眞は伏見宮殿下御臺覽を仰ぎたる八幡製鐵所開始式の圖

蒲船津士族堤寅次郎といふ男なり、肩書の堅きと其の名の恐ろしきには似ず此の女故ならば己が苗字の堤に窄りて死ぬるとも更に恨みはなしと現なく惚れ込まれ居る相手は同村阿志賀駒次郎が長女イネといふ者なり、遠き隔ての取除けられて嬉しい交情になりてより恐ろしい事も何とも思はず垣の外から蒟蒻投けて相圖して忍ぶ戀路に憂身をやつし居たりしが先方は差程にも思はぬか此の頃に至りて女の素振がらりと變り、とかく男を袖にする擧動さへ見ゆるに寅次郎は口惜がり、或夜の逢瀨を幸ひに女に向ひ幵もやお前と我の其の仲は他から水さす人あるとも裂かるゝ樣な浮いたる戀ではなけれど何時まで恁うして嬶曳せんより公然養子となりて緣組みなば人の知らぬ苦勞もせで可かるべし、最もお前故ならば如何なる苦勞も厭はぬ我心底なれど一層夫婦になりて共に白髮の生ゆる迄末の松山穩かに波も立たせず睦まじく暮らさんは又一入の樂しみなるべしと云ひけれども女は仔細ありて手を切らんとし殊にイネ方には幼少なる相續人もあることにて寅次郎を養子などゝは思ひ寄らずと刎ねつけ、其の後は一層よそ〳〵しくもてなし愛憎盡かしの數々を言へば、遑の寅次郎も此の戀の續かん事覺束なきを悟り、向ふが麼那心なら此方にも致しようありと燒腹の破れかぶれ放火して積もる思ひを晴らさんものと愚かしくも心を決め、

行燈部屋修業　博多蓮池町九番地山口種嗣(二一)と云ふ小僧は法華寺、法性寺の小僧にして而も困つた小僧なり、身は苟くも佛の弟子小僧にありながら經を讀むことよりも怪しき女の文を讀むことを好み、お題目を唱ふるよりも都々逸を呻る方慥かに上達し、末恐ろしき小僧よと檀家の者も笑止がり、師の耳に入れまいと窃に意見を加ふるものもありたれど何の効もなく、馬の耳に念佛無間禪天魔、眞言亡國律國賊、吾佛貴しと頗なで廻して此の頃題目縞衣圓頂の身ながら頻りに容子を作りて遊女町をそゞろ歩き俄に宗旨を女宗に代へ、去る二十二日夜女宗本山柳町に浮かれ込み花屋本店に上りて娼妓玉事木村ハツと云へるを相手として藝妓をも呼んで一座陽氣の底拔け騷ぎに愉快を盡くして部屋に入りしがやがて勘定をと仲居が持ち來るを明朝に延ばし、仲居は夜明けて再び支拂ひの請求をなせし所小僧本來の無一物、空々寂々に打ちも過ごされず仲居はサア頂きませう拂ふて吳れよ如何に〳〵の問答頻りなれども彼の蒟蒻屋の禪に倣ふて眼の下を指ざし無造作に追ひ拂はん由もなく、其の日は尙も娼妓を上げて流連し手紙を持たせて諸所方々の知邊々々に金借にやつたれども誰一人金を送りて吳るものなきに小憎殆んどあぐみ果てゝ仕方なく行燈部屋の中に修業の身となり、座禪を組つゝ筒井筒井筒の中の橘はお祖師樣の御紋だが行燈部屋の中の俺は何かしら、法華宗より女宗へ、女宗より禪宗へ宗旨がへ面壁九年の行も面白いが每夜〳〵の浮かれ客、躍るもあれば跳るもあり鉢卷さしたり轉がしたり棚の達磨も我慢の出來ない相恰、況や行燈部屋の中の己れは辛氣くさゝを什麼せんか。

一六、大學生廣田弘毅の滿鮮踏査開港意見

明治三十六年九月廿三日の本紙は「日露風雲搖くところ滿韓接壤の一帶は兩國折衝の燒點となれり而も迂なる哉日本の新聞紙未だ詳に其の實情を傳ふる者なし、廣田弘毅氏は大學生なり、今年の避暑休暇を以て洽く滿韓の境上を跋踄し數日前歸り來る、其の著す所の滿韓旅行記は卽ち其の見聞する所を手記する所也。附記す廣田氏は福岡市鍛冶町の人、大學法科二年生」といふ前書きつきで、後の總理大臣廣田弘毅の「滿韓踏査沙河子龍巖浦開港意見」を掲げ、引續き六日間連載してゐる。左は原文のまゝ一部を拔抄したものである。

滿韓踏査、沙河子龍巖浦開港意見

法科大學生　廣田弘毅

（一）旅行の目的

百日に餘る避暑休暇を、爲す事もなく徒らに午睡して夢の中に過ごすことは苟くも志ある青年が其の修養時代に於て到底爲すに忍びざる所なり、此の好機を利用して足一歩海外に出で、見ず識らざるの境に遊んで別趣の山水を觀、異樣の風俗を察せんか、其の見聞を廣め其の識見を高むる上に於て利益する所何ぞ限らん、況や天涯萬里の山河を跋跨するは吾人青年の最も快事とする所なるをや、余は夙に此の希望を懷抱して未だ之を遂ぐるに到らざりしに本年の夏期休暇は幸いに余に與ふるに其の好機會を以てす卽ち余は躍然として清韓兩國に跨るの旅行を企てぬ、而して今回の旅行たる、當世旅行の所謂觀光的漫遊とは些か其の趣きを異にする所なり、政治經濟乃至社會上各種の方面より清韓兩國を研究するは今日我が國の最も急務とする所、殊に南滿洲、北朝鮮就中其の境上に在る鴨綠江の沿岸は刻下極東外交問題の燒點となれり、此の附近に於ける露國の活動を見擊するは實に余が目的の主要なるものなりき。之を具體的に謂はゞ滿洲の開放と龍巖浦の租借とは實に世界的の大問題なり、就中龍巖浦の問題は是れ決して一韓國の問題に非ずして實に我が帝國の死活問題と云ふも過言にあらざるべし（―と、七月十四日、ロンドンタイムスの記事を引用し）余は此の論を以て能く時局の眞相を觀破するものとなす、今や我が日本の政府及び人民は此の龍巖浦問題を視ること斯くの如くに重大にして且つ緊急なりとする、若し夫れ不幸にして然らず政府も人民も悠々閑々として只問題の成行を傍觀し、優柔不斷の裡に日を曠ふせんか我が帝國の勢力は忽焉として朝鮮の野より消失し、惹いて自國の存立を危殆ならしむるに至ること誠に火を睹るより瞭然たり、豈千載の恨事に非ずや、今や我が政府は露國の巧妙なる侵略に對して果して如何なる籌策がある、內閣の諸侯はモト國家の重任を擔ふもの必ずや國家の爲めに謀るに於て遺算なかるべし、而して余も亦國を憂ふるの士、近頃自ら鴨綠江沿岸を跋跨して些か調査する所あり、茲に私見を披露して廣く江湖の識者に問はんと欲す

（と詳細に亘つて旅行各地の地理人情等を記して記行文を掲げ露國の野心を指摘し、沙河子、龍巖浦の開港意見を述べ日本の對策の急務を力說して五回に亘る）

―以上は單に其の地利より立論して龍巖浦の開港すべきを說きたるものなるが、萬一此の地點を以て露國の一手に歸せしむるが如きことあらば、是れ實に由々敷き大事と云はざるを得ず彼の露國にして若し其の租借の目的を達し、此の地に於て第二のダーリニー、第二の旅順口を建設するが如きことあらば、啻に經濟上に於て北韓の商業を獨占せらるゝのみならず、政治上に於て北韓の地は全く其の勢力範圍に歸せんのみ、世上若し余の想像を以て餘りに過ぎたりとなすものあらば彼等は非常の誤謬に陷るものなり、彼の露國の無謀なる決して吾人が想像し得る位の暴計をなして滿足するものにはあらざるなり、是れ余が一方に於て地理上より觀察して龍巖浦の開港を主張し、他の一方に於ては露國の侵略を防禦するの策として其の地を開放して露國の一手より奪ひ去らんことを建設する所以なり。

（六）附　言

以上述ぶる所を簡言すれば、滿洲沿岸に於て開港場を求め先づ沙河子を擇べ、朝鮮沿岸に於て開港場を求め先づ龍巖浦を擇べ

と云ふにあり、滿洲問題は暫らく措き、朝鮮問題に關して余が提議を實行するは我政府の當局者に於て決して容易のことにあらざるべきは余の深く信ずる所なり、而して若し此の提議にして果して實行せらるゝを得ば少くとも朝鮮問題に關しては日露兩國の葛藤いと平和的に議決せられ、而も日本は少しも失ふ所なくして却て大利する所あるべし、而して其の完全に此の目的を貫徹するは一に外交當局者の技倆如何にあり、冀くば國家の爲め鞠躬盡瘁する所あれ。

茲に論者あり、余の提議する所を以て餘りに溫和にして緩漫なる手段なりとし、是非共露國の頭上に一大打擊を加へざるべからず、若し露國をさへ壓倒することを得ば滿洲、朝鮮否極東問題の解決は一に我が掌中に歸せんのみ、是れ卽ち目下我國の採るべき唯一の政策なりと論ずるものあらば余は復何をか云はん、露國の頭上に一大打擊を加ふるは實に刻下の最大急務にして啻に我民族發展の爲めと云はず實に韓人の爲め實に淸人の爲め又亨（天寶）等の首腦部が交々編輯局の統制に任ずることゝなつた。第五代主筆を襲つたのは高橋亨であつた。

六月二十四日紙上に發表した懸賞金一千圓也の福岡縣下の「藝妓人氣投票」は果然人氣を呼んだ。一進一退の投票數を掲げて全縣下を熱狂せしめつゝ七月二十五日締切つたが、投票總數七十七萬二百五十七票、被投票藝妓四百七十七人に上り、久留米紺劵の桃太郎が八萬七千七百三十票といふ大量人氣を獲得して第一位を占め、さすが博多の連中を啞つと云はせた。

藝妓投票に人氣を博して本社は更に續いて八月四日に素人義太夫の投票募集を發表したが、これも熱狂的人氣で迎へられ、福岡縣京都郡行橋町の古賀司が六萬二千二百七十二票で最高を占め、十一月三十日及び十二月十一日の兩日間福岡市東中洲の明治座で高點者三十三名及び番外飛入の義太夫大會を催し大盛況であつた。

出演の高點者三十三名は左の人々であつた。

古賀司、能美淸司、加納芳太郎、竹尾時榮、秋吉角武、服部北溟、吉田富士登、中村霞松、小松久吉、三安可笑、井手呂調、井上蝶樂、大庭喜笑、鮎川鶴吉、三崎美咲、籾井八十志、末原權亮、吉武勇枝、花田落馬、佐島寅藏、高野司樂、光安筑紫、長壽館貴松、高取玉贅、和田初太郎、柴戸米笑、白水藤吉、大久保光勇、高木煙草軒、野口南島、恒富金太郎、安永卿

抜に引續き六日間連載してゐる。左は原文のまゝ一部を抜抄したものである。

滿韓踏査、沙河子龍巖浦開港意見

法科大學生　廣田弘毅

（一）旅行の目的

百日に餘る避暑休暇を、爲す事もなく徒らに午睡して夢の中に過ごすことは苟くも志ある青年が其の修養時代に於て到底爲すに忍びざる所なり、此の好機を利用して足一歩海外に出で、見ず識らざるの境に遊んで別趣の山水を觀、異樣の風俗を察せんか、其の見聞を廣め其の識見を高むる上に於て利益する所何ぞ限らん、況や天涯萬里の山河を跋跨するは吾人青年の最も快事とする所なるをや、余は夙に此の希望を懷抱して未だ之を遂ぐるに到らざりしに本年の夏期休暇は幸いに余に與ふるに其の好機會を以てす卽ち余は躍然として淸韓兩國に跨るの旅行を企てぬ、而して今回の旅行たる、當世旅行の所謂觀光的漫遊とは些か其の趣きを異にする所なり、政治經濟乃至社會上各種の方面より淸韓兩國を研究するは今日我が國の最も急務とする所、殊に南滿洲、北朝鮮就中其の境上に在る鴨綠江の沿岸は刻下

を睹るより瞭然たり、豈千載の恨事に非ずや、今や我が政府は露國の巧妙なる侵略に對して果して如何なる籌策がある、內閣の諸侯はモト國家の重任を擔ふもの必ずや國家の爲めに謀るに於て遺算なかるべし、而して余も亦國を憂ふるの士、近頃自ら鴨綠江沿岸を跋跨して些か調査する所あり、茲に私見を披露して廣く江湖の識者に問はんと欲す

（と詳細に亘つて旅行各地の地理人情等を記して記行文を掲げ露國の野心を指摘し、沙河子、龍巖浦の開港意見を述べ日本の對策の急務を力說して五回に亘る）

―以上は單に其の地利より立論して龍巖浦の開港すべきを說きたるものなるが、萬一此の地點を以て露國の一手に歸せしむるが如きことあらば、是れ實に由々敷き大事と云はざるを得ず彼の露國にして若し其の租借の目的を達し、此の地に於て第二のダーリニー、第二の旅順口を建設するが如きことあらば、啻に經濟上に於て北韓の商業を獨占せらるゝのみならず、政治上に於て北韓の地は全く其の勢力範圍に歸せんのみ、世上若し余の想像を以て餘りに過ぎたりとなすものあらば彼等は非常の誤謬に陷るものなり、彼の露國の無謀なる決して吾人が想像し得る位の暴計をなして滿足するものにはあらざるなり、是れ余が一方に於て地理上より觀察して龍巖浦の開港を主張し、他の一方に於ては露國の侵略を防禦するの策として其の地を開放して露國の一手より奪ひ去らんことを建設する所以なり。

（六）附　言

以上述ぶる所を簡言すれば、滿洲沿岸に於て開港場を求め先づ沙河子を擇べ、朝鮮沿岸に於て開港場を求め先づ龍巖浦を擇べ

と云ふにあり、滿洲問題は暫らく措き、朝鮮問題に關して余が提議を實行するは我政府の當局者に於て決して容易のことにあらざるべきは余の深く信ずる所なり、而して若し此の提議にして果して實行せらるゝを得ば少くとも朝鮮問題に關しては日露兩國の葛藤いと平和的に議決せられ、而も日本は少しも失ふ所なくして却て大利する所あるべし、而して其の完全に此の目的を貫徹するは一に外交當局者の技倆如何にあり、冀くば國家の爲め鞠躬盡瘁する所あれ。

茲に論者あり、余の提議する所を以て餘りに溫和にして緩漫なる手段なりとし、是非共露國の頭上に一大打擊を加へざるべからず、若し露國をさへ壓倒することを得ば滿洲、朝鮮否極東問題の解決は一に我が掌中に歸せんのみ、是れ卽ち目下我國の採るべき唯一の政策なりと論ずるものあらば余は復何をか云はん、露國の頭上に一大打擊を加ふるは實に刻下の最大急務にして啻に我民族發展の爲めと云はず實に韓人の爲め實に淸人の爲め又實に東洋人の爲めなり、一日も早く露國を壓倒して東洋瀕死國の復活を計り以て其の向背を決せしむるは我大帝國の天職に非ずや（完）

一七、主筆の更迭と紙面改良充實

明治三十六年二月七日、主筆白川次郎（鯉洋）は南京政府の教育顧問兼南京師範總教に招聘されて退社し、藏內正太郎（無狄）、高本尙古（雪浪）及び高橋亨（天寶）等の首腦部が交々編輯局の統制に任ずることゝなつた。第五代主筆を襲つたのは高橋亨であつた。

六月二十四日紙上に發表した懸賞金一千圓也の福岡縣下の「藝妓人氣投票」は果然人氣を呼んだ。一進一退の投票數を揭げて全縣下を熱狂せしめつゝ七月二十五日締切つたが、投票總數七十七萬二百五十七票、被投票藝妓四百七十七人に上り、久留米紺券の桃太郎が八萬七千七百三十票といふ大量人氣を獲得して第一位を占め、さすが博多の連中を唖つと云はせた。

藝妓投票に人氣を博して本社は更に續いて八月四日に素人義太夫の投票募集を發表したが、これも熱狂的人氣で迎へられ、福岡縣京都郡行橋町の古賀司が六萬二千二百七十二票で最高を占め、十一月三十日及び十二月十一日の兩日間福岡市東中洲の明治座で高點者三十三名及び番外飛入の義太夫大會を催し大盛況であつた。

出演の高點者三十三名は左の人々であつた。

古賀司、能美淸司、加納芳太郎、竹尾時榮、秋吉角武、服部北溟、吉田富士登、中村霞松、小松久吉、三安可笑、井手呂調、井上蝶樂、大庭喜笑、鮎川鶴吉、三崎美唉、籾井八十志、末原權亮、吉武勇枝、花田落馬、佐島寅藏、高野司樂、光安筑紫、長壽館貴松、高取玉贊、和田初太郎、柴戶米笑、白水藤吉、大久保光勇、高木煙草軒、野口南島、恒富金太郎、安永柳美、勝野友吉

藝妓及び素人義太夫人氣投票の廣告文を轉載して參考とすれば―

福岡縣下藝妓人氣投票募集豫告

今來の藝妓なるもの、古往の白拍子に及くべうもなし、然れども藝妓決して一樣ならず、一向藝道を研鑽して、酒席の興を助けんと希ふもあり、頻りに枕席に媚て黃白を得んと欲するもあり、玉石混淆も亦甚だしからずや

寫眞は當時の題字

我が三面子は無事の今日を利用し、敢て花柳巷の篩維と成つて之れが人氣投票を募集せんことを謀り、來る明五日公然發表する所あらんとす

其の投票方法の如きは更に詳記すべしと雖も募集區域は全縣下の各遊廓に亘り、無慮六百有餘の藝妓中、受賞者を增加して一百十名と定め、既に準備する所の懸賞費金は實に一千圓の多額に上れり、願はくば江湖の粹士通客、大いに奮つて投票あれと豫告すること爾り。

素人義太夫人氣投票懸賞募集の廣告

鯨寄る島根、虎伏す野邊の何れはあれど、古來一年宇治の螢狩りと、そりや聞こえませぬ傳兵衛さんを知らぬものは無い。それが文運の開くるに從つて益す盛んに、漸次紳士紳商の間にも弄ばるゝ事に成つたので更に數歩を進め、今や詩人は近松を以て能く人を研究せりと譽め通客は攝津大椽を以て能く文を活動せしむと稱すると共に、乃ち三ツ違ひと声の浦々を知らぬものは話せぬ男として擯ぞけらるゝ迄にも成つたのである。

是に於てか素人にして義太夫を學ぶ者年一年より多く、到る所見臺に對つて張扇を叩かぬは無い事に成つて來た。我が三面子は大いに此に見る所あり、今回左の方法によつて福岡縣下に於ける素人義太夫の名人を懸賞を以て募集する事と成つたのである。（以下略）

明治三十七年の劈頭、斷行された紙面の改良充實は劃期的なものであつた

一、家庭欄の新設
二、地方美顯彰（先づ地方名物及び地方舊家の紹介）
三、教育欄を新設し、これを小學教員に開放して實驗的教育論及體驗感想を揭載する
四、英、獨、米等の新聞雜誌中より興味ある記事を拔萃飜譯して揭載する
五、少年少女の日記を募集揭載する

等であつたが、家庭欄を始め少年少女欄、教育欄等を新設したことは地方新聞界に斷然先鞭をつけたもので、讀者の絶讃を博したものであつた。翌年の元旦號には「抽籤文藝十二ケ月」と題する讀物を揭載したが、これは編輯局同人抽籤して各月を割當られ、その月に因んだ文藝物を書いたもので歡迎を受けた記事であつた。

當時の編輯局員は主筆高橋天寶を始め、高本雪浪、藤昌樹、渡邊篤三郎、池松節、今村外園、伊形常太郎、古屋一二、大川徹、掉水庵歌丸、岡田武雄、笠睡虎、岡田八重子等であつた。

この年（明治三十八年）二月一日には從來の六段組、一行二十二字詰を改めて七段組一行十九字詰とした。

一八、日露戰役と本紙

明治三十七、八年、日露戰役に於ける我が社の活動は大陸政策に傳統を有する本來の使命を發揮して遺憾なかつたこと過ぐる日淸戰役、北淸事變の際と同樣であつた。

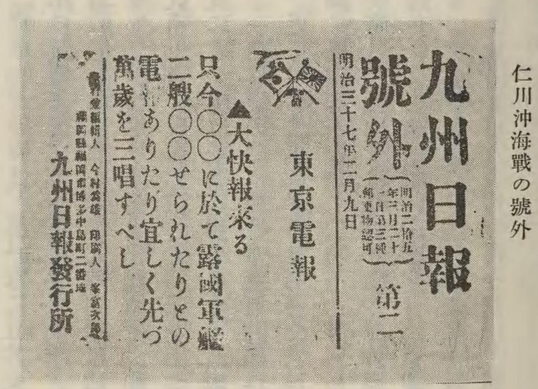
創立者であり第一代の社長であつた頭山滿及び社主平岡浩太郎等を中心とする先輩社友は對露同志會を組織して對露宣戰を主張し、軟弱外交の桂首相を激勵鞭撻して暴露膺懲を叫び、我が社はこれと呼應して「ロシヤ擊つべし！」の國民的輿論の先頭に立つた。

北淸事變後、日露の風雲は急角度をとつて開戰の一點へ集中されて行つたが、決定的に本紙が日露開戰を叫んだのは、明治三十三年九月四日の「日露開戰論」であつた。續いて十月二十三日には「滿洲問題の談判」同月廿七日には「滿洲問題」等を揭げ、當時シベリヤに在つた後の本社主筆篠崎昇之助も「西比利亞と日本の生產物」を寄稿し、以來、日露開戰必至の記事を連續せしめたが、三十六年に入るに及んでその記事論說は猛烈を極めて紙面に躍つた。

その一つ、五月九日の論說「開戰論」の一部を揭げて一班を知るの資としやう

當時揭載されたる東鄕司令長官

「――露西亞が滿洲を奪ふて日本の運命に影響あらずと云はゞ朝鮮を奪ふ



仁川沖海戰の號外

露ワリヤーク號火を發するの圖としてし當時揭載されしもの

抑も戰爭は凶事也、好むものに非ざる也、然れども又平和の擔保也、時に好むべき事あり、社會の爲に人道の爲に戰ふ如き卽ち然る也、如今露西亞は平和の公敵に非

募集區域は圣縣下の各遊廓に亘り、無慮六百有餘の藝妓中、受賞者を增加して一百十名と定め、既に準備する所の懸賞費金は實に一千圓の多額に上れり、願はくば江湖の粹士通客、大いに奮つて投票あれと豫告すること爾り。

素人義太夫人氣投票懸賞募集の廣告

鯨寄る島根、虎伏す野邊の何れはあれど、古來一年宇治の螢狩りと、そりや聞こえませぬ傳兵衛さんを知らぬものは無い。それが文運の開くるに從つて益す盛んに、漸次紳士紳商の間にも弄ばるゝ事に成つたので更に數歩を進め、今や詩人は近松を以て能く人を研究せりと譽め通客は攝津大椽を以て能く文を活動せしむと稱すると共に、乃ち三ツ違ひと芦の浦々を知らぬものは話せぬ男として擯ぞけらるゝ迄にも成つたのである。

是に於てか素人にして義太夫を學ぶ者年一年より多く、到る所見臺に對つて張扇を叩かぬは無い事に成つて來た。我が三面子は大いに此に見る所の如きは更に詳記すべしと雖も

其の投票方法

等であつたが、家庭欄を始め少年少女欄、教育欄等を新設したことは地方新聞界に斷然先鞭をつけたもので、讀者の絶讃を博したものであつた。翌年の元旦號には「抽籤文藝十二ケ月」と題する讀物を揭載したが、これは編輯局同人抽籤して各月を割當られ、その月に因んだ文藝物を書いたもので歡迎を受けた記事であつた。

當時の編輯局員は主筆高橋天寶を始め、高本雪浪、藤昌樹、渡邊篤三郎、池松節、今村外園、伊形常太郎、古屋一二、大川徹、掉水庵歌丸、岡田武雄、笠睡虎、岡田八重子等であつた。

この年(明治三十八年)二月一日には從來の六段組、一行二十二字詰を改めて七段組一行十九字詰とした。

一八、日露戰役と本紙

明治三十七、八年、日露戰役に於ける我が社の活動は大陸政策に傳統を有する本來の使命を發揮して遺憾なかつたこと過ぐる日淸戰役、北淸事變の際と同樣であつた。

創立者であり第一代の社長であつた頭山滿及び社主平岡浩太郎等を中心とする先輩社友は對露同志會を組織して對露宣戰を主張し、軟弱外交の桂首相を激勵鞭撻して暴露膺懲を叫び、我が社はこれと呼應して「ロシヤ擊つべし!」の國民的輿論の先頭に立つた。

北淸事變後、日露の風雲は急角度をとつて開戰の一點へ集中されて行つたが、決定的に本紙が日露開戰を叫んだのは、明治三十三年九月四日の「日露開戰論」であつた。續いて十月二十三日には「滿洲問題の談判」同月廿七日には「滿洲問題」等を揭げ、當時シベリヤに在つた後の本社主筆篠崎昇之助も「西比利亞と日本の生産物」を寄稿し、以來、日露開戰必至の記事を連續せしめたが、三十六年に入るに及んでその記事論說は猛烈を極めて紙面に躍つた。

當時揭載されたる東鄕司令長官

その一つ、五月九日の論說「開戰論」の一部を揭げて一班を知るの資としやう

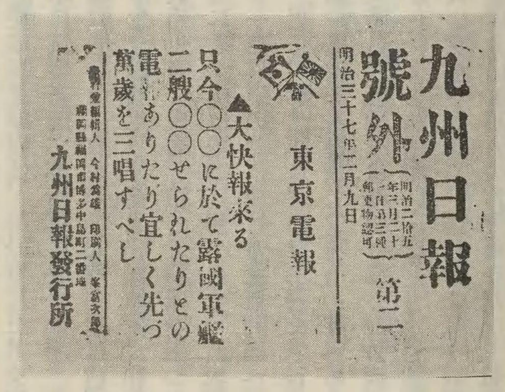
「——露西亞が滿洲を奪ふて日本の運命に影響あらずと云はゞ朝鮮を奪ふも福州を奪ふも將臺灣を奪ふも亦影響非ずと云はざる能はず、露國が朝鮮を占領し福州を奪ひ臺灣を割いて、爲に日本の運命危ふしとせば、滿洲と雖も亦然る也。(中略)——其れ露西亞は嘗て和蘭の海牙に於て世界平和の爲に軍備の撤去を主唱し、又嘗て東洋の平和を口實に我國に迫るに遼東半島の還附を以てしたるの國也。而して翌日には旅順大連灣を占領し、今は又滿洲を奪はむと圖らんとす、羊頭を揭げて狗肉を賣ると云はむか、隴を得て蜀を望むと云はむか、傍若無人も極まれりと云ふ可し。

抑も戰爭は凶事也、好むものに非ざる也、然れども又平和の擔保也、時に好むべき事あり、社會の爲に人道の爲に戰ふ如き卽ち然る也、如今露西亞は平和の公敵に非ずや、人道の賊に非ずや、然らば卽ち今露西亞と互ひに干戈の間に相見るは社會の爲に非ずや、豈好むべき戰爭に非ずや。

露西亞は由來日本と相容れざるの國、而して獨り相容るの道は戰爭あるのみ、戰ふて大いに屈するにあるのみ、大いに屈して大いに從はしむるにあるのみ、大いに敗れて大いに屈し、大いに屈して大いに從ひ、唯々諾々我命之れ從はざる共に伴ふ、又危險ならざるにあらずや。

現下ロシアが滿洲の野に於て橫暴を逞しふするは、天の我に與ふるに此

仁川沖海戰の號外



露ワリヤーク號火を發するの圖として當時揭載されしもの

の名譽と此の利益を以てするものにあらざらむか、要は唯戰鬪力の如何に止まると雖も今日に於ては我甚だ勝るは識者の共に認むる所、且つ英國に米國に、我に同情を表する邦國一にして足らず、卽ち一朝彼と互ひに干戈の間に相見える。豈其の戰鬪力の少きを憂へむや非戰論者は更に曰ふ、財源之を何處に求めむとするかと、亦之れ深く憂ふるを要せず、少しく不利益を忍ばる外債に由りて徵するも十億乃至十五億の軍事費は優に集まるを得べし、而して子孫と共に分擔す、必ずしも其の重きを苦しまざる也。

獨り怪しむ臺閣諸公、今容徒らに左顧右眄するのみ、之れ戰はざる如くして戰はむとする戰略なるか、然らば國內の一致は如何?、其れ桂內閣は軍人內閣、其の文治擧がらざるは國民夙に之を想ひき、今武事に臨むで斯の如きを見ては呆然たらざるを得ず（社友竹雨）

次いで七月十七日には「開戰と國論」と題して非常時を目睫に隋眠を貪る政黨に對して痛烈な批判を與へ國民の覺醒を絕叫した。此の前後の本紙はさながら全紙面熱火のごとく、橫暴ロシヤに對する國民的憤激を吐露し「武力干涉」（八月廿九日より三日間）「往年の普佛と現時の日露」（九月四日）「日露の形勢」（九月九日）「對韓政策の本義」（九月十日）等々の論稿を連日に亘つて揭載し、露軍の南下、邦人の引揚げ等逼迫せる狀況を報道したが、遂に十月十五日には「帝國最後の決意」と題して元老會議の模樣を報道してゐる。

明治廿七年二月九日、本紙配達員は向ふ鉢卷に日の丸の小旗を揷し、鈴の音勇ましく號外を配布し市民を昂奮と歡喜の熱狂へ投け込んだ。此號外こそは、宣戰布告に先だちて、わが東鄕艦隊が仁川沖に於て露艦コーレツ、ワリヤーク二艦を始め旅順港口に於ても數隻の敵艦を捕獲擊沈した飛報であつた國旗を交叉した號外には「大快報來る」の見出しで

只今〇〇に於て露國軍艦二艘〇〇せられたりとの電報ありたり宜しく先づ萬歲を三唱すべし

とあり、續く號外には「露艦三隻轟沈、總攻擊開始」の見出しで

芝罘發電によれば八日午前十一時〇〇艦隊旅順港口に於て露國軍艦を攻擊し露國戰鬪艦二隻、裝甲巡洋艦一隻〇〇水雷の爲め轟沈せられ露艦は總て港外にあり入港すること能はず、〇〇艦隊は九日午前九時を以て總攻擊を開始せり、

〇〇艦隊萬歲、國民は祝旗を擧げよ

と記載されてゐる、この海戰の狀況は九日に三回、十日に五回の號外を發行して速報し、尙海戰の圖や擊沈捕獲された露國軍艦の圖を揭げて說明したが十日、愈よ宣戰の詔勅が布告されたので、十四日には日露戰役の火蓋を切つた朝鮮へ記者本田友太を急派し、同日から戰況通信の萬全を期するため本紙（朝刊）を全部夕刊發行に變更し、機に應じて號外を發行することになつた。

通信は內外電報を倍加し、東京、關門、若倉及び佐世保、長崎の各要地には夫々特派員を派遣し戰況の進むに從つて特派記者を續々現地に急派した。

從軍特派陣容は、第一軍に三井文彌、第二軍に高本雪浪、三浦北峽、第三軍に筑紫三郎、第四軍に谷口松溪、藤昌樹等の顏觸れであつたが、この外全滿韓淸各地に散在して大陸問題に活躍中の社友等は、玄洋太郎、秋雨生、萬里生、鐵門生、黑龍生、鶴城生、和田生、芳野生、秋津生、白眼生、龍山生筑州生等の硯名で續々と特報を送つた。これ等社友等の特報は、普通の特派員によつては絕對に得られない、表裏側面の記事が多く、我が社のみが有する一朝異變の際に於ける東亞問題への誇示であつた。

更に、第二軍に從事せしめた三浦北峽及び結城素明の兩畫家は戰況及び露滿の風俗等を畫報し、特有の陣容による通信記事と相俟つて異彩を放つた。同時に、社內では今村外園が早速腕を揮つて戰爭小說「戰塵」を執筆揭載する外ロシヤと關係深い「快男子高田屋嘉兵衛」の連續小說を揭げ或ひは又出征軍人の家名を顯彰し、國民の士氣を鼓舞作興する意味から、開戰から戰役終了迄連日出征軍人の肖像畫を揭げ、戰死者の葬儀廣告料を半額にする等の奉仕をした。

當時の紙面は左の如き奇瑞の記事を揷畫入りで揭載してゐる。

神鳩、軍に從ふ

日淸役黃海の海戰に靈鷹の瑞あり、又筥崎八幡宮社頭の鳩の何れにか去つて戰爭の終局まで其の影を見せざりしは雜報子等の親しく知る所にして神鳩戰地に向へりとは當時隱れもなき噂なりしが、一昨夜又其の事あり、常に伏敵門頭に遊べる鳩の數は無慮七百羽に及ぶよしなるが一昨日は奇異にも變る〳〵御手洗に下りて翼を洗ふもの終日絕えず、尤も平日にも五羽八羽の鳩の翼を洗ふ事は珍らしからねど同日は三十羽五十羽が變る〳〵往復して居るので些さか不思議に思ひ居たりと云ふ、然るところ夜も七時と思しきころ何とは知らず非常の物音殆んど樓門も崩るゝばかりなるに社務所の一同は膽を潰し何事ならんと外に出れば無慮五、六百の鳩は一齊に起つて虛空遙かに飛び揚かり西北の方を指して去りたる儘歸り來らず、昨日は後備軍の補充兵とも見るべき鳩の五、六十羽殘れるのみ、是れ神勅を奉じて渡韓したるものならんとて同地の噂とり〴〵なり、何れにしても近頃芽出度き祥瑞ならずや。

以下は現地に活躍して本紙を飾つた本社特派員及び社友等の數多い戰地通信中の二、三である。

旅順の開城と當時の戰鬪

一月二日旅順口に於て　白眼生

すべき準備は今や全く成就したるを以て何れも意氣旺盛、眼下敵壘を睥睨して玆に芽出度く三十八年の元旦を迎へぬ。

瑞雲靄く大內山に敵壘占領の一大吉報を奉つて攻圍軍元旦の賀狀に代へんものと各自の勇ましき決心は眉宇の間に溢れしが前日松樹山砲臺を陷れし中央縱隊は勢ひに乘じて更に敵を一部驅逐し、本朝（一日）午前七時望臺の右肩とも稱すべきエツチ砲臺を占領し、續々磐龍山新砲臺を奪取し、忽ち三龍山より磐龍山を經てエツチ砲臺に亘る線は完全に我軍の占領に歸したるなり、是れ實に我軍の爲に最も有利の一大展開なるを得たり。

是に於て軍司令官は直に中央縱隊の一戶兵團と左縱隊の前田兵團とに命令し左右より望臺を挾擊占領することに爲したり、兩兵團の健兒は勇躍して互ひに先登を爭ひ獅子奮迅の勇を鼓して旅順第一の天嶮たる望臺に向つて攻め上れり、敵もさるもの暫しは踏み止まりて頂上より我軍を惱ませしが、我が軍の猛氣に如何でか敵すべき、午後三時四十分に至り全く敵を驅逐して之を占領するに至りたり。

眸を放てば舊市街は脚下呎尺の近きにありて呼べば直に應へんとするを以て忽ち大砲を望臺の頂上に曳き上げ、砲門を此の形勝の高地に据ゑ附け元旦の祝砲として實彈の大猛擊を開始し、半島も碎けて飛べよと許り發射したり。敵の損害の多大なる、震慄の甚だしき、以て想見すべし。

この時右翼隊の一部も亦午前八時より攻擊を開始し其の新來氣鋭の力を

軍人內閣、其の文治擧からざるは國民所に之を想ひき、今武事に臨むで期の如きを見ては呆然たらざるを得ず（社友竹雨）

次いで七月十七日には「開戰と國論」と題して非常時を目睫に隋眠を貪る政黨に對して痛烈な批判を與へ國民の覺醒を絕叫した。此の前後の本紙はさながら全紙面熱火のごとく、橫暴ロシヤに對する國民的憤激を吐露し「武力干涉」（八月廿九日より三日間）「往年の普佛と現時の日露」（九月四日）「日露の形勢」（九月九日）「對韓政策の本義」（九月十日）等々の論稿を連日に亘つて揭載し、露軍の南下、邦人の引揚げ等逼迫せる狀況を報道したが、遂に十月十五日には「帝國最後の決意」と題して元老會議の模樣を報道してゐる。

明治廿七年二月九日、本紙配達員は向ふ鉢卷に日の丸の小旗を挿し、鈴の音勇ましく號外を配布し市民を昂奮と歡喜の熱狂へ投げ込んだ。此號外こそは、宣戰布告に先だちて、わが東鄕艦隊が仁川沖に於て露艦コーレツ、ワリヤーク二艦を始め旅順港口に於ても數隻の敵艦を捕獲擊沈した飛報であつた國旗を交叉した號外には「大快報來る」の見出しで

只今〇〇に於て露國軍艦二艘〇〇せられたりとの電報ありたり宜しく先づ萬歲を三唱すべし

とあり、續く號外には「露艦三隻轟沈、總攻擊開始」の見出しで

（朝刊）を全部夕刊發行に變更し、機に應じて號外を發行することになつた。

通信は內外電報を倍加し、東京、關門、若倉及び佐世保、長崎の各要地には夫々特派員を派遣し戰況の進むに從つて特派記者を續々現地に急派した。

從軍特派陣容は、第一軍に三井文彌、第二軍に高本雪浪、三浦北峽、第三軍に筑紫三郎、第四軍に谷口松溪、藤昌樹等の顏觸れであつたが、この外全滿韓淸各地に散在して大陸問題に活躍中の社友等は、玄洋太郎、秋雨生、萬里生、鐵門生、黑龍生、鶴城生、和田生、芳野生、秋津生、白眼生、龍山生筑州生等の硯名で續々と特報を送つた。これ等社友等の特報は、普通の特派員によつては絕對に得られない、表裏側面の記事が多く、我が社のみが有する一朝異變の際に於ける東亞問題への誇示であつた。

更に、第二軍に從事せしめた三浦北峽及び結城素明の兩畫家は戰況及び露滿の風俗等を畫報し、特有の陣容による通信記事と相俟つて異彩を放つた。同時に、社內では今村外園が早速腕を揮つて戰爭小說「戰塵」を執筆揭載する外ロシヤと關係深い「快男子高田屋嘉兵衛」の連續小說を揭げ或ひは又出征軍人の家名を顯彰し、國民の士氣を鼓舞作興する意味から、開戰から戰役終了迄連日出征軍人の肖像畫を揭げ、戰死者の葬儀廣告料を半額にする等の奉仕をした。

當時の紙面は左の如き奇瑞の記事を挿畫入りで揭載してゐる。

神鳩、軍に從ふ

日淸役黃海の海戰に靈鷹の瑞あり、又筥崎八幡宮社頭の鳩の何れにか去つて戰爭の終局まで其の影を見せざりしは雜報子等の親しく知る所にして神鳩戰地に向へりとは當時隱れもなき噂なりしが、一昨夜又其の事あり、常に伏敵門頭に遊べる鳩の數は無慮七百羽に及ぶよしなるが一昨日は奇異にも變る〳〵御手洗に下りて翼を洗ふもの終日絕えず、尤も平日にも五羽八羽の鳩の翼を洗ふ事は珍らしからねど同日は三十羽五十羽が變る〳〵往復して居るので些さか不思議に思ひ居たりと云ふ、然るところ夜も七時と思しきころ何とは知らず非常の物音殆んど樓門も崩るゝばかりなるに社務所の一同は膽を潰し何事ならんと外に出れば無慮五、六百の鳩は一齊に起つて虛空遙かに飛び揚かり西北の方を指して去りたる儘歸り來らず、昨日は後備軍の補充兵とも見るべき鳩の五、六十羽殘れるのみ、是れ神勅を奉じて渡韓したるものならんとて同地の噂とり〴〵なり、何れにしても近頃芽出度き祥瑞ならずや。

以下は現地に活躍して本紙を飾つた本社特派員及び社友等の數多い戰地通信中の二、三である。

旅順の開城と當時の戰鬪

一月二日旅順口に於て　白眼生

我が攻圍軍の左縱隊は十二月十八日東鷄冠山北砲臺を占領し直に旅順の中堅を突破して露國極東の根據地を其の根底より顚覆せんと企てしも、中央右翼の攻擊進展を待ち一擧にして其の目的を達するも晩からずとて逸る氣を押し鎭め姑く時機を待ちをりしが、十日を經たる廿八日には中央縱隊は早くも旅順要塞の關門たる二龍山砲臺を奪取して致命の大傷を彼に加へ更に二日を距てし三十一日には又々松樹山砲臺を陷れ、中央方面に於ける敵砲臺の障害は是に於て全く除かれたるなり、斯くて敵要塞の中堅に突入すべき準備は今や全く成就したるを以て何れも意氣旺盛、眼下敵壘を睥睨して茲に芽出度く三十八年の元旦を迎へぬ。

瑞雲靉く大內山に敵壘占領の一大吉報を奉つて攻圍軍元旦の賀狀に代へんものと各自の勇ましき決心は眉宇の間に溢れしが前日松樹山砲臺を陷いれし中央縱隊は勢ひに乘じて更に敵を一部驅逐し、本朝（一日）午前七時望臺の右肩とも稱すべきヱツチ砲臺を占領し、續々磐龍山新砲臺を奪取し、忽ち三龍山より磐龍山を經てヱツチ砲臺に亘る線は完全に我軍の占領に歸したるなり、是れ實に我軍の爲に最も有利の一大展開なるを得たり。

是に於て軍司令官は直に中央縱隊の一戶兵團と左縱隊の前田兵團とに命令し左右より望臺を挾擊占領することに爲したり、兩兵團の健兒は勇躍して互ひに先登を爭ひ獅子奮迅の勇を鼓して旅順第一の天嶮たる望臺に向つて攻め上れり、敵もさるもの暫しは踏み止まりて頂上より我軍を惱ませしが、我が軍の猛氣に如何でか敵すべき、午後三時四十分に至り全く敵を驅逐して之を占領するに至りたり。

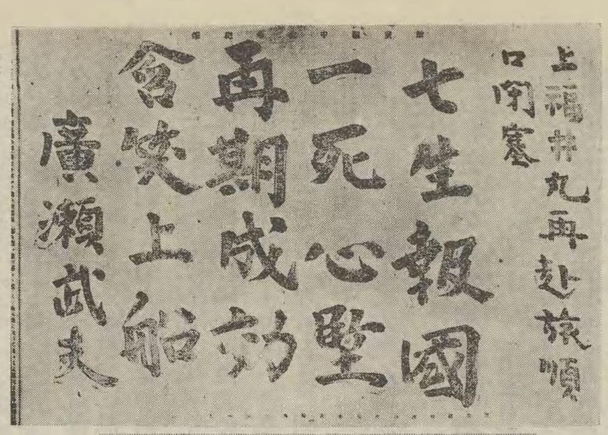
眸を放てば舊市街は脚下呎尺の近きにありて呼べば直に應へんとするを以て忽ち大砲を望臺の頂上に曳き上げ、砲門を此の形勝の高地に据ゑ附け元旦の祝砲として實彈の大猛擊を開始し、半島も碎けて飛べよと許り發射したり。敵の損害の多大なる、震慴の甚だしき、以て想見すべし。

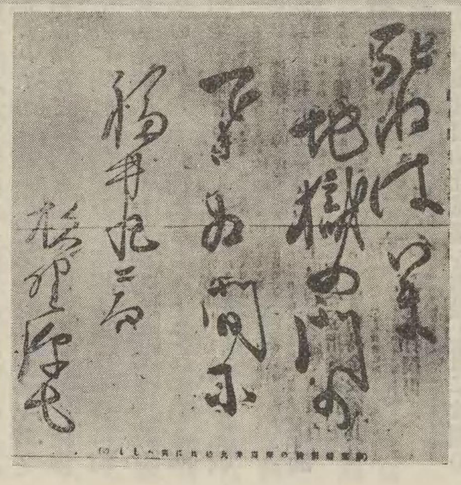
この時右翼隊の一部も亦午前八時より攻擊を開始し其の新來氣銳の力を以て猛烈なる進擊を試み敵の頑强なる抵抗を物ともせず午後に至りて鳩灣一帶の地は全く我軍の有に歸し終りたりき、是に於て我右翼隊は一路驀進せば直に新市街に突入し右に老鐵山の大砲臺を扼し得る有利の形勢を占め得たるなり。

（中略）——兎角する間に夜はほのぼのと明け渡れり、昨夜まで耳を聾せん許りなりし大攻城砲の響、小銃火の音も全く止んで萬籟悉く寂莫に歸し此の靜肅なる乾坤の闇を破つて朗々たる旭日昨日に倍し一層光明ある如く

見ゆる長閑さ、皇威八紘に照破して百蠻悉く慴伏するの感あるなり。

　驍てして急使は四方に馳せ敵兵全く屈伏し殆んど無條件の降伏に甘んずべしとの報全軍に傳はりしかば全軍の叫聲は山岳を震動し陷落の賀辭と年頭の祝辭と取交ぜて言ひ交す光景、何れも手の舞ひ足の踏む所を知らざるもの丶如く「生來初めて芽出度さ、嬉しさ」とは異口同音に放たれたる言





寫眞は廣瀬中佐の絶筆
下は杉野兵曹長の絶筆で共に紙上に掲載されしもの

葉なりき、昨日迄は生命を的に敵彈の中に飛び込んで敵の堅壘を陷いれざれば止まじと決死の覺悟を爲し、今日ありて明日を計られざりし身の局面忽ち一轉し、玆に敵の降伏を見るに至りし事とて將士の喜悅名狀す可くもあらず、虚言のやうなり、夢にはあらずやとは至る處に繰返されたりき、斯くて祝賀の宴會缺乏がちなる陣中に於て忽ちにひらかれ殺氣滿々たりし戰場は何時の間にか陽氣の春の歸り來りて天地萬象さも皇軍の大成功を祝するが如し(以下略)

陣中の正月

沙河に於て　特派員　谷口松溪

――予は不幸にして此の千載一遇の元旦に遭ひながら久しく病魔に侵され終日赤毛布の中に包まれて夜も日も知らずに打ち臥してゐたが「旅順口陷落萬歳、日本帝國萬歳、露助ポコペン」との聲が夢か現か手に取る様だ。眼を開けば夢にもあらず幻にもあらず、各地々々は益す萬歳の聲が高い。予も亦意外の喜び餘りて病を忘れてはね起き、寢ね居る五、六人の友人を呼び起し旅順陷落の情報を告げ一同起ち上りて帝國の萬歳を三唱す、時午前零時

　日は砲聲によりて暮れ又砲聲によりて明け離るゝ戰地の空、明くれば正月二日東雲時より打出す敵の彈丸は一發又一發ふも亦我國の正月を祝ふらしい。

　元旦食ひ殘しの餅を有するものは互ひに持寄せて雜煮の會食或ひは飲み過ぎの氣分直しとて鯉の味噌汁など作りて其處にも此處にも亦新年宴會を始めたらしい。悲しい哉予は病褥に在る爲一食だにすべからず、豫てより甘黨の大將軍なれど鍋に溢れる雜煮兵を眺めながら吶喊するの勇氣もなく例の赤毛布の中に「くの字」形、密臘の様に練り凝まつてゐるコンデンスミルクを炭火にあぶり湯に解かして當番兵より一杯すゝめられやつとその半を過ごして頭を抱へながら古巢に入り、毛皮の敷物、山羊の上張りを引被りて息をこらせども、分秒をキザム時計の音でさへ耳に障り殊に昨夜よりの旅順陷落の噂のみ頗る高く容易に眠り難い。

「オイ一杯飲み直さうか」

「旅順陷落祝やらうか」

「ハウ〳〵ヤルベシ」

などの聲が一層耳障りである。談判が決つたらしい。田島二等軍醫が今

谷口特派員寫生としてし揭載されし首山堡

から旅順陷落の祝杯を擧げるから大概の病氣は押して來給へ、病氣は大事にす可らず、可愛がれば病氣は何時までも側より離れぬ……などゝ煽てられ其の末席を汚した。

　赴けば早や、東天紅を告げた金鷄が既に丸裸にされて、石川五右衛門釜入りの最中で外に鱈や鰑やら多々でハウ〳〵――宴は益す盛んに花を咲かす折柄、前面一帶の敵の砲聲も亦盛んで北面の窓を押せば沙河一帶の陣地は榴霰彈やら曳火彈やらがドヽヽヽドンパチリと空高く爆發して或ひは會場の前に横に右に左に時ならぬ花火を打ち上ぐるのである。快哉々々、折から聯隊より中馬特務曹長が來つて露軍に通報せし我軍の正月砲撃中止の床しい通告文を朗讀する。

「旅順陷落に付き貴軍に通報するの光榮を有す、貴軍將卒の士氣阻喪することなく我軍に對し貴軍が猛烈なる攻撃あるを歡迎するものなり。

　終りに臨んで貴軍將卒一同の健康を祈り尚來る十三日は貴國の新年元旦にして又七日クリスマスなり、我軍に於ては當日砲撃をなさず心を安じ祝杯を擧げよ」

　我帝國の豪膽計り難し。喜び餘つて言葉なし

戰旅日乘

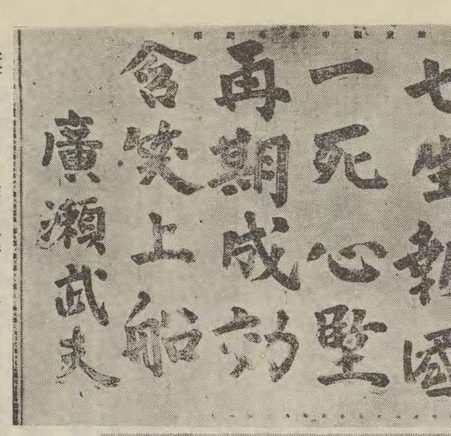
八月十八日　第〇軍特派員　高本雲浪

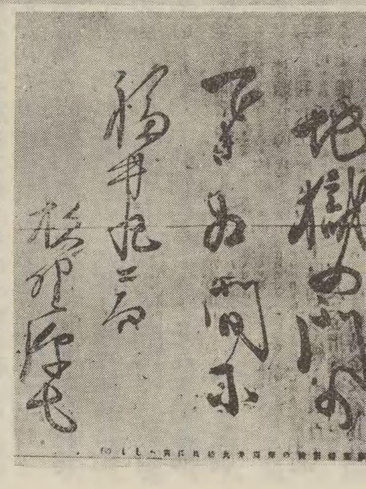
（前略）午後二時五分地山浦を通過す、運輸兵の辛苦益す同情に堪へず、支那苦力は日本輸送兵を日本の苦力と稱す、蓋し日本の輸送兵は彼等と共に輸送に從ふが爲めなり、支那苦力の無禮を咎むるは愚なり、寧ろ我兵の彼等と伍して此の難事を行ふて尚ほ忠誠なるを思へば國民たるもの一日も徒食安座を貪るべからず、苦力の濁水飲むには殆んど驚くに堪へたり、此の日も彼等の多數が殆んど泥濘たらんとする濁水をさも甘げに掬飲しつゝあるを見たり、蓋し彼等は不潔に長じたる免疫性動物なるか。途中進むに從つて軍馬車輛の往來頻繁を加へ戰地の俤益す分明なり、九時半某地に着す此の日天晴れ冷水惜げもなく衣袂を吹く、夜貨車中に宿す。

　八月十一日晴、午前八時出發某地に於て一行部隊配屬の命を受く、左の如し

　〇〇〇部＝大阪朝日新聞上野岩太郎、中央新聞岡田雄一郎、博文館日露戰爭實記坪谷善四郎、軍事界多田光三郎、法律新聞大島光利、戰時畫報小杉國太郎

　第〇〇〇＝九州日報高本尚古、九州日日新聞稻田福太郎、大阪朝日新聞弓削田精一、二六新聞杉原忠七、日本人安藤正純、萬朝報細身者太郎、時





下は杉野兵曹長の絶筆で共に紙上に掲載されしもの

葉なりき、昨日迄は生命を的に敵彈の中に飛び込んで敵の堅壘を陷いれざれば止まじと決死の覺悟を爲し、今日ありて明日を計られざりし身の局面忽ち一轉し、玆に敵の降伏を見るに至りし事とて將士の喜悅名狀す可くもあらず、虚言のやうなり、夢にはあらずやとは至る處に繰返されたりき、斯くて祝賀の宴會缺乏がちなる陣中に於て忽ちにひらかれ殺氣滿々たりし戰場は何時の間にか陽氣の春の歸り來りて天地萬象さも皇軍の大成功を祝

前零時

日は砲聲によりて暮れ又砲聲によりて明け離るゝ戰地の空、明くれば正月二日東雲時より打出す敵の彈丸は一發又一發けふも亦我國の正月を祝ふらしい。

元旦食ひ殘しの餅を有するものは互ひに持寄せて雜煮の會食或ひは飲み過ぎの氣分直しとて鯉の味噌汁など作りて其處にも此處にも亦新年宴會を始めたらしい。悲しい哉予は病褥に在る爲一食だにすべからず、豫てより甘黨の大將軍なれど鍋に溢れる雜煮兵を眺めながら吶喊するの勇氣もなく例の赤毛布の中に「くの字」形、密臘の樣に練り凝まつてゐるコンデンスミルクを炭火にあぶり湯に解かして當番兵より一杯すゝめられやつとその半を過ごして頭を抱へながら古巣に入り、毛皮の敷物、山羊の上張りを引被りて息をこらせども、分秒をキザム時計の音でさへ耳に障り殊に昨夜よりの旅順陷落の噂のみ頗る高く容易に眠り難い。

「オイ一杯飲み直さうか」

「旅順陷落祝やらうか」

「ハウ／＼ヤルベシ」

などの聲が一層耳障りである。談判が決つたらしい。田島二等軍醫が今から旅順陷落の祝杯を擧げるから大概の病氣は押して來給へ、病氣は大事にす可らず、可愛がれば病氣は何時までも側より離れぬ……などゝ煽てられ其の末席を汚した。

赴けば早や、東天紅を告げた金鷄が既に丸裸にされて、石川五右衛門釜入りの最中で外に鱈や鯣やら多々でハウ／＼――宴は益す盛んに花を咲かす折柄、前面一帶の敵の砲聲も亦盛んで北面の窓を押せば沙河一帶の陣地は榴霰彈やら曳火彈やらがド、、、、ドンパチリと空高く爆發して或ひは會場の前に横に右に左に時ならぬ花火を打ち上ぐるのである。快哉々々、折から聯隊より中馬特務曹長が來つて露軍に通報せし我軍の正月砲擊中止の床しい通告文を朗讀する。

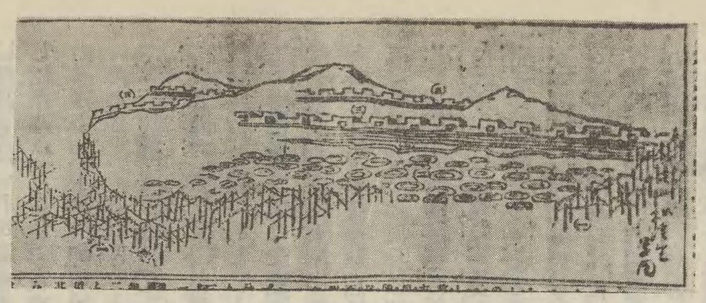
「旅順陷落に付き貴軍に通報するの光榮を有す、貴軍將卒の士氣阻喪することなく我軍に對し貴軍が猛烈なる攻擊あるを歡迎するものなり。

終りに臨んで貴軍將卒一同の健康を祈り尙來る十三日は貴國の新年元旦にして又七日クリスマスなり、我軍に於ては當日砲擊をなさず心を安じ祝杯を擧げよ」

我帝國の豪膽計り難し。喜び餘つて言葉なし吾も亦身の病界にあるを忘れて卽席の歌を唱つた。

見渡せば雲月高き西比利亞の、雪を衾に腕枕、結ぶ露助のネー夢醒めて、胡雁一聲風寒しサノサ

宴會所は更に鼎の如く湧き返りて萬歲の聲砲聲よりも高く滿洲の野に響き夜は深々と更け渡つた（以下略）



谷口特派員寫生として掲載されし首山堡の防禦工事

戰旅日乘

八月十八日　第〇軍特派員　高本雪浪

（前略）午後二時五分地山浦を通過す、運輸兵の辛苦益す同情に堪へず、支那苦力は日本輸送兵を日本の苦力と稱す、蓋し日本の輸送兵は彼等と共に輸送に從ふが爲めなり、支那苦力の無禮を咎むるは愚なり、寧ろ我兵の彼等と伍して此の難事を行ふて尙ほ忠誠なるを思へば國民たるもの一日も徒食安座を貪るべからず、苦力の濁水飲むには殆んど驚くに堪へたり、此の日も彼等の多數が殆んど泥濘たらんとする濁水をさも甘げに掬飲しつゝあるを見たり、蓋し彼等は不潔に長じたる免疫性動物なるか。途中進むに從つて軍馬車輛の往來頻繁を加へ戰地の俤益す分明なり、九時半某地に着す此の日天晴れ冷水惜げもなく衣袂を吹く、夜貨車中に宿ず。

八月十一日晴、午前八時出發某地に於て一行部隊配屬の命を受く、左の如し

〇〇〇部＝大阪朝日新聞上野岩太郎、中央新聞岡田雄一郎、博文館日露戰爭實記坪谷善四郎、軍事界多田光三郎、法律新聞大島光利、戰時畵報小杉國太郎

第〇〇〇＝九州日報高本尙古、九州日日新聞稻田福太郎、大阪朝日新聞弓削田精一、二六新聞杉原忠七、日本人安藤正純、萬朝報細野猪太郎、時事新報石濱鐵郎

第〇〇〇＝東京日日新聞岡本娵二、國民新聞走山猛勇、報知新聞旗尾健順、愛知新報新田新一郎、信濃日報川島順吉、實業之日本旗野簑織

第〇〇〇＝横平商業新報山崎忠剛、都新聞伊東龜雄、京都新聞濱崎直一郎、電報新聞中山太郎、長野新聞山中安太郎、大阪新報小田恒哲二郎、日出國新聞桑村常之助、富山房山岸直次

〇〇〇隊＝大阪每日新聞松內則信

此外、扶桑新聞の清水正幸、鹿兒島新聞の園田竹熊兩氏が途中にて病氣に罹れるは一行の遺憾とする所なりき、午後五時頃某地に達し當局官に會し紹介を受く、此の夜宿舍に着し周到なる周旋を受け又梨本宮殿下御下賜のブランデー酒の配與を受く、一行辱なくこれを保存す。（以下略）

露軍中の華

（銃殺されし敵の間諜）　第一軍從軍　三井文彌

父は天皇陛下の命によりてと、其の愛兒に一書を殘し潔く國に殉じたる志士横川省三氏の最期に數行の熱涙を注いだ天下有情の士は、今余が玆に報ずる銃殺されし敵の間諜、身は粒ならぬ雜卒の一員にして、其の擧動の大膽、其の最後の壯烈に就いては、哀れ敵ながら一掬同情の涙を吝まない事と信ずる。秋風身に泌む九月廿九日の黄昏頃、塒を急ぐ鳥ならぬ一人の土人は多分今日高粱の苅り入れすみての歸りであらう、左手には刈鎌を肩にして名殘の夕陽を支那笠の廂に除つゝ我が陣營の村口を辿りに辿つて一向北へと急ぐのである。ユー烟臺炭坑の北方、夕餉の仕度に忙がはしい我が一兵は、今通り過ぎんとする土人を呼び留め、一椀の清水を持ち來るべく命じた。命ぜられたる彼は寸時佇立つた許りにて應答さへせずに通り過ぎるのである。其の態度の如何にも無躾なので、さなくとも陣中の氣も心も荒々しき矢先、此の眼前の無禮漢、何條默止すべきやである。兵は怒聲一呼、ウヌと許り後追駈けた。逸足出して遁ぐるを捕ふる途端、笠は落ちぬ。主は紛れもなき敵の兵勇。斯くと見たる、六人の兵士はスワと許りに折重なり難なく彼は捕はれたのである。

取調べの結果、彼の自白によれば露曆九月十四（我九月廿七日）其の率るられたる一隊の將は、連敗の悲運に沈みつゝも尚ほ如何にかして其の頽勢を覆へさんものと、烟臺停車場を距る西北十露里の地に於て、我が陣地配兵の詳細を探知すべく命じて勇敢なる間諜の希望者を求め、彼はこれに應じて卒先身を挺して此の重大なる任務に服すべく希望したのであつた。即ち彼は朝裝を土人に扮し、あらゆる要所には我が哨兵の眼光鋭く嚴として網潜るにましたる危險を冒し、大膽と云はうか豪勇と云はうか、彼は此傍若無人の擧動を敢てして我が陣地深く進入し、其處の堡壘此處の陣地、隈なく捜り得ての歸路、天は彼に與せず遂に發見したのであつた。

法廷に於ける彼の沈着なる動作は、眞に一國の志士たる辱めず、露人としては中肉中脊の其の秀麗の紅顔に一點の曇りさへ留めず、軈ては軍律に照らされて最後の宣告を受く可き式許りになる法廷に引出された、彼は三名の判官を一順して後恭しく敬禮を表した。法廷は水を打ちたるやう語一人咳の聲さへない。審判長福原少佐は徐ろに口を開いて逐一彼が罪狀を述べ我が軍律に照らし、玆に彼れ被告を判決する事を嚴かに宣告した

判決書

第五軍團第七十一師團ヲエンパールスキー第二百八十四聯隊豫備兵卒

ワシリー・リヤポフ（三十三）

右者我軍の配傍を探知するの目的を以て支那農民に扮裝して明治三十七年九月二十七日以來清國奉天省烟臺停車場を經て東南の方向に進み、我前哨線内に入りて動靜配備を探査しつゝありしは間諜の行爲にして其現行中に捕獲されたる者とす、仍て成規の審判を經たる末判決する事左の如し

リヤポフを死に處す

明治三十七年九月三日

通譯官は仔細を彼に通じた。兼て覺悟の上なるべきも、予は此の場合此の宣告の如何に彼が精神に大なる恐怖と痛酷なる悲動とを與ふるかに注視すべく、瞬時も彼の面色に注意を怠らなかつた。天晴れなる彼は此の悲愴なる最後の一段に接し更に何等の變徴も示さなかつた。彼は靜かに其の態度を直して敬意を拂ひ、明晰なる言語にて一語、「滿足で御座います」と許り、秋の夕陽は柔かき光を投げ、野も畑も金色を帶べる滿洲高原の眺め何となく哀れ氣である。チパンの營地、一本の楢樹を楯に芝生ひ茂れる荒野其處はリヤポフが永き眠りの刑場である。

審判官來り、醫官來り、見物の群衆はそことはなしに集まりやがて哀れなるリヤポフは、所刑執行主任官藤谷憲兵中尉の指揮に從ひ靜かに刑場に入り來つた。場の中央に　憲兵は彼の捕繩を解き與へ、且つや優しき繩取は彼が捕繩の痛みを去るべく懇に其の双腕を擦り與ふるのである。彼は徐ろに憲兵を顧みて神に對する最後の禮拜を許容されたき由を乞ふた、許しを得て彼は瞑目專念、神に謝する事數時、更に恭しく跪座して四方の天に禮拜した。麗の此の世を去る彼リヤポフは其の末期に及んで切に〳〵神の御手に救はれん事を祈つたのであらう、群集は息を殺して眺めて居る、暮れ方の名殘に澄み渡つた空には一陣の微風だにない。

參謀濱面大尉は譯官を從へ靜かに歩を彼の面前に移して問ふ「爾は妻を有するか」曰く「有り」「爾は兒女を持てりや」曰く「二子を有す」嗚呼リヤポフの聲は何故か慄へたり、嗚呼リヤポフの色は何故か此の答へと共に著るしく動いた。

大尉は更に嚴然と冐すべからざるの態度を以て彼に向つて斯う語つた。「爾は露西亞帝國の軍人中に於て最も勇敢にして最も名譽ある一人である且つや爾が仕事する露帝に對しては無上の大忠臣である。然も我が大日本帝國は軍律に從ひ玆に爾を殺戮せねばならぬ。さは云へ予は個人として深は恭しく跪いて、確く緊く……（中略）――故郷遠きペチョフカ村の彼方には夫を失へる妻、父に殘されし子、今も尚夜々彼が安否を夢みるであらう

×

社友「龍山生」は乃木第三軍に從軍し「旅順口攻圍實記」と題して連日第三軍の奮戰ぶりを通信してゐたが、不幸脚氣に罹つて歸還することになつた。旅順の陷落を見ずして歸還する龍山生は、明治三十七年十一月十三日「攻圍實記」と題して悲痛な書を寄せた、

不幸、大不幸、一代の盛事に會し空前絶後たる日露大戰の軍中に在つて最大の榮譽たる旅順要塞攻圍軍に投じ、蘇家屯、十三里臺、金州、南山、青泥窪、營城子、双臺溝、鳳凰山、干大山等の前進陣地攻陷を完ふし今や將に最終の要塞に臨み連戰連勝の榮譽を擔ふて此に最後の攻勳を奏せんとするに當り、意外眞に豫想以外、脚氣症に犯されんとは、怨恨極まりなし怨恨極まりなし、〇〇軍醫の診斷は予をして内地に送還せらるべく一片の後送證と共に幾多誓約せし戰場の朋友と老鐵山前に手を分ち相顧みて攻圍線を脱し兵站病院に後送せらるゝの不運を來せり。氣色固より優れず一肢愈よ重く、長嶺子の定立病院の命に依つて一片の黒煙を殘して火車に投じ青泥兵站病院に轉送せらる。車路到る處の山水は血痛尚鮮かにして感慨低徊に堪へず。火車已に青泥窪に着し予は兵站病院に入り赤十字記章を附着せる白衣正式の病人となれり、從征半歲月、萬感何ぞ堪へんや、干時明治

報ずる銃殺されし敵の間諜、身は粒ならぬ雜卒の一員にして、其の擧動の大膽、其の最後の壯烈に就いては、哀れ敵ながら一掬同情の涙を吝まない事と信ずる。秋風身に泌む九月廿九日の黄昏頃、塒を急ぐ鳥ならぬ一人の土人は多分今日高粱の苅り入れすみての歸りであらう、左手には刈鎌を肩にして名殘の夕陽を支那笠の廂に除つゝ我が陣營の村口を辿りに辿つて一向北へと急ぐのである。ユー烟臺炭坑の北方、夕餉の仕度に忙がはしい我が一兵は、今通り過ぎんとする土人を呼び留め、一椀の清水を持ち來るべく命じた。命ぜられたる彼は寸時佇立つた許りにて應答さへせずに通り過ぎるのである。其の態度の如何にも無躾なので、さなくとも陣中の氣も心も荒々しき矢先、此の眼前の無禮漢、何條默止すべきやである。兵は怒聲一呼、ウヌと許り後追駈けた。逸足出して遁ぐるを捕ふる途端、笠は落ちぬ。主は紛れもなき敵の兵勇。斯くと見たる、六人の兵士はスワと許りに折重なり難なく彼は捕はれたのである。

取調べの結果、彼の自白によれば露曆九月十四(我九月廿七日)其の率るられたる一隊の將は、連敗の悲運に沈みつゝも尙ほ如何にかして其の頽勢を覆へさんものと、烟臺停車場を距る西北十露里の地に於て、我が陣地配兵の詳細を探知すべく命じて勇敢なる間諜の希望者を求め、彼はこれに應

判決書

第五軍團第七十一師團ヲエンパールスキー第二百八十四聯隊豫備兵卒

ワシリー・リヤポフ(三十三)

右者我軍の配傍を探知するの目的を以て支那農民に扮裝して明治三十七年九月二十七日以來清國奉天省烟臺停車場を經て東南の方向に進み、我前哨線内に入りて動靜配備を探査しつゝありしは間諜の行爲にして其現行中に捕獲されたる者とす、仍て成規の審判を經たる末判決する事左の如し

リヤポフを死に處す

明治三十七年九月三日

通譯官は仔細を彼に通じた。兼て覺悟の上なるべきも、予は此の場合此の宣告の如何に彼が精神に大なる恐怖と痛酷なる悲動とを與ふるかに注視すべく、瞬時も彼の面色に注意を怠らなかつた。天晴れなる彼は此の悲愴なる最後の一段に接し更に何等の變徴も示さなかつた。彼は靜かに其の態度を直して敬意を拂ひ、明晰なる言語にて一語、「滿足で御座います」と許り、秋の夕陽は柔かき光を投げ、野も畑も金色を帶べる滿洲高原の眺め何人唆の聲さへない。審判長福原少佐は徐ろに口を開いて逐一彼が罪狀を述べ我が軍律に照らし、茲に彼れ被告を判決する事を嚴かに宣告した

となく哀れ氣である。チバンの營地、一本の楢樹を楯に芝生ひ茂れる荒野其處はリヤポフが永き眠りの刑場である。

審判官來り、醫官來り、見物の群衆はそことはなしに集まりやがて哀れなるリヤポフは、所刑執行主任官藤谷憲兵中尉の指揮に從ひ靜かに刑場に入り來つた。場の中央に　憲兵は彼の捕繩を解き與へ、且つや優しき繩取は彼が捕繩の痛みを去るべく懇に其の双腕を擦り與ふるのである。彼は徐ろに憲兵を顧みて神に對する最後の禮拜を許容されたき由を乞ふた、許しを得て彼は瞑目專念、神に謝する事數時、更に恭しく跪座して四方の天に禮拜した。麗の此の世を去る彼リヤポフは其の末期に及んで切に〳〵神の御手に救はれん事を祈つたのであらう、群集は息を殺して眺めて居る、暮れ方の名殘に澄み渡つた空には一陣の微風だにない。

參謀濱面大尉は譯官を從へ靜かに歩を彼の面前に移して問ふ「爾は妻を有するか」曰く「有り」「爾は兒女を持てりや」曰く「二子を有す」嗚呼リヤポフの聲は何故か慄へたり、嗚呼リヤポフの色は何故か此の答へと共に著るしく動いた。

大尉は更に嚴然と冒すべからざるの態度を以て彼に向つて斯う語つた。「爾は露西亞帝國の軍人中に於て最も勇敢にして最も名譽ある一人である且つや爾が仕事する露帝に對しては無上の大忠臣である。然も我が大日本帝國は軍律に從ひ茲に爾を殺戮せねばならぬ。さは云へ予は個人として深く爾が勇敢を愛し、爾が最愛の妻子を故郷に殘し今日死の運命に捕はれたる非運に同情するものである。就いては爾が最後に於て不幸なる其妻、哀れなる其子に致すべく言ひ殘す事あらば、予は如何なる面倒をも忍び、爾が意志を達するに力むるであらう――」

情ある大尉の言葉を聽けるリヤポフはハツと許り歔りあけた飽まで剛勇の彼も茲に至りては熱き涙の數滴を、あはれ堰止め得なかつたのである。(中略)――彼は其の終焉の握手を大尉に乞ふた。快く諾せる大尉の手を彼は恭しく跪いて、確く緊く……(中略)――故郷遠きペチョフカ村の彼方には夫を失へる妻、父に殘されし子、今も尙夜々彼が安否を夢みるであらう

×

社友「龍山生」は乃木第三軍に從軍し「旅順口攻圍實記」と題して連日第三軍の奮戰ぶりを通信してゐたが、不幸脚氣に罹つて歸還することになつた。旅順の陷落を見ずして歸還する龍山生は、明治三十七年十一月十三日「攻圍實記」と題して悲痛な書を寄せた、

不幸、大不幸、一代の盛事に會し空前絶後たる日露大戰の軍中に在つて最大の榮譽たる旅順要塞攻圍軍に投じ、蘇家屯、十三里臺、金州、南山、青泥窪、營城子、双臺溝、鳳凰山、干大山等の前進陣地攻陷を完ふし今や將に最終の要塞に臨み連戰連勝の榮譽を擔ふて此に最後の攻勳を奏せんとするに當り、意外眞に豫想以外、脚氣症に犯されんとは、怨恨極まりなし怨恨極まりなし、〇〇軍醫の診斷は予をして内地に送還せらるべく一片の後送證と共に幾多誓約せし戰場の朋友と老鐵山前に手を分ち相顧みて攻圍線を脫し兵站病院に後送せらるゝの不運を來せり。氣色固より優れず一肢愈よ重く、長嶺子の定立病院の命に依つて一片の黒煙を殘して火車に投じ青泥兵站病院に轉送せらる。車路到る處の山水は血瘡尙鮮かにして感慨低徊に堪へず。火車已に青泥窪に着し予は兵站病院に入り赤十字記章を附着せる白衣正式の病人となれり、從征半歳月、萬感何ぞ堪へんや、干時明治三十七年九月十三日、涙を呑み筆を投じて此の攻圍日誌を葬る。噫

遼陽戰況

遼陽戰況は特派員高木雪浪に依つて詳報せられ「遼陽戰報」の大見出しで第三面全部を費して報道したが、左はその一部拔萃である、

――二十八日、雨漸く止み一天清朗、道路稍回復したり、軍は隊伍肅々豫定の時刻を以て各陣地線を出で、吾が所屬、九州健兒團の司令部は午前

六時を以て前夜の宿營地蔣家屯を發したり、曠原の中に於ける進軍の壯觀實に類なし、斯くて吾が所屬團の右翼隊は午前九時廿分頃風旗堡附近に到省し、左翼隊は同九時四十分シヤオタイツイに達したり、是れより先、吾が所屬部隊が鞍山の右方面なる高地を越えて進むこと一里半餘、午前九時前後、土人の言に依れば前日三萬餘人の敵兵駐屯せりと云へる畢管堡に着すれば、前方近く數發の銃聲を聞く、是れ蓋し彼我兩兵の衝突せるものにして軈て我が急射撃の聲は豆をいるが如く敵の砲聲は電の如く稍激戰の兆候を呈せり、進むで風旗堡附近に至れば高粱の野を隔てゝ前方一帶の丘陵蒼々たるを認む、此の時敵は二臺子より揚起堡に亘るの陣地に據り砲兵一中隊と兵一聯隊を以て盛んに吾に砲火と銃火とを交へ、無數の砲彈は斷へて又續きヒユー〳〵の響を成して双眸の裡に破裂し、恰も煙花を見るが如く而してその着彈は頗る規則正しく、敵より見て始め後方をうち、其の他の砲は各前方に、其の外距離を延ばすを見たり、此の時我所屬團の右翼陣は正面より敵を攻撃し、右翼隊は正面及び左側面より攻撃し、敵は頑強に抵抗して彼我砲銃の聲唯相合して天地に震撼せしも、九州健兒の勇奮を敵は遂に支ふる能はずして北方に潰亂し、更に進んで午前十一時前方要地を占領せり、此の戰鬪に於て我が某聯隊は其の攻撃最も激烈にして遂に後三臺子なる敵の砲兵陣地へ突撃せしがため敵は周章狼狽して措く所を知らず僅かに其の砲馬に乘じて逃走し速射砲八門、彈藥車十輛、輜重車二十輛、小銃三十六挺、其の他彈藥被服若干を鹵獲したり、吾が所屬の中央軍は尙ほ敵の逃ぐるを窮追して午後三時三十分前後更に前方數箇の要地に亘るの線を占領せり。

右翼團方面に於ては午前九時前後陶官屯より五家臺附近に亘るの線を占領せしが、當時敵は八封溝より東北方に亘るの線を占領して頑强に砲銃火を交へたりと云へども勢ひ遂に支ふるを得ず午前十一時三十分頃此の方面の敵も漸次遼陽方面に向つて退却せり。

左翼某團の方面に於ては甚だしき戰鬪もなく吾所屬團に聯繫して白旗堡北方附近を占領せり(以下略)

常陸丸遭難

明治三十七年六月十六日の本紙上に「宗像郡沖の島沖に露艦現はる」「露艦出現、砲聲殷々、〇〇艦追撃」「露艦果して襲來す、〇〇〇三隻撃沈せらる」等の見出しで全面に亘つて全文舊二號活字の物々しい事件が報道されたが、これこそ史上有名な玄海灘に於ける常陸丸、佐渡丸の遭難事件であつた。露艦は濃霧にまぎれて我が領海に出沒し、我が國民は勿論、上村艦隊が深き恨みを呑んだ日であつた。本紙は十八日の紙上に「玄洋の慘事」と題して左の如く記載してゐる。

「――千秋の恨みを殘して自殺し若くは五殺し然らざるものは敵彈に斃れ剩へ敵の虐殺する所となり、未だ一彈も放たざるに先づ自ら洋底の藻屑となり玄海の潮爲めに紅血を漲らす、嗚呼慘なる哉、嗚呼又悽なるかな。――されど我が艦隊も亦無爲にして已まざるは吾人の斷信する所而して今や陸海軍大勢の勝利我れに歸す。彼の敗戰の軍艦を殲滅する亦決して遠きに非ざるべく今回の變災の如き大勢より之を見れば嗟跌にして國民も亦毫も沮喪することにあらずと雖も孫子が所謂「兵驕者敗」の語吾人を欺かずとすれば吾人は偏に吾陸海軍の自重を望み國民又狂燥を愼むべきを希望す」

恨み骨髓に徹した上村中將は、自ら艦橋に立つて四晝夜に亘つて日本海を隈なく索敵したが遂に發見するに至らず切齒して引揚げた。上村中將の心事に對して本紙は「吾人は閣下の氣膽と材幹、幕僚の策謀と機略に深く信賴を拂へるもの、乃ち閣下が隱忍自重以て寃を雪ぐの機の到來せんこと亦遠きに非ざるを知るなり」と慰めたが、果して八月十日、敵艦ロシヤクロンボイ、リユーリツクの三艦を發見した上村艦隊は、丁字陣形に退路を塞いで全滅を期し、ロシヤクロンボイへは多大の損傷を與へリユーリツクを撃沈して先づ恨みを晴らすことが出來た。

戰捷祝賀

福岡市の戰捷祝賀會は第二同を明治三十七年四月三十日、五月一二の三日間に亘つて擧行されたが本社はその翌日の五月三日、本社主催の戰捷祝賀提灯行列を擧行した、社員社友の參加するもの四百數十、音樂隊を先頭に、記者岡田吊影が作つた左の軍歌を高唱しながら福博全市を練り歩いた。

征露軍歌

岡田吊影作

(一)

鐵路縱横長驅して　　鷲の羽を伸ばす西比利亞
貪婪不逞の爪を磨き　　滿韓の野を掻き亂る
平和の仇敵人の賊　　惡魔スラヴを討つは今

(二)

知らずや吾は日の御子の　　神氏を享けし國柱
古來武烈の血に湧きて　　八州の民義に勇む
いざ起て討たむ善隣の　　國を騒がす荒夷狄

(三)

たとへば過ぎし遼東の　　血潮に代へし堅壘を
平和の爲と敦圍きて　　奪ひし口に舌を吐き
牙をかけしも彼が罪　　神人奈何で許さむや
討て斬れ進め大和武士

日本海大海戰

明治三十八年五月廿七、八兩日に亘る沖の島附近に於ける「日本海大海戰」の砲聲は、手にとる如く福岡一帶に聞きとられ、本社編輯局に緊迫の震動を傳へたものであつた、地の利を有する本社の海戰速報は、從つて全國何れの新聞をも壓倒するものであつた、こゝには大里捕虜收容所に於ける本社記者の訪問記を摘錄して大海戰回顧の資とする。

余は日本海大海戰に於て撃沈せられたる露國二等巡洋艦ウラル乘組の大尉アルツホク中尉以下水兵三十名を大里收容所に訪ふ。中に露國の富豪に生れたる大學出身の水兵カイランスキーと稱するものあり。氣骨稜々として忌憚なく海戰當時の光景を語る。

彼の父は虛無黨中の勢力家にして、彼も亦革命的騒亂に加擔し放逐の不幸に遭遇したる事あり、今回日露の開戰に際して陸軍より轉じて海軍に籍を入れしものなり。

――露國第二、第三艦隊はカムラン灣に集合の時バツシ海峽を通過し、戰鬪艦、巡洋艦、病院船、運送船を合せて四十四隻の大艦隊は威風海を壓して航路を臺灣北方に取り、一直に北進して轉針し、上海に着せしは五月廿四日なりし。

中隊と兵一聯隊を以て盛んに吾に砲火と銃火とを交へ、無數の砲彈は斷へて又續きヒュー〳〵の響を成して双眸の裡に破裂し、恰も煙花を見るが如く而してその着彈は頗る規則正しく、敵より見て始め後方をうち、其の他の砲は各前方に、其の外距離を延ばすを見たり、此の時我所屬團の右翼陣は正面より敵を攻撃し、右翼隊は正面及び左側面より攻撃し、敵は頑強に抵抗して彼我砲銃の聲唯相合して天地に震撼せしも、九州健兒の勇奮を敵は遂に支ふる能はずして北方に潰亂し、更に進んで午前十一時前方要地を占領せり、此の戰鬪に於て我が某聯隊は其の攻撃最も激烈にして遂に後三臺子なる敵の砲兵陣地へ突撃せしがため敵は周章狼狽して措く所を知らず僅かに其の砲馬に乘じて逃走し速射砲八門、彈藥車十輛、輜重車二十輛、小銃三十六挺、其の他彈藥被服若干を鹵獲したり、吾が所屬の中央軍は尚ほ敵の逃ぐるを窮追して午後三時三十分前後更に前方數箇の要地に亘るの線を占領せり。

右翼團方面に於ては午前九時前後陶官屯より五家臺附近に亘るの線を占領せしが、當時敵は八封溝より東北方に亘るの線を占領して頑強に砲銃火を交へたりと云へども勢ひ遂に支ふるを得ず午前十一時三十分頃此の方面の敵も漸次遼陽方面に向つて退却せり。

戰捷祝賀

福岡市の戰捷祝賀會は第二同を明治三十七年四月三十日、五月一二の三日間に亘つて擧行されたが本社はその翌日の五月三日、本社主催の戰捷祝賀提灯行列を擧行した、社員社友の參加するもの四百數十、音樂隊を先頭に、記者岡田吊影が作つた左の軍歌を高唱しながら福博全市を練り歩いた。

征露軍歌

岡田吊影作

（一）

鐵路縱横長驅して
貪婪不逞の爪を磨き
平和の仇敵人の賊

（二）

知らずや吾は日の御子の
古來武烈の血に湧きて
いざ起て討たむ善隣の

（三）

たとへば過ぎし遼東の
平和の爲と敦圍きて
牙をかけしも彼が罪

（四）

天地の怒り激發し
見よ百萬の益良夫が
烏拉の山の血の煙

（五）

騎兵コザツク夫れ遂に
自滅の悔を見んまでは
討て斬れ進め大和武士

日本海大海戰

明治三十八年五月廿七、八兩日に亘る沖の島附近に於ける「日本海大海戰」の砲聲は、手にとる如く福岡一帶に聞きとられ、本社編輯局に緊迫の震動を傳へたものであつた、地の利を有する本社の海戰速報は、從つて全國何れの新聞をも壓倒するものであつた、こゝには大里捕虜收容所に於ける本社記者の訪問記を摘錄して大海戰回顧の資とする。

余は日本海大海戰に於て擊沈せられたる露國二等巡洋艦ウラル乘組の大尉アルツホク中尉以下水兵三十名を大里收容所に訪ふ。中に露國の富豪に生れたる大學出身の水兵カイランスキーと稱するものあり。氣骨稜々として忌憚なく海戰當時の光景を語る。

彼の父は虚無黨中の勢力家にして、彼も亦革命的騷亂に加擔し放逐の不幸に遭遇したる事あり、今回日露の開戰に際して陸軍より轉じて海軍に籍を入れしものなり。

——露國第二、第三艦隊はカムラン灣に集合の時バツシ海峽を通過し、戰鬪艦、巡洋艦、病院船、運送船を合せて四十四隻の大艦隊は威風海を壓して航路を臺灣北方に取り、一直に北進して轉針し、上海に着せしは五月廿四日なりし。

この日の提督は義勇艦及運送船十五隻をして馬鞍島及吳淞沖に向はしめ自由の行動をとらしめたり、而して戰鬪艦以下苟くも戰鬪に堪へ得る戰艦のみ浦鹽に闖入すべく航路を對州島方面に取り全速力にて航行を始めたり、而して本艦隊がバツシ海峽を出で僅々數浬の地點に達するや水天髣髴の裡に數條の煤煙淡く立ち昇るを見たり。

之れ正しく日本艦隊の快速巡洋艦なりしなり。爾後我が艦隊と日本艦隊とは微かに望遠鏡によりて認め得べき遠距離の間隔を保ちつゝ上海に到着せ如く記載してゐる。

「——千秋の恨みを殘して自殺し若くは互殺し然らざるものは敵彈に斃れ剩へ敵の虐殺する所となり、未だ一彈も放たざるに先づ自ら洋底の藻屑となり玄海の潮爲めに紅血を漲らす、嗚呼慘なる哉、嗚呼又悽なるかな。

——されど我が艦隊も亦無爲にして已まざるは吾人の斷信する所而して今や陸海軍大勢の勝利我れに歸す。彼の敗戰の軍艦を殲滅する亦決して遠きに非ざるべく今回の變災の如き大勢より之を見れば嗟跌にして國民も亦毫も沮喪することにあらずと雖も孫子が所謂「兵驕者敗」の語吾人を欺かずとすれば吾人は偏に吾陸海軍の自重を望み國民又狂燥を愼むべきを希望す」

恨み骨髓に徹した上村中將は、自ら艦橋に立つて四晝夜に亘つて日本海を隈なく索敵したが遂に發見するに至らず切齒して引揚げた。上村中將の心事に對して本紙は「吾人は閣下の氣膽と材幹、幕僚の策謀と機略に深く信賴を拂へるもの、乃ち閣下が隱忍自重以て寃を雪ぐの機の到來せんこと亦遠きに非ざるを知るなり」と慰めたが、果して八月十日、敵艦ロシヤクロンボイ、リューリツクの三艦を發見した上村艦隊は、丁字陣形に退路を塞いで全滅を期し、ロシヤクロンボイへは多大の損傷を與へリューリツクを擊沈して先づ恨みを晴らすことが出來た。

しが、我艦隊が上海沖通過の翌日は日本巡洋艦の常磐型一隻の艦形を最も近距離に於て認めたり、彼我艦隊の對峙せる狀況は全く右の如くなりしを以てロ提督は假令大平洋に出でゝ日本沿岸を迂回して北海より日本海に突入するも彼我の衝突は遂に免れ得ざる運命ならん、不幸にして我れ敗潰せんか遁入すべき好箇の中立港なきを如何せん、對州海峽防備の嚴なるは余等特に熟知する處なるも兎に角決戰の避く可からざるものとすれば至大の艱難に遭遇するも寧ろ清韓沿岸に近接せる對州海峽通過の利あるに若かざるなしと爲し玆に命令は各艦隊に傳へられ、對馬海峽强行通過に決したるなり。

かくて我艦隊の航路は愈よ萬全を賭して對州島を犯すべく決定され、義勇艦及び運送船に積載する軍需品一切を艦隊に移し終るや急速隊形を整へて進航し二十七日未明無事濟州島沖に到着し、雲煙摸糊の裡に同島影を認めたり、此の時逸早くも我先頭艦は日本艦出現の信號を傳へたるが、須臾にして我が進路を遮らんとする日本艦隊は弱小の巡洋艦隊なりし事を確めたれば、我は依然些かの動搖も爲さず、戰鬪準備にとりかゝり、警戒を嚴にして航海を續けしが、日本艦隊は一旦數浬の近距離に接近せる後漸次北方に引返へせり。

是に於て我艦隊は右にスワロフ號を先頭として一等戰艦の單縱列を作り之に對して左方に二等戰艦の單縱列を作り、此の縱列の中間に巡洋艦の縱列を擁護しつゝ別にイツムール號を右側哨艦としてユムリユツク號を左哨艦として濟洲島の東南方より朝鮮海峽に突入せり。

然るに前記日本巡洋艦隊は猶未だ挑戰せず依然北方に背進し我が艦隊が同海峽を全く通過し終るや朝鮮東南角の沖合に優勢なる日本巡洋艦三、四隻の新に艦影を現はし來れるを認めしかば我戰鬪艦は横列の隊形を作り、巡洋艦以下を後方に掩護しつゝ猛火を該日本巡洋艦に集中せり、されど距離は尙遠きに過ぎて着彈の模樣なく、彼我鑑隊は刻一刻接近して砲戰激烈を極め、我各鑑多少の損傷を蒙り形成如何ならんと危み始めたる時は早くも日本の水雷艇は疾風の如く四圍に蝟集し來りたり。一、二我鑑船の轟沈さるゝや形成は益す危殆となり、進退玆に谷まりしかば愈よ一大決心を以て各鑑自由に日本海へ遁竄せんと企てたりしに又もや一大優勢なる日本鑑隊は隊伍堂々煤煙天を焦がして北方より我の遁路を壓迫し來れり。此の時迄彼我鑑隊は沖の島方面にかけて前後三回右舷に回轉せしが、この日本の新勢力を見ては眞直北遁の勇氣も挫け已むなくこの地點より隱岐島方面へ卽ち東北に向け隊形潰亂のまゝ移動せり。之と同時に我鑑は沖の島附近に於て擊沈せられたれば以後の戰況は知るに由なし。

我鑑隊は全然大敗滅の不幸を見しが巡洋鑑の殿艦なりし我等乘船ウラル號は日本主力艦隊の出現し來る頃速力の遲きため戰列を離れ全く孤立の苦境に陷りたるに、日本巡洋艦數隻はこれを包圍して砲彈を集中せしかば彈雨遽かに急霰の如く飛來し、檣は折れ煙筒は摧け、艦橋艦上の器物は破壞され黑暗々たる硝烟の裡に包まれたり、その時十二吋の巨彈は來りて第一に艦首を次は艦尾を破壞し、續いて左舷側の吃水線を突貫し猛烈なる爆發力は機關室を微塵に破壞せしかば海水滔々として浸入し來り、此處に於て乘組兵員は先を競ふて端艇に移して沈沒の難を免れたり。

かくて運送船は見失ひ朝來吹き荒ぶ西北方の風に波浪は高く必死の力も盡き果てゝ三十時間水のまに〳〵漂流して二十八日午後十時山口縣須佐海岸に吹き着けられ、漁夫の爲に救助され一命を完ふしたるなりと。

滿洲義軍

日露戰役に際して組織された花田中佐の率ゐる「滿洲義軍」の活動はあまりにも有名である。滿洲の曠野を神出鬼沒し、恣まゝに露軍の側背を攪亂して驍將ミチスエンコをして「露軍眼中の針」と歎ぜしめたものであつたが、此の滿洲義軍の計畫者は實に我が社の元記者、玄洋社員安永東之助であり、中堅幹部は悉く玄洋社の志士であり中にも安永東之助をはじめ藤井種太郎、吉田痩及び陸軍特別任務班に加はつて横川、沖の兩烈士と共に滿蒙に活躍した奈良崎八郎などは曾て我が社の記者であつた。

この滿洲義軍は、單なる軍事探偵ではなく、滿洲に同志を糾合して大に天下に義を唱へんとするもので、頭山滿や參謀本部の福島安正少將等の援助によつて成立し、玄洋社の志士と花田中佐以下の現役軍人とを幹部とし、滿洲馬賊を糾合した勇猛果敢な大集團であつた。滿洲義軍に投じて活躍した玄洋社の志士は左の人々であつた。

安永東之助、小野鴻之助、眞藤愼太郎、柴田麟次郎、福島熊次郎、金子克巳、萱野長知、吉田痩、河村武道、横田虎之助、藤井種太郎、樋口滿、本田一郎

當時の本紙から「滿洲義軍」の記事一項を摘錄して置く。

滿洲義軍の新消息

八月三十日發　〇〇にて　芳野生

去る廿二日卽ち淸曆七月十六日の盆祭當日に、滿洲義軍の兵八百は、平頂山に在る露兵步騎合せて千二百を攻擊し、未明濃霧の裡に接戰し三方より立て廻して攻擊したる時は恰も網を張りて魚を捕ふるが如く、露兵を散々に擊ち惱まし、三名を捕虜とし馬十頭外套四十餘點其の他銃器彈藥の分捕多く、猶死者七名を出さしめたり、負傷も少からざりき。

一日六道溝と八河灘との東南兩道より之に向ふ。

同日六道溝を發せる我軍は、邊勾歲子といへる所に於て露騎六十と出會し、彼等が晩餐の準備をなせる場合を襲ひ直に之を擊退したり、此の時既に薄暮に及びたるが、賽馬集に在りし日本駐軍も義軍よりの報に接して棄て置き難しとなし、城廓に向ふ事となり、其の一隊城廓より三里を距てたる藍河谷口に達せし時恰も義軍が邊勾歲子に功を奏して前進せるものと出會したりければ義軍は玆に日本軍一部隊の先頭に立ちて嚮導をなす事となれり。

廿二日午前一時嚮導隊たる義軍は、深夜暗黑の雨中に山路を迂回して城廓の敵の側面に出づべく行進を始めたるに途中遂に日本軍と相失するに至りたれども義軍のみは目的の通り午前六時を以て城廓を距る一千メートルの高地に到達し同地を占領し先づ藍河谷古方面より引揚げ來れる露兵の狼狽は云はん方なく這々の體にて逃走散亂したり。

此時散亂せる露兵は、餘りに見苦しき敗亡を恥辱とや思ひけん、敗局を收拾して逆襲し來り猶城廓よりも三百騎の應援ありたれども義軍は少數ながらよく此の優勢の敵に對戰する事二時間餘にして露兵も稍旗色惡しくなりたる所へ日本軍隊來り合せて難なく擊退し追躡して城廓に入り全く之を占領せり、豫期の如く八河灘より來りし義軍も同時に城廓に入りたるが此方面は一名の露兵にも出會するなかりきと、玆に於て義軍の名譽ます〳〵

かくて我艦隊の航路は愈よ萬全を賭して對州島を犯すべく決定され、義勇艦及び運送船に積載する軍需品一切を艦隊に移し終るや急速隊形を整へて進航し二十七日未明無事濟州島沖に到着し、雲煙模糊の裡に同島影を認めたり、此の時逸早くも我先頭艦は日本艦出現の信號を傳へたるが、須叟にして我が進路を遮らんとする日本艦隊は弱小の巡洋艦隊なりし事を確めたれば、我は依然些かの動搖も爲さず、戰鬪準備にとりかゝり、警戒を嚴にして航海を續けしが、日本艦隊は一旦數浬の近距離に接近せる後漸次北方に引返へせり。

是に於て我艦隊は右にスワロフ號を先頭として一等戰艦の單縱列を作り之に對して左方に二等戰艦の單縱列を作り、此の縱列の中間に巡洋艦の縱列を擁護しつゝ別にイツムール號を右側哨艦としてユムリユツク號を左哨艦として濟洲島の東南方より朝鮮海峽に突入せり。

然るに前記日本巡洋艦隊は猶未だ挑戰せず依然北方に背進し我が艦隊が同海峽を全く通過し終るや朝鮮東南角の沖合に優勢なる日本巡洋艦三、四隻の新に艦影を現はし來れるを認めしかば我戰鬪艦は横列の隊形を作り、巡洋艦以下を後方に掩護しつゝ猛火を該日本巡洋鑑に集中せり、されど距離は尙遠きに過ぎて着彈の模様なく、彼我鑑隊は刻一刻接近して砲戰激烈

我鑑隊は全然大敗滅の不幸を見しが巡洋鑑の殿艦なりし我等乘船ウラル號は日本主力艦隊の出現し來る頃速力の遲きため戰列を離れ全く孤立の苦境に陷りたるに、日本巡洋艦數隻はこれを包圍して砲彈を集中せしかば彈雨遽かに急霰の如く飛來し、檣は折れ煙筒は摧け、艦橋艦上の器物は破壞され黑暗々たる硝烟の裡に包まれたり、その時十二吋の巨彈は來りて第一に艦首を次は艦尾を破壞し、續いて左舷側の吃水線を突貫し猛烈なる爆發力は機關室を微塵に破壞せしかば海水滔々として浸入し來り、此處に於て乘組兵員は先を競ふて端艇に移して沈沒の難を免れたり。

かくて運送船は見失ひ朝來吹き荒ぶ西北方の風に波浪は高く必死の力も盡き果てゝ三十時間水のまに〳〵漂流して二十八日午後十時山口縣須佐海岸に吹き着けられ、漁夫の爲に救助され一命を完ふしたるなりと。

滿洲義軍

日露戰役に際して組織された花田中佐の率ゐる「滿洲義軍」の活動はあまりにも有名である。滿洲の曠野を神出鬼沒し、恣まゝに露軍の側背を攪亂して驍將ミチスエンコをして「露軍眼中の針」と歎ぜしめたものであつたが、此の滿洲義軍の計畫者は實に我が社の元記者、玄洋社員安永東之助であり、中堅幹部は悉く玄洋社の志士であり中にも安永東之助をはじめ藤井種太郎、吉田

瘦及び陸軍特別任務班に加はつて横川、沖の兩烈士と共に滿蒙に活躍した奈良崎八郎などは曾て我が社の記者であつた。

この滿洲義軍は、單なる軍事探偵ではなく、滿洲に同志を糾合して大に天下に義を唱へんとするもので、頭山滿や參謀本部の福島安正少將等の援助によつて成立し、玄洋社の志士と花田中佐以下の現役軍人とを幹部とし、滿洲馬賊を糾合した勇猛果敢な大集團であつた。滿洲義軍に投じて活躍した玄洋社の志士は左の人々であつた。

安永東之助、小野鴻之助、眞藤愼太郎、柴田麟次郎、福島熊次郎、金子克巳、萱野長知、吉田瘦、河村武道、横田虎之助、藤井種太郎、樋口滿、本田一郎

當時の本紙から「滿洲義軍」の記事一項を摘錄して置く。

滿洲義軍の新消息

八月三十日發　〇〇にて　芳野生

去る廿二日卽ち淸曆七月十六日の盆祭當日に、滿洲義軍の兵八百は、平頂山に在る露兵步騎合せて千二百を攻擊し、未明濃霧の裡に接戰し三方より立て廻して攻擊したる時は恰も網を張りて魚を捕ふるが如く、露兵を散々に擊ち惱まし、三名を捕虜とし馬十頭外套四十餘點其の他銃器彈藥の分捕多く、猶死者七名を出さしめたり、負傷も少からざりき。

是より先、南四平街、八河灘、六道溝、等にも義軍の風を望みて起つもの多く、義軍の形勢大に揮ひしが、城廓より同地は日本軍引揚げ後直に露兵來着しマドリフ步騎砲兵二千餘を率ゐて此所に根據地を構へ猶進んで賽馬集の日本軍兵站線を蹂躙せんとせりとの報六道溝の義軍本營に達したるを以て義軍は殊勝にも之を鑛陽邊門及び賽馬集の日本駐軍に報告すると共に、偵察兵を城廓に向はしめたるに其の露兵の數は砲四門を有する步兵二百と騎兵五百なる事明白となりたれば、義軍は直に之を擊攘すべく七月廿一日六道溝と八河灘との東南兩道より之に向ふ。

同日六道溝を發せる我軍は、邊勾歲子といへる所に於て露騎六十と出會し、彼等が晩餐の準備をなせる場合を襲ひ直に之を擊退したり、此の時既に薄暮に及びたるが、賽馬集に在りし日本駐軍も義軍よりの報に接して棄て置き難しとなし、城廓に向ふ事となり、其の一隊城廓より三里を距てたる藍河谷口に達せし時恰も義軍が邊勾歲子に功を奏して前進せるものと出會したりければ義軍は玆に日本軍一部隊の先頭に立ちて嚮導をなす事となれり。

廿二日午前一時嚮導隊たる義軍は、深夜暗黑の雨中に山路を迂回して城廓の敵の側面に出づべく行進を始めたるに途中遂に日本軍と相失するに至りたれども義軍のみは目的の通り午前六時を以て城廓を距る一千メートルの高地に到達し同地を占領し先づ藍河谷古方面より引揚げ來れる露兵の狼狽は云はん方なく這々の體にて逃走散亂したり。

此時散亂せる露兵は、餘りに見苦しき敗亡を恥辱とや思ひけん、敗局を收拾して逆襲し來り猶城廓よりも三百騎の應援ありたれども義軍は少數ながらよく此の優勢の敵に對戰する事二時間餘にして露兵も稍旗色惡しくなりたる所へ日本軍隊來り合せて難なく擊退し追躡して城廓に入り全く之を占領せり、豫期の如く八河灘より來りし義軍も同時に城廓に入りたるが此方面は一名の露兵にも出會するなかりきと、玆に於て義軍の名譽ます〳〵高まり四方風を望みて來り加はるもの踵を接し未だ幾日ならずして五百餘名の新加入者を得、義軍の祭旗式を行ふに至れり。

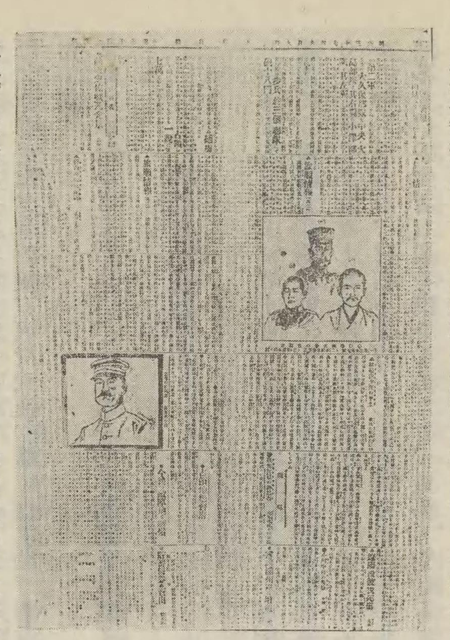
義軍が、城廓に據りてより既に一月餘、此の間敵襲二回、平頂山攻擊二回（其の一回は前記にして第二回の敵襲には有名なる敵將マドリフ大佐脚部に負傷するに至れりといふ義軍の勢ひは實に遠近に振へり、但し其の內幕を窺へばスナイドル銃を携ふる訓練なき烏合の衆に過ぎずと雖も露兵は既に怖氣つき居れば斯る烏合の輩にまで敗衂を取る所以也。笑止とも何と

も言はふ様なしといふべし、義軍は之より更に局面を展開して或方面に活動を始めん計畫ありとか。（明治三十七年九月十五日掲載）

義軍の發起者安永東之助は、戰役終了後も滿洲に留まつて素志完成に奮闘したが不幸匪賊に狙撃されて戰死した。

一九、非媾和運動

日露戰爭終局して、陸海軍の大捷に拘らず、善後措置の外交戰に破れて、當時の所謂「屈辱的媾和條約」が締結されるに及んで、國民の義憤は熱狂し、媾和問題同志聯合會の活動となり、有名な日比谷の燒き打事件を惹起するに至つた。



紙上掲載の出征軍人及戰死者

本紙は明治三十八年八月三十一日、媾和談判成立の號外を發行し、翌九月一日には「屈辱的媾和の成立、噫百年の長計を誤れり」「戰爭の報酬、噫單にこれに止まるか」と一、二面全部を費して悲壯激越の痛論を掲げ、翌二日は「第二の日露戰爭」、三日「元老閣臣の魯鈍」「空前の大屈辱」、五日「國民に檄す」六日「國民の奮起を要す」等々連日に亘つて外交の失敗を論じ國民の奮起を促す一方九州に於ける非媾和運動の先頭に立つて活躍した。

——九州に於ける非媾和運動は九月十五日の福岡市東公園に於ける福岡縣大會を皮切りに熱狂的なものがあつた。この日の參會者は五千、玄洋社長進藤喜平太會長となり、左の決議文を可決して宮内大臣、樞密院及び滿洲軍に打電した。

決　議

「今回の媾和條件は宣戰の詔勅に背き東洋永遠の平和を保證するに足らず吾人は此の條約を破棄し閣臣の處決を促す」

續いて東中洲壽座に大演説會を開いて氣勢を擧げ、我が社及び九州各縣硬派各新聞社發起の「非媾和九州大會並に九州同志記者大會」は九月二十日、長崎市舞鶴座に開催された。この日の參會者は九州各縣から參集した憂國の士七千、空前の盛觀を呈し、決議文を可決して九州の同志が全國の主動となることの申合せをした。九州同志記者大會の出席社は我が社を始め熊本二豐新聞馬關實業、熊本毎日、九州めざまし、九州日の出、佐賀新聞、西肥日報、長崎新報、鎭西日報、佐世保新報、佐世保新聞、佐世保軍港新聞等十四社に及び、我が社の高本雪浪は時局に關する挨拶をなし、左の決議案を可決し、非媾和輿論の中堅たるべきを申合せた。

決　議

一、屈辱媾和の破棄を期すること

二、現内閣及び元老をして引責せしめ自今國政に容喙せしめざること

三、代議士をして現政府に絶對的反對の態度を執らしむること

左は本紙に飜譯された旅順陷落に關する列國輿論の片鱗である。

△英國のタイムス紙＝ステツセル將軍の防守の頑強であつた事を一應賞揚し攻撃は防守に幾倍する難事業であることを述べ「攻圍者は今回執拗智略、及び絶倫の勇氣其他凡そ武士の本色とすべき一切の點に於て月桂冠は攻圍者の手に落ちざるを得ず」と激賞し、三國干渉の報復をあげ、旅順の陷落は日本軍に取つて戰爭の第二の目的を達したと。

△デイリー・テレグラフ＝タイムス紙と大同小異

△佛國ルタン紙＝「日本人の露國より旅順口を收めたるは復仇以上の償がある、是れ殆んど黄色人種勃興の前徴なり、歐洲人が黄色人に驅逐せられるとは今や單に空想に止まらずして現實なり」

同國社會黨の新聞は日本を賞讃

△獨逸＝旅順陷落の號外に群衆は街路に於て熱心に我軍の大勝を論評し、尊敬と賞讃の意を表した。

△フオツシュ・ツアイツング紙　日本軍は旅順陷落により士氣大いに振ひ露國に於ては今後益々惡結果を來すであらう。日本は確に有利なる狀態に於て新局面に望むものなり。

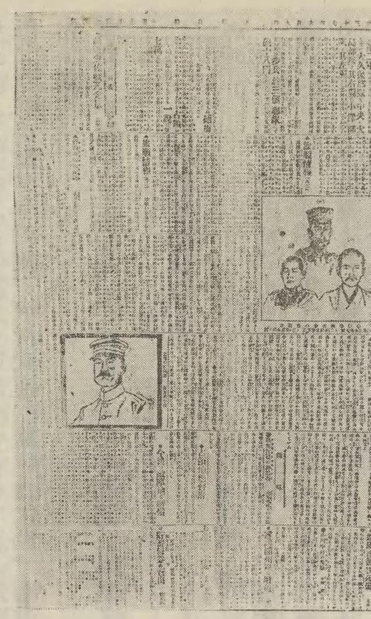
△クロイツ・ツアイツング紙＝日本軍の如き異常なる精力ある者にあらざれば旅順は今日尚安全なる避難所たるを得ん。

二〇、福本社長時代　劈頭の改善充實

第三代社長宮川武行は、滿六年經營に當り、明治三十八年十一月社長の椅子を新進の學徒福本誠（日南）に讓つて退いた。

福本は多年滿清韓に遊び、東亞の問題に就いては一家の見を有し後、世界を漫遊した博識篤學の士であつた。政治經濟、教育、社會問題等到らざるなき有樣であつたが、就中、彼の文學は有名で、後に本紙に執筆連載した「元祿快擧錄」は、後世彼の名を代表する一つである。教育論、鄉土史等に關したために紙價五錢引下げの斷行であつた。第二は通信網の完備強化であつた。卽ち從來東京電報を介して採錄した外國電報を、ロイテル電報社と特約して直接本紙に掲載することになり、伯林、北京、京城電報の特約、東京その他内地各地の電報を增加して紙面の刷新、記事の速報充實陣容を强化したのであつた。この大革新發表に當つて、本紙の社告には「若し夫れ改善第二擧第三擧に至りては今より五ケ月以内に斷行し、一擧は一擧よりも壯且つ大ならんとす。意圖既に立ち計畫亦定まれり。是れ讀者諸君の豫じめ目を拭ひて待たれんことを希ふ所なり」と記載したが、果して（五ケ月以内ではなかつたけれども）翌三十九年八月一日には「改善第二擧」を實現せしめた。改善第二擧は新聞製作の原動力ともいふべき輪轉機の採用であつた——工場を擴張して從來のローラーに代ふるに最新式のマリノニー式色刷輪轉機及びその動力用としてナショナル式瓦斯エンヂンを据付けたが、東京以西の地方新聞中この輪轉機を使用したのは我が社を嚆矢とするもので、社員は勿論讀者もこれを誇りとし、題字の意匠、季節の挿畫、廣告など、日々工夫を凝らして紙面に現はされる配合の妙を極めた三色の鮮明さに人々は眼を瞬つて感歎したものであつた。

かくて新社長を迎へて新天地を開拓した我が社は、あらゆる新機軸の活動



紙上揭載の出征軍人及戰死者

本紙は明治三十八年八月三十一日、媾和談判成立の號外を發行し、翌九月一日には「屈辱的媾和の成立、噫百年の長計を誤れり」「戰爭の報酬、噫單にこれに止まるか」と一、二面全部を費して悲壯激越の痛論を掲げ、翌二日は「第二の日露戰爭」、三日「元老閣臣の魯鈍」「空前の大屈辱」、五日「國民に檄す」六日「國民の奮起を要す」等々連日に亘つて外交の失敗を論じ國民の奮起を促す一方九州に於ける非媾和運動の先頭に立つて活躍した。

——九州に於ける非媾和運動は九月十五日の福岡市東公園に於ける福岡縣大會を皮切りに熱狂的なものがあつた。この日の參會者は五千、玄洋社長進が締結されるに及んで、國民の義憤は熱狂し、媾和問題同志聯合會の活動となり、有名な日比谷の燒き打事件を惹起するに至つた。

この申合せをした。九州同志記者大會の出席社は我が社を始め熊本二豐新聞馬關實業、熊本毎日、九州めざまし、九州日の出、佐賀新聞、西肥日報、長崎新報、鎭西日報、佐世保新報、佐世保新聞、佐世保軍港新聞等十四社に及び、我が社の高本雪浪は時局に關する挨拶をなし、左の決議案を可決し、非媾和輿論の中堅たるべきを申合せた。

決　議

一、屈辱媾和の破棄を期すること
二、現內閣及び元老をして引責せしめ自今國政に容喙せしめざること
三、代議士をして現政府に絕對的反對の態度を執らしむること

左は本紙に飜譯された旅順陷落に關する列國輿論の片鱗である。

△英國のタイムス紙＝ステツセル將軍の防守の頑强であつた事を一應賞揚し攻擊は防守に幾倍する難事業であることを述べ「攻圍者は今回執拗智略、及び絕倫の勇氣其他凡そ武士の本色とすべき一切の點に於て月桂冠は攻圍者の手に落ちざるを得ず」と激賞し、三國干涉の報復をあげ、旅順の陷落は日本軍に取つて戰爭の第二の目的を達したと。

△デイリー・テレグラフ＝タイムス紙と大同小異

△佛國ルタン紙＝「日本人の露國より旅順口を收めたるは復仇以上の價がある、是れ殆んど黃色人種勃興の前徵なり、歐洲人が黃色人に驅逐せられるとは今や單に空想に止まらずして現實なり」

同國社會黨の新聞は日本を賞讃

△獨逸＝旅順陷落の號外に群衆は街路に於て熱心に我軍の大勝を論評し、尊敬と賞讃の意を表した。

△フオツシュ・ツアイツング紙　日本軍は旅順陷落により士氣大いに振ひ露國に於ては今後益々惡結果を來すであらう。日本は確に有利なる狀態に於て新局面に望むものなり。

△クロイツ・ツアイツング紙＝日本軍の如き異常なる精力ある者にあらざれば旅順は今日尙安全なる避難所たるを得ん。

二〇、福本社長時代　劈頭の改善充實

第三代社長宮川武行は、滿六年經營に當り、明治三十八年十一月社長の椅子を新進の學徒福本誠(日南)に讓つて退いた。

福本は多年滿淸韓に遊び、東亞の問題に就いては一家の見を有し後、世界を漫遊した博識篤學の士であつた。政治經濟、教育、社會問題等到らざるなき有樣であつたが、就中、彼の文學は有名で、後に本紙に執筆連載した「元祿快擧錄」は、後世彼の名を代表する一つである。教育論、鄕土史等に關しても彼の研究は深く、在任中、縣下の中等學校、教育會等の講師として聘せられ、實に席溫まらぬ活躍をした。

福本は、社長就任と共に河波莞次郎を副社長に据ゑ、これに主として經營方面を擔當せしめ、自身は主筆を兼ねて堂々の論陣を張り、一方直に本紙の大改革に着手し、その「第一擧」を十二月一日より斷行した。

改善の第一は、全國地方新聞に卒先して年中無休刊(但し歲末三日、正月一日及び大祭祝日をのぞく)に加へて「日露戰後の經營難を讀者と共に分たん」ために紙價五錢引下げの斷行であつた。第二は通信網の完備强化であつた。即ち從來東京電報を介して採錄した外國電報を、ロイテル電報社と特約して直接本紙に揭載することになり、伯林、北京、京城電報の特約、東京その他內地各地の電報を增加して紙面の刷新、記事の速報充實陣容を强化したのであつた。この大革新發表に當つて、本紙の社告には「若し夫れ改善第二擧第三擧に至りては今より五ケ月以內に斷行し、一擧は一擧よりも壯且つ大ならんとす。意圖既に立ち計畫亦定まれり。是れ讀者諸君の豫じめ目を拭ひて待たれんことを希ふ所なり」と記載したが、果して(五ケ月以內ではなかつたけれども)翌三十九年八月一日には「改善第二擧」を實現せしめた。改善第二擧は新聞製作の原動力ともいふべき輪轉機の採用であつた——工場を擴張して從來のローラーに代ふるに最新式のマリノニー式色刷輪轉機及びその動力用としてナショナル式瓦斯エンヂンを据付けたが、東京以西の地方新聞中この輪轉機を使用したのは我が社を嚆矢とするもので、社員は勿論讀者もこれを誇りとし、題字の意匠、季節の揷畫、廣告など、日々工夫を凝らして紙面に現はされる配合の妙を極めた三色の鮮明さに人々は眼を睜つて感歎したものであつた。

かくて新社長を迎へて新天地を開拓した我が社は、あらゆる新機軸の活動に入り、三月二十二日(明治三十九年)には本社始めての企てである「九州日報讀者大會」を開催した。大會場は福岡市東公園の豫定を雨のため水茶屋常盤館に變更したが、雨にもめげず押寄せた愛讀者は七百五十名に達し、遠近各階層を網羅した賑やかさであつた。

大會は、岡澤麟太郎の開式の辭に始まり、大鳥居辨三、福本社長の講演、祝電披露、九州日報萬歲、愛讀者大會萬歲、閉式、宴會に移つて、藝妓の手踊、筑前琵琶、桃中軒雲右衛門の浪曲、義太夫など興を添へ、五色の花合戰で散會したが、一面識もない人々が「九州日報讀者」といふ精神的連

繋に結ばれて和氣靄々の懇親を交へたのは本社の感激であつた。

四月に入つてからは、福本社長を中心とする「談論會」が企てられた、第一回は六日に催され大鳥居辨三は「婦人と職業」を講演し福本社長は「明治の文學」を講じた、それ以來毎月第一日曜日の午後一時から開催、實際問題についての討論をたゝかはし時に應じて社會教育の公開講演會等を催したが、福本日南を崇拜する人々の參會多く盛會を極めた。七月には去る一月の東北地方の大饑饉地學童の義捐金募集を締切り、淨財五百七十八圓六十五錢を罹災地三縣當局に送り、九月には新聞記者の素質向上のため、本社最初の入社試驗を行ひ、一名採用した。

試驗は問題解答と口授筆記及び電話試用の三科目であつたが、全部滿足なものは一人もなかつた、受驗者の三分二は第一問の

（イ）歐洲列國の國名及び其首府名
（ロ）清國十八省及び東三省の省名
（ハ）清韓兩國の主たる開市場及び開港場名
（ニ）國家の組織並に各機關の機能

で躓いて、第二、第三迄殘つたものは、七十人中僅かに三人であつた。この殘された三人は當時の尋常中等卒業生であつたので、本紙は「今後の社會では才や器用ばかりでは事に應ずることは出來ぬ。是れ位容易な問題が出來ないとは思はれなかつた。是非とも相應の學殖素養がなくてはならぬ」と記載してゐる。續いてこの月の二十三日には再び採用試驗を行つて二人採用した

十月一日から筑後地方讀者の爲に「久留米欄」を設け、同地方の記事を滿載したが、本紙、地方版の特設はこれを以て嚆矢とする。

次いで第二回讀者大會を十月十七日福岡市龜山銅像前廣場で擧行したが、細雨を衝いて集まる愛讀者は五千名に達した。

色刷輪轉機を設備した本社は、色刷による廣告料金を規定した。

△第一頁の特別廣告欄＝一色一行七十五錢、二色一行一圓、三色一行一圓二十五錢

△第八頁の廣告欄＝一色一行五十錢、二色一行七十五錢、三色一行一圓

（但し第八頁の廣告は五十行以上の依頼に應ず）

福本社長の改善充實案は停止するところなく次々と發表敢行されて、明治三十九年は我が社の歴史に特筆すべき年となつた。輪轉機による印刷を開始して間もなく、十月三十一日には從來の木版畫に代ふるに近代的寫眞印刷が開始された。寫眞版の開始は勿論本紙面の重要なる劃期をなすもので、これに依つて創刊以來二十年間、不便不完全を極めた木版畫による報道から解放され從來、記者の不完全なスケツチを印刻して報道してゐたニュース寫眞は文明の光澤輝かしい寫眞版となり、これによる最初の寫眞は、ロセツタ丸といふ汽船が岸壁に繋留されてゐるところであつたが、鮮明に印刷されて新時代の新聞として面目を一新した。四十年に入つてからは時事寫眞の外に連日「浮世畫報」や「名士畫報」として色刷裝飾入りの人物寫眞を掲載して、好評を博した。

ロセツタ丸の寫眞版

色刷當時の本紙題號

明治四十年二月には早稻田出の赤木龜一（格堂）が編輯長として入社し、福本主筆を輔けたが、間もなく退社した。

四月には法律相談欄を設けて法律問題の指導に當つた。又この月には第二回の素人淨瑠璃の懸賞募集を行つたが、前回以上の盛況で第一位は若松の瓜生龍笛が五萬五千八百三十八票を獲得し、五萬三千八百十五票を獲得して第二位となつた直方の平野開月と共に一等賞に當選し、四月廿四日、博多東中洲壽座で賞品授與式を兼ねた當選者の披露淨瑠璃大會を催したが非常な盛況であつた。我社のこの二回に亘る催しは北九州に於ける淨瑠璃熱を高調せしめ、斯道への貢獻は同好者の忘れ得ぬところであらう。

八月一日からは次の如く廣告料金を改定した。

△五號十九字詰一行一回三十錢△二回三回二十七錢△四回以上二十五錢△特別廣告一行一回六十錢△同雜報欄內廣告五行四圓五十錢△同十行八圓△寫眞版廣告鯨尺一寸一坪二圓五十錢

明治四十年八月九日は、創刊六千號を迎へ、二十頁の記念號を發行し讀者優待の大福引を行ひ、社員一同も業を休んで祝盃を擧げた。

嗚呼平岡浩太郎君

嗚呼我帝國、今又一人の名士平岡浩太郎君を失へり。君が一代の事蹟を顧みれば光輝ある明治政史の一分を顯現せり。

君の此の世に來りたるは、米國の艦隊太平洋の波浪を破り、浦賀の海關を叩きたる前々年、卽ち嘉永四年の六月廿日に在り君を包みたる襁褓は、海內擾亂の衣なりき。之に襁かれ之に褓かれて漸く亂髮の間を經たり。而して君が生鄉地行の一角より俊傑濟々相踵ぎて起てり。寡園氣の涵養する所は、君をして又一個の天下の士たるに至らしめたり。

明治元年、君始めて十八歲、故有栖川宮熾仁親王大總督となり、錦旗を進めて東征し給ふに從ひ、江戶に於ては上野に戰ひ下總に轉じては船橋に闘ひ遂に王師に屬して仙臺を壓し、奥州の平定を待ちて始めて振旅せり。見であり、本紙をして名實共に九州の覇王たらしむべく、私財を投じて改善充實の途上、平岡を喪つたことは本紙にとつても大きな損失であつた。平岡の葬儀は十月廿九日彼が生前の功業に相應しい地行西町の菩提寺眞福寺で盛大に執行され、こゝにある祖先の墓地に永眠した。

左は平岡の死を哀悼する福本日南の名文「嗚呼平岡浩太郎君」の摘記である。（葬儀當日寫眞と共に本紙第一面に掲載）

試驗は問題解答と口授筆記及び電話試用の三科目であつたが、全部滿足なものは一人もなかつた、受驗者の三分二は第一問の

（イ）歐洲列國の國名及び其首府名
（ロ）清國十八省及び東三省の省名
（ハ）清韓兩國の主たる開市場及び開港場名
（ニ）國家の組織並に各機關の機能

で躓いて、第二、第三迄殘つたものは、七十人中僅かに三人であつた。この殘された三人は當時の尋常中等卒業生であつたので、本紙は「今後の社會では才や器用ばかりでは事に應ずることは出來ぬ。是れ位容易な問題が出來ないとは思はれなかつた。是非とも相應の學殖素養がなくてはならぬ」と記載してゐる。續いてこの月の二十三日には再び採用試驗を行つて二人採用した

十月一日から筑後地方讀者の爲に「久留米欄」を設け、同地方の記事を滿載したが、本紙、地方版の特設はこれを以て嚆矢とする。

次いで第二回讀者大會を十月十七日福岡市龜山銅像前廣場で擧行したが、細雨を衝いて集まる愛讀者は五千名に達した。

色刷當時の本紙題號

明治四十年二月には早稻田出の赤木龜一（格堂）が編輯長として入社し、福本主筆を輔けたが、間もなく退社した。

四月には法律相談欄を設けて法律問題の指導に當つた。又この月には第二回の素人淨瑠璃の懸賞募集を行つたが、前回以上の盛況で第一位は若松の瓜生龍笛が五萬五千八百三十八票を獲得し、五萬三千八百十五票を獲得して第二位となつた直方の平野開月と共に一等賞に當選し、四月廿四日、博多東中洲壽座で賞品授與式を兼ねた當選者の披露淨瑠璃大會を催したが非常な盛況であつた。我社のこの二回に亘る催しは北九州に於ける淨瑠璃熱を高調せしめ、斯道への貢獻は同好者の忘れ得ぬところであらう。

八月一日からは次の如く廣告料金を改定した。

△五號十九字詰一行一回三十錢△二回三回二十七錢△四回以上二十五錢△特別廣告一行一回六十錢△同雜報欄內廣告五行四圓五十錢△同十行八圓△寫眞版廣告鯨尺一寸一坪二圓五十錢

明治四十年八月九日は、創刊六千號を迎へ、二十頁の記念號を發行し讀者優待の大福引を行ひ、社員一同も業を休んで祝盃を擧げた。

二二、平岡浩太郎逝去

明治三十九年十月廿四日、社主平岡浩太郎は五十六歲で病歿した。

平岡は、創立者頭山滿の後を承けて明治三十一年五月、第二代の社主となり、的野、宮川、福本、三代社長の積極的後援者として我が社の大改革、大飛躍を成さしめつゝあつた。福陵新報を「九州日報」と改題したのも平岡の意見であり、本紙をして名實共に九州の覇王たらしむべく、私財を投じて改善充實の途上、平岡を喪つたことは本紙にとつても大きな損失であつた。平岡の葬儀は十月廿九日彼が生前の功業に相應しい地行西町の菩提寺眞福寺で盛大に執行され、こゝにある祖先の墓地に永眠した。

左は平岡の死を哀悼する福本日南の名文「嗚呼平岡浩太郎君」の摘記である。（葬儀當日寫眞と共に本紙第一面に揭載）

嗚呼平岡浩太郎君

嗚呼我帝國、今又一人の名士平岡浩太郎君を失へり。君が一代の事蹟を顧みれば光輝ある明治政史の一分を顯現せり。

君の此の世に來りたるは、米國の艦隊太平洋の波浪を破り、浦賀の海關を叩きたる前々年、卽ち嘉永四年の六月廿日に在り君を包みたる襁褓は、海內擾亂の衣なりき。之に襁かれ之に褓かれて漸く亂髻の間を經たり。而して君が生鄉地行の一角より俊傑濟々相踵ぎて起てり。雰圍氣の涵養する所は、君をして又一個の天下の士たるに至らしめたり。

明治元年、君始めて十八歲、故有栖川宮熾仁親王大總督となり、錦旗を進めて東征し給ふに從ひ、江戶に於ては上野に戰ひ下總に轉じては船橋に鬪ひ遂に王師に屬して仙臺を壓し、奧州の平定を待ちて始めて振旅せり。國士たらんと欲するの意は兩肩に聳やかせる双峰に現はれ來りたり。

海內統一の業に次ぎて國家の急務は當然兵制の建立にありき奇才の少年は早くも此の急務を先見せり。藩に歸りて同志と俱に就戰隊の一隊を組織し、兵制改革を藩廳に迫りたり。藩廳にして之を聽かざれば、一隊皆屠腹して藩主を警省せんと欲するに在りき。

此の際從容戰に就かんと志すもの乃ち隊名として自ら命ぜし所以なりき福岡藩の兵制は是れより變革せり顧ふに是れ事へし所の一藩に對する貢獻

ロセツタ丸の寫眞版

從來、記者の不完全なスケツチを印刻して報道してゐたニユース寫眞は文明の光澤輝かしい寫眞版となり、これによる最初の寫眞は、ロセツタ丸といふ汽船が岸壁に繫留されてゐるところであつたが、鮮明に印刷されて新時代の新聞として面目を一新した。四十年に入つてからは時事寫眞の外に連日「浮世畫報」や「名士畫報」として色刷裝飾入りの人物寫眞を揭載して、好評を博した。

開始された。寫眞版の開始は勿論本紙面の重要なる劃期をなすもので、これに依つて創刊以來二十年間、不便不完全を極めた木版畫による報道から解放され

のみ然も其の實は是れ國家の要求を代表せり異日一國兵備の基礎確然として帝國の上に建立したりしは此の氣の磅薄に由らざる莫らんや。

次に帝國に期待されたるは、卽ち國權の振張に在りて、國士の間に意見は衝突せり。內地を先にせんと固執せしは故岩倉公故大久保公等にして、國權を先にせんと主張せしは故西鄕公、故江藤公等なりき。海內の統一は何の爲ぞ。兵制の改革は何の爲ぞ。多年一日國權を伸張し、名譽ある國光を四表に照輝せんと欲せしが爲なるのみ。我鄕の志士は皆西鄕に黨せり。明治十年新政原德の大旆九州の一角に飜るに及び、建部、越智、久光、舌間等諸子と倶に、君は鄕曲より蹶起せり。城南の一戰競はずして衆散じ、福岡に於て復た爲すべからず。是に於てか君は孤劍敵地を間行して薩軍に投じ、客將として西鄕、桐野、逸見、池上諸豪に器重せられ、可愛嶽の突出の如きは實に君が獻策に出でたり。既にして官軍の手に落ち、一年有餘囹圄の月を看たり。

明治十二年、君は放歸せられて故山に復すれば國勢は漸く進みて立憲政體の創建を要望せり、鄕志士の結社せる向陽社は、大同に合して玄洋社となりて、君は社長の印綬を佩びたり。縣に在りては一縣の公衆を提撕し共愛會に牛耳を執り、縣を出でゝは海內の同志を糾合して愛國社に重位を占めたり。

斯の如くして天下の輿論を代表して、國會開設を政府に建白すること一再ならず明治十四年に至り遂に立憲豫約の大詔は煥發せられたり。曰く海內の統一、曰く兵制の改革、曰く國權の振張、曰く憲政の創立、國家今日の盛運に至るの要求にして君の力を致し心を盡さざる所あらず、唯此の四事業のみにても其の人を明治の政史上に遺留するに餘りあり。

立憲の大詔既に煥發し、國會の開期亦既に決定せり。是に於てか君は將來憲制中の一大政治家たらんことを深思せり。其の意に謂へらく、身を一國の政治に任じ天下の經倫を事とせんと欲せば、歐米列國の政治家の家く資產を以て之に副するもの無かる可からず。淵に臨みて魚を羨まんよりは退きて網を結ぶに如かじと、乃ち徒手空拳を揮ひて、筑前に於ては中間及び金剛の炭坑、豐前に於ては某の銅山開掘に從事せり。

既に徒手を以て業を起し、又空拳を揮ひて事を營まんとす。艱險は固より其の處なり。坑衆の糧食給せざるに當りては、糠を浸し大根を交へ、羹に炊きて之を食せしむるに至りたるも義故數十人從いて散ぜず。拮据數年在ゆる辛酸を嘗め、明治二十一年に至りて安川敬一郎氏と力を戮せ赤池炭坑を開業するに至りて始めて起色あり。次いで山本貴三郎氏と豐國炭坑を經營するに及び、前坑後坑と年は一年より盛運に赴き、筑豐の一隅に一個の大事業家平岡浩太郎あることを遠近に喧傳するに至れり。是に於て我將に言はんとす工業の發達は富國の要務に於て國に一日も缺ぐ可からざる所にして、君はこの方面に嚮ひても又挺身先鞭を着け、國民にその針頭を示したり。

故平岡浩太郎君

葬儀當日に掲載されし平岡氏像

是の時に當りて君を知らざるものは、君は永く事業界中の人たる可きを想見せり、誰か知らん、是れ食を足して兵を膽し、而る後軍を出さんとの戰鬪準備ならんとは、明治廿七年九月の臨時選擧開くるに及び君は突然として身を事業界より起し、競爭壇上に打つて出で、一擧にして衆議院議員に登り、爾後三十一年三月の第五回臨時選擧、同年八月の第六回選擧、三

十六年三月の第八回臨時選擧、三十七年三月の第九回臨時選擧を通じ眞に十年一日の如く九州一角の國民を代表して日比谷の議場に周旋せり、是に於て乎、人始めて君が先見の明と立志の杜とに嘆服せり。

君の公生涯に入りしより、國務に貢獻せしもの一つにして足らず。中に就きて尤大顯著たるものを擧げんか、明治三十一年伊藤內閣の終りを告ぐるや、維新以降馴致したる藩閥の慣習は例によりて他の閥家の政治家に移さんとす。此の間小機の開くるあり。君說を立てゝ曰く、政黨內閣の創立を策するは、實に此の秋にありと、乃ち內は大隈伯に勸說して進步自由の兩黨を合同せしめ、外は伊藤侯及び井上伯に遊說して責任內閣の已むべからざるを感悟せしめ終に憲政內閣を翼立するに至らしめたるもの、實に浩太郎君其の人の力なりき。是れを以て當時の新內閣は君に擬すに遞信大臣の席を以てせり。君之を辭謝して曰く、人の爲に難を排し紛を說き報を求めざる者は仲連の學びし所にして、浩太郎の常に欽する所、我は鎭西八郎にして足れり、何ぞ大臣たることを要せんや、と終に受ず。人益々其の高節に服せり。

明治三十六年日露の國交繆葛を加ふるや、朝野露の大敵たるを意とし、遲疑逡巡の情あり。君亦同志の士と卒先して對露同志會を組織し、大いに戰議を主張し、入りては臺閣の卿相を悚動し、出でゝは國民の義憤を激勵し、終ひに聖詔煥發し、六軍堂々海を越ゆるの氣運を招致せり。平生君と

り、是に於てか淸廷亦感悟し、日淸の事宜始めて和好に向ひたり。是れ我之を說かざるも臺閣の某々侯伯等が今尙ほ牢記する所ならん。之を君が政界掉尾の飛躍とす。

此行、君は燕雲を破り、遼水を涉りて、多く寒暑を冒し、是れより健康甚だ勝れず。今年に入りて大患に罹り、終に起たず。今月今日、此の一代の名士を故山に葬る。悲しい哉。（福本誠謹記）

平岡浩太郎の死に伴ふ衆議院議員補缺選擧は十一月十五日執行されたが玄洋社長進藤喜平太が當選した。

二二、久田全、吉林省に捕へらる

日露戰後、國內は「戰後經營」に奔命し、大戰によつて疲弊せる國力の回復飛躍に總動員した。本紙も亦その指導的立場に立つて戰後經營の萬全を期するため、その全機能を發揮して當局者並に國民の注意を喚起し烈々たる「國士新聞」の眞面目を發揮したが、本社の母胎である玄洋社の所謂大陸政策は遂に駐足を伸し、社員をして續々と大陸に於て活躍せしめるまでに至つた。その一人久田全は元來本社の庶務部長であつたが、重要使命を帶びて吉林方面を調査旅行中、軍事探偵の嫌疑を受けて露軍に捕へられ遂に二ケ月間ハルビンの獄舍に繫がれる不幸に遭遇した。當時、本紙に掲載された「久田全の「入

投じ、客將として西郷、桐野、逸見、池上諸豪に器重せられ、可愛嶽の突出の如きは實に君が献策に出でたり。既にして官軍の手に落ち、一年有餘囹圄の月を看たり。

明治十二年、君は放歸せられて故山に復すれば國勢は漸く進みて立憲政體の創建を要望せり、鄉志士の結社せる向陽社は、大同に合して玄洋社となりて、君は社長の印綬を佩びたり。縣に在りては一縣の公衆を提撕し共愛會に牛耳を執り、縣を出でゝは海内の同志を糾合して愛國社に重位を占めたり。

斯の如くして天下の輿論を代表して、國會開設を政府に建白すること一再ならず明治十四年に至り遂に立憲豫約の大詔は煥發せられたり。曰く海内の統一、曰く兵制の改革、曰く國權の振張、曰く憲政の創立、國家今日の盛運に至るの要求にして君の力を致し心を盡さざる所あらず、唯此の四事業のみにても其の人を明治の政史上に遺留するに餘りあり。

立憲の大詔既に煥發し、國會の開期亦既に決定せり。是に於てか君は將來憲制中の一大政治家たらんことを深思せり。其の意に謂へらく、身を一國の政治に任じ天下の經倫を事とせんと欲せば、歐米列國の政治家の家くることを遠近に喧傳するに至れり。是に於て我將に言はんとす工業の發達は富國の要務に於て國に一日も缺ぐ可からざる所にして、君はこの方面に鄉ひても又挺身先鞭を着け、國民にその針頭を示したり。

是の時に當りて君を知らざるものは、君は永く事業界中の人たる可きを想見せり、誰か知らん、是れ食を足して兵を膽し、而る後軍を出さんとの戰鬪準備ならんとは、明治廿七年九月の臨時選擧開くるに及び君は突然として身を事業界より起し、競爭壇上に打つて出で、一擧にして衆議院議員に登り、爾後三十一年三月の第五回臨時選擧、同年八月の第六回選擧、三

故平岡浩太郎君

儀當日に掲載されし平岡氏像

十六年三月の第八回臨時選擧、三十七年三月の第九回臨時選擧を通じ眞に十年一日の如く九州一角の國民を代表して日比谷の議場に周旋せり、是に於て乎、人始めて君が先見の明と立志の杜とに嘆服せり。

君の公生涯に入りしより、國務に貢獻せしもの一つにして足らず。中に就きて尤大顯著たるものを擧げんか、明治三十一年伊藤内閣の終りを告ぐるや、維新以降馴致したる藩閥の慣習は例によりて他の閥家の政治家に移さんとす。此の間小機の開くるあり。君說を立てゝ曰く、政黨内閣の創立を策するは、實に此の秋にありと、乃ち内は大隈伯に勸說して進歩自由の兩黨を合同せしめ、外は伊藤侯及び井上伯に遊說して責任内閣の已むべからざるを感悟せしめ終に憲政内閣を翼立するに至らしめたるもの、實に浩太郎君其の人の力なりき。是れを以て當時の新内閣は君に擬すに遞信大臣の席を以てせり。君之を辭謝して曰く、人の爲に難を排し紛を說き報を求めざる者は仲連の學びし所にして、浩太郎の常に欽する所、我は鎭西八郎にして足れり、何ぞ大臣たることを要せんや、と終に受ず。人益々其の高節に服せり。

明治三十六年日露の國交繆葛を加ふるや、朝野露の大敵たるを意とし、遲疑逡巡の情あり。君亦同志の士と卒先して對露同志會を組織し、大いに戰議を主張し、入りては臺閣の卿相を悚動し、出でゝは國民の義憤を激勵し、終ひに聖詔煥發し、六軍堂々海を越ゆるの氣運を招致せり。平生君と政見を異にし、相容れざるの政治家と雖も其の熱誠に感ぜざるはあらざりき。是に至りて君が宿昔の素望たる國權の振張、始めて大に達するを得たり。

皇軍大に朔北に克ちて、强露亦和を求めんとす。而して淸廷頑鈍、動もすれば我國の提案に異議あり。政府の當局頗る之が懷柔に困しめり。仲連亦起てり、明治三十八年の夏、君は内命を卹みて北平に入り、北廷大臣の間に歷遊し、說くに我國意の在る所と、淸國の利害とを以てし兩端を叩けり、是に於てか淸廷亦感悟し、日淸の事宜始めて和好に向ひたり。是れ我之を說かざるも臺閣の某々侯伯等が今尙ほ牢記する所ならん。之を君が政界掉尾の飛躍とす。

此行、君は燕雲を破り、遼水を涉りて、多く寒暑を冒し、是れより健康甚だ勝れず。今年に入りて大患に罹り、終に起たず。今月今日、此の一代の名士を故山に葬る。悲しい哉。(福本誠謹記)

平岡浩太郎の死に伴ふ衆議院議員補缺選擧は十一月十五日執行されたが玄洋社長進藤喜平太が當選した。

二二、久田全、吉林省に捕へらる

日露戰後、國内は「戰後經營」に奔命し、大戰によつて疲弊せる國力の回復飛躍に總動員した。本紙も亦その指導的立場に立つて戰後經營の萬全を期するため、その全機能を發揮して當局者並に國民の注意を喚起し烈々たる「國士新聞」の眞面目を發揮したが、本社の母胎である玄洋社の所謂大陸政策は遂に駐足を伸し、社員をして續々と大陸に於て活躍せしめるまでに至つた。その一人久田全は元來本社の庶務部長であつたが、重要使命を帶びて吉林方面を調査旅行中、軍事探偵の嫌疑を受けて露軍に捕へられ遂に二ケ月間ハルビンの獄舍に繫がれる不幸に遭遇した。當時、本紙に掲載された久田全の「入獄記」を左に摘錄しておかう。

哈爾賓入獄記

昌國府にて　久田全

我等の一行卽ち日本人五名及び小使として雇傭せる支那人一名は、五月十七日吉林方面踏査のために開原を出發した。支那語に精通せる某が同行する筈であつたが、來り合せざる爲めに我等は全く啞の一行である。先づ一直線に東北を指して長白山から吉林の背後に出で、そして市街に入り込まふといふ目論見を立てた

正面の大道を行けば雜作はないのであるが、到る處に露兵が駐屯してゐるので捕へられては事業に障碍を來すと懸念したからである。

六月一日西安縣を發し間道を擇み伊通崎に向つた所、馬車頭が地理に暗く遂に路を失ふて險惡なる山道の荊棘を開きつゝ滅茶々々に進んだ。其の內に日が暮れて愈々困難したが、一行の先頭にあつた余は逸早く伊通崎の火光を認め一行を勵して或る旅館らしいものに飛込んだのである。然るにそれが旅館ではなくて露兵の宿舍であつた。一人殘らず引揚げた筈の露兵が銃劍で目を光らしてゐたのだから驚く。倉皇馭者を叱咤して馬首を轉じて數町逃げのびたが、疾風の如きコザツク兵の追跡には如何とも出來ず、彼等の包圍を受け遂に彼等のなすがまゝに捕へられたまゝ伊通崎に連行された。

伊通崎に到るや彼等は何かと詰問したが、言語不通で辯解も出來ず、かくて彼等は余等一行を軍事探偵と目して翌日公主領に護送したのである。

その日の中に公主領の守備隊長に引渡され、手荷物及び所持品を檢査された。勿論一行の手荷物の中には刀劍、短銃、余の所持品中には將校用の腰帶や靴が陰されてあつたのだから隊長が余等を變裝軍人が軍事探偵の目的を以て入り込んだものと推定したのは無理からぬことであつたらう。たゞ行李を搜つた繩を指して河流の深淺を測量するに用ゆるものであらうと詰問された時には全く辯解の辭に苦しんだ。言語不通による彼等の勝手な認定は結局余等にとりて非常な不利を來し、隊長はハルビン總司令官へ向け針小棒大の報告をなすに至つたのである。

拘束釋くに由なく、六月九日午後四時、一行は牛の如き露兵の看視の下にハルビンに護送されたのである。

翌十日早朝ハルビンに著き投獄され十一日更に他の獄舍に轉ぜられ、十二日一同は呼び出されて第一回の審問を受けた。此時我等は若し支那人を通辯にすればれんことを要求した。

將校室を以て審問所に充て、中央には佐官位の係長官が椅子を占め外に四、五人の將校が陪席し、余等は一人宛呼び出され、審問を受けたが、陪席將校中に一人の日本人がゐることに余等は等しく驚き且つ慨嘆したのである。然し幸にも彼は我が帝國軍人ではなく橫濱在住の露人と日本の所謂洋妾との間に出來た混血兒であつた。尙序に云つておくが彼は後に日本人が長春以南の鐵道接受の際にも露國側の通辯として立會つたのを見た。

第一回の取調べ後、暑氣の烈しいのと食物の急變から多少惡くしてゐた、眼病が惡化し、加るに下痢を起し非常に苦んだのであるが、看視の兵が余の症狀を軍醫に報告したものと見え、軍醫が診察に來て每日看護長が手當に來て呉れたが言語不通のため、下痢の意味が通ぜず眼病の方のみの手當で、眼は日に增快癒して來たが、下痢は治まらず、これには流石余も閉口した。

其月の二日頃だつたかと思ふ。五六名の武裝せる兵士がドカ〳〵と獄舍に來て余一人に轉獄を申渡した。余思へらく、自分の生命も今日一日なるべし。余が士官用の鞄を携帶し然かも一行中最年長者であり、言語不通のこと、疑念は余一人に懸つてゐるかの如く見受けられてゐたものゝ如く今日は銃殺さるべし。と。かく觀念しつゝ兵士に引かれ二、三十町行つた頃、赤十字旗を飜せる建物の前に到着した。余は銃殺されるのでなく彼等の厚遇を受けたのであつた。これには余も自分の早合點に苦笑した次第である。

入院はしたものゝ玆でも余は眼病のみの手當で、手眞似や、繪を書いて下痢樣子をやつとの思ひで知らせることの出來た時には言語不通の悲哀をしみ〴〵と感じた。六月下旬下痢が一旦全快したのであるが、其後再び嘔吐、下痢等を起し一時は四十度の發熱を見、病源不明には困つた。同室の露國革命黨の士官は余に非常に同情し、露軍醫の技術の拙劣を罵倒し、早く狀を具して日本官衙に訴へんことを微細に親切に敎へて呉れた。

余はこの親切なる敵國の革命黨員の敎へを實行に移すべく種々苦心の末、結局監獄病院の入院者には同國人に限り來訪が許されてあるの利用するに如かずと思ひ、この黨員を來訪する妻女に浦鹽領事宛の手紙の投函を依賴した。勿論この手紙が正確に領事の手に渡るかどうか疑問であるので內容については開封されても差支ない程度の文意を認めておいたのである。（中略）

余等の入獄中向ひ側の獄舍に我が鐵道技師、工夫四五名が矢張り投獄されてゐた。彼等は公主領にありて勤務中、境界線を越へて捕へられたのだそうで技師は余の友人的野氏の知己の由。

七月廿六日退院、再び一行の人々と同房に起居することになり、二十九日ハルビン出發、三十日長春著、再び入獄。丁度同日長春江南の鐵道接受のため中村將軍以下の日本委員が來春されてゐたので漸く一行は釋放され、午後中村將軍以下委員の歸還される列車に同車を許され公主領著と共に我が憲兵隊に引き渡され自由の身となるを得たのである。

二三、福本社長の代議士當選

第十回の衆議院議員總選擧は明治四十一年五月十五日施行されたが、本社社長福本誠は憲政本黨から立候補して當選するを得た。當時の福本社長が本紙に連載された「自薦狀」廣告文の概要を左に摘記して當時の選擧模樣を知る一端に供しやう。

自薦狀　小生不肖には候へども、國民の一員として議會に立ち、國家の公事を圖議するに於て、敢て人後に落ちざることを自信仕る者に候。

右につき小生の心事を在體に申候へば、假ひ一地方には不利益と相成り候とも、一國の公利公益と確認し候ふ場合には、躊躇なく一國のためにせんと存ずる者に候。

之に反して、一國の公利公益を害せずして、地方の福利を高む可き事實に逢著し候ふ時は、專心に地方のためにせんと存ずる者に候。

此段々たる心事は神明も知ろし召さる可く、是に由りて本縣を代表し、國的野半平（憲本）　福本誠（憲本）　庄野金十郎（政友）　野田卯太郎（政友）永江純一（政友）　富安保太郎（政友）

有名な福本日南の「元祿快擧錄」が本紙に揭載され始めたのは、氏が代議士に當選して間もなく、卽ち明治四十一年八月十一日で、爾來回を重ねる事二百九十五回に涉つた。氏の意圖せる「義士正史」は豐富な資料と文學的天分によつて洛陽の紙價を高からしめたもので、これにより本紙の賣行增大も素晴しいものであつた。左に當時氏が語つた「快擧錄」に對する意圖を引用しておかう。

「―赤穗浪人四十七士が復讐の一擧は日本武士道の花である。從つて芝居にも演ぜらるれば、講談にも上せられる。小說にも入れば、浪花節にも謠はるゝ。支那にも聞こへ、歐米にも傳はつて之を欽仰せぬ者はない。さりながら、芝居や小說や浪花節や、是等は流俗の俗趣味に投ぜんが爲に、それからそれと架空の談を揑造して、可惜四十七士の眞面目と時代の情態とを窺ふに足らぬ。尤も眞確にして信を置くべき好著として、室鳩巢の「赤穗義人錄」や三宅觀瀾の「烈士報讐錄」や、青山佩弦齋の「赤穗四十七士傳」等の如き書のないではない。さりながら之等は餘りに尙古に過ぎたると、窮屈な漢文の桎梏に入れたので、述べて詳かならず、語つて精しからざる遺憾がある。それで今年夏期の休暇を利用し、自分が信用する參考書に基

伊通崎に到るや彼等は何かと詰問したが、言語不通で辯解も出來ず、かくて彼等は余等一行を軍事探偵と目して翌日公主領に護送したのである。

その日の中に公主領の守備隊長に引渡され、手荷物及び所持品を檢査された。勿論一行の手荷物の中には刀劍、短銃、余の所持品中には將校用の腰帶や靴が陰されてあつたのだから隊長が余等を變裝軍人が軍事探偵の目的を以て入り込んだものと推定したのは無理からぬことであつたらう。たゞ行李を搜つた繩を指して河流の深淺を測量するに用ゆるものであらうと詰問された時には全く辯解の辭に苦しんだ。言語不通による彼等の勝手な認定は結局余等にとりて非常な不利を來し、隊長はハルビン總司令官へ向け針小棒大の報告をなすに至つたのである。

拘束釋くに由なく、六月九日午後四時、一行は牛の如き露兵の看視の下にハルビンに護送されたのである。

翌十日早朝ハルビンに著き投獄され十一日更に他の獄舍に轉ぜられ、十二日一同は呼び出されて第一回の審問を受けた。此時我等は若し支那人を通辯にすれば却而不利益を生ずるやも知れずと考へたので斷然審問に應ぜず軍衛に於て審問されんことを要求した。

將校室を以て審問所に充て、中央には佐官位の係長官が椅子を占め外に四、五人の將校が陪席し、余等は一人宛呼び出され、審問を受けたが、陪席將校中に一人の日本人がゐることに余等は等しく驚き且つ慨嘆したのである。然し幸にも彼余一人に轉獄を申渡した。余思へらく、自分の生命も今日一日なるべし。余が士官用の鞄を携帶し然かも一行中最年長者であり、言語不通のこと、疑念は余一人に懸つてゐるかの如く見受けられてゐたものゝ如く今日は銃殺さるべし。と。かく觀念しつゝ兵士に引かれ二、三十町行つた頃、赤十字旗を飜せる建物の前に到着した。余は銃殺されるのでなく彼等の厚遇を受けたのであつた。これには余も自分の早合點に苦笑した次第である。

入院はしたものゝ玆でも余は眼病のみの手當で、手眞似や、繪を書いて下痢樣子をやつとの思ひで知らせることの出來た時には言語不通の悲哀をしみ〴〵と感じた。六月下旬下痢が一旦全快したのであるが、其後再び嘔吐、下痢等を起し一時は四十度の發熱を見、病源不明には困つた。同室の露國革命黨の士官は余に非常に同情し、露軍醫の技術の拙劣を罵倒し、早く狀を具して日本官衛に訴へんことを微細に親切に敎へて呉れた。

余はこの親切なる敵國の革命黨員の敎へを實行に移すべく種々苦心の末、結局監獄病院の入院者には同國人に限り來訪が許されてあるの利用するに如かずと思ひ、この黨員を來訪する妻女に浦鹽領事宛の手紙の投函を依頼した。勿論この手紙が正確に領事の手に渡るかどうか疑問であるので內容については開封されても差支ない程度の文意を認めておいたのである。（中略）

余等の入獄中向ひ側の獄舍に我が鐵道技師、工夫四五名が矢張り投獄されてゐた。彼等は公主領にありて勤務中、境界線を越へて捕へられたのだそうで技師は余の友人的野氏の知己の由。

七月廿六日退院、再び一行の人々と同房に起居することになり、二十九日ハルビン出發、三十日長春著、再び入獄。丁度同日長春江南の鐵道接受のため中村將軍以下の日本委員が來春されてゐたので漸く一行は釋放され、午後中村將軍以下委員の歸還される列車に同車を許され公主領著と共に我が憲兵隊に引き渡され自由の身となるを得たのである。

二三、福本社長の代議士當選

第十回の衆議院議員總選擧は明治四十一年五月十五日施行されたが、本社社長福本誠は憲政本黨から立候補して當選するを得た。當時の福本社長が本紙に連載された「自薦狀」廣告文の概要を左に摘記して當時の選擧模樣を知る一端に供しやう。

自薦狀　小生不肖には候へども、國民の一員として議會に立ち、國家の公事を圖議するに於て、敢て人後に落ちざることを自信仕る者に候。

右につき小生の心事を在體に申候へば、假ひ一地方には不利益と相成り候とも、一國の公利公益と確認し候ふ場合には、躊躇なく一國のためにせんと存ずる者に候。

之に反して、一國の公利公益を害せずして、地方の福利を高む可き事實に蓬著し候ふ時は、專心に地方のためにせんと存ずる者に候。

此皎々たる心事は神明も知ろし召さる可く、是に由りて本縣を代表し、國家に使ひし候はゞ、民命を辱しむることこれ無かる可しと確信仕り居り候此言明に對し信用を措かれ候はゞ小生を衆議院議員に御推薦下され度候

敬具

この時の福岡縣下の當選者は左の如くであつた。

太田清藏（政友）　淺野陽吉（猶興）　石田平吉（猶興）　古賀庸三（政友）　藏本次郎作（政友）　古野孫太郎（政友）　熊本素人（政友）　大內暢三（憲本）

的野半平（憲本）　福本誠（憲本）　庄野金十郎（政友）　野田卯太郎（政友）　永江純一（政友）　富安保太郎（政友）

有名な福本日南の「元祿快擧錄」が本紙に揭載され始めたのは、氏が代議士に當選して間もなく、卽ち明治四十一年八月十一日で、爾來回を重ねる事二百九十五回に涉つた。氏の意圖せる「義士正史」は豐富な資料と文學的天分によつて洛陽の紙價を高からしめたもので、これにより本紙の賣行增大も素晴しいものであつた。左に當時氏が語つた「快擧錄」に對する意圖を引用しておかう。

「—赤穗浪人四十七士が復讐の一擧は日本武士道の花である。從つて芝居にも演ぜらるれば、講談にも上せられる。小說にも入れば、浪花節にも謠はるゝ。支那にも聞こへ、歐米にも傳はつて之を欽仰せぬ者はない。さりながら、芝居や小說や浪花節や、是等は流俗の俗趣味に投ぜんが爲に、それからそれと架空の談を揑造して、可惜四十七士の眞面目と時代の情態とを窺ふに足らぬ。尤も眞確にして信を置くべき好著として、室鳩巢の「赤穗義人錄」や三宅觀瀾の「烈士報讐錄」や、靑山佩弦齋の「赤穗四十七士傳」等の如き書のないではない。さりながら之等は餘りに尙古に過ぎたると、窮屈な漢文の桎梏に入れたので、述べて詳かならず、語つて精しからざる遺憾がある。それで今年夏期の休暇を利用し、自分が信用する參考書に基いて、士流の爲に一擧の顚末を講演し、一つには武士道の一端を發揮し、又一つには歷史の參考に供しやうと存じたのであるー。」

本社は、「元祿快擧錄」揭載を記念として、十二月十四日夜、東公園聖福寺で第一回の戰士會を主催した。

當日の模樣は、記者矢田挿雲が名文で叙述してゐるが、白米三合宛を持つて集つた男女四百餘名、さすがに廣い聖福寺の本堂も一杯となつた。會は東瀛禪師（聖福寺）、猷山禪師（圓覺寺）を始め聖福寺及び崇福寺伴僧の讀經に

始まり、福本社長、東瀛禪師の講演があり、本社の筒井條之助が次の建議案を朗讀し、萬場異議なく可決した。

「元祿義士の快擧を追憶し、現世の士氣を涵礪せん爲め、義士會を組織し左の規約を結ぶ。

㈠、本會を義士會と稱し、士氣の鼓舞を以て目的とす、

㈡、本會は毎年十二月十四日の夜を以て開く、

續いて薩摩琵琶、居合拔などの餘興を催し、因緣深き粥をすゝつて往時を追懷し十二時過ぎ散會した。矢田挿雲の當夜の記事の一節を揭げて置かう。

「……委員は本堂一杯に椀を撒いた。否何も、椀撒などゝいふ古事がある譯ではないが、餘り人數が多いので膳も机も持ち出す餘地がない。仕方がないから疊の上へ椀と箸と澤庵漬の盆と燒昆布とを配つて歩く、其の跡から手桶を提げて廻る。手桶の中には粥がある。柄杓を入れて一攪し且つ配ち且つ進むに大椀小椀行手を遮ぎりて容易に捗取らぬ。一人、二人、三人と注いで四人目に及ばんとすれば最初の人は早や平げ終つて「敵に後を見するは卑怯なり。一寸歸し給へ」。など袖を引く。日暮れ路遠しの感がある。何しろ四百人以上の者が十七年の天津風といふ勢ひで一齊に箸を下すのであるから、其の壯觀偉觀たるや痛快淋漓を極むること無論である。…」

第一回旅行團

本社主催旅行團の第一回は明治四十年九月に決行された日光遊覽團體で、これは九州に於ける初めての企てゞあつた。したがつて、計畫發表と同時に申込み殺到、豫定の人員四百名はすぐ充たされて、一行を乘せた七臺連結の特別列車は、九月廿四日午後四時博多驛を出發した。副社長河波荒次郎がこの旅行團の團長で、特派員として編輯主事矢田義勝(挿雲)、及び久留米支局長田村和六、庶務係に波多江茂兵衛、附添醫師として尾岡定などが同行し、博多驛からは岩倉驛長と赤帽一名、九鐵管理局から書記、警手各一名、寫眞係は岩岐寫眞師、その他酒保係六名が行を共にして萬遺漏なきを期した。

旅程は、往路を宮島、岡山、神戸、大阪、京都、江の島、鎌倉、東京、日光にとり、歸路は伊勢、奈良、大阪を經て十月九日歸着、十六日に亘る大旅行であつた。會費は僅に二十四圓であつた。同行した矢田特派員は毎日一行の行動を報道し、沿道各地の新聞社では盛大に一行を送迎して土地の名産などを贈り、團員は何れも大喜びであつた。

二四、杉山茂丸時代

社主平岡浩太郎を失ひ、我が社の第三次、第四次改善計畫は挫折するに至つたが、福本社長は河波副社長と協力、平岡亡き後の我社を護り、全社員も福本社長の下に一丸となつて、難關の克服に努め、次々と地方新開界に巨砲を放つた。あたかも其際、我社非常時の經營を背負つて立つ河波副社長は、經營上の苦心から法の嫌疑を受けて拘引されるに至り、茲に於て、博學名文を以て本紙の紙價を高からしめた福本社長も、遂に數萬の讀者に惜まれながら河波副社長と共に、經營を杉山茂丸に讓つて退社した。同時に福本社長の德を慕ふ矢田挿雲、半田福平、川口重次、田中櫃二、村田正雄、熊谷源次郎雜賀博愛、宮崎六次、宮田太郎、三角司、瀨利安次郎等の社員も連袂して退社した。

かくて明治四十二年十二月、平岡浩太郎、福本日南の後を繼いで杉山茂丸が本社第三代の社主となつた。

――杉山は、元治元年、水戸派の漢學者灌園の一子として福岡に生れた。長ずるに及んでルソーの民約論や傾國美談の影響を受け、藩閥政府の橫暴を憤慨し、十七歲の時出奔して上京、山岡鐵舟の門に入つた。

杉山の波瀾を極めた生涯はこの時に始つて、昭和十年七月十七日、その生涯を閉ぢるまで、明治、大正、昭和の三聖代に亘る足跡は、さながら時代の原動力の觀を呈し、國會開設、日淸、日露の戰役、日韓併合、北鐵讓渡問題等をはじめ、國家の重要問題の蔭には悉く「杉山茂丸」があつたと云つて毫末の過言もない。

杉山は、本社の經營一切を引繼いで、明治四十三年一月廿五日の紙上に次の如く聲明した。

吾輩若冠の時より、四方に流寓し、或る時世の動機と、先輩の勸誘とに餘儀なくせられて、再び鄕關に入りて、鄕國の事を經營するに至りたるは正に明治十八、九年頃のことにて有りにき。吾輩當時、先輩の騏尾に從ひ鄕國の元氣振興策の第一着事業として、新聞紙の發刊を企圖し、之れを縣下同感の士の俠義に訴へ、晨に星を戴いて其の門を叩き、夕に月を踏んで里閭を來往し、一意專心、發起先輩の希望を貫徹せしめんことを勉めたりしに發起者の熱情、旺盛なりしと同時に、縣下同憂諸賢の贊助は、時世の觀察に相一致して、九州日報の前身、卽ち福陵新報の發刊を見るに至りしは、吾輩の今尙は快哉を謖るゝ能はざるのことに屬す、而して爾後、吾輩が屢々海外に遊びしと或る事情の爲め、居を東京に定めたるが爲め、其經營は、他の人士の與る處となりしも、實に十數年間、此の新聞紙が、鎭西の北隅に蟠踞して社會百般の表裏を雄視し、今尙ほ其精神を發揮せることは、一は、經營者の熱心と、一は縣下諸賢の幇助と相一致するの結果に非ざるよりは奚んぞ能く此の姿勢を保有するを得ん乎。

回顧すれば茫々夢の如く、故山の松柏蔽芾として拱把を增し、玄海の濤瀾韜藉として尙ほ汀涯を洗ふ、吾輩去りて茲に十數年、縣下の事業、百般の進步は朝に駿馬を、坦部に撻つが如く、朝令暮改にして、其の景影、趣きを改むるの時に、束薪、重荷の老樵、暮逕に之と駢馳を競ふは尤も笑ふべきもの、由來事業の經營は緩急各々其道あるを知る、今や吾國の朝野は、官民共に政治經濟の要綱を紊亂し、各々姑息の利名に迷倒し、淸、露二回の戰勝に得たるの國運は、內治、經營の拙劣に相殺して、長く帝國の病患を遺さんとす、已に此の根帶を刈除せんと期す、胡んぞ俗流と事の緩急遲速を競ひ、徒らに勞を厭ふて逸を求め只勢ひに媚びて憂國の本事を蔑如するに忍びんや、遮幾くば此の志を明諒して、左提、右挈、以て此の對國家の重責に助け有らしむると否らざるとは一に縣下諸賢の同情如何にありて存するを知了せられんことを、

紫溟の翠巒、鬱として八郊を擁し、淸流涓として其の間を縱橫す、諸賢が憂世の操姿も、亦長へに此の如きを見る、卽ち九州日報の多望、期して待つべし、矧んや其の前身たる福陵新報の創刱、已に諸賢の便義に因するは、散て當事者委囑の責めを免れんとするものに非ざるなり、夫れ勢力の微なるは事を沮廢し、經驗の少なきは過誤多きもの故、吾輩は此の措置を以て決して輕漫に非ざることを信ずるなり、

「……委員は本堂一杯に椀を撒いた。否何も、椀撒などゝいふ古事がある譯ではないが、餘り人數が多いので膳も机も持ち出す餘地がない。仕方がないから疊の上へ椀と箸と澤庵漬の盆と燒昆布とを配つて歩く、其の跡から手桶を提げて廻る。手桶の中には粥がある。柄杓を入れて一攪し且つ配ち且つ進むに大椀小椀行手を遮ぎりて容易に捗取らぬ。一人、二人、三人と注いで四人目に及ばんとすれば最初の人は早や平げ終つて「敵に後を見するは卑怯なり。一寸歸し給へ」。など袖を引く。日暮れ路遠しの感がある。何しろ四百人以上の者が十七年の天津風といふ勢ひで一齊に箸を下すのであるから、其の壯觀偉觀たるや痛快淋漓を極むること無論である。…」

第一回旅行團

本社主催旅行團の第一回は明治四十年九月に決行された日光遊覽團體で、これは九州に於ける初めての企てゞあつた。したがつて、計畫發表と同時に申込み殺到、豫定の人員四百名はすぐ充たされて、一行を乘せた七臺連結の特別列車は、九月廿四日午後四時博多驛を出發した。副社長河波荒次郎がこの旅行團の團長で、特派員として編輯主事矢田義勝(挿雲)、及び久留米支局長田村和六、庶務係に波多江茂兵衛、附添醫師として尾岡定などが同行し、社主平岡浩太郎を失ひ、我が社の第三次、第四次改善計畫は挫折するに至つたが、福本社長は河波副社長と協力、平岡亡き後の我社を護り、全社員も福本社長の下に一丸となつて、難關の克服に努め、次々と地方新開界に巨砲を放つた。あたかも其際、我社非常時の經營を背負つて立つ河波副社長は、經營上の苦心から法の嫌疑を受けて拘引されるに至り、茲に於て、博學名文を以て本紙の紙價を高からしめた福本社長も、遂に數萬の讀者に惜まれながら河波副社長と共に、經營を杉山茂丸に讓つて退社した。同時に福本社長の德を慕ふ矢田挿雲、半田福平、川口重次、田中櫃二、村田正雄、熊谷源次郎雜賀博愛、宮崎六次、宮田太郎、三角司、瀬利安次郎等の社員も連袂して退社した。

かくて明治四十二年十二月、平岡浩太郎、福本日南の後を繼いで杉山茂丸が本社第三代の社主となつた。

——杉山は、元治元年、水戸派の漢學者藩園の一子として福岡に生れた。長ずるに及んでルソーの民約論や傾國美談の影響を受け、藩閥政府の横暴を憤慨し、十七歳の時出奔して上京、山岡鐵舟の門に入つた。

杉山の波瀾を極めた生涯はこの時に始つて、昭和十年七月十七日、その生涯を閉ぢるまで、明治、大正、昭和の三聖代に亘る足跡は、さながら時代の原動力の觀を呈し、國會開設、日清、日露の戰役、日韓併合、北鐵讓渡問題等をはじめ、國家の重要問題の蔭には悉く「杉山茂丸」があつたと云つて毫末の過言もない。

杉山は、本社の經營一切を引繼いで、明治四十三年一月廿五日の紙上に次の如く聲明した。

吾輩若冠の時より、四方に流寓し、或る時世の動機と、先輩の勸誘とに餘儀なくせられて、再び鄕關に入りて、鄕國の事を經營するに至りたるは正に明治十八、九年頃のことにて有りにき。吾輩當時、先輩の騏尾に從ひ鄕國の元氣振興策の第一着事業として、新聞紙の發刊を企圖し、之れを縣下同感の士の俠義に訴へ、晨に星を戴いて其の門を叩き、夕に月を踏んで里閭を來往し、一意專心、發起先輩の希望を貫徹せしめんことを勉めたりしに發起者の熱情、旺盛なりしと同時に、縣下同憂諸賢の贊助は、時世の觀察に相一致して、九州日報の前身、卽ち福陵新報の發刊を見るに至りたるは、吾輩の今尙は快哉を謖るゝ能はざるのことに屬す、而して爾後、吾輩が屢々海外に遊びしと或る事情の爲め、居を東京に定めたるが爲め、其經營は、他の人士の與る處となりしも、實に十數年間、此の新聞紙が、鎭西の北隅に蟠踞して社會百般の表裏を雄視し、今尙ほ其精神を發揮せることは、一は、經營者の熱心と、一は縣下諸賢の幇助と相一致するの結果に非ざるよりは奚んぞ能く此の姿勢を保有するを得ん乎。

然るに輓時、當事者より吾輩に向つて今後此の新聞紙の經營を擔當すべきことを屬せらる。去れども吾輩の微力は昔日に同じく、菲才は益々舊に陪蒞して一層の衰憊を加ふるも、前に述べたるが如き關繫を有することなれば、無下に之れを辭するは、縣下の諸賢に對し、太だ忍びざる情誼の存するあるを以て、終に之れを東京なる太平洋通信社、及びサンデー雜誌社の兩社を統轄する森山守次氏を推撰して此の新聞經營を擔當せしむる事となし、之れに吾輩、微力の及ぶ限りを以て、援助することゝせり。蓋し吾輩は、散て當事者委囑の責めを免れんとするものに非ざるなり、夫れ勢力の微なるは事を沮廢し、經驗の少なきは過誤多きもの故、吾輩は此の措置を以て決して輕漫に非ざることを信ずるなり、

回顧すれば茫々夢の如く、故山の松柏蔽芾として拱把を增し、玄海の濤瀾韡韡として尙ほ汀涯を洗ふ、吾輩去りて茲に十數年、縣下の事業、百般の進歩は朝に駿馬を、坦部に撻つが如く、朝瞬にして、其の景影、趣きを改むるの時に、束薪、重荷の老樵、暮逕に之と駢馳を競ふは尤も笑ふべきもの、由來事業の經營は緩急各々其道あるを知る、今や吾國の朝野は、官民共に政治經濟の要綱を紊亂し、各々姑息の利名に迷倒し、淸、露二回の戰勝に得たるの國運は、內治、經營の拙劣に相殺して、長く帝國の病患を遺さんとす、已に此の根蒂を刈除せんと期す、胡んぞ俗流と事の緩急遲速を競ひ、徒らに勞を厭ふて逸を求め只勢ひに媚びて憂國の本事を蔑如するに忍びんや、遮幾くば此の志を明諒して、左提、右挈、以て此の對國家の重責に助け有らしむると否らざるとは一に縣下諸賢の同情如何にありて存するを知了せられんことを、

紫溟の翠巒、鬱として八郊を擁し、淸流涓として其の間を縱橫す、諸賢が憂世の操姿も、亦長へに此の如きを見る、卽ち九州日報の多望、期して待つべし、矧んや其の前身たる福陵新報の創掬、已に諸賢の便義に因するに於てお乎矣。

二五、陣容整備、紙面刷新

杉山茂丸の社主就任に對しては各方面から祝詞を寄せられたが、左はその祝詞を寄せられた內の一人內田良平氏のものである。

日報の刷新を祝す

内田良平

我が九州日報は、其の前身福陵新報時代より、我先輩諸老の經營に係り能くその主張を一貫して二十餘年間、政治上及び産業上の進運に處し、以て地方的發達の指針に任じて今日に及べるは、その事業の時に盛衰ありしに似ず、敢然勇往、誠に他を顧みざるの概ありしなり。是れ我が先輩諸老が、その主張と目的の下に新聞を經營せし所以のものにして、世間一般新聞營業の徒らに時好に阿嚮し、たゞ發刊紙數の多からむ事を求むるものと自らその撰を異にせり。

今我が杉山茂丸氏、日報の爲めに刷新の案を立て、親友森山守次君を以て本社經營の任に當らしめたり。蓋し當今人文の趨向如何によりて我が政治、經濟的地方要務に省みれば、その氏の才學經驗に荷するところのもの固より甚だ輕しとなさず、予も亦この先輩親友が東京に於ける幾多公共の事業を有し、日も之れ足らざる繁劇の身を以て、我が鄉關の爲に、九州日報刷新の擧あるを見、感荷自ら描く能はず、筆硯を提げて遙かに聲援を試みんと欲す、是れ固より愛鄉の至情、婆心に似たりと雖も、心實に止むべからず、讀者諸賢、幸ひに寬容して微志を諒とせられんことを冀ふなり。

二十年前の福岡縣は必ずしも今日の福岡縣に非ず、今日の福岡縣未だ必ずしも他日の福岡縣に非ず、何となれば交通機關の進歩と、商工業の進歩とが竟に舊日の觀にあらざるを以てなり。今鐵道は九州を一貫して鹿兒島より門司に直馳し、又安奉線竣工の曉は釜山より經ちに南滿鐵道に聯なり釜山阜頭と我が門司大里阜頭と及び博多灣頭とは一呼一應、四通八達、其樞區の地點は實に我が福岡縣に印せられ、而も豐富なる石炭の力と開展せる海運の便利とは尙至大なる進歩の餘地を剩せるを以て、我福岡縣の後來は其商工二業の上より竟に帝國經濟施設の一翼となり、之が盛衰消長如何は關繫を東洋一般に及ぼすに至る決して永き將來に非ざるを信ずるなり、故を以て九州日報がその輿論の源泉となり、以て其進歩の氣運を率ゐて縣下の政治的經濟的施設に貢獻せざるべからざるは予の責を森山君に荷する所にして、乃ち之に依り之を我先輩諸老が日報創造の志に酬ゆる所以となすものあり。

杉山茂丸、經營を承け繼ぐや、その聲明のごとく、太平洋通信社及びサンデー雜誌社を統轄する森山守次を迎へて社長兼主筆とした。

森山は、東京で選んだ知名の記者十餘名及び工場員二十餘名と共に着任して、社内の組織、内容を刷新し、新陳容を構成すると共に、諸般の改革刷新を斷行した。この時の紙面並に通信印刷關係の改革は次の如きものであつた。

一、紙面七段制をポイント式八段制に改めたこと、

二、編輯法に歐米新聞式長所を取入れたこと、

三、通信機關の充實擴張斷行（電報、電話を增加し、門司より鹿兒島に至る九州主要都市に通信員を增置し、東京支局は太平洋通信社内に移し、滿洲支局は滿洲日々新聞社内に、京城支局は京城電報通信社内に、夫々設置して内外の通信の正確、速報を圖る）

四、月躍附錄を發行、

五、印刷器具及び活字の新調

この時から、九州日報は從來の政治問題偏重から脫却して、自ら「九州實業界唯一の報道機關」を以て任ずるほどこの方面に力を注ぐと同時に、家庭婦人、教育、技藝方面にも新生面を開拓して好評を博した。

――森山社長の下に各般の整備を終つて活動に入つた本社は、先づ明治四十三年二月には「九州文藝」募集を開始した。

「一國一州固有の文藝なかるべからず」と叫んで九州文藝の復興を企圖したもので、最初の募集項目は、筑前、薩摩の兩琵琶歌をはじめ、和歌、俳句、情歌、百字文といつたものであつた。その年四月十一日から五月九日まで、福岡市に「九州沖繩八縣聯合共進會」が開催せられたが、本社はこれが宣傳に萬全を盡し、會場内には臺灣娘接待の「無料休憩所」をはじめ、「變裝競爭」「九州玉突競技會」、讀者優待半額入場券の配布、入場者豫想投票等を行つた豫想投票結果は、入場實數九十一萬三千九百十人に對して、小倉市京町七丁目松本鶴次氏の豫想九十一萬二千七百三人が第一等となり、本社特製の銀杯を獲得した。

二六、福博電車開通

明治四十三年三月九日、福岡市を縱貫する市民待望の福博電車が開通し、大學前より西公園間及び博多驛、吳服町間の路線の運轉を開始した。共進會を控へて工事を急いだせいもあつたが、前年八月創立總會を開いて僅か半歲の間に完成したことは、當時驚異とされたもので、初代社長福澤桃介は、「これ全く市民各位の御後援の然らしむるところで、これほどの短時日に、これだけの大事業を成し遂げたことは、恐らく日本の歷史にはない……」とまで感激した位で本紙は、開通日の三月九日には、十二頁の「電車開通記念號」を發行して、交通機關の發展に對する左の如き社說を揭げて會社並に市民に注意することを忘れなかつた。

福博電車は昨日を以て開業式を擧行し、今日より街衢人巷、全市内に十數臺の電車を運轉せんとす。第一車の纜に微塵一髮を聯て微動し初めんとする時、九州文明の脈搏は玆に一大紀元を開展せんとする也。

會社は素より一小商賣のみ、社長は主人にして車掌運轉手は番頭小僧のみ、市營の官吏には非ざる也。其醜陋なる營、利の二字を本意とし、第一成典とする者也。唯市民は美しき効果と些少の黃白とを以て地邸を賣れるのみ、祖先の遺情、無形の地上權を迄明け渡せるには非ざる也。其處に地下に尙祖先の精靈は生活す。玆を以て會社若し其本意と結果とを顚倒し、此精靈と權主の權威を蹂躙する時あらば、半夜、軌道に電轍の轢る時、祖先は地下より、市民は地上より一齊に鬼哭啾々の聲を放つ事あらん。

一市民として吾人は、州人と相率ゐて今旦の喜悅を玆に述ぶ。然れど冀くば此美しき喜悅を以て、他日鬼哭啾々の記念ならしめざれ。之を會社發起人に委囑して三度、一市民としての祝盃を高く〳〵捧ぐ

記念號には、電車の智識、電車に對する注意、電車に關する諸名士の談話などを揭けて、一般の參考としたが左はその中の一つ、當時の福岡縣知事寺原長輝まつ子夫人の談話「電車と姉人」を抄錄で當時をしのぶため繁をいとはず揭げておかう

「買物などにチョイ〳〵出歩きますには、人力車より電車の方が便利で御座いませう。……急ぎの場合など、之も時と場所によつて何れとも瞭然り申されませぬが、早い事は電車の方が早い樣です。何時か上野から宅まで歸りますときに妾は人力で參りましたが、一緒に發つた電車の方が餘程早いやうでした。……初めて

自らその擔を異にせり。

今我が杉山茂丸氏、日報の爲めに刷新の案を立て、親友森山守次君を以て本社經營の任に當らしめたり。蓋し當今人文の趨向如何によりて我が政治、經濟的地方要務に省みれば、その氏の才學經驗に荷するところのもの固より甚だ輕しとなさず、予も亦この先輩親友が東京に於ける幾多公共の事業を有し、日も之れ足らざる繁劇の身を以て、我が鄉關の爲に、九州日報刷新の擧あるを見、感荷自ら描く能はず、筆硯を提げて遙かに聲援を試みんと欲す、是れ固より愛鄉の至情、婆心に似たりと雖も、心實に止むべからず、讀者諸賢、幸ひに寬容して微志を諒とせられんことを冀ふなり。

二十年前の福岡縣は必ずしも今日の福岡縣に非ず、今日の福岡縣未だ必ずしも他日の福岡縣に非ず、何となれば交通機關の進歩と、商工業の進歩とが竟に舊日の觀にあらざるを以てなり。今鐵道は九州を一貫して鹿兒島より門司に直馳し、又安奉線竣工の曉は釜山より經ちに南滿鐵道に聯なり釜山阜頭と我が門司大里阜頭と及び博多灣頭とは一呼一應、四通八達、其樞區の地點は實に我が福岡縣に印せられ、而も豐富なる石炭の力と開展せる海運の便利とは尙至大なる進歩の餘地を剩せるを以て、我福岡縣の後來は其商工二業の上より竟に帝國經濟施設の一翼となり、之が盛衰消長如何は關繫を東洋一般に及ぼすに至る決して永き將來に非ざるを信ずるなり、

二六、福博電車開通

明治四十三年三月九日、福岡市を縱貫する市民待望の福博電車が開通し、大學前より西公園間及び博多驛、呉服町間の路線の運轉を開始した。共進會を控へて工事を急いだせいもあつたが、前年八月創立總會を開いて僅か半歲の間に完成したことは、當時驚異とされたもので、初代社長福澤桃介は、「これ全く市民各位の御後援の然らしむるところで、これほどの短時日に、これだけの大事業を成し遂げたことは、恐らく日本の歷史にはない……」とまで感激した位で本紙は、開通日の三月九日には、十二頁の「電車開通記念號」を發行して、交通機關の發展に對する左の如き社說を揭げて會社並に市民に注意することを忘れなかつた。

福博電車は昨日を以て開業式を擧行し、今日より街衢人巷、全市内に十數臺の電車を運轉せんとす。第一車の纔に微塵一髮を蹶て微動し初めんとする時、九州文明の脈搏は玆に一大紀元を開展せんとする也。

市が市營を棄てゝ會社に委ねたるは、開通に從つて來るべき結果を思へば也。而も會社自身の本意とする所は唯醜陋なる營、利の二字に過ぎず、會社は美果を說きて市民を文明の美酒に醉はせ、市民は去り難き祖先の地邸を公益の蹂躙に任せて、今や永へに九州文明の犧牲となす。一路縹渺、福博市樞を貫いて東立花山より西背振油山と相呼ばんとする者、之實に市民が公益の爲に不拔の私情を擲倒したる美しき記念塔なり。會社、事業の本意を寬過しつゝ其美しき効果に對して永へに贈與せんとする記念塔也。

萬全を盡し、會場内には臺灣娘接待の「無料休憩所」をはじめ、「變裝競爭」「九州玉突競技會」、讀者優待半額入場券の配布、入場者豫想投票等を行つた豫想投票結果は、入場實數九十一萬三千九百十人に對して、小倉市京町七丁目松本鶴次氏の豫想九十一萬二千七百三人が第一等となり、本社特製の銀杯を獲得した。

會社は素より一小商賣のみ、社長は主人にして車掌運轉手は番頭小僧のみ、市營の官吏には非ざる也。其醜陋なる營、利の二字を本意とし、第一成典とする者也。唯市民は美しき効果と些少の黃白とを以て地邸を賣れるのみ、祖先の遺情、無形の地上權を迄明け渡せるには非ざる也。其處に地下に尙祖先の精靈は生活す。玆を以て會社若し其本意と結果とを顚倒し、此精靈と權主の權威を蹂躙する時あらば、半夜、軌道に電轍の轢る時、祖先は地下より、市民は地上より一齊に鬼哭啾々の聲を放つ事あらん。

一市民として吾人は、州人と相率ゐて今旦の喜悅を玆に述ぶ。然れど冀くば此美しき喜悅を以て、他日鬼哭啾々の記念ならしめざれ。之を會社發起人に委囑して三度、一市民としての祝盃を高く〳〵捧ぐ

記念號には、電車の智識、電車に對する注意、電車に關する諸名士の談話などを揭げて、一般の參考としたが左はその中の一つ、當時の福岡縣知事寺原長輝まつ子夫人の談話「電車と姉人」を抄錄で當時をしのぶため繁をいとはず揭げておかう

「買物などにチョイ〳〵出歩きますには、人力車より電車の方が便利で御座いませう。……急ぎの場合など、之も時と場所によつて何れとも瞭然り申されませぬが、早い事は電車の方が早い樣です。何時か上野から宅まで歸りますときに妾は人力で參りましたが、一緒に發つた電車の方が餘程早いやうでした。……初めて乘りますときですか？、いえ妾は別に……、鐵道馬車の時分から乘つて居りますのですからホヽヽヽ、去年で御座いました。宅の書生が奈良から參りまして、新橋で初めて電車に乘せました。よく注意して置きましたのですが、急に電車が動き出しますとネ、ぼんやりして居たもんですから後に轉倒返つたのですよ、ホヽヽヽ。乘ります場合に、上り臺に足をかけますと直ぐ動き出される場合には隨分女などには困ります。デモ大抵伴れがあつて參りますからサウ大して慌てるやうな事も御座いません。花電車に乘るのは今度初めてゞ御座います。」

何しろ、九州ではじめて、福岡市に電車が開通したのであるから、市民の騒ぎは大變なものであつた。當時を唄つた都々逸「紙鳶も揚れよ東風ふく岡に、霞のせ來る花電車」「丁字結んだ博多の帶は、伊達ぢや電車ぢや九州一」などが紙面に見へる。又、福博人力車營業組合取締、太田太平は「大した影響はない。將來路線が延長さるれば、その時は善後策を講じなければなるまいが、目下のところでは心配するほどの事ではない。」と樂觀してゐる記事も見える。

二七、日韓合併と本紙

明治四十二年六月、伊藤博文は韓國統監の職を退き、曾禰荒助その後を襲ひ、次いで四十三年七月、寺內正毅と代つた。

寺內統監は、日韓合併の大命を帶びて七月二十一日、軍艦八雲で赴任の途に就いたが、大陸問題の先驅權威を自任し、これを社の傳統とする本紙は、同日紙上に「赴任に臨んで」と題して「廟議一決せる今日、快刀亂麻を絕つ勢ひで根本問題の解決を望む、寺內統監今回の赴任は國民が強い期待を有してゐる」と述べ、同月三十日には「韓國を合して大日本帝國の一部と爲すは建國以來の大事件で、これが顚末を政府は國民に報告すべし、無味乾燥な官報などを以てせず、臨時議會を召集して、代表者の口頭によつて、反覆質問し充分の諒解を得なければならぬ。尙合併後の立法、豫算などはどうするか、速かに政府は議會を開いて國民と共に議せよ」、八月十二日には「如何にして二個の民族を同化せしむるか」と題して「識者は教育と宗教と相俟つて二民族の同化を圖ると雖も、宗教の普及には教育の普及が前提であり、教育の普及には相當の年限を要するから、これによつての同化は一朝一夕には期せられない。日本人の渡韓移住を奬勵し、雜居せしめて同化を計れ」など論じたが政府は日韓合併は對韓國民並に國際的に影響する所が大きいので、合併完成までは秘密主義で進む方針をとり、新聞電報は官憲の嚴重な檢閱を受け、檢閱洩れの分は郵便局で再檢閱して差押へられ、此問題報道に關する新聞社の苦心は非常なものであつた。

本紙は八月十七日左の號外を發行して合併問題の進捗を始めて報道した。

「寺內統監は韓國處分に關し既に內々交涉を開始し、或る重大なる事件につき韓國皇帝に暗示を與へたりと確聞す。但し其內容は時期を見て報道す」

越えて二十一日、「二十四時間轉載を禁ず」と物々しい註をつけた細井京城特派員の通信は「韓國皇帝が合併協約の全文に對し御裁可あらせられ、李總理をして寺內統監を經て日本天皇陛下に合併の奏請を捧ぐべき勅諚を下された」と報じ、同日號外は「日本天皇陛下には二十二日臨時樞密院會議に御諮詢あらせらる」旨の東京電報を報じた。

二十二日、樞密院に於いて合併協約が可決されたので本社は直ちに號外を發行し、二十三日には「合併後の韓人と參政權」を論じ、「自治議會を認めよ」と述べ、祝賀會の禁止を號外で速報した。

當時の紙上には韓國人の合併反對運動や日本人に對する暴行記事が散見されるが、八月二十七日の本紙社說は

「日韓合併は韓國を征服したのではない。在韓邦人の韓國人に對する態度には面白からざる評を聞く、我國は千七百年來の國是を實現せんとする重大なる時機であるから、國民は大國民の襟度を以て臨め、又政府は合併後に於ては官僚の獨占仕事場などいふ狹量な考へを棄てゝ、出來得る限り韓人を官吏に採用し又事業を得せしめて自暴自棄に陷らしめざる用意を持つべし」

と國民及び政府に對して戒告した。

かくて愈々、八月廿九日、合併條約正文が發表され、本社京城特派員は、發表と同時に八ケ條より成る條約文を午前七時に打電したので、直ちに半頁大の號外を發行し、續いて同八時には東京特派員から、煥發せられた詔勅全文の電報があり、これを第二號外とした。三十日には十頁に亘る「日韓合併記念號」を發行し、一面に明治天皇御尊影、詔書及び宣言書を揭げ、二面以下には李王殿下を始め日韓關係の當路者大官及び合併功勞者の寫眞と共に各分野から日韓合併問題及び韓國の狀況等を揭げ、眞に大陸問題の權威たる本紙の眞價を發揮したが、續いて九月八日からは我が社のみが知り得る門外不出の「日韓併合秘史」を四十三回の長きに亘つて揭載し、一方には水野疎梅の「詩的朝鮮」、細井吼崖の「合併後の朝鮮」等各十五、六回に亘つて揭載し、朝鮮問題は、本紙の獨壇場であつた。

二八、杉山時代の終局

明治四十三年五月二日、森山社長は、友人菊地忠三郎を後任社長に推して退社した。森山社長は、杉山茂丸の懇望によつて本社々長の椅子に就いたのであつたが、その以前から經營してゐた東京に於ける通信社を共に經營してゐたので、「共に經營をなし得ず、九州日報の發展を期する爲には專任社長を必要とする」といふ理由の下に、在任僅かに四ケ月にして退いたのであつた。

名士、名流婦人を訪問して訪問記を揭げ、藝妓を訪ねては一藝一能を紹介したり、昨夜のお客の批評などを寫眞入りで揭げた。當時は「紅筆だより」など稱して好評を博した。「百圓の使ひ方」「嬉しかつたこと、恥しかつたこと」「善行者表彰」「相緣者錄(夫婦になつた動機)」など、色々と募集して優秀原稿には賞金を與へたが興味ある記事ばかりであつた。又第一面には盛んに一般から原稿を募集して紙面を開放提供した。

この編輯方針は、一言にして言へば從來の主張本位の新聞即ち硬骨直筆を生命とする九州日報が此の時代に肩の凝らぬ讀み易い新聞に轉向したことを意味する。それだけに、所謂從來の九州日報型の讀者には相當反對もあつた樣であつた。

かくて明治四十四年三月九日、菊池社長は「地方新聞は、その鄕土人の手によつて經營編輯せられざるべからず」と、四田主筆と共に退社し、後任には玄洋社の大原義剛が就任した。

「新聞社は生かさうと殺さうと君の勝手だ。思ふ存分暴れてくれ!」大原への社長就任交涉に當つて創立者頭山滿と前社主杉山茂丸が言つたことはそれだけであつた。

森山、菊地兩社長を通ずる所謂杉山茂丸時代は前後僅かに一年三ケ月であつた。

明治四十二年六月、伊藤博文は韓國統監の職を退き、曾禰荒助その後を襲ひ、次いで四十三年七月、寺內正毅と代つた。

寺內統監は、日韓合併の大命を帶びて七月二十一日、軍艦八雲で赴任の途に就いたが、大陸問題の先驅權威を自任し、これを社の傳統とする本紙は、同日紙上に「赴任に臨んで」と題して「廟議一決せる今日、快刀亂麻を絶つ勢ひで根本問題の解決を望む、寺內統監今回の赴任は國民が強い期待を有してゐる」と述べ、同月三十日には「韓國を合して大日本帝國の一部と爲すは建國以來の大事件で、これが顚末を政府は國民に報告すべし、無味乾燥な官報などを以てせず、臨時議會を召集して、代表者の口頭によつて、反覆質問し充分の諒解を得なければならぬ。尙合併後の立法、豫算などはどうするか、速かに政府は議會を開いて國民と共に議せよ」、八月十二日には「如何にして二個の民族を同化せしむるか」と題して「識者は教育と宗教と相俟つて二民族の同化を圖ると雖も、宗教の普及には教育の普及が前提であり、教育の普及には相當の年限を要するから、これによつての同化は一朝一夕には期せられない。日本人の渡韓移住を奬勵し、雜居せしめて同化を計れ」など論じたが政府は日韓合併は對韓國民並に國際的に影響する所が大きいので、合併完成までは秘密主義で進む方針をとり、新聞電報は官憲の嚴重な檢閱を受け、檢

かくて愈々、八月廿九日、合併條約正文が發表され、本社京城特派員は、發表と同時に八ケ條より成る條約文を午前七時に打電したので、直ちに半頁大の號外を發行し、續いて同八時には東京特派員から、煥發せられた詔勅全文の電報があり、これを第二號外とした。三十日には十頁に亘る「日韓合併記念號」を發行し、一面に明治天皇御尊影、詔書及び宣言書を揭げ、二面以下には李王殿下を始め日韓關係の當路者大官及び合併功勞者の寫眞と共に各分野から日韓合併問題及び韓國の狀況等を揭げ、眞に大陸問題の權威たる本紙の眞價を發揮したが、續いて九月八日からは我が社のみが知り得る門外不出の「日韓併合秘史」を四十三回の長きに亘つて揭載し、一方には水野疎梅の「詩的朝鮮」、細井吼崖の「合併後の朝鮮」等各十五、六回に亘つて揭載し、朝鮮問題は、本紙の獨壇場であつた。

二八、杉山時代の終局

明治四十三年五月二日、森山社長は、友人菊地忠三郎を後任社長に推して退社した。森山社長は、杉山茂丸の懇望によつて本社々長の椅子に就いたのであつたが、その以前から經營してゐた東京に於ける通信社を共に經營してゐたので、「共に經營をなし得ず、九州日報の發展を期する爲には專任社長を必要とする」といふ理由の下に、在任僅かに四ケ月にして退いたのであつた。

森山社長の後を繼いで本社第六代の社長となつた菊池忠三郎は、永く英、佛に留學した所謂新智識者で就任と共に匹田鋭吉を迎へて主筆とし、大體に於て編輯、經營共に前任者の方針を踏襲したが特に從來地方新聞の弊であつた限定された記事や一種の型から脫却して、大膽、自由奔放の編輯によつて地方新聞界を唖然たらしめた。卽ち從來の政治中心の弊を匡め、地方產業、經濟方面を開拓し、社會記事の見出しの如きも獨特の考案を拂つて興味本位のものを撰び、警察、裁判所本位の社會記事を全般的に押し擴めた。例へば

特派員の通信は「韓國皇帝が合併協約の全文に對し御裁可あらせられ、李總理をして寺內統監を經て日本天皇陛下に合併の奏請を捧ぐべき勅諚を下された」と報じ、同日號外は「日本天皇陛下には二十二日臨時樞密院會議に御諮詢あらせらる」旨の東京電報を報じた。

二十二日、樞密院に於いて合併協約が可決されたので本社は直ちに號外を發行し、二十三日には「合併後の韓人と參政權」を論じ、「自治議會を認めよ」と述べ、祝賀會の禁止を號外で速報した。

當時の紙上には韓國人の合併反對運動や日本人に對する暴行記事が散見されるが、八月二十七日の本紙社說は

「日韓合併は韓國を征服したのではない。在韓邦人の韓國人に對する態度には面白からざる評を聞く、我國は千七百年來の國是を實現せんとする重大なる時機であるから、國民は大國民の襟度を以て臨め、又政府は合併後に於ては官僚の獨占仕事場などいふ狹量な考へを棄てゝ、出來得る限り韓人を官吏に採用し又事業を得せしめて自暴自棄に陷らしめざる用意を持つべし」

と國民及び政府に對して戒告した。

名士、名流婦人を訪問して訪問記を揭げ、藝妓を訪ねては一藝一能を紹介したり、昨夜のお客の批評などを寫眞入りで揭げた。當時は「紅筆だより」など稱して好評を博した。「百圓の使ひ方」「嬉しかつたこと、恥しかつたこと」「善行者表彰」「相緣者錄(夫婦になつた動機)」など、色々と募集して優秀原稿には賞金を與へたが興味ある記事ばかりであつた。又第一面には盛んに一般から原稿を募集して紙面を開放提供した。

この編輯方針は、一言にして言へば從來の主張本位の新聞卽ち硬骨直筆を生命とする九州日報が此の時代に肩の凝らぬ讀み易い新聞に轉向したことを意味する。それだけに、所謂從來の九州日報型の讀者には相當反對もあつた樣であつた。

かくて明治四十四年三月九日、菊池社長は「地方新聞は、その鄕土人の手によつて經營編輯せられざるべからず」と、匹田主筆と共に退社し、後任には玄洋社の大原義剛が就任した。

「新聞社は生かさうと殺さうと君の勝手だ。思ふ存分暴れてくれ!」大原への社長就任交涉に當つて創立者頭山滿と前社主杉山茂丸が言つたことはそれだけであつた。

森山、菊地兩社長を通ずる所謂杉山茂丸時代は前後僅かに一年三ケ月であつた。

先輩の信賴に感激して經營を承け繼いだ大原義剛は、就任と共に歐米歸りの篠崎昇之助を主筆に編輯長には詩人加藤壽太郎(介春)を、營業部長に吉田痩を据えて陣容を整備し、昭和三年一月、中野正剛に讓る迄滿十七ケ年の永きに亘つて粉骨碎身、本社大成の基礎を築いたのであつた。

二九、大原社長時代

大原社長、篠崎主筆は漸進主義の改良充實を方針とした。從つて編輯方針も急角度の改革を採らず、森山、菊池色彩の中庸をとり漸次內容の充實に力

を注ぐことになつた。この年(明治四十四年)に特筆すべきことは、四月十一日から三十日迄福岡市に開催された福岡縣物産品評會に協賛して諸種の施設催し物をなし、特別記念號を發行した事をはじめとして、五月二十七日の箱崎濱に於ける日本海々戰記念會には正午から本社主催の「變裝競爭」を催して大餘興とした。出場者は

本社員大原英太郎は四國遍路姿、同小柴松兒は縞の着物に前垂掛けの番頭姿、川端町林喜太郎は露店商人から火夫姿へ、博多相券すみ子は女乞食に、同中券しげ子は可憐な船頭の娘姿に、水券小三は傀儡師

に各々工夫を凝らして變裝しこの外に中洲券番からは三十餘名の藝妓が、乞食、看護婦、女學生、巡禮、法界屋、令夫人、令孃などに變裝して應援に繰り出したので、ごつた返す神苑は大混雜を極め、觀衆は正午の煙火を合圖に本紙揭載の寫眞と見比べて探しにかゝつたが、なか〳〵發見されず、ニセ者を引張つて來たり、見物人を無理矢理に引摺つて來るなどの滑稽を演じ午後四時の締切まで發見されたのは林喜太郎唯一人であつた。

八月二十八日には本社主催最初の水泳大會が擧行された。コースは箱崎水族館裏から西公園下の伊崎裏海岸迄、三哩の遠泳であつた。參加選手は二十名、審判長、神傳流師範山王堂磯五郎外數名の審判委員、本社員、醫師、看護婦などを乘せた十隻の小舟に護られながら午前十時十五分スタートを切り第一着は木谷義英、タイム一時間四十七分であつた。終つて各種の水上遊戰を催したが、當日は箱崎濱から西公園にかけての海岸は應援者、觀衆の山を築いた。

明治四十四年は宛も本社創刊二十五周年に相當するので、九月、盛大な記念祝賀會を發行した。二十五日から二十七日までの三日間、毎日十二頁宛の記念號を發行して、連日二十五に因んだ讀物や、創立者頭山滿を始め、歷代の社主、社長、主筆及び關係者の追憶談などを揭げて多難の過去を偲び、將來への發展飛躍を誓ひ、一方、二十七日には博多東中洲壽座で廿五周年記念讀者優待演藝大會を催した。會は午後五時から始められたが、觀衆は正午頃から詰めかける盛況で三千人に達し、主筆篠崎昇之助の挨拶、水、中、相の博多三券番藝妓の藝競べ、水儀組の博多二和加や落語等があり、午後十一時半、九州日報萬歲を三唱して閉會した。

十月からは將棋欄を、十一月からは圍碁欄を新設した。

翌年一月十四日には「第一回九州歌留多大會」を博多水茶屋常盤館で催したが、九州山口各縣からの代表六十二名參加、妙齡の婦人も加へて輸贏を競ひ福岡市しのぶ會の河原清太郎が一等賞を獲得した。これが歷史ある本社歌留多大會の最初である。

二月一日からは廣告料を改正して、普通一行三十五錢、特別六十錢、雜報欄七十錢とした。

三月には大阪支局を東區安土町三丁目堺筋の目貫の場所に移し、四月には八幡支局を、八月には大分市に大分支局を夫々設けて通信販賣網の充實をはかつた。

この年、本紙は、九州大學々生の墮落を嘆き、之れが肅正のために「戀の大學生」といふ大學生の素行に關する記事を揭げて徹底的に反省を促したが、不幸本社編輯長加藤介春は、不良學生のトリックに誤られて七十日間未決監に收容される憂目を見、公判の結果は勿論無罪で出監後、數日に亘つて事件の眞相を報道して我社の公明正大な立場を宣明する等のことまでした。

三〇、肥筑の大演習

明治天皇最後の御統監となつた明治四十四年の陸軍特別大演習は、十一月九州の健兒によつて筑紫の山野に擧行された。

參加部隊は熊本第六、小倉第十二、久留米第十八各師團及び後備混成旅團總數十萬、南軍司令官長谷川好道大將、北軍司令官川村景明大將これを指揮して激戰し、十五日國分練兵場に於ける觀兵式を以て終了した。

本社は、鳳輦を九州に迎へ奉り、大演習の大繪卷を報導するに遺憾なからしむべく、佐竹秋帆、吉野花風兩名を行在所たる久留米へ、統監部には和田素水、松隈天劍、平田攀堂及び寫眞部二名を特派し、陛下行幸の十日から一週間、記念號を發行して、詳細に亘つて陛下の御巡幸を謹記し奉り、大演習の實況を紙面に髣髴せしめた。左は、十日本紙に揭げられた鳳輦を迎へ奉るの辭である。

迎鳳輦

滿天の霜葉は紅錦を雲間に織り、郊野の草花は華氈を地に布くの時、肥筑の曠原は砲聲殷々として硝煙漲り、劍戟の音、馬蹄の響に包まれんとす。これ將に行はれんとする特別大演習にして、實に軍國の光景は此曠原に活躍せむとす。

陛下の聖德乾剛、泰平には卽ち泰平に處し、困難には卽ち困難に處して、緩急兩つながら宜しきを得らせらるゝ、大御心の程を拜し奉りて

陛下の大業廣謨、夙に定まりて明治の隆興、玆に淵源するものあるを深く信ぜしむ。

大元帥陛下には此の肥筑の曠原に於て行はるゝ、大演習に臨ませらるべく沿途

萬歲の聲晃々、幸の錦旗、

久留米まで

世界に其の光輝を放ち、列聖の遺靈又

陛下の乾德に依りて宇內に光被す。我等臣民は自ら稱して

陛下の臣民と謂ふを誇りとする名譽を有するを喜ぶものなり。而して忠良の臣民として

至尊宵衣肝食の御心に酬ひ奉るの覺悟なかるべけんや。報國の心は盡忠の心と一致し、忠君の精神は愛國の精神と契合す。之れ

陛下の御仁德、一視同仁國を家となし、五千萬衆を赤子と爲して以て不盡の天德を垂れさせらるゝ、赫々たる天日の如き聖恩に感じ、懿德を思ひ、忠愛の誠油然として生じ、君民相親み、相結ぶの情益々牢く、益々久しきを致す所以ならずんばあらず。今や乾下坤上、國威の蓬勃軒頭せる、眞個に經緯を六にし、三臺を四にするの概あり。

列聖の惟れ孝、惟れ敬、克く續き克く承け、千歲悠々、爰に皇謨の愈よ洪大なるを致せしに外ならずと雖も

陛下の允に文、允に武にして、皇祖皇宗の遺烈を大成し玉ふにあらずんば、安んぞ能く如斯くなるを得べけんや。謹んで玆に

陛下の龍事を迎へ奉る。

左は特派員松隈天劍の記事の一部である。

食、看護婦、女學生、巡禮、法界屋、令夫人、令孃などに變裝して應援に繰り出したので、ごつた返す神苑は大混雜を極め、觀衆は正午の煙火を合圖に本紙掲載の寫眞と見比べて探しにかゝつたが、なか〳〵發見されず、ニセ者を引張つて來たり、見物人を無理矢理に引摺つて來るなどの滑稽を演じ午後四時の締切まで發見されたのは林喜太郎唯一人であつた。

八月二十八日には本社主催最初の水泳大會が擧行された。コースは箱崎水族館裏から西公園下の伊崎裏海岸迄、三哩の遠泳であつた。參加選手は二十名、審判長、神傳流師範山王堂磯五郎外數名の審判委員、本社員、醫師、看護婦などを乘せた十隻の小舟に護られながら午前十時十五分スタートを切り第一着は木谷義英、タイム一時間四十七分であつた。終つて各種の水上遊戰を催したが、當日は箱崎濱から西公園にかけての海岸は應援者、觀衆の山を築いた。

明治四十四年は宛も本社創刊二十五周年に相當するので、九月、盛大な記念祝賀會を催した。二十五日から二十七日までの三日間、毎日十二頁宛の記念號を發行して、連日二十五に因んだ讀物や、創立者頭山滿を始め、歷代の社主、社長、主筆及び關係者の追憶談などを掲げて多難の過去を偲び、將來

二月一日からは廣告料を改正して、普通一行三十五錢、特別六十錢、雜報欄七十錢とした。

三月には大阪支局を東區安土町三丁目堺筋の目貫の場所に移し、四月には八幡支局を、八月には大分市に大分支局を夫々設けて通信販賣網の充實をはかつた。

この年、本紙は、九州大學々生の墮落を嘆き、之れが肅正のために「戀の大學生」といふ大學生の素行に關する記事を掲げて徹底的に反省を促したが、不幸本社編輯長加藤介春は、不良學生のトリツクに誤られて七十日間未決監に收容される憂目を見、公判の結果は勿論無罪で出監後、數日に亘つて事件の眞相を報道して我社の公明正大な立場を宣明する等のことまでした。

三〇、肥筑の大演習

明治天皇最後の御統監となつた明治四十四年の陸軍特別大演習は、十一月九州の健兒によつて筑紫の山野に擧行された。

參加部隊は熊本第六、小倉第十二、久留米第十八各師團及び後備混成旅團總數十萬、南軍司令官長谷川好道大將、北軍司令官川村景明大將これを指揮して激戰し、十五日國分練兵場に於ける觀兵式を以て終了した。

本社は、鳳輦を九州に迎へ奉り、大演習の大繪巻を報導するに遺憾なからしむべく、佐竹秋帆、吉野花風兩名を行在所たる久留米へ、統監部には和田素水、松隈天劍、平田攀堂及び寫眞部二名を特派し、陛下行幸の十日から一週間、記念號を發行して、詳細に亘つて陛下の御巡幸を謹記し奉り、大演習の實況を紙面に髣髴せしめた。左は、十日本紙に掲げられた鳳輦を迎へ奉るの辭である。

迎鳳輦

滿天の霜葉は紅錦を雲間に織り、郊野の草花は華氈を地に布くの時、肥筑の曠原は砲聲殷々として硝煙漲り、劍戟の音、馬蹄の響に包まれんとす。これ將に行はれんとする特別大演習にして、實に軍國の光景は此曠原に活躍せむとす。

陛下の聖德乾剛、泰平には卽ち泰平に處し、困難には卽ち困難に處して、緩急兩つながら宜しきを得らせらるゝ、大御心の程を拜し奉りて

陛下の大業廣謨、夙に定まりて明治の隆興、玆に淵源するものあるを深く信ぜしむ。

大元帥陛下には此の肥筑の曠原に於て行はるゝ、大演習に臨ませらるべく沿途幾萬の臣民に、其の翹望して已まざる御英姿を拜さしめ給ふ。思ふに戰爭は盤根錯節を絶つ利刃たり。若し一困難に逢へば卽ち之を回避し、優柔一時を糊塗し去らば、國運の隆盛或は期し難し。生命あり、威嚴ある最後の平和を擁護するは、一つに全く兵力に待つの外ある可からず。恐れ多くも我

大元帥陛下には大御心を深く玆に灑かせ給ひ、親ら兵馬の大權を統轄せられ、國家の威力外に發揚す。天の高き

陛下の大業を仰げば其の高きも高からず、地の厚き、

陛下の聖旨に比すれば、其の厚きも厚からず。我日本歷史は實に明治史を以て

九州日報五十年史

世界に其の光輝を放ち、列聖の遺靈又

陛下の乾德に依りて宇內に光被す。我等臣民は自ら稱して

陛下の臣民と謂ふを誇りとする名譽を有するを喜ぶものなり。而して忠良の臣民として

至尊宵衣肝食の御心に酬ひ奉るの覺悟なかるべけんや。報國の心は盡忠の心と一致し、忠君の精神は憂國の精神と契合す。之れ

陛下の御仁德、一視同仁國を家となし、五千萬衆を赤子と爲して以て不盡の天德を垂れさせらるゝ、赫々たる天日の如き聖恩に感じ、懿德を思ひ、忠愛の誠油然として生じ、君民相親み、相結ぶの情益々牢く、益々久しきを致す所以ならずんばあらず。今や乾下坤上、國威の蓬勃軒頭せる、眞個に經緯を六にし、三臺を四にするの概あり。

列聖の惟れ孝、惟れ敬、克く續き克く承け、千歲悠々、爰に皇謨の愈よ洪大なるを致せしに外ならずと雖も

陛下の允に文、允に武にして、皇祖皇宗の遺烈を大成し玉ふにあらずんば、安んぞ能く如斯くなるを得べけんや。謹んで玆に

陛下の龍車を迎へ奉る。

左は特派員松隈天劍の記事の一部である。

久留米まで

大演習觀戰特派員　天劍生

編輯長足下　今回筑紫の山河を背景として擧行される特別大演習を見物して來いとの足下の仰せを蒙つて、僕は日曜日の午後三時半旅裝を整へて博多驛に着く、玆で二等棧敷への通券を買つて直ちに夫へと通される、汽車に乘る、車中には縣廳農林課の林業技師島村經夫氏があり、旅行用の大きな鞄とシルクハットサックとを所持せる處を見ると、同氏も矢張り演習地行きに極つたり、相一揖して僕は其の向ふの席を占む。

原田驛から寺原知事と其の隨員とが乘つた。思ふに一行は演習地域の視察を終つて今久留米に歸へるところと察する。お定まりで閣下は一等室に乘る、其他は二等室に僕等と相對して席を占める。何れを見ても歷々たる金ピカの警察官ばかりだ。常に縣廳で見る小原警部、廣田警部も居た。官房屬の神一八君も來た。何れの方も御足勞煩る大儀に存じてやる。（以下略）

尙この大演習に際して、特記しておき度いことは御召列車試運轉中の失敗から、御豫定を一時間餘遲延せしめた責任から、門司驛構內主任兼操車係、書記淸水正次郎は、山陽線幡生驛附近の鐵道隧道內で自殺した事件で本社は玄洋社と共にその靈を弔ひ國民精神作興に資すべく、義捐金を募つて記念碑を建立した。

三一、明治大帝崩御

明治四十五年七月二十日、明治天皇の御不例に亙らせられるの本紙號外の報導は國民を驚愕せしめ、憂愁せしめた。

明治大帝の御聖業を追慕し奉る意味に於て左に號外全文を採錄して置く。

主上陛下御不例

御容體頗る御重患と拜聞す

天皇陛下には去る十四日御胃腸を御損傷あらせられ、十五日は御嗜眠の御傾きあり、十八日以來御睡眠一層加へさせられ御食氣も至つて御減少、午後より御睡眠の御狀態に渉らせらる。十九日夕刻よりは一層の御發熱にて四十度五分に昇騰し、御脈搏百四、御呼吸三十八回に渉らせられ、上下の臣民擧つて深憂に沈みつつあり。

御不例第二報

皇族方、貴紳の參內繼るが如し

聖上陛下の御容體は旣記の外十八日以來御睡眠一層加はらせられ、午後は御精神御恍惚の御狀態にて、御腦症あらせらる。陛下御重患の報上下に傳はるや今朝來皇族方をはじめ奉り各大臣各元老其他貴顯の參內者陸續と絕へず上下一同肅然として御經過を痛心しつゝあり。

以來連日、御惱重らせ給ふことを報じて國民と共に深き愁ひに沈んだが、三浦、靑山兩侍醫の精魂捧げての奉仕も、全國民の赤誠の祈願も嘉納し給はず、遂に三十日午前零時四十三分、神去り給ひしことを報ずる號外の鈴の音は全國津々浦々に深き哀しみの響きを傳へた。

かくて世は大正と改まり、九月十三日夜、靈柩は殯宮から靑山葬場殿に奉遷し奉り、續いて伏見桃山の御陵に着御、斂葬の儀行はせらる。

此の日を以て、兩陛下を初め奉り御皇族方、及び六千萬同胞は、御靈柩と永訣し奉るの悲しみを同ふし、國を擧り哀悼の情痛切を極む。

明治年代は、明治大帝の崩御を以て竭く。御治世滿四十四年の御偉蹟は建國以來滿三千載、御歷代の天皇中に於かせられて、明治大帝の如く資性御仁慈にして十全の御法を完備あらせられしは多く見奉らず。今日邦家空前の隆運を致せるもの、洵に皇謨の大なるに依らずんばあらず。明治大帝の御威德は、民の仰ぐこと日月の臨むが如く、仁に沐すること江海の潤へるが如かりしなり。噫明治中興の祖たる明治大帝不意の登遐は吾人六千萬同胞の最大不幸にして、亦我が帝國の最大損失なりしと雖も、顧みて過去滿四十四年間に於ける明治大帝の盛德大業を懷はゞ、悲傷の中自ら幾分の慰むる所なきにあらず。其の御在世六十一年なりしは、必ずしも長しと言ふ可らざるも、其の二百年、三百年を閱して、成すべからざる所を成就し給へる事業の分量よりせば、明治大帝は實に古來世界に其比を見ざる長壽の君主に算へまつる可し、內は夙に皇室の式微を慨し給ひ、王政維新の鴻業を成就あらせられて以來、開國進取の國是を定め給ひ、法治の實、代議の制、燦然火を放ち、外には日淸日露の大戰役に捷ちを制し給ひ、韓國併合の實擧りて、東洋平和の基礎確立し、茲に列祖列宗の偉業を大成し給ひたる御績は、實に空前曠古の盛事にして、聖德の御稜威、世界何れの皇帝と雖も、其の匹儔を求むるも得べからず。六千萬の同胞は祖先が未だ曾て享有せざる恩澤に沐浴するの光榮と幸福とを有し、聖恩の無量に感泣して以て、御命運の御長久ならんことを希ひ奉りしに、忽焉として神去り給ふ。痛恨悲愁何ぞ堪へん。茲に明治大帝の偉大なる功業と盛德の大業とを仰ぎ、御靈柩を遙拜して哀悼の至情を捧ぐ。

左は、當時本紙に揭げられた乃木大將の遺言狀である。

遺言狀

ひも有之、天理に背きたる事は致すまじき事に候、祖先憤墓の守護は血緣有之限りは其考共氣を附け申候に依り新阪邸は其爲め區又は市に寄附し然るべき方法に願ひ度く候、

第三、資財分與の議は別紙の通り認め置き其他は靜子に相談なさるべく候

第四、遺物分配の儀は自分軍職上の副官たりし諸子に時計、メートル眼鏡馬具、刀劍等の軍事用品の中見計ふ儀塚田大佐に依賴し置き候、大佐は前後兩度の戰役に盡力少からず、靜子承知の次第御相談なさるべく、其他は皆々の裁斷に委し候（以下略）

大正元年九月十二日夜　　希典

湯池定基殿
大館集作殿
玉木正之殿

三二、武昌革命と本社

明治四十四年十月、淸國武昌に「滅滿興漢」の大旆を揭げた革命軍が、勢ひ猛烈、長江一帶を壓して漢口、漢陽を占領し、長州岳州を瞬く間に陷れたかの有名な——黎元洪、黃興等の所謂武昌革命の勃發があつた。

この狀況は本社上海特派員安河內江南、漢口特置員波多南山より刻々通信し來つたが、革命軍の勢力とその將來性の重大を看取し本社は、間髮を入れ

玄洋社と共にその靈を弔ひ國民精神作興に資すべく、義捐金を募つて記念碑を建立した。

三一、明治大帝崩御

明治四十五年七月二十日、明治天皇の御不例に亘らせられるの本紙號外の報導は國民を驚愕せしめ、憂愁せしめた。

明治大帝の御聖業を追慕し奉る意味に於て左に號外全文を採錄して置く。

主上陛下御不例

御容體頗る御重患と拜聞す

天皇陛下には去る十四日御胃腸を御損傷あらせられ、十五日は御嗜眠の御傾きあり、十八日以來御睡眠一層加へさせられ御食氣も至つて御減少、午後より御睡眠の御狀態に渉らせらる。十九日夕刻よりは一層の御發熱にて四十度五分に昇騰し、御脈搏百四、御呼吸三十八回に渉らせられ、上下の臣民擧つて深憂に沈みつつあり。

同胞の最大不幸にして、亦我が帝國の最大損失なりしと雖も、顧みて過去滿四十四年間に於ける明治大帝の盛德大業を懷はゞ、悲傷の中自ら幾分の慰むる所なきにあらず。其の御在世六十一年なりしは、必ずしも長しと言ふ可らざるも、其の二百年、三百年を閱して、成すべからざる所を成就し給へる事業の分量よりせば、明治大帝は實に古來世界に其比を見ざる長壽の君主に算へまつる可し、內は夙に皇室の式微を慨し給ひ、王政維新の鴻業を成就あらせられて以來、開國進取の國是を定め給ひ、法治の實、代議の制、燦然火を放ち、外には日淸日露の大戰役に捷ちを制し給ひ、韓國併合の實擧りて、東洋平和の基礎確立し、玆に列祖列宗の偉業を大成し給ひたる御績は、實に空前曠古の盛事にして、聖德の御稜威、世界何れの皇帝と雖も、其の匹儔を求むるも得べからず。六千萬の同胞は祖先が未だ曾て享有せざる恩澤に沐浴するの光榮と幸福とを有し、聖恩の無量に感泣して以て、御命運の御長久ならんことを希ひ奉りしに、忽焉として神去り給ふ。痛恨悲愁何ぞ堪へん。玆に明治大帝の偉大なる功業と盛德の大業とを仰ぎ、御靈柩を遙拜して哀悼の至情を捧ぐ。

左は、當時本紙に揭げられた乃木大將の遺言狀である。

遺言狀

第一、自分此度御後を追ひ奉りて自殺候處恐入候儀、其罪輕からず候、然る所明治十年の役に於て軍旗を失ひ、其後死所を得たく心掛候も其機を得ず厚く聖恩に浴し今日迄過分なる御優遇を被むり追々老衰し最早や御役に立つ時も餘日無之候折柄、此度の御大變、何とも恐れ入候次第にて爰に覺悟相定め候。

第二、兩典戰死の後、先輩諸氏及び親友諸君より每々懇諭有之候得共、養子の弊害は古來の議論有之、自然乃木大兄の如き例他に少からず、特に華族の御優遇を蒙り居り、實子なければ致方無之候も却つて殘名を遺す樣の憂ひも有之、天理に背きたる事は致すまじき事に候、祖先墳墓の守護は血緣有之限りは其考共氣を附け申候に依り新阪邸は其爲め區又は市に寄附し然るべき方法に願ひ度く候、

第三、資財分與の議は別紙の通り認め置き其他は靜子に相談なさるべく候

第四、遺物分配の儀は自分軍職上の副官たりし諸子に時計、メートル眼鏡馬具、刀劍等の軍事用品の中見計ふ儀塚田大佐に依頼し置き候、大佐は前後兩度の戰役に盡力少からず、靜子承知の次第御相談なさるべく、其他は皆々の裁斷に委し候(以下略)

大正元年九月十二日夜　　希典

湯池定基殿

大館集作殿

玉木正之殿

三二、武昌革命と本社

明治四十四年十月、淸國武昌に「滅滿興漢」の大旆を揭げた革命軍が、勢ひ猛烈、長江一帶を壓して漢口、漢陽を占領し、長州岳州を瞬く間に陷れたかの有名な——黎元洪、黃興等の所謂武昌革命の勃發があつた。

この狀況は本社上海特派員安河內江南、漢口特置員波多南山より刻々通信し來つたが、革命軍の勢力とその將來性の重大を看取し本社は、間髮を入れず支那大陸に大活動の通信陣を張つた。

卽ち、十月廿五日には、曾て日露戰役の際、兒玉大將の密命を帶びて特別任務に活躍した社員來原慶助(木犀庵)を第一番に現地に急派し、續いて廿八日には社員水野元直(疎梅)に、東京エンパテー商會と契約した寫眞班、萩尾堅造、阿部敬助の兩名を隨はしめて現地に送り、現地にある社友宮坂九郎(重慶)、平岡小太郎(同)、吉澤忠吉(同)、神田正雄(北京)、小平總司(漢口)、荒川悚治(漢口)、佐藤武則(杭州)、梅津助太郎(上海)等を變に應じて活躍せしむべく手配し、革命軍の中央部に參加して敏腕を揮ふ社友末永節(嘯月)を

して全戰線を馳驅せしめ、本社通信布陣の連絡を掌らしめることにした。

同時に北支那方面の情況は阿部眞言、布衣遊子の兩名に通信を委囑したが袁世凱の行動に依つて時局重大化するに至つたので更に十一月十六日、北京に宮川良雄を特派して通信の完璧を期した。

清國混亂して、憲法發布の悲痛な清帝の上諭となり、袁世凱が總理大臣として新北京政府を組織するに及び、本紙は十一月二日紙上に「痛切なる上諭」と題して左の如く論じた。

「將に實行せられんとする清國立憲制十二ヶ條は今次の革命軍に對する唯一の和議條件であらうが、排滿興漢を中外に標榜して立てる革命軍に對して果して慰撫鎭定するに足るべきや否やは甚だ疑しい。革命黨の根絶に全力を用ひた袁世凱が、今回の動亂鎭定に出征の命令を受くるに及び、革命軍の主張し若しくば氣受よき條件を奏請して、一方、革命軍に對し自己の心事方針を表示して其の間に袁氏自身を中心とせる緩和調節を求めて、朝廷の困厄その極に達せるに乘じその意圖の儘に操縱するを得て、北京の宮中府中は其の頤使に動くの狀あるに似たり。斯くして或は政治的革命は、意外なる別途に於て平和的手段の下に、其の全部の目的を達するに至らざるまでも、或程度の革命は外より來らずして、內より行はれんとする傾向を示し來れり。

然れども清國革命黨員が理想とする所は共和政體を樹立するに在りて、殊に民主々義に依りて釀成されたる漢人の思想は、滿洲政府を以て種族として不俱戴天の仇敵となせり。されば假令北京政府にして愈よ其の上諭の如く立憲政體を確實なるべしとせんも、種族的に釀成されたる漢人をして悅服柔順ならしむるを得ざるや察すべし。（以下略）

果して、事實は社論の如く、歸趨し、その後明治四十五年二月十一日に共和立憲の上諭煥發となり、清帝退位、中華民國の出現となつた。

本紙はこの事に關して「支那の革命は當然歸着すべきところに歸着した。愛親覺羅氏の末路は、日本の明治維新に於ける德川氏政權奉還の先例に似てゐる。その民族性に負ふ內容は同一視すべきでは勿論ないが、人類の爭鬪を緩和する平和的精神を以て時局を解決せんとする點は相似てゐる。清帝の退位は大勢の促進するところで、如何ともすることは出來ないが、自ら帝位を退き、三百年の帝業を一朝にして亡滅に歸したことは、支那の歷史を通じて未だ曾つて見ぬ悲慘事である」と述べて、尙今後に於ける袁世凱の對日態度を注視すべし」と警告した。

本紙はこの革命戰に際しては、完璧の特派陣容に依つて斷然他紙を壓倒したが、この外清國の將來及び日本の執るべき方策等各視野からこれを論じ、又十數回に亘る「革命起因の回顧」「袁世凱と孫逸仙」等の時事解說を揭げ、終始一貫大陸問題の權威先覺としての社の傳統を發揮した。

三三、支那動亂と本紙

大正二年七月、支那は再び戰亂のるつぼと化した。

この內亂は我が國旗侮辱、邦人虐殺事件を起した所謂南京事件の發端をなし、對支國民大會の騷擾事件から阿部外務省政務局長の暗殺にまで發展し、大陸問題に力を注ぐ本社の社史に逸することの出來ぬ事件である。內亂の原因は七月十八日の本紙「南方宗社黨と結ぶ、革命黨擧兵の理由」と題した記事に盡されてゐる。一部を抄錄すれば

「——李烈鈞は九江に於て火蓋を切り、黃興も亦獨立を宣し、岑春煊を大元帥として討袁軍を組織中なりとの報あり、此時に際し、北強南弱を唱へ居たる我當局は如何に之れを見んとするか、抑も今回南方が事を擧げしは一時の憤怨に驅られしにあらざるなり。卽ち曩に宗教に暗殺せられし以來孫、黃等の革命黨一派は、袁を除くにあらざれば理想の共和政府を樹立する能はずとなしたり、然ればとて事をなさんとするも兵力微弱にして軍費の不足を告げ居るの時なれば、北方と對抗して堂々旗皷の間に成敗を決する能はざる狀態にあり、故に約百萬兩の賞金を袁の首に懸けて盛んに刺客を放てるも警戒嚴重にして目的を達せざるのみならず、袁の壓迫日一日と强烈を加へ來り、今や彼等の生命に及ばんとする危險狀態に迫れり、如斯にして彼等は遂に窮餘の一策として玆に宗社黨と結び、南北より挾擊せんと計畫し、秘かに西蒙方面に伏在せる宗社黨と交涉を開始し、其の後滿蒙に在る宗社黨領袖と孫黃との間に協議大に進捗し、本年五日に至りて相互の意見一致し、成功の上は支那全土を分割し、革命黨は黃興を大統領として南京に共和政府を建設し、宗社黨は恭親王又は肅親王の內何れかを滿蒙の首腦に奉じ、再び清朝を復活すとの條件の下に宗革兩者の締盟成り、機を見て事を擧ぐべしとし、宗社黨は各所に伏在せし同志に檄を發し、一方北京に在る第一鎭及び禁衛兩軍に向つて運動を開始し、一方革命黨は各所の同志と熟議を凝らし時機の到來を待ちつつありしに此の事何時しか奸智なる袁世凱の探知する處となり、同時に彼は大狼狽を極め、軍隊の離叛を防がんとて鐵道借款の大部分を之れがため消散し、一方本邦に在留せる宗社黨の首領に向つては孫李の兩人を特派して恩威を以て懷柔せんとしたるも遂に其效を奏せず、然るに宗革兩黨は一刻も猶豫ならずとして急遽事を

する彈劾の火の手は猛然と燃へ上つた。

本紙は事件勃發するや逸早く、九月八日の紙上に左の如く論じて無能政府攻擊の先頭に立つた。

「——日米外交に失敗し、日墨親善の好機を逸したる我外交の無能不振なる、支那に對してすら何等の威信だも示す能はずして、種々なる迫害を受く。

東洋の盟主を以て任じ、支那の保護者を以て任ずる我が日本が、斯かる由々敷大侮辱を支那より受くるは我が外交の無爲無能不振其の極に達せるを證明するものならずや。此の上猶ほも例の大國民の襟度なりとか、善隣國に對する俠氣なりとか云ふ下らぬ辭柄に籍口して其實列國の思惑を顧慮し、四方に氣兼して、萎縮退嬰の方針を持續することもあらむか、今後斯る侮辱事件は益々續出して、支那に於ける國威國權は全く失墜に至る可きなり。此際我政府は直ちに强硬なる談判を開始し、速やかに損害賠償の要求を爲す可きは言ふに及ばず、別言すれば南方一帶に於ける我が在留民の生命財產を保護するが爲め適當なる要地を占領して以て我が威信面目を回復するの手續を取るに毫も躊躇逡巡するの要あるなし。（中略）此際現內閣は徒らに愚にもつかぬ大國民の宏量など言ふ辭柄の下に邦家の大事を誤ることなきを嚴重に警告す。」

て果して慰撫鎭定するに足るべきや否やは甚だ疑しい。革命黨の根絶に全力を用ひた袁世凱が、今回の動亂鎭定に出征の命令を受くるに及び、革命軍の主張し若しくば氣受よき條件を奏請して、一方、革命軍に對し自己の心事方針を表示して其の間に袁氏自身を中心とせる緩和調節を求めて、朝廷の困厄その極に達せるに乘じその意圖の儘に操縱するを得て、北京の宮中府中は其の頤使に動くの狀あるに似たり。斯くして或は政治的革命は、意外なる別途に於て平和的手段の下に、其の全部の目的を達するに至らざるまでも、或程度の革命は外より來らずして、內より行はれんとする傾向を示し來れり。

然れども淸國革命黨員が理想とする所は共和政體を樹立するに在りて、殊に民主々義に依りて釀成されたる漢人の思想は、滿洲政府を以て種族として不俱戴天の仇敵となせり。されば假令北京政府にして愈よ其の上諭の如く立憲政體を確實なるべしとせんも、種族的に釀成されたる漢人をして悅服柔順ならしむるを得ざるや察すべし。（以下略）

果して、事實は社論の如く、歸趨し、その後明治四十五年二月十一日に共和立憲の上諭煥發となり、淸帝退位、中華民國の出現となつた。

二三、支那動亂と本紙

大正二年七月、支那は再び戰亂のるつぼと化した。

この內亂は我が國旗侮辱、邦人虐殺事件を起した所謂南京事件の發端をなし、對支國民大會の騷擾事件から阿部外務省政務局長の暗殺にまで發展し、大陸問題に力を注ぐ本社の社史に逸することの出來ぬ事件である。內亂の原因は七月十八日の本紙「南方宗社黨と結ぶ、革命黨擧兵の理由」と題した記事に盡されてゐる。一部を抄錄すれば

「——李烈釣は九江に於て火蓋を切り、黃興も亦獨立を宣し、岑春煊を大元帥として討袁軍を組織中なりとの報あり、此時に際し、北强南弱を唱へ居たる我當局は如何に之れを見んとするか、抑も今回南方が事を擧けしは一時の憤怨に驅られしにあらざるなり。卽ち曩に宗教に暗殺せられし以來孫、黃等の革命黨一派は、袁を除くにあらざれば理想の共和政府を樹立する能はずとなしたり、然ればとて事をなさんとするも兵力微弱にして軍費の不足を告げ居るの時なれば、北方と對抗して堂々旗皷の間に成敗を決する能はざる狀態にあり、故に約百萬兩の賞金を袁の首に懸けて盛んに刺客を放てるも警戒嚴重にして目的を達せざるのみならず、袁の壓迫日一日と强烈を加へ來り、今や彼等の生命に及ばんとする危險狀態に迫れり、如斯にして彼等は遂に窮餘の一策として玆に宗社黨と結び、南北より挾擊せんと計畫し、秘かに西蒙方面に伏在せる宗社黨と交涉を開始し、其の後滿蒙に在る宗社黨領袖と孫黃との間に協議大に進捗し、本年五日に至りて相互の意見一致し、成功の上は支那全土を分割し、革命黨は黃興を大統領として南京に共和政府を建設し、宗社黨は恭親王又は肅親王の內何れかを滿蒙の首腦に奉じ、再び淸朝を復活すとの條件の下に宗革兩者の締盟成り、機を見て事を擧ぐべしとし、宗社黨は各所に伏在せし同志に檄を發し、一方北京に在る第一鎭及び禁衛兩軍に向つて運動を開始し、一方革命黨は各所の同志と熟議を凝らし時機の到來を待ちつつありしに此の事何時しか奸智なる袁世凱の探知する處となり、同時に彼は大狼狽を極め、軍隊の離叛を防がんとて鐵道借款の大部分を之れがため消散し、一方本邦に在留せる宗社黨の首領に向つては孫李の兩人を特派して恩威を以て懷柔せんとしたるも遂に其効を奏せず、然るに宗革兩黨は一刻も猶豫ならずとして急遽事を擧げたる次第なり。

かくして南、北兩軍は一ケ月に亘つて戰つたが革命軍たる南軍遂に利あらず、南京は陷落して、潮のごとく殺到した張勳軍（北軍）は掠奪、暴行を恣にし、その暴虐は國旗を揭げて避難する邦人にも加へられ、國旗は汚辱せられ多數の邦人は張勳軍の暴兵に虐殺せられた。

こゝに於て、國民の義憤は沸騰し、斷乎たる處置を取り得ぬ軟弱政府へ對する彈劾の火の手は猛然と燃へ上つた。

本紙は事件勃發するや逸早く、九月八日の紙上に左の如く論じて無能政府攻擊の先頭に立つた。

「——日米外交に失敗し、日墨親善の好機を逸したる我外交の無能不振なる、支那に對してすら何等の威信だも示す能はずして、種々なる迫害を受く。

東洋の盟主を以て任じ、支那の保護者を以て任ずる我が日本が、斯かる由々敷大侮辱を支那より受くるは我が外交の無爲無能不振其の極に達せるを證明するものならずや。此の上猶ほも例の大國民の襟度なりとか、善隣國に對する俠氣なりとか云ふ下らぬ辭柄に籍口して其實列國の思惑を顧慮し、四方に氣兼して、萎縮退嬰の方針を持續することもあらむか、今後斯る侮辱事件は益々續出して、支那に於ける國威國權は全く失墜に至る可きなり。此際我政府は直ちに强硬なる談判を開始し、速やかに損害賠償の要求を爲す可きは言ふに及ばず、別言すれば南方一帶に於ける我が在留民の生命財產を保護するが爲め適當なる要地を占領して以て我が威信面目を回復するの手續を取るに毫も躊躇逡巡するの要あるなし。（中略）此際現內閣は徒らに愚にもつかぬ大國民の宏量など言ふ辭柄の下に邦家の大事を誤ることなきを嚴重に警告す。」

此事件に關する、東京をはじめ各地の國民大會は漸次騷擾化し、遂に外務省阿部政務局長は岡田滿、宮本千代吉兩人の爲に殺害せられるに至つた。原因は阿部政務局長が「世間では國旗が侮辱されたといつて重大のことのやうにいふが、國旗は一つの器具に過ぎぬ。こんな問題で憤慨するのは愚なことだ」と放言したと傳へられたことに義憤しての結果で、岡田は福岡縣鞍手郡勝野村の出身、僅かに十八歲であつたが、事件後自首自殺した。

本紙はこの事件に就ても國政に携るもの〻覺悟戒心を喚起する論調をすゝめ、對支問題解決の急を論じたが、この問題は、國民輿論の沸騰に恐れをなした支那側の陳謝で間もなく解決鎭靜した。

俠骨外交官を以て鳴つた玄洋社員、時の支那公使山座圓次郎が政府の弱腰に憤慨したのもこの時であり、末永節が「支那開放論」を本紙に寄稿したのもこの時であつた。

三四、櫻島の大爆發

大正三年一月十一日午前二時頃から、鹿兒島縣地方に强弱三百回に上る震動襲ひ、人々は恟々として不安に包まれたが、果然午前九時半に至つて櫻島に大爆發起り、孤島櫻島は瞬時にして焦熱地獄と化した。

我社は、鹿兒島通信部からの第一報を受けて號外を發行したが、刻々報ぜられる通信によつて爆發の容易ならざることを察知し、卽日、記者松隈天劍を寫眞班藤丸一利と共に現地に急派し、翌日は横田十六を送り、更にその翌日は「決死探檢記者」として今川特派員を現地に急派して報道陣を固めた。これ等特派員の活躍は連日の本紙を飾り、一報毎に讀者を驚かし、被害地への同情を起さしめた。

左は今川決死探檢記者の手記の一部である。

――水上警察署は非常の混雜だ。警官は握り飯を頬張つて中食の最中だ。刺を通じたが一向煮え切らないので「決死特派員」の名刺を出すと、恐ろしく感興を惹いたと見へて、早速汽艇に便乘を承諾してくれた。

上陸すると屍るい〳〵、人間の死骸かと思つてよく見ると、夥しい豚や馬の死骸だ。少し行くと茅屋から爺さんが目に泪を一杯ためて出て來た。事情を聽くと救助船に乘り遲れて今日まで飮まず食はずに耐へてゐたとのこと、湯村といふ村に着くと海江田六郎といふ一家がこれまた一家四人、堀立小屋にウヅクマツテゐる。この一家の話を聽くと「一家の財産とては何もない、こゝに飼つてゐる一頭の牛が財産だ、この牛によつて粗製砂糖を搾つて辛ふじて露命をつないでゐる。いまこの牛を殘して鹿兒島に避難しても將來の生計が案じられるから、寧ろこの危險を冒してこの地に踏みとゞまる」といふのだ。何たる悲慘事であらうか、この哀れな話を聞いてゐる間も危險は刻々に迫る。轟然たる音響を聽いた水上署長はソレ引揚げろと駈け足で田の浦方面(汽艇のある所)に逃げ出す。芝立小學校前に至るや、北方約三町の山腹に當つて轟然たる一大音響を聞く。民家は震動し灰黑色の噴煙は予等の身邊を包圍した。いま五分遲かつたならば予等は亜硫酸瓦斯のため名譽の最後を遂げたであらう。

十六日も警察隊と行を共にする豫定であつたが、かくては到底危險地帶に突入することゝ覺束ないので、けふは午前六時、單身櫻島に渡り横山の危險地帶に向つて前進した。この方面の溶岩はやゝ冷却してゐる。予は濛々たる噴煙の中を突進し、更に噴火口に近づかんとしたが、降灰のため、半身を埋沒せられて進退の自由を失つた。しかも鳴動は百雷の一時に眼前に落下するが如く、予が鼓膜は破れん許り。爆音の外何ものも聞こへず、爆音の外何ものも見えず。加ふるに突然足下より噴煙を始む。かくて如何ともすべからざる危地に陷つたが、予の目的は眞の探險をなすにあるが敢に、勇を鼓して更に他の方面に前進した。

今川特派員の活動は「決死特派員」の名に背かず、連日小舟を仕立てゝ、鳴動爆發を續くる櫻島を一周し、各地點から上陸して幾度か危地に臨みつゝも島内の狀況報道を萬全ならしめ、完全に任務を果した。

一方、本社は爆發と共に避難者及遭難者遺族救護の義捐金募集を開始したが、義捐金八千五百餘圓、衣類七千餘點、餅一萬五千餘個、その他白米、物品、多數の寄贈を依託されたので、篠崎主筆は鹿兒島に赴いて谷口同縣知事にこれ等を手交した。

三五、青島戰と本紙

大正三年六月二十八日、セルビヤの一青年が放つた短銃は歐洲大戰の端緒となり、英國と同盟國である日本は支那に於ける獨立の租借地膠州灣の武裝解除を要求して、同年八月廿三日對獨宣戰の布告となつた。

神尾光臣中將の率ゐる第十八師團(久留米)の精銳は時を移さず出動、青島封鎖司令長官加藤定吉中將の第二艦隊と協力して猛烈な戰端を開始した。

「――果然廿三日の正午を以て國交は斷絶した。日獨兩國は東亞に於て武力の雌雄を決せざるべからざる運命に逢着した。徒らに人命を損傷するは人道上の罪惡であれば、北京の外交團は獨逸に對して、日本の要求に應ずべしと勸說し、英公使の如きは其の利害得失を說いて獨公使に青島還付を極力勸めたが頑として應じなかつた。若し一戰にして日本に奪はれるに至らば愚劣眞に極まれるいふべしである。

世人は膠州灣租借地全部を支那に還付する目的の下に無償無條件を以て九月十五日限り日本政府に交付すべしといふ要求に對し、悲觀的解釋を下す者があるが、還付の意義は、獨逸政府が日本の勸告に應じて平和的に讓渡をしたる場合を指すもので、兩國兵火を交へて戰勝の結果日本がこれを攻落するに至らば問題は自ら別個となる。

――よつて開戰後日本の占領に歸すべき膠州灣は、東洋永遠の平和を維持に參加してその威力を發揮したが、日本民間航空界の狀態は幼稚なもので

を增設した。日獨戰で特筆すべきは我軍最初の飛行機の活動であつた。

本紙は、歐洲戰亂勃發と共に直ちに「歐洲戰亂地圖」を添付發行し、續いて十月三日には三色刷の「日獨交戰地圖」を讀者に配布し、十一月八日には「青島陷落記念號」を發行し、戰鬪中は、丸尾斗山の「從軍記」「英軍露陣地訪問記」「陸軍飛行機の活躍」、春田天眞の「攻圍軍の戰鬪經過」「我軍の衛生狀態等の戰爭讀物を連續揭載し、ニュース電報と共に異彩を放つた。四千六百餘名の俘虜と共に總督ワルデツクが輸送船で內地に送られるや、丸尾斗山はこれに同乘して船中でワルデツク總督と會見し、會見談及び獨逸兵の行動、談話など詳細に揭げて好評を博したものであつた。

三六、本社主催飛行大會

歐洲大戰勃發と時を同うして、大正三年八月、本社は航空思想普及のために「飛行大會」を主催し、當時民間航空界の重鎭と謳はれた坂本吾一を聘して始めて福岡市の上空を快翔せしめることになつた。期日は八月二、三の兩日であつたが、機體の故障から十、十一の兩日に延期決行された。

當時、軍用飛行機は相當發達して歐洲大戰に活躍し、我が海軍機も青島攻

動襲ひ、人々は恟々として不安に包まれたが、果然午前九時半に至つて櫻島に大爆發起り、孤島櫻島は瞬時にして焦熱地獄と化した。

我社は、鹿兒島通信部からの第一報を受けて號外を發行したが、刻々報ぜられる通信によつて爆發の容易ならざることを察知し、卽日、記者松隈天劍を寫眞班藤丸一利と共に現地に急派し、翌日は横田十六を送り、更にその翌日は「決死探檢記者」として今川特派員を現地に急派して報道陣を固めた。これ等特派員の活躍は連日の本紙を飾り、一報毎に讀者を驚かし、被害地への同情を起さしめた。

左は今川決死探檢記者の手記の一部である。

——水上警察署は非常の混雜だ。警官は握り飯を頬張つて中食の最中だ。刺を通じたが一向煮え切らないので「決死特派員」の名刺を出すと、恐ろしく感興を惹いたと見へて、早速汽艇に便乘を承諾してくれた。

上陸すると屍るい〳〵、人間の死骸かと思つてよく見ると、夥しい豚や馬の死骸だ。少し行くと茅屋から爺さんが目に泪を一杯ためて出て來た。事情を聽くと救助船に乘り遲れて今日まで飮まず食はずに耐へてゐたとのこと、湯村といふ村に着くと海江田六郎といふ一家がこれまた一家四人、堀立小屋にウヅクマツテゐ

今川特派員の活動は「決死特派員」の名に背かず、連日小舟を仕立てゝ、鳴動爆發を續くる櫻島を一周し、各地點から上陸して幾度か危地に臨みつゝも島内の狀況報道を萬全ならしめ、完全に任務を果した。

一方、本社は爆發と共に避難者及遭難者遺族救護の義捐金募集を開始したが、義捐金八千五百餘圓、衣類七千餘點、餅一萬五千餘個、その他白米、物品、多數の寄贈を依託されたので、篠崎主筆は鹿兒島に赴いて谷口同縣知事にこれ等を手交した。

三五、青島戰と本紙

大正三年六月二十八日、セルビヤの一青年が放つた短銃は歐洲大戰の端緒となり、英國と同盟國である日本は支那に於ける獨立の租借地膠州灣の武裝解除を要求して、同年八月廿三日對獨宣戰の布告となつた。

神尾光臣中將の率ゐる第十八師團(久留米)の精銳は時を移さず出動、青島封鎖司令長官加藤定吉中將の第二艦隊と協力して猛烈な戰端を開始した。

「——果然廿三日の正午を以て國交は斷絶した。日獨兩國は東亞に於て武力の雌雄を決せざるべからざる運命に逢着した。徒らに人命を損傷するは人道上の罪惡であれば、北京の外交國は獨逸に對して、日本の要求に應ずべしと勸說し、英公使の如きは其の利害得失を說いて獨公使に青島還付を極力勸めたが頑として應じなかつた。若し一戰にして日本に奪はれるに至らば愚劣眞に極まれるいふべしである。

世人は膠州灣租借地全部を支那に還付する目的の下に無償無條件を以て九月十五日限り日本政府に交付すべしといふ要求に對し、悲觀的解釋を下す者があるが、還付の意義は、獨逸政府が日本の勸告に應じて平和的に讓渡をしたる場合を指すもので、兩國兵火を交へて戰勝の結果日本がこれを攻落するに至らば問題は自ら別個となる。

——よつて開戰後日本の占領に歸すべき膠州灣は、東洋永遠の平和を維持する必要に應じて之が處分をなすべきである。此の秋、此の際に及んでは膠州灣問題に對しては他の干涉容喙は絶對に許さぬ。日本は東洋永遠の平和を唯一の基礎としてこれに應ずる行動に出づべきである。」

と攻擊に先だちて、過去に於ける外交の失敗を再び繰返さないやう警告すると共に、特派員として先づ松隈天劍(勇)を宣戰布告の當日膠州灣に急派し、翌廿一日には丸尾斗山、春田天眞、宮川良美の三名を從軍記者として派遣した

一方、歐洲大戰の戰況報道の完全を期して海外通信網の强化を圖り、紙面を九段制に擴張し、發行部數の增大に催へて佛國式マリノニー輪轉機一臺を增設した。日獨戰で特筆すべきは我軍最初の飛行機の活動であつた。

本紙は、歐洲戰亂勃發と共に直ちに「歐洲戰亂地圖」を添付發行し、續いて十月三日には三色刷の「日獨交戰地圖」を讀者に配布し、十一月八日には「青島陷落記念號」を發行し、戰鬪中は、丸尾斗山の「從軍記」「英軍露陣地訪問記」「陸軍飛行機の活躍」、春田天眞の「攻圍軍の戰鬪經過」「我軍の衛生狀態等の戰爭讀物を連續揭載し、ニュース電報と共に異彩を放つた。四千六百餘名の俘虜と共に總督ワルデツクが輸送船で內地に送られるや、丸尾斗山はこれに同乘して船中でワルデツク總督と會見し、會見談及び獨逸兵の行動、談話など詳細に揭けて好評を博したものであつた。

三六、本社主催飛行大會

歐洲大戰勃發と時を同うして、大正三年八月、本社は航空思想普及のために「飛行大會」を主催し、當時民間航空界の重鎭と謳はれた坂本吾一を聘して始めて福岡市の上空を快翔せしめることになつた。期日は八月二、三の兩日であつたが、機體の故障から十、十一の兩日に延期決行された。

當時、軍用飛行機は相當發達して歐洲大戰に活躍し、我が海軍機も青島攻略に參加してその威力を發揮したが、日本民間航空界の狀態は幼稚なものであつた。「果して飛び得るだらうか?」といふのが、當時飛行機に對する一般の考へ方であつた。從つて、「飛行機が飛ぶ!」といふので人々は早朝から、地方の人々は前夜から、會場(福岡城外練兵場)に押し寄せた。

飛行は兩日とも午前、午後の二回に涉つて行はれたが、觀衆は坂本飛行士の鮮やかな飛行振りに度膽を拔かれて感歎した。

この飛行大會の爲め、汽車、電車は割引が行はれ、二十四聯隊は總出動で飛行射擊演習を擧行するなど、想像以上の盛大さであつた。然しその當時

の飛行記錄は現時のそれに比すれば飛行時間十六分、高度最高四千尺、最低七尺、航空距離二十哩といふ幼稚さであつた。

飛行を終了後の坂本飛行士の談話を參考に引用しておかう。

「上等の飛行日和であつた。大濠の上では氣流のために押えられるかと思つて心配した。射撃隊の砲火は判つきりと見へるが、音は爆音にさへぎられて聞えなかつた。今回のやうに地上七尺迄の低空飛行を試みたことは始めてゞあつた。殘の島の上空で、玄海の風が激しく襲ひ、機を動搖させた。日本のやうな惡氣流の所で經驗を積んで置けば、歐米の本場に出ても決してひけを取らない。飛行機は危險だといはれるが、いまの進んだ科學と、技術によつて造られた飛行機は決して危險ではない。偶々墜落などするのは飛行家に責任がある。惡氣流や突風、旋風に出會しても變に應じ騒がぬだけの度胸と操縦技術が出來なければ駄目だ。これは經驗によつてのみ得られるものである。云々」

參觀中の谷口福岡縣知事は、所澤で陸軍機に同乘の經驗をもつといふ當時の飛行通であつたが、飛行機が離陸すると、「コレはうまい」と叫び、銀翼悠々、蒼空を一周すると、「どうも感心ぢや、もうこれで成功だ。しかし無事に着陸してくれゝばよいが」と一抹の不安を抱いてゐたが、低空飛行の離れ業の後、鮮やかに着陸すると「これは美事！」「坂本君萬歳！」と走り出して握手した……と當時の本紙に記載されてゐる、記事によつても如何に當時一般人の飛行機に對する智識の低かつたかゞ想像されやう。

三七、北九州驢馬旅行

大正四年の夏には奇抜な「北九州驢馬旅行」を擧行した。東西二別にして東廻り「彌次號」と呼び記者小田部博美、西廻りは「喜多號」と呼び記者藤井新草を乘せ沿道各地にユーモラスを振りまきながら地方の風景産物などを紹介して、夏涸れの新聞を賑はさうといふ趣向で、その催しの社告を掲げて說明に代へる。

「博美、新草兩君は物好きな記者なり、今度コノタビ驢馬旅行といふものを企つ飛行機や飛行船での空中旅行もあまり珍らしからぬ今日の世界に、驢馬旅行とは大分洒落すぎたり。對手が驢馬のことなれば無論鈍馬な旅に相違なし。驢馬は乘るに非ず、索くにあらずして後から追ふなり。さればこの行、驢馬のケツを追ふてノロリ〳〵と餘り香しからぬ旅なり。旅程は兩君東西に岐れて出發點を福岡市とし、

▽東（博美）は折尾、小倉、豐津、後藤寺、直方、飯塚、甘木、日田、吉井、久留米、山鹿を經て熊本市に至る八十五里四町のコース

▽西（新草）は前原、唐津、伊萬里、佐世保、早岐、大村、嬉野、鹿島、武雄、佐賀、柳河、大牟田を經て熊本市に入る九十一里二十九町のコースに足跡を印して兩君とも福岡に凱旋しやうといふ。東は多くは山、西は多くは海、しかしてこの山へ山へ、海へ海へと相手が驢馬では贅澤をいふ勿れ、驢馬の背中にシヨタマ積んだ原稿用紙は、旅中の見たり聞いたり、其の土地々々の人情風俗乃至一般狀勢など兎角肩の凝らぬ夏の讀物を得んが爲めなり。時や三伏の炎暑、驢馬倒れるか、記者倒れるか。」

三八、大正天皇御卽位

大正天皇御卽位の御大禮は、大正四年の秋擧げさせ給ふたが、これこそは明治天皇が御定め給ふた登極令最初の萬古に比なく後世に範を垂れさせ給ふ御盛儀であつた。

本社は千載一遇の御大典を壽ぎ奉り、俳句、和歌、漢詩等奉祝懸賞文藝を募集し、讀者に普ねくこの御盛典を拜せしむべく、陛下御還幸前から御還幸まで、藤井新草を京都に特派し、十日賢所大前の儀から紫宸殿の御儀、御神樂の儀、大祓及び禊の儀、鎭魂の儀、大嘗祭の儀を經て十七日の大饗宴まで奉祝大典の特別號を發行し、讀者へは御盛儀を謹寫した「御大典記念寫眞帳」を頒布した。十一月十日掲載の本紙奉祝文は左の如くであつた。

大典を祝し奉る

萬世一系の天皇、神武天皇より數へて、茲に百二十二代、大正四年十一月十日を以て御卽位禮を擧げさせ給ふ。布衣葦帶、何を以て新帝の幸多き新治世を壽ぎ奉るべき。伏して惟れば、陛下御踐祚以來、茲に滿三歳、今や聖駕は秋豐かに山秀で水淸き平安の舊都に移御あらせられ、陛下御一代唯一度の盛典を行はせ給ふ。君萬歳の聲は山河を搖がして邊陬に曳々たり。曜靈赫灼扶桑に出でられ九陽を燭し、方漠に塞るの感なくんば非ず。凡そ我が祖宗の鴻謨や至大無限、六合を狹とし、宇宙を包括す。君臣の分、遠く建國の昔に定まり、國體の淵源、茲に發す。實に我國體は我國のみの有する國體にして、忠孝の二者全く一致し、又敬神、忠君、愛國の三者全く一致す。此國體は神代に傳はり、上、列聖相承け、下忠勇なる臣民相續きて金甌無缺の國體を奉戴し來り、君臣間の歷史的連鎖を精神的に傳承して我國體の精華を千古に發揮す、光榮ある國史の成跡、又一に之れに基く。

王道蕩々、皇國赫々、陛下の天縱英明、更に皇謨に加ふ所大に、大正の御代、必ず光前照後の一大紀元を帝國の史乘に劃するを信ず斯の日、紫極丹杖景雲に滿ち、爽日龍光草萊に洽し、草莽の微臣跪伏稽首して、一片涓埃の誠を致し、遙かに大典の盛儀を祝し、皇猷

明治
御
募
ま
樂
奉
を

四千

▽名譽會長頭山滿▽名譽顧問玄洋社長、進藤喜平太、陸軍々醫監武谷水城▽陸軍少將山本悌三郎▽會長陸軍少將横地長幹▽顧問東京相撲協會綾川五郎次▽賛助員福岡市長井手佐三郎、代議士奥村七郎、福岡縣議原田種一、同太田勘太郎、福岡市助役奏傳次郎、福岡市會議長岩永佐八、福岡商議會頭石村虎吉、福師校長根岸福彌、修猷館長白坂榮彦、福工校長藤川勝丸、福商校長太田德次郎、福農校長高橋正一

參加者は福師、修猷館、福農、福工、福商の五中等學校生徒百名、觀覽者四千に達した。

會は午前十時に始まり最初の取組は全員を五十名宛東西に分ち個人割勝負、次は五人拔勝負で修猷館の富永優勝し、頭山名譽會長寄贈の太刀一口を獲得した。最後に各校選手五人宛によつてトーナメント式の決勝戰を行つたが、福工と修猷館が勝殘り、兩校の猛烈な爭覇戰は大將同士の取組となり福工大將鈴木、修猷大將富永を突出して、第一回の優勝旗は福工軍の手に歸した。

當時の學生相撲は、各選手それ〳〵相撲名を持ち、毛布や紙、唐米袋などで學生らしい趣向を凝らした化粧廻しを造り、相撲甚句を歌つて土俵入りをするといふ狀態であつた。

翌第二回からは土俵を筥崎宮神苑の松原に移し、每年五月二十七、八兩日の日本海々戰記念會當日を期して擧行された。

危險ではあるが、に出會しても變に應じ騷がぬだけの度胸と操縱技術が出來なければ駄目だ。これは經驗によつてのみ得られるものである。云々」

參觀中の谷口福岡縣知事は、所澤で陸軍機に同乘の經驗をもつといふ當時の飛行通であつたが、飛行機が離陸すると、「コレはうまい」と叫び、銀翼悠々、蒼空を一周すると、「どうも感心ぢや、もうこれで成功だ。しかし無事に着陸してくれゝばよいが」と一抹の不安を抱いてゐたが、低空飛行の離れ業の後、鮮やかに着陸すると「これは美事！」「坂本君萬歳！」と走り出して握手した……と當時の本紙に記載されてゐる、記事によつても如何に當時一般人の飛行機に對する智識の低かつたかゞ想像されやう。

三七、北九州驢馬旅行

大正四年の夏には奇抜な「北九州驢馬旅行」を擧行した。東西二別にして東廻り「彌次號」と呼び記者小田部博美、西廻りは「喜多號」と呼び記者藤井新草を乘せ沿道各地にユーモラスを振りまきながら地方の風景産物などを紹介して、夏涸れの新聞を賑はさうといふ趣向で、その催しの社告を掲げて說明に代へる。

て兩君とも福岡に凱旋しやうといふ。東は多くは山、西は多くは海、しかしてこの山へ山へ、海へ海へと相手が驢馬では餐澤をいふ勿れ、驢馬の背中にシコタマ積んだ原稿用紙は、旅中の見たり聞いたり、其の土地々々の人情風俗乃至一般狀勢など兎角肩の凝らぬ夏の讀物を得んが爲めなり。時や三伏の炎暑、驢馬倒れるか、記者倒れるか。」

三八、大正天皇御卽位

大正天皇御卽位の御大禮は、大正四年の秋擧げさせ給ふたが、これこそは明治天皇が御定め給ふた登極令最初の萬古に比なく後世に範を垂れさせ給ふ御盛儀であつた。

本社は千載一遇の御大典を壽ぎ奉り、俳句、和歌、漢詩等奉祝懸賞文藝を募集し、讀者に普ねくこの御盛典を拜せしむべく、陛下御還幸前から御還幸まで、藤井新草を京都に特派し、十日賢所大前の儀から紫宸殿の御儀、御神樂の儀、大祓及び禊の儀、鎭魂の儀、大嘗祭の儀を經て十七日の大饗宴まで奉祝大典の特別號を發行し、讀者へは御盛儀を謹寫した「御大典記念寫眞帳」を頒布した。十一月十日掲載の本紙奉祝文は左の如くであつた。

大典を祝し奉る

萬世一系の天皇、神武天皇より數へて、玆に百二十二代、大正四年十一月十日を以て御卽位禮を擧げさせ給ふ。布衣葦帶、何を以て新帝の幸多き新治世を壽ぎ奉るべき。伏して惟れば、陛下御踐祚以來、玆に滿三歳、今や聖駕は秋豐かに山秀で水淸き平安の舊都に移御あらせられ、陛下御一代唯一度の盛典を行はせ給ふ。君萬歳の聲は山河を搖がして邊陬に曳々たり。曜靈赫灼扶桑に出でられ九陽を燭し、方漠に塞るの感なくんば非ず。凡そ我が祖宗の鴻謨や至大無限、六合を狹とし、宇宙を包括す。君臣の分、遠く建國の昔に定まり、國體の淵源、玆に發す。實に我國體は我國のみの有する國體にして、忠孝の二者全く一致し、又敬神、忠君、愛國の三者全く一致す。此國體は神代に傳はり、上、列聖相承け、下忠勇なる臣民相續きて金甌無缺の國體を奉戴し來り、君臣間の歷史的連鎖を精神的に傳承して我國體の精華を千古に發揮す、光榮ある國史の成跡、又一に之れに基く。

王道蕩々、皇國赫々、陛下の天縱英明、更に皇謨に加ふ所大に、大正の御代、必ず光前照後の一大紀元を帝國の史乘に劃するを信ず斯の日、紫極丹杖景雲に滿ち、爽日龍光草萊に洽し、草莽の微臣跪伏稽首して、一片涓埃の誠を致し、遙かに大典の盛儀を祝し、皇猷の愈よ大ならんことを祈り奉る。

三九、西日本中等學校相撲大會

本社主催の西日本中等學校相撲大會第一回は、大正四年十一月二十八日、福岡市天神町福博電車會社敷地(後の東邦電力福岡支店)に於て擧行され、市內五中等學校參加した。左に見える役員の顏觸れを見ても、その盛大ぶりが想像されやう。

▽名譽會長頭山滿▽名譽顧問玄洋社長、進藤喜平太、陸軍々醫監武谷水城▽陸軍少將山本悌三郎▽會長陸軍少將横地長幹▽顧問東京相撲協會綾川五郎次▽賛助員福岡市長井手佐三郎、代議士奥村七郎、福岡縣議原田種一、同太田勘太郎、福岡市助役奏傳次郎、福岡市會議長岩永佐八、福岡商議會頭石村虎吉、福師校長根岸福彌、修猷館長白坂榮彦、福工校長藤川勝丸、福商校長太田德次郎、福農校長高橋正一

參加者は福師、修猷館、福農、福工、福商の五中等學校生徒百名、觀覽者四千に達した。

會は午前十時に始まり最初の取組は全員を五十名宛東西に分ち個人割勝負、次は五人抜勝負で修猷館の富永優勝し、頭山名譽會長寄贈の太刀一口を獲得した。最後に各校選手五人宛によつてトーナメント式の決勝戰を行つたが、福工と修猷館が勝殘り、兩校の猛烈な爭覇戰は大將同士の取組となり福工大將鈴木、修猷大將富永を突出して、第一回の優勝旗は福工軍の手に歸した。

當時の學生相撲は、各選手それ〴〵相撲名を持ち、毛布や紙、唐米袋などで學生らしい趣向を凝らした化粧廻しを造り、相撲甚句を歌つて土俵入りをするといふ狀態であつた。

翌第二回からは土俵を宮崎宮神苑の松原に移し、毎年五月二十七、八兩日の日本海々戰記念會當日を期して擧行された。

九州競馬大會

大正五年五月廿一、二兩日、福岡城外練兵場で、本社主催の「九州競馬大會」が催され、九州各地からの出場馬百六十一頭、參加人五萬、非常な盛況を現出し、爾來毎年擧行して馬匹改良に貢獻したが、十二回まで繼續して中止した。地方競馬の先鞭をつけたものとして敢て一筆附加する次第である。

四〇、大演習と本紙

大正五年十一月、肥筑の野に陸軍特別大演習擧行せられ、大元帥陛下には大纛を福岡に進め給ふた。七日宮城御發輦、名古屋離宮に一夜を御駐輦あらせられて神戸から御召艦榛名に御乘艦、霧島、比叡を從へさせられ、土佐沖から九州の南端を御迂回あらせられて十日佐世保に御入港、十一日午前十時五十六分福岡市の大本營(福岡縣廳)に入御、御休憩もとらせられず午後二時から御統監のため鳥栖に向はせられた。本紙はこの千載一遇の光榮を讀者と共に祝福感激して、十日の紙上に左の如く謹記し奉つた。

鳳輦を迎へ奉る

皇統連綿として、百二十二代の寶祚を躊ませ玉へる
今上皇帝陛下には、今秋肥筑の野に於て行はせらるゝ陸軍特別大演習御統監の爲め、本日を以て佐世保軍港に御上陸遊ばされ、鳳輦を福岡市に進め玉ふ。吾人臣民は何を以てか奉迎の赤誠を表し、何を以てか此の光榮に酬ひ奉るべきぞ。恭しく惟みるに
先帝陛下の鴻業は、內に封建の百弊を掃蕩し、立憲の制を施き、外は列國と對峙して、締盟親善の誼を擧けさせ玉ひ、更に淸國の壇恣を膺懲し、露國の暴威を粉碎し、加之琉球を收め、臺灣を領し、滿州を租借し、尙進んで樺太の南半を獲得し、遂に韓國を併合して、我帝國の地位努力は、復た昔日の島帝國に非ざるを致せり。而して大正の御代に入りて早くも今上陛下は歐洲大戰亂に加はらせられ、列國一齊に御稜威を仰ぎ、更に亞細亞の盟主として、極東及び南洋指導權を掌握し玉ふに至り、國運の將來は益々發展向上の域に向ふ。生を
今上陛下の聖代に享けたる吾人臣民は親しく沿道に
陛下の御英姿を拜し奉り、報國の心は盡忠の心と一致し、忠君の精神は愛國の精神と契合し、君臣相親み相結ぶの情益々牢きを加ふ。玆に滿腔の赤誠を捧げて恭しく鳳輦を迎へ奉る。
大演習は、廣島第五、小倉第十二兩師團より成る北軍の進擊に對して、久留米第十八、熊本第六兩師團の南軍がこれを邀擊する想定の下に、兩軍十萬肥筑の野に軍國日本の大繪卷を展開した。
參謀總長は上原勇作大將、中央審判長は田中義一中將、北軍司令官井口省吾中將、南軍司令官大迫尙道大將で、所澤から陸軍機十六臺參加し、壯烈な攻防戰を演じて十四日終了、十五日は福岡城外練兵場に於ける大觀兵式を擧はし給ひ、十六日龍顏麗しく還幸あらせられた。
此間、大正天皇には、大演習御統監の御多忙を割かせられて、十二日には九州帝國大學に行幸あらせられ、十三日には縣下の實業家を御召出、その他學校、工場、高橋紹運の墓などに侍從を御差遣、文事產業を御奬勵あらせられた。尙福岡、佐賀兩縣に於ける治國撫民、勤王、文敎、治水などの史上に功績をとゞむべき故人に對しては御贈位の御沙汰があり、枯骨に及ぶ聖恩の廣大に兩縣民は感泣した。
本社は、本社所在地に鳳輦を迎へ奉つて全機構を感激に動員し、報道使命の萬全を期して活動した。十一月十日から十六日まで、一週間に亘つて特別號を發行し、大正六年の新春には、畏くも本社が特に許されて御野立所に於て謹寫し奉つた寫眞によつて、東條鉦太郎が日夜潔齊謹製した大正天皇御英姿を全讀者に贈呈した。

四一、シベリヤ出兵と米騷動

歐洲大戰は繼續し、ロシヤ革命の餘波は、我が軍のシベリヤ出兵となり、八月二日動員令を受けた小倉第十二師團は大井師團長以下勇躍して浦鹽に向つて出動した。
我が社は從軍記者として今川英隆(鹿眠)を特派、我が師團の活躍ぶりを報道したが、今川特派員の從軍記事は奔放自在、紙價を高からしめたものであつた。
このシベリヤ出兵問題は、論議の多い如く、出兵當時も贊否相半の狀態であつた。本紙は七月二十日の紙上に「――出兵問題は今や朝野議論の大主題となつてゐるが、吾人國民は政府の出兵の動機及び目的を何等聽くことなく遺憾に堪へない。立憲政治は國民の輿論を無視することを許さない。和戰外交のことは大權に在りと雖も、その發動に先ちて國民の意嚮を定むるは輔弼の職に在る國務大臣の職責である。曩きに征露の軍を起すや、國民は十年の臥薪嘗膽よく戰爭の動機目的を諒解した。今次の出兵は膠州灣の征討とは其の意義自ら異るところがある。政府はよろしく出兵の動機目的を國民に明示公表すべきである」と論じた。
歐州大戰の繼續は、日一日と物價を暴騰せしめ、新聞紙の材料たるパルプなど外國品は手に入らず、內地品は缺乏し、紙の不足する一方讀者は戰爭のため增大するといふ變態的狀態を現出した。從つて購讀料の値上げは止むを得ず、四月一日從來の一ヶ月三十七錢を四十錢に改正したが、更に翌七年六月には一躍五十錢に値上けした。
史上有名な米價暴騰に依る「米騷動」もその頃の出來事であつた。
卽ち、米價は大正七年に入つて一升五十五錢、六十錢と恐るべき値段を示して來た。本紙は七月に入つて數回に亘つて米價問題を論じ、政府の無策無

共に祝福感激して、十日の紙上に左の如く謹記し奉つた。

鳳輦を迎へ奉る

皇統連綿として、百二十二代の寶祚を躊ませ玉へる
今上皇帝陛下には、今秋肥筑の野に於て行はせらるゝ陸軍特別大演習御統監の爲め、本日を以て佐世保軍港に御上陸遊ばされ、鳳輦を福岡市に進め玉ふ。吾人臣民は何を以てか奉迎の赤誠を表し、何を以てか此の光榮に酬ひ奉るべきぞ。恭しく惟みるに
先帝陛下の鴻業は、内に封建の百弊を掃蕩し、立憲の制を施き、外は列國と對峙して、締盟親善の誼を擧けさせ玉ひ、更に清國の壇恣を膺懲し、露國の暴威を粉碎し、加之琉球を收め、臺灣を領し、滿州を租借し、尚進んで樺太の南半を獲得し、遂に韓國を併合して、我帝國の地位努力は、復た昔日の島帝國に非ざるを致せり。而して大正の御代に入りて早くも今上陛下は歐洲大戰亂に加はらせられ、列國一齊に御稜威を仰ぎ、更に亞細亞の盟主として、極東及び南洋指導權を掌握し玉ふに至り、國運の將來は益々發展向上の域に向ふ。生を
今上陛下の聖代に享けたる吾人臣民は親しく沿道に
陛下の御英姿を拜し奉り、報國の心は盡忠の心と一致し、忠君の精神は

此間、大正天皇には、大演習御統監の御多忙を割かせられて、十二日には九州帝國大學に行幸あらせられ、十三日には縣下の實業家を御召出、その他學校、工場、高橋紹運の墓などに侍從を御差遣、文事産業を御奬勵あらせられた。尚福岡、佐賀兩縣に於ける治國撫民、勤王、文教、治水などの史上に功績をとゞむべき故人に對しては御贈位の御沙汰があり、枯骨に及ぶ聖恩の廣大に兩縣民は感泣した。

本社は、本社所在地に鳳輦を迎へ奉つて全機構を感激に動員し、報道使命の萬全を期して活動した。十一月十日から十六日まで、一週間に亘つて特別號を發行し、大正六年の新春には、畏くも本社が特に許されて御野立所に於て謹寫し奉つた寫眞によつて、東條鉦太郎が日夜潔齊謹製した大正天皇御英姿を全讀者に贈呈した。

四一、シベリヤ出兵と米騒動

歐洲大戰は繼續し、ロシヤ革命の餘波は、我が軍のシベリヤ出兵となり、八月二日動員令を受けた小倉第十二師團は大井師團長以下勇躍して浦鹽に向つて出動した。

我が社は從軍記者として今川英隆(鹿眠)を特派、我が師團の活躍ぶりを報道したが、今川特派員の從軍記事は奔放自在、紙價を高からしめたものであつた。

このシベリヤ出兵問題は、論議の多い如く、出兵當時も贊否相半の狀態であつた。本紙は七月二十日の紙上に「――出兵問題は今や朝野議論の大主題となつてゐるが、吾人國民は政府の出兵の動機及び目的を何等聽くことなく遺憾に堪へない。立憲政治は國民の輿論を無視することを許さない。和戰外交のことは大權に在りと雖も、その發動に先ちて國民の意嚮を定むるは輔弼の職に在る國務大臣の職責である。曩きに征露の軍を起すや、國民は十年の臥薪嘗膽よく戰爭の動機目的を諒解した。今次の出兵は膠州灣の征討とは其の意義自ら異るところがある。政府はよろしく出兵の動機目的を國民に明示公表すべきである」と論じた。

歐州大戰の繼續は、日一日と物價を暴騰せしめ、新聞紙の材料たるパルプなど外國品は手に入らず、內地品は缺乏し、紙の不足する一方讀者は戰爭のため增大するといふ變態的狀態を現出した。從つて購讀料の値上げは止むを得ず、四月一日從來の一ケ月三十七錢を四十錢に改正したが、更に翌七年六月には一躍五十錢に値上げした。

史上有名な米價暴騰に依る「米騒動」もその頃の出來事であつた。

卽ち、米價は大正七年に入つて一升五十五錢、六十錢と恐るべき値段を示して來た。本紙は七月に入つて數回に亘つて米價問題を論じ、政府の無策無能を悾慨し、根本對策の速急樹立實施を叫び、「若しこのまゝ推移せんか由々しき大事を惹起するであらう」と論じたが、果して八月、富山縣下の一漁村滑川町の女房連に依つて捲き起された所謂「米騒動」は忽ち全國に飛火して鈴木商店の燒打等收拾不可能の混亂狀態を現出した。

これが爲畏くも御宸襟を惱ませ給ふた兩陛下には御內帑金三百萬圓下賜の御沙汰があり、續いて三井、岩崎兩家が各百萬圓の寄附を申出で、全國の大小、富豪實業家も競つてこれに倣ひ、事の重大に驚愕した政府は國庫から一千萬圓を支出して急救費に充て、「外國米の廉賣」と「國內貯藏米の强制買收」の方法を定め、米穀需給の圓滑をはかる應急策を講じたので騒動は一先づ鎭靜した。本紙は八月十六日の社說に「吁國富んで民貧し」と論述して政府の責任を問ふた。

「――我國は目下十二億の正貨を有する成金國なり。米國の成金程度には比すべくもあらざるも、正貸十二倍に達したるは從來多く其の比を見ず、國富みたるは爭ふべからざる事實なり。然るに國民大多數の生活は、國富みたるに反比例して、一層の生活困難を加へたるは悲慘なる一大矛盾の現象と云はざるべからず。(中略)――政府は今日の斯の如き不安なる空氣、不穩事象の頻發を目前に眺めて「國民よ我慢せよ、在米は千七百萬石あり新米の出づるも亦遠からず」として現下の急迫せる食糧迫害の危機に對し毫も根本的解決策を立てず、米穀管理に對する經綸を具體化する能はず、公定價格設定問題についても何等積極的態度に出づる能はず、近世稀に見る生活難より來る一揆暴動を激發せしめ、これに依りて如何なる教訓と刺戟とを與へられたるか。」

「米騒動」擴大と共に、政府は「その筋發表」以外のもの丶新聞揭載を禁止したので、社會不安は益々募り、全國の言論機關は猛烈にこの壓政に抗して起ち上つた。卽ち東京春秋會の記者團によつてあげられた內閣彈劾の烽火をきつかけとして、名古屋では東海新聞記者會、關西では大阪近畿記者會の奮起となり、九州では福岡市の縣公會堂に於て、本社及び福日、博多每日主催の下に全九州新聞二十八社の代表者參集し、「九州新聞記者大會」を開いて政府彈劾の決議をなし、決議文を首相、內相、貴衆兩院議長及び東京記者團に打電し、內閣糾彈に奮鬪した。

四二、一萬號記念祝賀

本紙は、大正七年九月九日、紙齡一萬號を迎へるに至つたので、當日は十六頁の「一萬號記念號」を發行し、政治、經濟、產業、教育などの過去「三十年の回顧」を特輯した。然し記念大祝賀會は、第十二師團西比利亞出動中ではあり、米騷動直後の遠慮からこれを取止め、讀者に福引券を進呈し、社内のみの家族的な小宴を當日福岡市縣公會堂で催した。集まるものは社員從業員全部に進藤玄洋社長以下の玄洋社員を加へて百八十餘人であつた。

——篠崎主筆が開會の挨拶を述べ、大原社長は「三十有餘年の歲月を經て一萬の號を重ねたが、新聞はこれからがホントの活動期に入るのだ」と決意を示し「——編輯、營業、工場は勿論、關係者は一つとして新聞を作るに欠ぐべからざる力でないものはない。この意味から全社員は一家族となつて協力し、ます〳〵努力して頂きたい」と述べて、社長自ら創刊當初から勤續の佐竹菅根をはじめ最近入社した給仕小使に至るまで全部に「お祝の目錄」を贈與した。特に創刊以來の功勞者佐竹菅根、今村外園兩人には次の如き表彰狀と金品を贈つてその功勞を顯彰した。

表彰狀

九州日報ノ前身福陵新報創立當時ヨリ入社シ爾來勤續三十二年ノ久シキニ及ブ其間ノ忠實ナル精勵ハ我社ノ發展ニ貢獻シタルコト頗ル大ナルモノアリ、玆ニ一萬號ノ記念日ニ際シ其ノ勤勞ニ酬ユル爲メ金壹千圓ヲ贈呈シテ聊カ表彰ノ微意ヲ表ス

大正七年九月九日　　九州日報社

佐竹菅根殿

今村外園は當時既に退社してゐたが、創立準備時代から參畫して二十年、本紙の連載小說を擔當し、記者として奮鬪した功勞に對して表彰の意を表したものである。

表彰狀

九州日報ノ前身福陵新報創立當初ヨリ入社シ社務ニ從事スルコト二十年ノ久シキニ及ビ勤續努力ノ功大ナルモノアリシコトヲ追想シ、玆ニ一萬號ノ記念ヲ迎フルニ當リ、金時計及金鎖ヲ贈呈シテ聊カ微意ヲ表ス

大正七年九月九日　　九州日報社

今村爲雄殿

かくて躍進する本紙は、大正七年六月、時勢に對應し從來紙面の九段組制を十段組制に改め、八ポイント活字を採用することになり、更に十二月一日からは全頁を十一段制に改め、翌八年十一月一日からは十二段制に、矢繼早の改良を遂げた。然し講讀料は打つゞく紙原料騰貴のため八年十一月一日に五十五錢に値上げし、更に翌九年二月一日には六十錢と値上げするの止むなきに至つた。

四三、歐洲大戰の終熄

大正八年を迎へて、さしもの歐洲大戰も休戰に入り、平和の曙光を認め得るに至つた。左は大正八年元旦の本紙記事である。

平和第一の新年を迎ふ

劒光電火、歐亞の天地を蔽ひ、慘虐の戰禍に困憊し盡したる世界も玆に新しき光に煇やく平和第一の新年初日を迎ふ。

回顧すれば大戰開始以來既に四星霜、客冬獨墺側の降伏的條件の下に、聯合國との間に休戰行はれ、次で媾和時期に入り、世界改造の大業、有史以來の世界文化を綜合せる新文明、新時代創造の準備期に入れり。崢嶸生新の意氣自ら國民の間に滂沱たるを覺ふ。夫れ苟も國家が民族的に興隆し進化せんとするに當りてや、其の採るべき方策は一ありて二ある莫し。我日本民族は其歷史上、其嚴守せる地勢上、東西兩洋の文化を融合して新しき世界文明を創造すべき大使命を有するに自覺し、戰後の經營方策は一に此根本的使命を基礎として雄大なる經綸を以て臨まざる可からず。

國家の興隆と衰亡とは一に民族的、國家的精神の强弱に依つて決す。戰後の民族競爭に於ても、雄大なる思想を根抵として、確乎不拔の國民的精神を有するものが、優勝の地位に立つべきは多く疑ふを要せず。今回の戰爭は實に世界の一轉機を劃するものにして、其影響する所は單に物質的のみならず、深く思想の根抵に觸れるものあるに鑑み、區々たる小局面に拘泥して眼前寸尺を糊塗するに汲々たるなく、雄大なる民族的精神の下に全世界の人類を指導するの大抱負、大威力を把持するに非ずんば、眞に徹底せる戰後の大經營を遂行する能はざるなり。

而して今や有史未曾有の意義と使命を有する平和會議は目捷の間に開催されむとし、ヴエルサイユ宮殿は世界改造の運命を支配する列國使節の晴れの舞臺たらむとす。我媾和使節は東洋永遠の平和の確保と、世界の根本的改造の爲め其主張すべきを主張して以てこの記念すべき新しき年をして眞に意義あらしむ可き也。

大戰終了と共に、本社は戰後の歐米の思想、經濟視察のため一ケ年の豫定で主筆篠崎昇之助を特派することになり、篠崎主筆は大正九年二月二日橫濱開かれ、福岡市に於ける「普選大會」は二月一日、市記念館に於て、九州普選期成同盟會、在福六新聞社記者、縣市會議員有志の聯合主催で催された。

定刻太田福岡市會議長開會を宣し、普選の實施によつて凡ゆる社會問題、勞働問題は解決せられる……と述べ、本社長大原義剛座長に推されて次の如き宣言、決議を可決した。祝電披露の後演說會に移り、博多每日新聞の明午時男、川崎達夫、大正日々新聞の小田從橫、大阪朝日新聞の飯田爲三郎、本社の土屋虎一、博多每日社長三隅忠雄、其他有志交々普選卽行の熱辯を揮ひ最後に東方時論主幹中野正剛は外交問題、普選問題について約二時間に亘つて雄辯を揮ひ、次いで自動車を連ねて市中の示威運動に氣勢を擧げて散會した。

宣言

方今天下普通選擧ヲ唱道シ之ニ贊同スルノ聲國内ニ瀰漫ス、然ルニ政界ノ形勢ヲ看ルニ政府及貴衆兩院ノ多數ハ今日直ニ普通選擧ヲ實行スルノ意志ナキモノヽ如シ、是レ彼等ガ天下ノ形勢ヲ解セズ、人心ノ嚮フ所ヲ察セザル罪ナリ

今ヤ世界ノ人心甚ダ動搖ス、素ヨリ思想ノ過激極端ナルモノハ之ヲ排斥セザル可ラズ。而モ世界人類ノ覺醒ト共ニ各國民ガ自由獨立ヲ要求スル聲ハ鬱勃トシテ旺ナリ

彼ノ少數ノ有權者ニ政權ヲ獨占セシムルコトハ正ニ之レ封建ノ遺風ニシテ斷ジテ大正帝國ノ制度ニ非ザルナリ

一萬の號を重ねたが、新聞はこれからがホントの活動期に入るのだ」と決意を示し「――編輯、營業、工場は勿論、關係者は一つとして新聞を作るに欠ぐべからざる力でないものはない。この意味から全社員は一家族となつて協力し、ます〳〵努力して頂きたい」と述べて、社長自ら創刊當初から勤續の佐竹菅根をはじめ最近入社した給仕小使に至るまで全部に「お祝の目錄」を贈與した。特に創刊以來の功勞者佐竹菅根、今村外園兩人には次の如き表彰狀と金品を贈つてその功勞を顯彰した。

表彰狀

九州日報ノ前身福陵新報創立當時ヨリ入社シ爾來勤續三十二年ノ久シキニ及ブ其間ノ忠實ナル精勵ハ我社ノ發展ニ貢獻シタルコト頗ル大ナルモノアリ、茲ニ一萬號ノ記念日ニ際シ其ノ勤勞ニ酬ユル爲メ金壹千圓ヲ贈呈シテ聊カ表彰ノ微意ヲ表ス

大正七年九月九日　　九州日報社

佐竹菅根殿

今村外園は當時既に退社してゐたが、創立準備時代から參畫して二十年、本紙の連載小說を擔當し、記者として奮鬪した功勞に對して表彰の意を表し

を十段組制に改め、八ポイント活字を採用することになり、更に十二月一日からは全頁を十一段制に改め、翌八年十一月一日からは十二段制に、矢繼早の改良を遂げた。然し講讀料は打つゞく紙原料騰貴のため八年十一月一日に五十五錢に値上げし、更に翌九年二月一日には六十錢と値上げするの止むなきに至つた。

四三、歐洲大戰の終熄

大正八年を迎へて、さしもの歐洲大戰も休戰に入り、平和の曙光を認め得るに至つた。左は大正八年元旦の本紙記事である。

平和第一の新年を迎ふ

劒光電火、歐亞の天地を蔽ひ、慘虐の戰禍に困憊し盡したる世界も玆に新しき光に煇やく平和第一の新年初日を迎ふ。

回顧すれば大戰開始以來既に四星霜、客冬獨墺側の降伏的條件の下に、聯合國との間に休戰行はれ、次で媾和時期に入り、世界改造の大業、有史以來の世界文化を綜合せる新文明、新時代創造の準備期に入れり。崢嶸生新の意氣自ら國民の間に滂沱たるを覺ふ。夫れ苟も國家が民族的に興隆し進化せんとするに當りてや、其の採るべき方策は一ありて二ある莫し。我

日本民族は其歷史上、其嚴守せる地勢上、東西兩洋の文化を融合して新しき世界文明を創造すべき大使命を有するに自覺し、戰後の經營方策は一に此根本的使命を基礎として雄大なる經綸を以て臨まざる可からず。

國家の興隆と衰亡とは一に民族的、國家的精神の强弱に依つて決す。戰後の民族競爭に於ても、雄大なる思想を根抵として、確乎不拔の國民的精神を有するものが、優勝の地位に立つべきは多く疑ふを要せず。今回の戰爭は實に世界の一轉機を劃するものにして、其影響する所は單に物質的のみならず、深く思想の根抵に觸れるものあるに鑑み、區々たる小局面に拘泥して眼前寸尺を糊塗するに汲々たるなく、雄大なる民族的精神の下に全世界の人類を指導するの大抱負、大威力を把持するに非ずんば、眞に徹底せる戰後の大經營を遂行する能はざるなり。

而して今や有史未曾有の意義と使命を有する平和會議は目捷の間に開催されむとし、ヴエルサイユ宮殿は世界改造の運命を支配する列國使節の晴れの舞臺たらむとす。我嬬和使節は東洋永遠の平和の確保と、世界の根本的改造の爲め其主張すべきを主張して以てこの記念すべき新しき年をして眞に意義あらしむ可き也。

大戰終了と共に、本社は戰後の歐米の思想、經濟視察のため一ケ年の豫定で主筆篠崎昇之助を特派することになり、篠崎主筆は大正九年二月二日橫濱解纜の香取丸で視察の途に上つた。

四四、普選運動と本紙

原內閣成立して、第四十一議會に於ける選擧法改正の前後より院の內外に昂まつて來た普通選擧實施の輿論は、第四十二議會に入るに及んでいよ〳〵熾烈を加へ來つた。

卽ち大正九年一月廿五日には東京に於て通信新聞記者團の普選期成大會が

開かれ、福岡市に於ける「普選大會」は二月一日、市記念館に於て、九州普選期成同盟會、在福六新聞社記者、縣市會議員有志の聯合主催で催された。

定刻太田福岡市會議長開會を宣し、普選の實施によつて凡ゆる社會問題、勞働問題は解決せられる……と述べ、本社長大原義剛座長に推されて次の如き宣言、決議を可決した。祝電披露の後演說會に移り、博多每日新聞の明午時男、川崎達夫、大正日々新聞の小田從橫、大阪朝日新聞の飯田爲三郎、本社の土屋虎一、博多每日社長三隅忠雄、其他有志交々普選卽行の熱辯を揮ひ最後に東方時論主幹中野正剛は外交問題、普選問題について約二時間に亘つて雄辯を揮ひ、次いで自動車を連ねて市中の示威運動に氣勢を擧げて散會した。

宣言

方今天下普通選擧ヲ唱道シ之ニ賛同スルノ聲國內ニ瀰漫ス、然ルニ政界ノ形勢ヲ看ルニ政府及貴衆兩院ノ多數ハ今日直ニ普通選擧ヲ實行スルノ意志ナキモノヽ如シ、是レ彼等ガ天下ノ形勢ヲ解セズ、人心ノ嚮フ所ヲ察セザル罪ナリ

今ヤ世界ノ人心甚ダ動搖ス、素ヨリ思想ノ過激極端ナルモノハ之ヲ排斥セザル可ラズ。而モ世界人類ノ覺醒ト共ニ各國民ガ自由獨立ヲ要求スル聲ハ鬱勃トシテ旺ナリ

彼ノ少數ノ有權者ニ政權ヲ獨占セシムルコトハ正ニ之レ封建ノ遺風ニシテ斷ジテ大正帝國ノ制度ニ非ザルナリ

爰ニ於テカ吾儕ハ普通選擧ノ急施ヲ要求ス

大正九年二月一日　　福岡普通選擧促進大會

決議文

一、吾儕ハ今期議會ニ普通選擧法ヲ成立セシメンコトヲ期ス

一、次期ノ總選擧ニ際シ普通選擧ニ反對ノ意思ヲ有スル候補者ハ絕對ニ排斥シ選擧セザルコト

八幡市では翌二月二日、勞友會主催の下に左の「普選行進歌」を高唱しなが

ら市中の大示威運動を敢行した。

一、聞かずや君よ民衆の
闇に嘆けるその聲を
正義人道地を拂ひ
貧しきものに自由なく
民は悲しく影うすし

二、金もて自由を縛らざる
公義の天地みん爲めに
我は叫ばん平等の
選擧の權利與へよと
選擧の自由を與へよと

三、君よ敎へよ三圓の
貨幣に自由の差異あるか
自由の金に多寡あるか
正義は黃金に劣れるか
金は人よりまされるか
自由をなみする國立つか

「普選卽行」の聲は全國に澎湃し、普選案上提日の衆議院は數萬の群衆に圍まれたが、政府は、普選案が上提されると、原首相自ら演壇に立つて「選擧法の改正は國家の基礎を動搖せしめんとするもので、斷じて同意すべからず。しかもこの普選案は、議員の自由意思を壓迫し、次第に危險性を帶び來り、國家の前途甚だ寒心に堪へざるものあり」と普選案の不穩當を論じて拔打的の議會解散を敢行した。

普選運動については、言論に實際運動に、先頭に立つて奮鬪した本社は二月廿八、九の兩日に亘つて解散の不當を論じて政府を彈劾した。

「今回の解散は無意義なる解散なり。政府の解散理由書には

——選擧權は今後國情の如何により適當に擴張すべし。——今回の提案は帝國の國情に鑑みず、現在の社會組織を阻害する不安の思想存するを見る、——衆議院に於て本案の否決を見るは疑はざるところであるが衆議院を解散して國民の公平なる判斷に訴ふ——とあるは、矛盾の甚しいものと云はざる可らず。特に「帝國の國情に鑑みず」といふが如きは、現內閣自ら世界の大勢と日本の國情とを鑑別洞察し能はざる不賢明を表白するものにして、普選が社會の不合理を改善せんとするものなるに對し「現在の社會組織を阻害せん」「不穩の思想」と誹るが如きは、普選の不實行によりて却て國民思想惡化の俑を作る冠履顚倒の辟說といはざる可らず、更に不合理なるは第三義「國民の公平なる判斷」云々なり、議會の否決疑ひなければ何故に最後の採決をなさゞりしや、卽ち公平なる國民代表の判斷に訴へざりしや、しかして普選案が多數を以て通過すれば民論の表徵として當然總辭職をなし、若し多數を以て否決さるれば現內閣の主張是なりとして議事を續行すべきなり、當事者たる議員を除外して第三者に訴ふが如きは不合理、非合法、官僚政治の亞流を汲む惡辣政治の極致と云はざる可からず——」

總選擧は大正九年五月十日行はれたが、後に本社の社長となつた中野正剛は此時福岡縣第一區から立候補して當選した。

四五、夕刊發行

大正十年三月三日は、東宮殿下（今上陛下）御外遊の途に上らせ給ふた記念すべき日であるが、本社は、歐洲大戰後銳意研究中であつた「夕刊發行」のことを、殿下御外遊を機として敢行することゝなり、三月十九日から夕刊を發行した。この事は、同業福岡日日新聞と共に西日本地方新聞界に於ける先驅として新時代への劃期をなすもので、地方新聞界では未だ夕刊發行などその確實性を疑はれてゐた時代であつた。

意氣軒昂、先鞭をつけた本紙「夕刊發行の辭」に曰く。

「歐洲大戰後、愈よ多事多端となつた世界の報道機關として、新聞紙が完全にその職責を果さうとするには、假令紙面を十頁、十二頁、十六頁乃至二十頁の大にしても到底不可能の事であります。從來の我が「九州日報」が、僅少なる八頁を以て職責の遂行に努め乍ら克く大過なく今日あるを致したるは全く讀者諸君の博大なる同情と愛顧の賜物であります。而も諸君の同情は雨露の如くに深く浸潤し、泉は滾々と盡きざる水を湛へて、今や次第に溢れねばなりません。

本社が微力、朝夕刊制を執ると共に聊か紙面擴張の意を以て取敢ず十頁に增頁する事としましたのは全く之が爲であります。この紙面擴張を朝夕刊兩刊制の實行は既に久しき以前より本社の第一期計畫としてゐたもので、主筆篠崎昇之助が外遊一年有餘日の間に歐米の最新知識を收めて二月上旬歸朝歸社するに及んでこの計畫は決定しました。此の間本社は各地に於ける支局通信部の增設とその內容の充實は勿論、通信機關、印刷發送機關其他社內外各部の設備を出來るだけ完全に整へました。而して當初の豫定通り日曜祭日を除く外は每日四頁を夕刊に、六頁を朝刊にして本社の新しき步みを始めます。

新聞紙は複雜にして微妙、緊急にして重大なる政治、外交、經濟、軍事、敎育の狀勢は素より、思潮の推移變遷、學術の進步發達、其他社會各方面の現象事象に關して、深く廣く聽知する所の「世界の耳」でなければなりません。新聞紙の報道は正確にして又最も敏活でなければなりません。本紙の朝夕刊制十頁は未だ形體大とは云へませぬが、編輯法上、世の進運に伴ふ萬有る手段と努力とによつて記事の撰擇統一を爲し、報道の機敏正確を期し以て紙面の狹少を補ひ得ると信じてゐます。

社內外同人、今や灼熱火の如き赤誠と勇氣とに滿ちてゐるのは專心この所信を

大事件勃發の豫感に危惧して八方に手配する本社編輯局へ、間もなく、長野岡崎、名古屋、大阪等から、或は軍艦、商船の無電を有線中繼して齎らされた飛報は驚くべきこの大震災勃發のことであつた。全社は擧げて緊張、速記者は全身を耳にして銳筆を走らせ、給仕は八方に飛び、號外發行の非常ベルは全社內に鳴り響き、全支局並に全販賣店は電話の統制に整然と連絡して、刻一刻と報ぜられる大震災ニュースの發行に奔命し、輪轉機は全能力を響かせて晝夜の別なく廻轉した。歷史的な記錄、長野電話の第一報は左の如くであつた。

（長野電話）地震の爲め東京各所に火災起り、市中は大混亂を極め居れり、通信交通機關破壞せられ詳細判明せず。

（長野電話）東京全市に亘る被害は實に言語に絕し、大厦高樓は枕を並べて倒壞し、各所に起れる火災は其の數實に四十八ヶ所に達し、焰は天を焦し、全市は阿鼻叫喚の巷と化し、水道は斷絕し消防手は力盡きて手の下し樣なく光景凄慘を極め此世ながらの焦熱地獄を現出し死傷者莫大の數に上る見込みなり。

一報は一報每に報道詳細となり、被害の甚大さを傳へた。本社は通信網全機構の最大能力を動員してこの大慘事を報道し、一方直ちに記者今川英隆、村瀨時男の兩名を現地に特派し又東京支社員及び滯京中の杉山泰道、（故夢野久作）を協力せしめて報道の萬全を期した。

自由の金に多寡あるか
正義は黃金に劣れるか
金は人よりまされるか
自由をなみする國立つか

「普選卽行」の聲は全國に澎湃し、普選案上提日の衆議院は數萬の群衆に圍まれたが、政府は、普選案が上提されると、原首相自ら演壇に立つて「選擧法の改正は國家の基礎を動搖せしめんとするもので、斷じて同意すべからず。しかもこの普選案は、議員の自由意思を壓迫し、次第に危險性を帶び來り、國家の前途甚だ寒心に堪へざるものあり」と普選案の不穩當を論じて拔打的の議會解散を敢行した。

普選運動については、言論に實際運動に、先頭に立つて奮鬪した本社は二月廿八、九の兩日に亘つて解散の不當を論じて政府を彈劾した。

「今回の解散は無意義なり。政府の解散理由書には
——選擧權は今後國情の如何により適當に擴張すべし。——今回の提案は帝國の國情に鑑みず、現在の社會組織を阻害する不安の思想存するを見る、否決されば現內閣の主張是なりとして議事を續行すべきなり、當事者たる議員を除外して第三者に訴ふが如きは不合理、非合法、官僚政治の亞流を汲む惡辣政治の極致と云はざる可からず——」

總選擧は大正九年五月十日行はれたが、後に本社の社長となつた中野正剛は此時福岡縣第一區から立候補して當選した。

四五、夕刊發行

大正十年三月三日は、東宮殿下(今上陛下)御外遊の途に上らせ給ふた記念すべき日であるが、本社は、歐洲大戰後銳意研究中であつた「夕刊發行」のことを、殿下御外遊を機として敢行することゝなり、三月十九日から夕刊を發行した。この事は、同業福岡日日新聞と共に西日本地方新聞界に於ける先驅として新時代への劃期をなすもので、地方新聞界では未だ夕刊發行などその確實性を疑はれてゐた時代であつた。

意氣軒昂、先鞭をつけた本紙「夕刊發行の辭」に曰く。

「歐洲大戰後、愈よ多事多端となつた世界の報道機關として、新聞紙が完全にその職責を果さうとするには、假令紙面を十頁、十二頁、十六頁乃至二十頁の大にしても到底不可能の事であります。從來の我が「九州日報」が、僅少なる八頁を以て職責の遂行に努め乍ら克く大過なく今日あるを致したるは全く讀者諸君の博大なる同情と愛顧の賜物であります。而も諸君の同情は雨露の如くに深く浸潤し、泉は滾々と盡きざる水を湛へて、今や次第に溢れねばなりません。

本社が微力、朝夕刊制を執ると共に聊か紙面擴張の意を以て取敢ず十頁に增頁する事としましたのは全く之が爲であります。この紙面擴張を朝夕刊兩刊制の實行は旣に久しき以前より本社の第一期計畫としてゐたもので、主筆篠崎昇之助が外遊一年有餘日の間に歐米の最新知識を收めて二月上旬歸朝歸社するに及んでこの計畫は決定しました。此の間本社は各地に於ける支局通信部の增設とその內容の充實は勿論、通信機關、印刷發送機關其他社內外各部の設備を出來るだけ完全に整へました。而して當初の豫定通り日曜祭日を除く外は每日四頁を夕刊に、六頁を朝刊にして本社の新しき步みを始めます。

新聞紙は複雜にして微妙、緊急にして重大なる政治、外交、經濟、軍事、敎育の狀勢は素より、思潮の推移變遷、學術の進步發達、其他社會各方面の現象事象に關して、深く廣く聽知する所の「世界の耳」でなければなりません。新聞紙の報道は正確にして又最も敏活でなければなりません。本紙の朝夕刊制十頁は未だ形體大とは云へませぬが、編輯法上、世の進運に伴ふ萬有る手段と努力とによつて記事の撰擇統一を爲し、報道の機敏正確を期し以て紙面の狹少を補ひ得ると信じてゐます。

社內外同人、今や灼熱火の如き赤誠と勇氣とに滿ちてゐるのは專心この所信を果さうとする爲めであります。尙紙面擴張と配達二重との爲めに購讀料の値上げの如き絕對に我社の執らざるところであります。

四六、關東地方大震災

大正十二年九月一日、午前十一時五十八分は、我が史上有名な關東地方大震災の勃發した時刻である。本社の東京電話はその時刻から不通となつた。大事件勃發の豫感に危惧して八方に手配する本社編輯局へ、間もなく、長野岡崎、名古屋、大阪等から、或は軍艦、商船の無電を有線中繼して齎らされた飛報は驚くべきこの大震災勃發のことであつた。全社は擧げて緊張、速記者は全身を耳にして鋭筆を走らせ、給仕は八方に飛び、號外發行の非常ベルは全社內に鳴り響き、全支局並に全販賣店は電話の統制に整然と連絡して、刻一刻と報ぜられる大震災ニュースの發行に奔命し、輪轉機は全能力を響かせて晝夜の別なく廻轉した。歷史的な記錄、長野電話の第一報は左の如くであつた。

(長野電話) 地震の爲め東京各所に火災起り、市中は大混亂を極め居れり、通信交通機關破壞せられ詳細判明せず。

(長野電話) 東京全市に亘る被害は實に言語に絕し、大廈高樓は枕を並べて倒壞し、各所に起れる火災は其の數實に四十八ヶ所に達し、焰は天を焦し、全市は阿鼻叫喚の巷と化し、水道は斷絕し消防手は力盡きて手の下し樣なく光景凄慘を極め此世ながらの焦熱地獄を現出し死傷者莫大の數に上る見込みなり。

一報は一報每に報道詳細となり、被害の甚大さを傳へた。本社は通信網全機構の最大能力を動員してこの大慘事を報道し、一方直ちに記者今川英隆、村瀨時男の兩名を現地に特派し又東京支社員及び滯京中の杉山泰道、(故夢野久作)を協力せしめて報道の萬全を期した。

これより先八月十三日、社命を帶びて上京中の高田眞太郎は、勃發と同時に帝都の慘害を視察して命から〴〵九月六日慘事を齎らして歸り、數日に亘つて「東京脫出記」を揭げた。左の一文はその一節である。

「——三日午前六時起床、近隣に昨夜大阪から來たといふ人があつた。信越線に廻つて大宮から五、六里の道を步いて來たと云ふ。それに力を得て午前八時友人の家を辭し、高田の馬場驛で汽車の都合を問合せたら川口驛から乘れるといふこ

とだつた。直ちに鐵道の枕木を傳つて池袋から赤羽の方へ三里の鐵道線路を辿つた。その線路も避難民と入京者とで混雜してゐた。脫線した列車が幾つも横つてゐた。赤羽を過ぎると、蜿々二町もあらうといふ鐵橋がある。線路は飴のやうに曲つて工夫が右往左往してゐた。

水の流れてゐない河床は所々に一尺以上もある龜裂を生じてそれを濁流が流れてゐる所もあつた。舟を並べて板を渡した危なつかしい橋を渡つて川口町に辿りつくと此處は東京市內以上の震害である。倒壞、半倒壞の家が累々としてゐる。それでも道の兩側に新鮮な水や茶を出して避難民を喜ばしてゐた。川口驛でやつと滿員列車の窓から飛込んだ。切符などは賣つてゐないのである。どの列車もどの列車も出入口は鈴なりで列車の屋根にも一杯避難民が這ひつめてゐた。——大宮、高崎、篠の井各驛でいづれも窓から飛込んで乘りかへた。高崎からは便所の中で……アノ狹ひ便所の中に五、六人と鮨詰めになつてゐた。——列車の屋根に乘つてゐた人の中にはブリッヂで頭を打つて落ちて死んだ人もある。碓氷峠の二十六のトンネルの中では數人の人が死んだと驛員から聞かされた。（以下略）

本社は、大地震襲來の報と共に、大阪支社に命じて活動寫眞班を組織し、東京、横濱の戰慄すべき慘害をフヰルムに收めてこれを各地で上映し、報道の萬全を圖る一方人々の同胞愛喚起に努め、福岡縣廳、福岡日々新聞社と協同して大々的に義捐金募集に活動した。

四七、九州日報社の組織替

本社が從來の個人經營組織を改めて株式會社を創立したのは、大正十五年で、六月十日發起人會が開かれ、社長大原義剛を委員長に、杉山茂丸、吉田痩、篠崎昇之助、內田好之輔、中島德松、菊池德四郎、小林庸太、岸本辰三郎等創立委員となり、資本金三十萬圓、六千株、一時拂込、全株發起人引受けで、こゝに「株式會社九州日報社」が誕生し、吉田痩名義の九州日報社を五十萬圓（營業權三十二萬圓、財產權十八萬圓）で新會社九州日報社が買收した。

大正十五年十二月廿五日、大正天皇崩御あらせられ、年號も昭和と改められたその後二年を經て卽ち昭和三年一月を期して中野正剛社長となり、名實共に西日本の覇王としての「九州日報」の更生飛躍時代に入つたのである。

第三章　現代篇

一、昭和時代

昭和の聖代を迎へて、「九州日報」は回天の飛躍期に入つた。卽ち昭和三年一月六日の臨時株主總會は、本社の陣容を左の如く更新し、「世は不斷に進歩し、現實は常に成長する。進歩と成長なき所に沈滯と不振を來す。殊に世界を擧げて大改造の時期にある現時に於ては寸時も停滯するを許さない。我社は玆に時代の進運と社會の情勢とに鑑み、人物の大更迭と內部の大改革を行ひ、眞に新時代輿論の代表として活躍せん事を期す」の宣言と共に新春の巨彈を放つた。

顧　問　頭山滿
　　大原義剛
　　安達謙藏
相談役　吉田磯吉
　　河波荒次郎
　　柴田文城
　　篠崎昇之助
　　入江八郎
社　長　中野正剛
專務取締役　坂田卯三郎
取締役　玉丸代吉
　　西尾守太郎
　　河野二郎
　　藤村源路
監査役　喜多島淳
　　樋口昌弘
主　筆　清水芳太郎
理　事　長谷川了
　　伊豆富人
　　內田好之輔

同時に新活字採用を發表し、特別寄稿家として三宅雪嶺、杉森孝次郎、土井盛之、鷲澤與四二の名を發表し、海外特派員中に新に左の四名を加へた。

北京　柳町精
倫敦　中野秀人
紐育　佐渡高一
伯林　百々巳之助

大地に刻せよ『經世の文字』

九州日報社長　**中野正剛**

九州日報は四十年の歷史を有し、創立以來幾多先輩の心血を傾けて今日に至れり其の後を承けて社長の任に就くは、眞に重負なりと云はざる可らず。然れども余が敢て辭せざる所以のものは、窃かに自ら期するあればなり。

九州日報は九州新聞界の重鎭たり、而して北九州は新興產業の中心にして、鐵槌の響く所、思想の光焰此處に閃めき、煙突の林立する所、大衆の意氣虹の如し。言論に此地に從事する者、大に歷史に鑑みると共に須らく現在に鬱勃たる活氣を善導して將來の進路を開拓すべきなり。幸にして鄕黨の同志轡を並べて余を援助すべきを說き、淸水主筆以下在京の俊髦勇んで余の先驅たらんことを誓ふ。是に於て余は安んじて此大任に就き、宿昔の理想と抱負とを提げて鄕黨同志の元氣を恢弘するを得んとす。

九州日報歷代の主筆編輯長には、多く天下旣に名を成せる名流を頂くを常とせり然るに余は期する所ありて、遙頭垢面の同志靑年淸水芳太郎君に主筆を請ひ、余に親交ある靑年數氏を附して鄕里に送れり。破衣幣帽の淸水君等が、如何に九州男兒の間に迎へらるゝか、余は遙かに微笑を含みて其の光景を想見せざる能はず。社中の新同人假令世事に短なるも文筆に於て使命を辱かしむるなきを信ず。假令文筆に巧妙ならざるも、其の人格に於て其の行動に於て、必ず富貴も淫する能はず、威武も屈する能はず、貧賤も移す能はず、徹頭徹尾大衆の畏友たるべきを疑はざるなり。

中で……アノ狹ひ便所の中に五、六人と鮨詰めになつてゐた。——列車の屋根に乘つてゐた人の中にはブリッヂで頭を打つて落ちて死んだ人もある。碓氷峠の二十六のトンネルの中では數人の人が死んだと驛員から聞かされた。（以下略）

本社は、大地震襲來の報と共に、大阪支社に命じて活動寫眞班を組織し、東京、横濱の戰慄すべき慘害をフヰルムに收めてこれを各地で上映し、報道の萬全を圖る一方人々の同胞愛喚起に努め、福岡縣廳、福岡日々新聞社と協同して大々的に義捐金募集に活動した。

四七、九州日報社の組織替

本社が從來の個人經營組織を改めて株式會社を創立したのは、大正十五年で、六月十日發起人會が開かれ、社長大原義剛を委員長に、杉山茂丸、吉田痩、篠崎昇之助、內田好之輔、中島德松、菊池德四郎、小林庸太、岸本辰三郎等創立委員となり、資本金三十萬圓、六千株、一時拂込、全株發起人引受けで、こゝに「株式會社九州日報社」が誕生し、吉田痩名義の九州日報社を五十萬圓（營業權三十二萬圓、財產權十八萬圓）で新會社九州日報社が買收

昭和の聖代を迎へて、「九州日報」は回天の飛躍期に入つた。卽ち昭和三年一月六日の臨時株主總會は、本社の陣容を左の如く更新し、「世は不斷に進歩し、現實は常に成長する。進歩と成長なき所に沈滯と不振を來す。殊に世界を擧けて大改造の時期にある現時に於ては寸時も停滯するを許さない。我社は玆に時代の進運と社會の情勢とに鑑み、人物の大更迭と內部の大改革を行ひ、眞に新時代輿論の代表として活躍せん事を期す」の宣言と共に新春の巨彈を放つた。

顧問　頭山滿
大原義剛
安達謙藏
吉田磯吉
河波荒次郎
柴田文城
篠崎昇之助
入江八郎

相談役

社長　中野正剛
專務取締役　坂田卯三郎
取締役　玉丸代吉
西尾守太郎
河野二郎
藤村源路
監査役　喜多島淳
樋口昌弘
主筆　清水芳太郎
理事　長谷川了
伊豆富人
內田好之輔

同時に新活字採用を發表し、特別寄稿家として三宅雪嶺、杉森孝次郎、土井盛之、鷲澤與四二の名を發表し、海外特派員中に新に左の四名を加へた。

北京　柳町精
倫敦　中野秀人
紐育　佐渡高一
伯林　百々巳之助

覇氣滿溢の新社長中野正剛が全幅の信倚と共に選び出した新主筆清水芳太郎は、中野正剛の所謂「蓬頭垢面」、若冠儻かに二十八歳であつたが、この大任を受けて勇躍、萬腔の雄志をその弊衣につゝんで着任した。清水主筆と行を共にした者は何れも青年血氣の士ばかり、編輯長神保榮、學藝部長池崎正士及び北九州支社長進藤一馬等であつた。

左は中野新社長が、清水新主筆以下を送るに當つて社同人に與へたるの書である。

大地に刻せよ『經世の文字』

九州日報社長　**中野正剛**

九州日報は四十年の歷史を有し、創立以來幾多先輩の心血を傾けて今日に至れり其の後を承けて社長の任に就くは、眞に重負なりと云はざる可らず。然れども余が敢て辭せざる所以のものは、窃かに自ら期するあればなり。

九州日報は九州新聞界の重鎭たり、而して北九州は新興產業の中心にして、鐵槌の響く所、思想の光焰此處に閃めき、煙突の林立する所、大衆の意氣虹の如し。言論に此地に從事する者、大に歷史に鑑みると共に須らく現在に鬱勃たる活氣を善導して將來の進路を開拓すべきなり。幸にして鄕黨の同志轡を並べて余を援助すべきを說き、清水主筆以下在京の俊髦勇んで余の先驅たらんことを誓ふ。是に於て余は安んじて此大任に就き、宿昔の理想と抱負とを提げて鄕黨同志の元氣を恢弘するを得んとす。

九州日報歷代の主筆編輯長には、多く天下旣に名を成せる名流を頂くを常とせり然るに余は期する所ありて、蓬頭垢面の同志青年清水芳太郎君に主筆を請ひ、余に親交ある青年數氏を附して鄕里に送れり。破衣幣帽の清水君等が、如何に九州男兒の間に迎へらるゝか、余は遙かに微笑を含みて其の光景を想見せざる能はず。社中の新同人假令世事に短なるも文筆に於て使命を辱かしむるなきを信ず。假令文筆に巧妙ならざるも、其の人格に於て其の行動に於て、必ず富貴も淫する能はず、威武も屈する能はず、貧賤も移す能はず、徹頭徹尾大衆の畏友たるべきを疑はざるなり。年少氣銳の新同人諸君、余は平常に鑑みて諸君に對し瑣の老婆心を有せず。諸君は五寸の健筆を執りて紙上に活躍するのみならず、六尺の壯軀を横へて、九州の大地に太く強く經世の實行文字を刻せよや。諸君の氣魄にして銷磨せざる限り、九州の大衆自ら九州日報の繁榮を聲援すべき也。

入社の辭

清水芳太郎

刑罰は昔ほど慘酷であつた。最近代の統計學に於ては、毎年の犯罪者の約半數は

既に刑罰を終了した人々であることが明白になつた。卽ち體刑が有効な方法でない事を示すに至つた。そこで、犯罪の有無は昔通り判決すると雖も、執行猶豫といふ方法を取つて出來るだけ體刑を避くる傾向を生じて來た。唯何人が犯罪者であるかを嚴格に調査して、之を社會に報ずるを以て刑罰の目的が達せられると推意されるやうになつた。刑罰は體刑だけに求むる必要はない。或一人が一度不正なる行爲をすれば、此の事實を社會に報ずるが良い。しからば社會の人々は或は彼との取引を中止し、或は交際を絶ち、或は再び彼より自己の利益を侵害されんことを防止せんとして努力するであらう。犯罪者に體刑を加へても、如何なる犯罪者がいつ出獄するか社會の一般が知らぬようでは犯罪の豫防は六ヶ敷い。刑罰の目的は復仇より豫防へ移つた事は學者の論ずる所である。從つて犯罪事實の報道が刑罰の方法として採用されるは當然である。

司法權は國家の大權である。けれども最近代の事實の示す所によれば司法權は新聞によりて行使されてゐる。初犯者に對し單に執行猶豫を條件として判決を公表する如き程度の犯罪事實の公表は新聞が最も多く取扱つてゐる。

政界に於ても、政治家及び政黨を判決するものは新聞である。政治家の行跡、政黨の成績が新聞によつて公表せられ、國民はこれを判斷材料として或る政治家に投票し、或は或政黨に加入する。良き政治家が直ちに國民の支持を受け、惡しき政治家が直ちに國民の處罰を受けて、寸時も不良なる政治家政黨の棲息を許さないやうにする爲には、完全なる報道機關を持つにある。事實が間違つて報道されるならば、國民は間違つた觀念を構成する、そしてこの間違つた觀念によつて投票を行へば、立憲政治は永久に完成しない。古の新聞は多く政黨に隷屬してゐた。所が近代の新聞特に中央の大新聞は政黨より獨立し、不偏不黨の地位に立つて公平に政界の事實を報道するやうになつた。

しかれども、現代の新聞は未だ生產者の隷屬物である。新聞社は政黨より金員の補助を受けないで濟むやうになつたけれども、まだ廣告收入に依賴せざるを得ないこの廣告を出せば社會の何人かゞ損害を蒙ると知りながら、廣告收入を增すために紙上にその廣告を揭載するのが現在の新聞の通例である。もし新聞が政界に於ける如く、經濟界に於ても中立の態度をとり、各生產品を公平に品評するならば、安くて良い品を生產する工場は繁榮し、高くて粗惡なる品物を生產するものは生存を續ける事はできない。經濟界に於ける司法權は手工業時代には確立してゐた。それは經濟單位が村落であつた爲に、粗惡品を一度でも造れば直ちにその村落に喧傳され自然に不買同盟が構成されたからである。今日の如き世界經濟時代に於ては、吾人が日常使用する品がいづこで如何にして何人によつて製造されるか判らぬ場合が多い。こゝに經濟界に於ける司法權崩壞の所以がある。現在に於ける新聞紙の急務は政界に於けると同樣に經濟界に於ても獨立する事である。新聞紙が經濟界に於ても廣告より獨立し公平なる品評をなすに於ては、高柳某の如き一日も棲息し得ないであらう。而して機械は生產上の人力を節約し、新聞紙の公平なる品評は商業上の人力を節約し得る。

今や新聞は「主張」を雜誌に讓り、「報道」を主たる機能とするに至つた。此重大なる社會的公務に責任を持つ事となつた自分を顧る時、自己が餘りに淺學卑才でありしかも四十餘年の光輝ある歷史を有する九州日報に主筆として重任に就くには餘りに自分は貧弱無經驗である。ただ皆樣の御指導によつてこの社會的公務を遂行する外方法がない。或は口頭により或は書面により、紙面の改良、其他御氣付きの點を常に御敎示たまはらん事を切に乞ふ。

清水君の九日行を送る

早大敎授　杉森孝次郎

清水君は地震前からの相識だ。あとで憶へば、敎場に清水君の顏、むしろ風貌を見た度數は極めて多く、そしていつからともなく古い。清水君と池崎君とは、どちらを影とも形とも失禮な意味に於て想像だにしないが、私から見ると形影相離れざるの觀があつた。清水君の地がねのやうな手來、池崎君の超時代的な純善、談すたんびに感じられた清水君の迫心、壓肝的なまじめさ、池崎君の泥中蓮そのまゝの淨操、いつもながら私にとつてはたましひの解放であつた。

この兩君をばすでに識つてゐたやうな感がかなりにあつたことを、兩君が始めて

私の寓を來訪された時に私が覺えたことを今憶ひ起こす。私が二階の一室——同時に一室の二階、そして書齋——に風を引いて寢て居た時の事だつたかと憶ふ。中野正剛君の簡單ながら特別の紹介狀やうなもの——名刺面記入なりしが——を案內として兩君が來訪された。その特別といふのは兩君に對する中野君の人物評價に屬するものであつて、特別の讃、推の辭があつた。その際、兩君は私を識る前に中野君を相當によく識つてゐられたのだなと、私は始めて知つた次第であつた。

それはとにかく地震前の事であつた。なぜなら、地震の時には兩君はすでに舊識として拙居をも訪問されたことを私は憶ひ起こすから。

中野君との個人關係は大戰當初以來ともいふべく、隨分古いが、清水君と私との個人關係も淺からぬ歲月を閱した。その淺からぬ歲月の間に、清水君はいろいろの意味に於て私を感心させた、時としては感慨無限的にさへさせた。

私が清水君に對して最も感慨無限的にさせられた場合は、同君が中野君に對する友義、友情の隱れたる發露であつた。これは清水君として最も意外な評語であるに相違ない。中野君も全然意外に感ずるであらう。しかし、私としては、事實に對する直接の認識、觀察が十分にあつての話であつて他の人の感じによつて動搖を來さないだけの自明眞的基礎ある經驗、しかも理性的經驗の如きものの記述に過ぎないのだ。

その友義友情の深く私を感慨せしめたものが具體的になんであつたかも私はこゝに記述する意志を持たない。（中略）

中野君こそ、幾多のまじめな意味に於て清水君の美質に對する最も勇敢なる認識發達した時代があつた。

清水君に對する中野君の場合は上出來の部になかんづく屬する。愛の一途に進んで盲目愛に落入る事からはそれは救はれたからであつた。

中野君は頭は素的にいゝ人だから、感情さへ統整、調節を保たれてゐれば、馬を鹿と見、鹿を馬と見るやうな怪我は決してなしに行ける人だ。なに分感情が激しくまた比較的にその方面の訓練は放膽的な處からハラ〳〵させる行動も時に發展するその中野君も、清水君に對しては溺愛には終はらなかつた。その原因は清水君に對して常に批判的忠義の友であつて、盲目的忠義の友ではなかつたことに拠からずあつたらう。全然無特權の後進者に對してなしたやうな勇敢な評價をなすことは決して容易どころの業ではない。こゝで私が評價といふのは幾年か前に、中野君が私との自由放談中に自然に露表した情想を材料としての話であつて、最も明白なものを指してゐるのだ。

清水君は才、識共に、その兩語の善い意味にしたがつて非凡の人だ。しかしながら君の異常を激しく顯著にするものは、それが道義的感情、精神品性の底知れぬ深さ强さのもので、無縫の一衣を織り成してゐるところにある。

清水君は犧牲的精神の最も純烈な人だ。そして頭腦は萬物と共に茫々漠々として適往限りもない。獨創的にして組織的、人情的にして科學的、愚なるが如くにして太だ智。自然と社會は中野君の如き個性を生み育てると同時に、清水君の如き個性を生み育てる、そしてその兩者間にまた一新社會が發達する。自然と社會は夷にして險、險にして夷、常にして奇、奇にして常、萬古にして日新、日新にして萬古、

採用されるは當然である。

司法權は國家の大權である。けれども最近代の事實の示す所によれば司法權は新聞によりて行使されてゐる。初犯者に對し單に執行猶豫を條件として判決を公表する如き程度の犯罪事實の公表は新聞が最も多く取扱つてゐる。

政界に於ても、政治家及び政黨を判決するものは新聞である。政治家の行跡、政黨の成績が新聞によつて公表せられ、國民はこれを判斷材料として或る政治家に投票し、或は或政黨に加入する。良き政治家が直ちに國民の支持を受け、惡しき政治家が直ちに國民の處罰を受けて、寸時も不良なる政治家政黨の棲息を許さないやうにする爲には、完全なる報道機關を持つにある。事實が間違つて報道されるならば、國民は間違つた觀念を構成する、そしてこの間違つた觀念によつて投票を行へば、立憲政治は永久に完成しない。古の新聞は多く政黨に隷屬してゐた。所が近代の新聞特に中央の大新聞は政黨より獨立し、不偏不黨の地位に立つて公平に政界の事實を報道するやうになつた。

しかれども、現代の新聞は未だ生産者の隷屬物である。新聞社は政黨より金員の補助を受けないで濟むやうになつたけれども、まだ廣告收入に依賴せざるを得ないこの廣告を出せば社會の何人かゞ損害を蒙ると知りながら、廣告收入を增すために紙上にその廣告を揭載するのが現在の新聞の通例である。もし新聞が政界に於ける

今や新聞は「主張」を雜誌に讓り、「報道」を主たる機能とするに至つた。此重大なる社會的公務に責任を持つ事となつた自分を顧る時、自己が餘りに淺學卑才でありしかも四十餘年の光輝ある歷史を有する九州日報に主筆として重任に就くには餘りに自分は貧弱無經驗である。ただ皆樣の御指導によつてこの社會的公務を遂行する外方法がない。或は口頭により或は書面により、紙面の改良、其他御氣付きの點を常に御敎示たまはらん事を切に乞ふ。

清水君の九日行を送る

早大敎授　杉森孝次郎

清水君は地震前からの相識だ。あとで憶へば、敎場に清水君の顏、むしろ風貌を見た度數は極めて多く、そしていつからともなく古い。清水君と池崎君とは、どちらを影とも形とも失禮な意味に於て想像だにしないが、私から見ると形影相離れざるの觀があつた。清水君の地がねのやうな手釆、池崎君の超時代的な純善、談すたんびに感じられた清水君の迫心、壓肝的なまじめさ、池崎君の泥中蓮そのまゝの淨操、いつもながら私にとつてはたましひの解放であつた。

この兩君をばすでに識つてゐたやうな感がかなりにあつたことを、兩君が始めて私の寓を來訪された時に私が覺えたことを今憶ひ起こす。私が二階の一室——同時に一室の二階、そして書齋——に風を引いて寢て居た時の事だつたかと憶ふ。中野正剛君の簡單ながら特別の紹介狀やうなもの——名刺面記入なりしが——を案內として兩君が來訪された。その特別といふのは兩君に對する中野君の人物評價に屬するものであつて、特別の讃、推の辭があつた。その際、兩君は私を識る前に中野君を相當によく識つてゐられたのだなと、私は始めて知つた次第であつた。

それはとにかく地震前の事であつた。なぜなら、地震の時には兩君はすでに舊識として拙居をも訪問されたことを私は憶ひ起こすから。

中野君との個人關係は大戰當初以來ともいふべく、隨分古いが、清水君と私との個人關係も淺からぬ歲月を閱した。その淺からぬ歲月の間に、清水君はいろいろの意味に於て私を感心させた、時としては感慨無限的にさへさせた。

私が清水君に對して最も感慨無限的にさせられた場合は、同君が中野君に對する友義、友情の隱れたる發露であつた。これは清水君として最も意外な評語であるに相違ない。中野君も全然意外に感ずるであらう。しかし、私としては、事實に對する直接の認識、觀察が十分にあつての話であつて他の人の感じによつて動搖を來さないだけの自明眞的基礎ある經驗、しかも理性的經驗の如きものの記述に過ぎないのだ。

その友義友情の深く私を感慨せしめたものが具體的になんであつたかも私はこゝに記述する意志を持たない。（中略）

中野君こそ、幾多のまじめな意味に於て清水君の美質に對する最も勇敢なる認識者であつた。言ふは易く、行ふは難し。中野君の清水君に對する評價は行動によつて伴はれたものであつた。自己の識力を信ずること厚き中野君が清水君を深く觀照して、ほとんど男惚に惚た心理をさへ生ずるに至つた美しい貴い徑路を私はいま自然に想起する。

清水君に對する中野君の眼光は、元來天才的な中野君としても殊に天才的であつた。一觀して識眞し、しかる後は只管に直往邁進した概があつた。年わかき、そして全然無特權の清水君の本質に、中野君は、君としても不思議なほど深く着眼し、その美所に惚にぞ惚た。先輩が後輩を崇拜したやうな純眞な感情が中野君の胸裏に發達した時代があつた。

清水君に對する中野君の場合は上出來の部になかんづく屬する。愛の一途に進んで盲目愛に落入る事からはそれは救はれたからであつた。

中野君は頭は素的にいゝ人だから、感情さへ統整、調節を保たれてゐれば、馬を鹿と見、鹿を馬と見るやうな怪我は決してなしに行ける人だ。なに分感情が激しくまた比較的にその方面の訓練は放膽的な處からハラ〳〵させる行動も時に發展するその中野君も、清水君に對しては溺愛には終はらなかつた。その原因は清水君に對して常に批判的忠義の友であつて、盲目的忠義の友ではなかつたことに夢からずあつたらう。全然無特權の後進者に對してなしたやうな勇敢な評價をなすことは決して容易どころの業ではない。こゝで私が評價といふのは幾年か前に、中野君が私との自由放談中に自然に露表した情想を材料としての話であつて、最も明白なものを指してゐるのだ。

清水君は才、識共に、その兩語の善い意味にしたがつて非凡の人だ。しかしながら君の異常を激しく顯著にするものは、それが道義的感情、精神品性の底知れぬ深さ强さのもので、無縫の一衣を織り成してゐるところにある。

清水君は犧牲的精神の最も純烈な人だ。そして頭腦は萬物と共に茫々漠々として適往限りもない。獨創的にして組織的、人情的にして科學的、愚なるが如くにして太だ智。自然と社會は中野君の如き個性を生み育てる、そしてその兩者間にまた一新社會が發達する。自然と社會は夷にして險、險にして夷、常にして奇、奇にして常、萬古にして日新、日新にして萬古、さながら清水君その人の如し。

九州日報が君と共に、君が九州日報と共に、その純誠なる社會報謝の一志を惟ふ精、惟ふに追ひ進まるゝ聖にして雄なる姿態を私は翹望する一人である。

中野正剛社長就任以來の九州日報の飛躍は、目ざましいの一語に盡きる。青年主筆清水芳太郎の無縫の人格の下に一體となつた「九州日報」は、報道機關としての新機構陣容を完成し、天才清水芳太郎主筆が指し示す方向舵に從つて輿論の指導機關となり、昭和四年六月、中野社長が遞信政務次官就任と

共に表面社長の地位を退き、中野正剛を代理して河野二郎が社長となり、次いで千倉豐これに代り、そして現在昭和十年五月より森田久を社長に迎へ、その間、長谷川了、柳町精、主幹となり、神保榮の後を受けて山口巖、大石利德、編輯長となり、現在山口巖編輯局長として編輯局を總宰し、新聞界の麒麟兒と謳はれる森田社長と共に、よき協力一體をなし、社業隆々として發展の一途を進んでゐる。——この約十年の間こそ、その以前四十年を基礎時代としてこれに對する「飛躍時代」といふことが出來るであらう。

中野正剛、社長就任と共に着手された社屋の建築は、福岡市天神町の一角を壓して昭和七年新春劈頭完成し、その近世様式四層建の見事な社屋は、近代的に整備された內容の表徵として輝やかしき社業を語り、新築と同時に設備された關西隨一の「九日式電光高速度輪轉機」は、二臺連結一時間二十四萬枚の驚異的印刷能力を動員して晝夜を分たず增大する發行部數に備へてゐる

この間、昭和五年九月一日には十三段制を採用し、七年二月二十九日新社屋へ移轉、同五月十五日には朝野の名士數千名を大濠公園の大會場に招待して盛大な新築落成祝賀會を擧行し、四月十六日には朝刊二頁を增し、昭和八年十二月から日曜夕刊を發行し、十年二月十一日には更に二頁增を斷行して朝夕刊十六頁を發行したが、五月一日、現森田社長就任と共に果敢斷然一擧十二頁に減頁を斷行し、日曜夕刊を廢止し、九州日報が有する獨自の世界を勇往して亂戰時代の西日本新聞界を風靡し、全國地方新聞界の先頭を進んで新しき活路の指導に任じつゝある。

二、本社姉妹紙

本社は佐賀に佐賀每日新聞、佐世保に佐世保新報、下關に馬關每日新聞の三姉妹社を有し、佐賀、長崎、山口三縣下に覇勢を張つてゐるが、昭和十年九月一日、馬關每日新聞はこれを廢止して、山口縣を起點とする中國への發展は「九州日報」に統制することに改め、現在の姉妹紙は佐賀每日、佐世保新報の兩新聞である。

佐賀每日新聞　佐賀每日新聞は明治四十五年七月二十日創刊、最初「西肥日報」と稱し、國民黨支部の機關紙として政友系の佐賀新聞と對立したが後、福岡日々新聞の姉妹紙佐賀日日新聞發刊されるに及び、西肥日報は九州日報の姉妹紙として「佐賀每日新聞」と改題合併、佐賀縣下に勢力を張つて今日に及んでゐる。社長は初代田崎慶一、次いで大正三年辯護士豐增龍次郎と更迭し、第三代は藤津郡の長老中野權六、大正五年からその逝去の大正十年五月まで社業に專念したが、逝去と同時に西肥日報との合併成り、西肥日報社長西英太郎社長となり、昭和五年西英太郎逝去と共に再び豐增龍次郎社長となつたが、間もなく國民同盟の關係から豐增社長辭任、その後は社長を置かず、主幹島崎雅臣、事實上の社長として經營一切を擔當し、現在佐賀縣下に於ける發行數は斷然第一位を占めてゐる。

佐世保新報　佐世保新報は明治三十六年六月三日、日露戰爭を前に軍都佐世保に創刊せられ、創立者佐賀縣杵島郡出身の遠藤十郎社長として經營に任じたが、大正四年一月、九州日報の姉妹紙となり、同時に島崎雅臣主幹として經營に任じた。大正十五年島崎主幹佐賀每日に轉じ、爾來社勢振はなかつたが、昭和十年現社長大坪虎三郎就任し、佐賀每日島崎主幹兼務してこれを補佐するに至り、社業隆々、長崎縣下を席捲しつゝある。

馬關每日新聞　明治新政府組織されて、長州人は我も〳〵と官途を志したが、その中に官途を遂はぬ若い志士が三人あつた。その中の一人、下關に相場會所(後の米取引所)を起した後の米取引所理事長豐永長吉が、明治八年發行した經濟新聞が後の馬關每日新聞である。從つて馬關每日新聞が商業機關として經濟界を啓發した事績は僅少ではない。第二代社長は永積安兵衛。次いで株式組織に改められるや、勤王家白石正一郎の孫に當る白石鐵太郎が社長となり、第四代社長土井重吉就任して合資組織に變更、大いに縱橫の發展を遂げたが、土井は下關經濟界の中心人物としてあらゆる商業會社の社長重役を兼ね、多忙であつた爲に社長の椅子を安井作太郎に讓つた。しかしながら安井も下關物品問屋組合の理事長として多忙の身であつたので、代表重役として梶永吉藏を擧げて經營一切に當らしめた。この時代に至つて馬關每日新聞は漸く商業機關としての色彩を失ひ政治色彩が濃厚となり、ここに於て別に「下關物價日報」と題する小新聞が發行されたが、これが後の關門日々新聞である。安井、梶永等が退いて秋田寅之助が第六代社長となつたのは大正元年であつた。秋田社長は機略縱橫、よく社運を挽回したが、代議士に當選して以來は再び社勢振はず、遂に昭和三年九州日報の姉妹紙となつて、九州日報社勢の中國進展の基點となつて發展したが、昭和十年、「九州日報」の題字に統一されて、「馬關每日新聞」としての永い歷史を葬り、更生飛躍の一路を邁進、中國筋への大量進出を試みつゝある。

三、本社の主なる主催事業

全日本學童揮毫會

全日本學童揮毫會は大正四年、大原義剛社長時代の創始である。當時、やや不審を買ひ、同人の出頭を求めて席上揮毫をなさしめたが、全くの實力と分つて審査員を唖然たらしめた。爾來連綿四十五回、「新年」「七夕」の本社主催學童揮毫會は、福岡縣を中心とする全九州の書方教育の指針となり、兒童書き方の向上、書道を通じての日本精神教育に寄與するところ多く、教育界の絶大なる感謝と後援を受けて年一年と發展膨張し、昭和九年一月には各校から選拔された應募作品は六萬に達するに至つたので、山口編輯局長等の主唱に依つてこれを本社の手に壟斷せず、組織を擴大することになつた。卽ち社內よりは會長に本社長を、副會長に編輯局長、幹事に、學藝部長及び庶務部長を任じ、地元福岡縣知事を總裁に推戴し、九州山口各縣知事を顧問に、福岡縣教育會長及び九州山口各縣學務部長を參與に、副會長には文の祖神官幣中社太宰府神社宮司を加へ、審査長福岡縣學務課長、副審査長福岡縣視學官審査員は九州各縣男女師範附屬主事、中等學校書道教諭を任命し、從來の個人賞の外に優秀學校に對する「學校賞」を制定し、秀逸より選拔されたる人々によつて席上揮毫審査をなすことになつたが、この大改革によつて應募作品は一躍十萬を突破した。續ひて初代總裁小栗一雄(時の警視總監)は席上揮毫に於ける兒童の態度に感激して「小栗賞」を贈り、文部大臣松田源治は文部大臣賞を贈つたが、文部大臣賞及び小栗賞を最初に獲得した學校は福岡師範附屬小學校であつた。二十數年營々として捧げ來つた本社のこの貢獻はこの頃に至つて漸く賞讚と感謝をもつて酬ゐられ、地元久世福岡市長よりは市長賞

備された關西隨一の「九日式電光高速度輪轉機」は、二臺連結一時間二十四萬枚の驚異的印刷能力を動員して晝夜を分たず增大する發行部數に備へてゐる

この間、昭和五年九月一日には十三段制を採用し、七年二月二十九日新社屋へ移轉、同五月十五日には朝野の名士數千名を大濠公園の大會場に招待して盛大な新築落成祝賀會を擧行し、四月十六日には朝刊二頁を增し、昭和八年十二月から日曜夕刊を發行し、十年二月十一日には更に二頁增を斷行して朝夕刊十六頁を發行したが、五月一日、現森田社長就任と共に果敢斷然一擧十二頁に減頁を斷行し、日曜夕刊を廢止し、九州日報が有する獨自の世界を勇往して亂戰時代の西日本新聞界を風靡し、全國地方新聞界の先頭を進んで新しき活路の指導に任じつゝある。

二、本社姉妹紙

本社は佐賀に佐賀毎日新聞、佐世保に佐世保新報、下關に馬關毎日新聞の三姉妹社を有し、佐賀、長崎、山口三縣下に覇勢を張つてゐるが、昭和十年九月一日、馬關毎日新聞はこれを廢止して、山口縣を起點とする中國への發展は「九州日報」に統制することに改め、現在の姉妹紙は佐賀毎日、佐世保新

佐世保新報　佐世保新報は明治三十六年六月三日、日露戰爭を前に軍都佐世保に創刊せられ、創立者佐賀縣杵島郡出身の遠藤十郎社長として經營に任じたが、大正四年一月、九州日報の姉妹紙となり、同時に島崎雅臣主幹として經營に任じた。大正十五年島崎主幹佐賀毎日に轉じ、爾來社勢振はなかつたが、昭和十年現社長大坪虎三郎就任し、佐賀毎日島崎主幹兼務してこれを補佐するに至り、社業隆々、長崎縣下を席捲しつゝある。

馬關毎日新聞　明治新政府組織されて、長州人は我も〳〵と官途を志したが、その中に官途を遂はぬ若い志士が三人あつた。その中の一人、下關に相場會所(後の米取引所)を起した後の米取引所理事長豐永長吉が、明治八年發行した經濟新聞が後の馬關毎日新聞である。從つて馬關毎日新聞が商業機關として經濟界を啓發した事績は僅少ではない。第二代社長は永積安兵衛。

となつたが、間もなく國民同盟の關係から豐增社長辭任、その後は社長を置かず、主幹島崎雅臣、事實上の社長として經營一切を擔當し、現在佐賀縣下に於ける發行數は斷然第一位を占めてゐる。

次いで株式組織に改められるや、勤王家白石正一郎の孫に當る白石鐵太郎が社長となり、第四代社長土井重吉就任して合資組織に變更、大いに縱橫の發展を遂げたが、土井は下關經濟界の中心人物としてあらゆる商業會社の社長重役を兼ね、多忙であつた爲に社長の椅子を安井作太郎に讓つた。しかしながら安井も下關物品問屋組合の理事長として多忙の身であつたので、代表重役として梶永吉藏を擧げて經營一切に當らしめた。この時代に至つて馬關毎日新聞は漸く商業機關としての色彩を失ひ政治色彩が濃厚となり、ここに於て別に「下關物價日報」と題する小新聞が發行されたが、これが後の關門日々新聞である。安井、梶永等が退いて秋田寅之助が第六代社長となつたのは大正元年であつた。秋田社長は機略縱橫、よく社運を挽回したが、代議士に當選して以來は再び社勢振はず、遂に昭和三年九州日報の姉妹紙となつて、九州日報社勢の中國進展の基點となつて發展したが、昭和十年、「九州日報」の題字に統一されて、「馬關毎日新聞」としての永い歷史を葬り、更生飛躍の一路を邁進、中國筋への大量進出を試みつゝある。

三、本社の主なる主催事業

全日本學童揮毫會

全日本學童揮毫會は大正四年、大原義剛社長時代の創始である。當時、やうやく硬筆萬能時代で、毛筆廢止說さへ擡頭し、小學教育に於ける書方の價値は閑却され、跛行的教育の疲害は識者の憂慮を加ふるものがあつた。全日本學童揮毫會は、この時弊を矯正すべく、教育者出身の社員安東重文等が創始するに至つたものである。第一回は福岡師範學校主事藤本萬治、福岡女子師範主事太田光二、及び本社客員水野疎梅を審査員として福岡市を中心とする小範圍に募集したが應募一千點に達した。作品中福岡市大名校の陶山水城の作品は兒童の作品と思へぬあまりに見事な出來榮えであつた爲に審査員の不審を買ひ、同人の出頭を求めて席上揮毫をなさしめたが、全くの實力と分つて審査員を啞然たらしめた。爾來連綿四十五回、「新年」「七夕」の本社主催學童揮毫會は、福岡縣を中心とする全九州の書方教育の指針となり、兒童書き方の向上、書道を通じての日本精神教育に寄與するところ多く、教育界の絶大なる感謝と後援を受けて年一年と發展膨張し、昭和九年一月には各校から選拔された應募作品は六萬に達するに至つたので、山口編輯局長等の主唱に依つてこれを本社の手に壟斷せず、組織を擴大することになつた。即ち社内よりは會長に本社長を、副會長に編輯局長、幹事に、學藝部長及び庶務部長を任じ、地元福岡縣知事を總裁に推戴し、九州山口各縣知事を顧問に、福岡縣教育會長及び九州山口各縣學務部長を參與に、副會長には文の祖神官幣中社太宰府神社宮司を加へ、審査長福岡縣學務課長、副審査長福岡縣視學官審査員は九州各縣男女師範附屬主事、中等學校書道教諭を任命し、從來の個人賞の外に優秀學校に對する「學校賞」を制定し、秀逸より選拔されたる人々によつて席上揮毫審査をなすことになつたが、この大改革によつて應募作品は一躍十萬を突破した。續ひて初代總裁小栗一雄(時の警視總監)は席上揮毫に於ける兒童の態度に感激して「小栗賞」を贈り、文部大臣松田源治は文部大臣賞を贈つたが、文部大臣賞及び小栗賞を最初に獲得した學校は福岡師範附屬小學校であつた。二十數年營々として捧げ來つた本社のこの貢獻はこの頃に至つて漸く賞讃と感謝をもつて酬ゐられ、地元久世福岡市長よりは市長賞を、福岡出身の内閣總理大臣廣田弘毅よりは廣田賞を、舊藩主黑田侯爵家よりは黑田賞をそれ〴〵贈與され、現在應募十五萬、名實共に東洋一としての榮譽を保有してゐる。

各種運動競技大會

九州日報のスポーツ界に致せる力は誇り得べきものがある。卽ち昭和十一年伯林に於ける第十一回萬國々際オリムピックの日本代表選手團の中に我が

社主催の各大會より生み出せる陸上短距離の谷口睦生（宇土中學出、關西大學在中）三段跳の古田康治（鞍手中學關西大學出、現日鐵八幡勤務）同じく三段跳の戸上研（熊本時習中學出、關西大學在學中）、棒高跳の安達清（關西中學出、早稻田大學在學中）、女子短距離の小宮悅子及び昭和九年ロンドンに於ける世界女子オリムピックに日本代表として出場した鳥栖高女の平島クリ子等は何れも本社主催の西日本中等陸上競技大會が生んだ逸材であり、マラソン代表となつた香川青年の飽玉男も本社主催の門司―福岡間驛傳競走が生んだ選手であり、水上代表中三百米平泳の優勝候補葉室鐵夫（修猷館出、日本大學在學中）及び女子百米自由型の松村昶子（山口高女在學中）は昭和十年の本社主催西日本女子水上の覇者であつた。又排球大會からは極東大會の日本代表となつた雨佐藤（修猷館出）を生み、昭和六年に小倉で行つた西日本中學野球大會からは早大の名左翼手の鶴崎（佐賀中學出）をはじめ納家投手（浪花商業出、法政投手）松廣（浪花商業出現明大）當時黄金時代の小倉工業から植田投手（一時早大、立命に入る）及び東京巨人軍の最强打者と謳はれてゐる新富名三壘手、專修大學に入つた田才遊擊手等名手を生み、中等學校相撲大會は全國的に屈指の古い歷史を持ち、不振勝ちの九州學生相撲界に非常な貢献をなし、昭和九年には全國中等學校選拔渡米軍の中に本社大會の生んだ東筑中學の田籠の名を見せ、昭和九年には三年連續優勝した長崎師範が大毎の全國大會で制覇の大業を成就し九州健兒のため萬丈の氣を吐くなどの事あり皇太子殿下御降誕記念として昭和十一年第三回大會を開催したる學童武道大會は少年選手の意氣を高め、現に小學校に武道正課採用說の有力な導火線となつて居り、一時中絶して居る全九州都市對抗ラグビーは全國的にも新聞社主催として唯一の誇りを持つものであつた。又西日本高專の卓球大會は文字通り西日本に於ける唯一の大會として重要視され、近來非常な勃興振りを示してゐる。拳闘に對しては九州に拳闘を移入した本社の獨占するところであり、その發達に貢献してゐる。現在本社直接關係の每年定期の競技會は廿六回の歷史を持つ中等相撲大會を筆頭に約二十種に及んでゐる。

新興スポーツとして大衆的體育時代の波にのりつゝあるハイキングの提唱指導は本社の早くから主張したものである。尙ほ本社主催の各競技大會には古賀縣體育主事はじめ各學校關係者及び一般民間の各先輩が一丸となつて審判その他の役員として盡力されてゐることは本社の深く感謝してゐる處であり、世に誇り得る點である。

那珂川開き煙火大會及び各地催し物

大博の年中行事の一つとして初夏を飾る本社主催那珂川開き煙火大會は大正六年七月、大原義剛社長時代の創始、最初大阪に眞似て住吉神社の祭禮に屋形船渡御の行事を那珂川で擧行され、これに煙火を用ゐたのが濫觴をなし本社が主催するに至つて今日の盛大を招來した。發起人は八尋利兵衛、石橋彌三、福井平十郎、田中尾和理、和田傳吉、八尋吉太郎、天津卯作等で、昭和三年の川開きにはこれ等發起人の追悼煙火大會を盛大に擧行した。昭十年夏からは大濠公園に於て納涼煙火大會を催し、全九州の各支局に於ても各地の此種催しの主催や後援をなしてゐる。

春日原大納涼場

大正十三年、福岡、久留米間に九鐵急行電車開通し、本社は翌十四年夏から沿線春日原を開拓し、龍神地を圍んだ廣茫幾十萬坪の地に大納涼場を開設した。その規模の廣大、福岡、久留米兩市は勿論沿線一帶の人々は夏の夜ともなればこの樂園に雪崩れ込み盛觀言語に絶したが、近年、春日原一帶の發展につれて中止した。（完）

九州産業發達史

九州産業發達史

の本社主催西日本女子水上の覇者であつた。又排球大會からは極東大會の日本代表となつた雨佐藤(修猷館出)を生み、昭和六年に小倉で行つた西日本中學野球大會からは早大の名左翼手の鶴崎(佐賀中學出)をはじめ納家投手(浪花商業出、法政投手)松廣(浪花商業出現明大)當時黄金時代の小倉工業から植田投手(一時早大、立命に入る)及び東京巨人軍の最强打者と謳はれてゐる新富名三壘手、專修大學に入つた田才遊擊手等名手を生み、中等學校相撲大會は全國的に屈指の古い歴史を持ち、不振勝ちの九州學生相撲界に非常な貢献をなし、昭和九年には全國中等學校選拔渡米軍の中に本社大會の生んだ東筑中學の田籠の名を見せ、昭和九年には三年連續優勝した長崎師範が大毎の全國大會で制覇の大業を成就し九州健兒のため萬丈の氣を吐くなどの事あり皇太子殿下御降誕記念として昭和十一年第三回大會を開催したる學童武道大會は少年選手の意氣を高め、現に小學校に武道正課採用說の有力な導火線となつて居り、一時中絶して居る全九州都市對抗ラグビーは全國的にも新聞社主催として唯一の誇りを持つものであつた。又西日本高專の卓球大會は文字通り西日本に於ける唯一の大會として重要視され、近來非常な勃興振りを示してゐる。拳闘に對しては九州に拳闘を移入した本社の獨占するところであり、その發達に貢献してゐる。現在本社直接關係の毎年定期の競技會は廿六大博の年中行事の一つとして初夏を飾る本社主催那珂川開き煙火大會は正六年七月、大原義剛社長時代の創始、最初大阪に眞似て住吉神社の祭禮に屋形船渡御の行事を那珂川で擧行され、これに煙火を用ゐたのが濫觴をなし本社が主催するに至つて今日の盛大を招來した。發起人は八尋利兵衛、石橋彌三、福井平十郎、田中尾和理、和田傳吉、八尋吉太郎、天津卯作等で、昭和三年の川開きにはこれ等發起人の追悼煙火大會を盛大に擧行した。昭十年夏からは大濠公園に於て納涼煙火大會を催し、全九州の各支局に於ても各地の此種催しの主催や後援をなしてゐる。

春日原大納涼場

大正十三年、福岡、久留米間に九鐵急行電車開通し、本社は翌十四年夏から沿線春日原を開拓し、龍神地を圍んだ廣茫幾十萬坪の地に大納涼場を開設した。その規模の廣大、福岡、久留米兩市は勿論沿線一帶の人々は夏の夜ともなればこの樂園に雪崩れ込み盛觀言語に絶したが、近年、春日原一帶の發展につれて中止した。(完)

九州産業發達史

第一編　緒論

第一章　日本産業革命に於ける九州産業の地位

十八世紀十九世紀の西歐諸國に於て起つた一連の經濟的變化は、誠に根本的、徹底的であり、その變化は單に量の上の變化のみでなく、質に於ける變化であつた。換言すれば、この時代の産業上の變化は、その後の産業界の支配的特質を、それ以前の時代に於ける産業界の特質と本質的に異るものたらあつた。恰も吾日本へ、幕末に、諸外國船舶が、頻りに通商を求めて來航し國內に上下を通じて非常時局を現出せしめたものは、正にこの歐米先進國に於ける産業革命の波濤が、東洋の一小島日本への進出を試み來つたものと考へ得るのである。

日本の産業革命は、云ふ迄もなく、西歐諸國より遙かに遲れて進展した。幕末吾國産業の、少くも若干部門に於て、マニュファクチュアが著しく發展し鹿兒島藩の如き、又佐賀藩、山口藩の如き機械による産業の出現も見出された事實は明らかであるが、これを以て、直ちに日本産業革命の始發期と見ることに對しては、尙若干の異論もあることであらう。

併し乍ら幕末開港と共に、世界經濟への加入、貿易額の激增、諸機械の輸

九州産業發達史

第一編　緒論

第一章　日本産業革命に於ける九州産業の地位

十八世紀十九世紀の西歐諸國に於て起つた一連の經濟的變化は、誠に根本的、徹底的であり、その變化は單に量の上の變化のみでなく、質に於ける變化であつた。換言すれば、この時代の産業上の變化は、その後の産業界の支配的特質を、それ以前の時代に於ける産業界の特質と本質的に異るものたらしめたものであつた。經濟史家はこれを産業革命と呼んでゐる。この産業革命が、略々完成されたのは、西歐に於ては、十九世紀の半であると稱せられてゐるが、それ以來の産業界に支配的となつた制度上の特徴は、云ふ迄もなく、大規模工場制度であり、技術上に於ける機械の支配であつた。卽ち近代的産業制度の普遍化である。而してこの産業資本主義の發展は、自ら生産上の擴大と伴つて、市場範圍の擴張、世界商業の進展を必然ならしむるものであつた。恰も吾日本へ、幕末に、諸外國船舶が、頻りに通商を求めて來航し國内に上下を通じて非常時局を現出せしめたものは、正にこの歐米先進國に於ける産業革命の波濤が、東洋の一小島日本への進出を試み來つたものと考へ得るのである。

日本の産業革命は、云ふ迄もなく、西歐諸國より遙かに遲れて進展した。幕末吾國産業の、少くも若干部門に於て、マニュファクチュアが著しく發展し鹿兒島藩の如き、又佐賀藩、山口藩の如き機械による産業の出現も見出された事實は明らかであるが、これを以て、直ちに日本産業革命の始發期と見ることに對しては、尙若干の異論もあることであらう。

併し乍ら幕末開港と共に、世界經濟への加入、貿易額の激增、諸機械の輸入が特に著しくなつた事實は否定し得ない所であつて、やがて、日本産業革命の訪れるべき日の近きを暗示するものであつた。

日本産業革命は、明治二十七八年にその第一期を見出し、三十七八年に至つて略々完成したる姿を示したと見るを妥當とする樣に考へられる。今日の資本主義的發展の基礎は卽ち三十年―七八年の間に確立されたものと見得るのである。その過程は頗る急速であつたが、より一層その後の發展が急速で

あつたことは世界列國の等しく驚異の眼を以て見る所であつた。日清役後西歐の一角に擡頭したと稱せられる黄禍論は、日露役後一層の著しさを加へ、日本の存在は世界の一注目點となつた。歐州大戰後、日本は國際市場に、特に、飛躍的發展を試み、昭和六年暮の金輸出再禁止後は列國の經濟回復遲々たる中に吾國の經濟界は、寧ろ驚異的發展を示し、其製品は、世界市場を席捲し、再びこゝに、世界列國が小島日本國を怖るゝ、甚だしきものあるに至つた事情は、最近の吾々の耳目に新たな所である。

産業革命の始期に於ても完成に於ても約百年の後進國日本が、今や世界産業界に有力なる地位を占め、世界市場を驚異せしめた、この驚くべき進出力に對する理由づけの詳論は今こゝに敢てする餘裕を持たないのであるが、この急速なる發展を遂げた日本資本主義の基礎石となつた九州産業の重要性については、吾々はこゝで強調する所がなければなるまい。

資本主義的産業は、云ふ迄もなく、機械を以て技術上の基礎とし、それを採用し、機械生産を支配的とする點に、その本質は認めらるべきであらう。生産に於ける變革は、マニュファクチュアに於ては勞働力を基點とし、大規模工業に於ては、勞働要具としての道具機、更には、それの發展したる機械を以て出發點とする。産業革命の根本は卽ち機械の採用より起ると云つても過言ではあるまい。

然るに機械の製作には鐵が根本的原料である。その堅固さ、耐力、品質の多様性等は、この金屬をして機械に必須の原料たらしめ、大工業の基礎たらしめてゐる。更にこれ等機械の運轉に當つて、原動力となる蒸氣の爲めの燃料として、將、製鑛用の基礎的原料として資本主義的産業に忘るべからざる

は、石炭である。この意味に於て、資本主義發展の基礎をなしたものが鐵と石炭であると稱することは、過言でないのみならず、否寧ろ最もうがち得たる言として多くの人々に認められてゐる所である。

所で、九州は封建時代以來、殆んど本邦唯一とも稱し得べき石炭の重要産地であつた。現在の本邦炭業の主要部分が九州によつて占められてゐる事實並にその史的過程は次章以下に詳細に明かにせんとする所であるが、この石炭の主要産地である事は、日本資本主義發展の基礎石が、外ならぬ九州産業にあつたと云ふ事を意味するものと云はねばならない。石炭産地としての九州(特に北九州)が、今や日本内地に二つとして並ぶ所なき大工業地帶となつて、八幡製鐵所を始め、幾多の製鐵、製機械工場の設立を誇つてゐる所以は正に、この資本主義と鐵及石炭の關係を明瞭にこの地方に現實の姿として示してゐるものと云はねばならぬ。

かくて、九州の産業と云へば、現在の吾々にとつては——少くも資本主義社會に棲息し、それにインタレストを有するものには——日本資本主義産業の根源となつた石炭業を意味し、石炭業と云へば、卽ち九州の産業、黒ダイヤ採掘事業を思ひ起すのも、蓋し故なきに非ざる所と云ひ得るであらう。同時にこの石炭を基礎として發展した北九州一帶の製鐵業、機械工業、軍事造船工業等々、これ亦、石炭と必然的に聯關し、相應じた重要九州産業として何人の眼にも映ずることは周知の所である。この鐵と石炭との日本鍵鑰産業を包藏せる北九州の産業こそは、日本産業否、全日本帝國の心臟として、その中心的重要性が認識され、この九州主要産業の史的發展の跡を眺むることは、卽ちその研究の範圍が九州に限らるゝにも拘らず、或程度迄、全日本主要産業の發達史を明かにする試みと云ふも過言でないことを吾々は主張し得るのである。

九州産業發達史は如上の意味に於て、その研究の對象は、日本資本主義發達に於ける鍵鑰産業としての石炭業と製鐵業にその最も大なる關心が向けられねばならないのである。云ふ迄もなく吾人の意圖は主としてこの點にある。が併し、これのみを以て、九州産業の主要なるものゝ全部と見ることは勿論許さるべきではあるまい。九州の産業として特徴的なものは右二産業にあるも、一般的産業として、九州に於ても重要なるものは數多存すること他地方と異らない。從業人口の數的方面より考察するならば、九州に於ても亦他地方と同樣、第一位を占めるものは、恐らく農業であらう。又生産額の上から見ても、次の數字に示される如く、それ〴〵の諸産業は、九州の重要産業たることを失はないものである。

九州主要産業生産額割合表（昭和三年度）

種目	全國産額	九州産額	同上割合
農業	三、四四〇、二四九	五二三、九〇九	〇・一五五
牧畜	二五八、一六〇	三六、二〇四	〇・一四〇

於ては、殆んど農業を唯一最重要の産業としてゐた實情に鑑みて、當然吾々は、九州の特徴的重要産業としての石炭、製鐵、造船業に次いで、農業を擧げ、又林業、牧畜業、水産業の發達狀態も、農業の發達に應じて考究せらるべき重要産業として考察の對象にすべきものと思ふ。現實の生産額を全國のそれと比較した場合、右表に見る如く、最低率を示すものは工業であつて、この點工業は最も九州に貧弱であり、意義も小なるかの如く、一見考へらるるであらうが、事實は、最も古くより發達し、吾國の工業界に長く影響を與へ重要製品を送り出してゐた歴史的な工業品も多く存する事を忘れてはならない。就中、纖維工業としての博多織、小倉織、久留米絣、大島紬等は顯著なものであらう。今日も尙重要品として、それ〴〵の存在を主張してゐるし又最近に於ける延岡市の旭ベンベルクの人絹工場の設立による、その産額の如きも、この方面に於ける重要なる變遷として注目さるべく、その他、筵、製蠟業等も嘗て重要産物たりしものであつて、工業方面には幾多の重要産業が存してゐる。從つてこれ等の工産業の變遷の跡も亦九州産業發達史に於ける時殊性を示す限りに於て、こゝでの研究對象となるであらう。併し乍ら、必ずしも重要な特質を有せず、産額も云ふに足らざる諸産業の多くのもの、

業界に有力なる地位を占め、世界市場を驚異せしめた、この驚くべき進出力に對する理由づけの詳論は今こゝに敢てする餘裕を持たないのであるが、この急速なる發展を遂げた日本資本主義の基礎石となつた九州産業の重要性については、吾々はこゝで强調する所がなければなるまい。

資本主義的産業は、云ふ迄もなく、機械を以て技術上の基礎とし、それを採用し、機械生産を支配的とする點に、その本質は認められるべきであらう。生産に於ける變革は、マニュファクチュアに於ては勞働力を基點とし、大規模工業に於ては、勞働要具としての道具機、更には、それの發展したる機械を以て出發點とする。産業革命の根本は卽ち機械の採用より起ると云つても過言ではあるまい。

然るに機械の製作には鐵が根本的原料である。その堅固さ、耐力、品質の多様性等は、この金屬をして機械に必須の原料たらしめ、大工業の基礎たらしめてゐる。更にこれ等機械の運轉に當つて、原動力となる蒸氣の爲めの燃料として、將、製鋼用の基礎的原料として資本主義的産業に忘るべからざる要産業の發達史を明かにする試みと云ふも過言でないことを吾々は主張し得るのである。

九州産業發達史は如上の意味に於て、その研究の對象は、日本資本主義發達に於ける鍵鑰産業としての石炭業と製鐵業にその最も大なる關心が向けられねばならないのである。云ふ迄もなく吾人の意圖は主としてこの點にある。が併し、これのみを以て、九州産業の主要なるものゝ全部と見ることは勿論許さるべきではあるまい。九州の産業として特徴的なものは右二産業にあるも、一般的産業として、九州に於ても重要なるものは數多存すること他地方と異らない。從業人口の數的方面より考察するならば、九州に於ても亦他地方と同樣、第一位を占めるものは、恐らく農業であらう。又生産額の上から見ても、次の數字に示される如く、それ〴〵の諸産業は、九州の重要産業たることを失はないものである。

九州主要産業生産額割合表（昭和三年度）

種目	全國産額	九州産額	同上割合
農業	三、四四〇、二四九	五二三、九〇九	〇・一五五
牧畜	二五八、一六〇	三六、二〇四	〇・一四〇
林産	三九九、〇二三	六五、八三七	〇・一六四
鑛産	四二二、四六三	二〇三、七二五	〇・四八二
工業	八、三六〇、七〇〇	六八五、一〇六	〇・〇八一
水産	五五六、一一七	八一、〇四〇	〇・一四五
計	一三、四三六、七一二	一、五九五、八二一	〇・一一八

卽ち、農業は、本邦全體として重要根本的産業であると相應じて、九州でも歴史的な重要基本産業であることには變りはない。特に明治以前の社會に於ては、殆んど農業を唯一最重要の産業としてゐた實情に鑑みて、當然吾々は、九州の特徴的重要産業としての石炭、製鐵、造船業に次いで、農業を擧げ、又林業、牧畜業、水産業の發達狀態も、農業の發達に應じて考究せらるべき重要産業として考察の對象にすべきものと思ふ。現實の生産額を全國のそれと比較した場合、右表に見る如く、最低率を示すものは工業であつて、この點工業は最も九州に貧弱であり、意義も小なるかの如く、一見考へらるであらうが、事實は、最も古くより發達し、吾國の工業界に長く影響を與へ重要製品を送り出してゐた歴史的な工業品も多く存する事を忘れてはならない。就中、纖維工業としての博多織、小倉織、久留米絣、大島紬等は顯著なものであらう。今日も尙重要品として、それ〴〵の存在を主張してゐるし又最近に於ける延岡市の旭ベンベルクの人絹工場の設立による、その産額の如きも、この方面に於ける重要なる變遷として注目さるべく、その他、筵、製蠟業等も嘗て重要産物たりしものであつて、工業方面には幾多の重要産業が存してゐる。從つてこれ等の工産業の變遷の跡も亦九州産業發達史に於ける時殊性を示す限りに於て、こゝでの研究對象となるであらう。併し乍ら、必ずしも重要な特質を有せず、産額も云ふに足らざる諸産業の多くのもの、及びこれ等産業と關聯して說き得る産業の如きは、特に一章を擧げて取扱ふことは、省略したいと思ふ。

第二章　九州産業發達の特殊性

所謂日本産業革命に於ける九州産業の重要性に關して大觀した吾々は、今

や、九州産業發達に基礎的關聯を持つ諸要素について、その特異性を究むべき順序に到達した。勿論その詳細なる特殊性を各方面に亘つて檢討する事は限られた紙面に於てよくし得ない所であるから、こゝでは經濟發達の重要條件と考へらるゝ(一)住民、(二)社會制度、(三)自然的條件の三者に關して簡單に述べることゝする。

一　民族的特異性

經濟活動を行ふものは人間である。如何なる國、如何なる地方の經濟もその發達を左右する最基本的なものは、その地に活動する人的要素、即ち住民の資質體力等、換言すれば民族性に依存することは疑ひ得ない。吾が九州の産業發達に於ても亦例外をなすものではない。所で民族的歷史に關しては今尙學者の間に種々の異說を見るのであるが、現在の考古學、人類學等の研究結果は、やはり天孫民族即ちツングース系の優秀民族が主であつたと見るを妥當とする樣である。隼人、熊襲等の所謂原住民と稱せらるゝものも本質的に異る民族とは考へられない。(濱田耕作、東亞考古學研究參照)隨つて九州としての民族的特異性は認められない樣に思はれる。だが併し、單に天孫民族が主要な構成員であると云ふだけでその特性を塗り潰して終つてはならない。通說の教ふる所に從へば、九州は尠くとも天孫族到着の最初の地であり、本邦文化發祥の地である。そこに自ら本州や四國、北海道等々と異る精神的特徵が現はれ、この歷史的事情は後述せんとする自然的條件と相伴つて特異の氣質、性格、智力、體力を住民の上に生み出した事を知り得る。

我が國に關する文獻中最古のものたる魏志倭人傳中に「禾稻を種え紵麻蠶桑を緝績し、細紵縑緜を出す云々」とあり、その對象地、耶馬臺國が九州だとの有力說に見ても、古代九州の産業に於ける進步の程度が知られ、この地方と支那、朝鮮との關係が推察せられる。神功皇后の御事蹟について考ふるも、亦これ等地方との交通の中心地が九州であつた事は否定し得ず、由來長く外國文化移入の門戶となつた。就中、中世末以來、八幡船を以て知らるゝ海賊(一種の海外貿易家)に、鐵砲の傳來に、諸外國人(葡萄牙、和蘭、英人等)との通商に、九州はその根據地たるの觀を呈し、九州人にして海外貿易家たりし者は頗る多かつたのである。博多の三商傑(島井、神屋、大賀)はその最も著名なものであり、末次、伊藤等々も長崎貿易家であつた。彼等は何れも宏壯濶達な氣宇と氣槪とを以て九州人の意氣を發揮した大商人である。同時に大名の中でも早くより諸外國と關係を持つたものが多い。宗教的意義より從來觀察せられてゐた大友、有馬、大村諸氏の天正年間ローマへの使節派遣はあまりにも有名な事實であるが、その他の大名にもキリスト教に歸依し、好を通じたものは一、二に止らなかつた。(當時の調査によると天主教信者は日本全國で約十五萬人、中十一萬五千人は九州人であつた)そしてこの

の發達を左右する最基本的なものは、その地に活動する人的要素、卽ち住民の資質體力等、換言すれば民族性に依存することは疑ひ得ない。吾が九州の産業發達に於ても亦例外をなすものではない。所で民族的歷史に關しては今尙學者の間に種々の異說を見るのであるが、現在の考古學、人類學等の研究結果は、やはり天孫民族卽ちツングース系の優秀民族が主であつたと見るを妥當とする樣である。隼人、熊襲等の所謂原住民と稱せらるゝものも本質的に異る民族とは考へられない。（濱田耕作、東亞考古學研究參照）隨つて九州としての民族的特異性は認められない樣に思はれる。だが併し、單に天孫民族が主要な構成員であると云ふだけでその特性を塗り潰して終つてはならない。通說の教ふる所に從へば、九州は尠くとも天孫族到着の最初の地であり、本邦文化發祥の地である。そこに自ら本州や四國、北海道等々と異る精神的特徵が現はれ、この歷史的事情は後述せんとする自然的條件と相伴つて特異の氣質、性格、智力、體力を住民の上に生み出した事を知り得る。

我が國に關する文獻中最古のものたる魏志倭人傳中に「禾稻を種え紵麻蠶はその最も著名なものであり、末次、伊藤等々も長崎貿易家であつた。彼等は何れも宏壯濶達な氣宇と氣概とを以て九州人の意氣を發揮した大商人である。同時に大名の中でも早くより諸外國と關係を持つたものが多い。宗教的意義より從來觀察せられてゐた大友、有馬、大村諸氏の天正年間ローマへの使節派遣はあまりにも有名な事實であるが、その他の大名にもキリスト教に歸依し、好を通じたものは一、二に止らなかつた。（當時の調査によると天主教信者は日本全國で約十五萬人、中十一萬五千人は九州人であつた）そしてこの大名の信仰には、その根抵に、貿易利潤への着眼といふ經濟的基礎や鐵砲を買入るゝ便宜の爲めと云ふ政治的意義が忘るべからざる重要原因として存したのである。かくの如き史的事實は、それ自身が九州人の民族的資質を示すものであると共に、後の人々に對しても一層宏大な進取的性格を涵養せずには措かなかつた。彼等の心身には祖先偉人の英雄的血潮が流れ、活潑なる氣性が溢れて今日に及んだのである。

今若し試みに我國民性に顯著なる二つの型を考ふるならば、一は退嬰的悲觀的要素を多分に持つ東北型であり、他は正にこれに對蹠的な九州型とも名付くべきものがあると云ひ得よう。豪壯にして樂觀的進取性を多く見出す。——その反面として不遜性の缺點も亦多いが——かゝる住民の資質は彼等の經濟的指導概念の上に常に決定的重要意義を示し、諸他の地理的自然的事情と相俟つて、傳統的に社會的に經濟活動の上に、隨つて產業發達の上に大なる影響を及ぼしたのである。

古代フエニキヤの商業發達が、その國民性の濶達に依存する所大なるものがあつた事を知る吾々は、今九州產業の史的發展を眺むるに當つても絕えずかゝる住民の資質を念頭に置いて進むべきであらう。

人的要素として今一つ吾々の注意せねばならぬことは、その數量的變遷の實際である。

九州の人口は年代と共に如何に增減したか？如何なる遷變過程を經たか？最も重要な問題にも拘らず、明治中期に至る迄の統計の不備の故に、正確なる數字を示し得ないことは甚だ遺憾である。たゞ現存資料の不充分を省みず推定的にその增減の跡を辿るならば大體左表の如くなるであらう。

九州人口增減表

年代	一條帝の頃（九八六—一〇〇一）	天文年間	元祿三年	享保十九年
人口數	一、五六、〇〇〇	一、六五、〇四八	三、五一七、〇九三	三、〇四六、三二六

年代	寬延三年（一七五〇年）	寶曆六年（一七五六年）	文化元年（一八〇四年）	天保五年（一八三四年）
人口數	三、一六五、三七）	三、三六、一四七（豐前肥後を缺く）	三、二九九、六九七	三、四四九、七三三

年代	弘化三年（一八四六年）	嘉永五年（一八五二年）	明治五年（一八七二年）	明治十八年（一八八五年）
人口數	三、四六八、〇四五	三、四三、二七七	五、二八、二五五	五、四五〇、九三七

年代	明治三十六年	大正二年
人口數	六、七七二、六〇〇	七、七〇二、六〇〇

これによつて見れば、大體に於て九州の人口は、明治維新前迄は增加率頗る低く、時には減少の事もあつた事は、他地方と多く異らない。古代より中世に至る迄のこの地方の人口は、恐らく他に見得ざる特殊性を持つのではないかと想像せらるるが、今、資料を以てこれを示すことは困難である。近世に於て特記すべきは享保十七年の所謂西國筋蝗害飢饉による人口の減少である。貝原常春は朝野雜載の中で國內人口が半減し、荒地が頗る增加した事を述べてゐる。以て、人口數の消長と產業發達との相關々係を察することが出來るのであるが之等の點に關しては、嘗て、筑前藩を對象として稍詳述したからこゝでは深く觸れないことゝする。（拙稿「福岡藩の人口政策」福日新聞昭和六年十一月六日——十二日、參照）。

二　社會組織上に於ける特異性

日向に天孫民族の降臨を信ずる者も、或は北九州にその地點を求めんとする論者も共に九州が日本文化輸入の入口となり古代に於ける中心點たりし事に異存はない。隨つて、太古から特異な、政治制度や財產制度が考へ得られるのであるが、最も注目すべきは、中世の太宰府を根據とした政治組織であり、近世に於ける外樣大名統制政策としての德川氏による代官制度であらう。中

世の太宰府に於ける都府樓を中心とした當時の政治組織や、社會組織は、現存の都府樓址に於ける諸遺跡や考古學的諸遺跡乃至、近隣北九州に於ける當時の社會經濟事情を物語る諸資料等によつて、次第に明らかにせられ來つたものゝ樣である。

當時我が國に於て最も困難且つ惱みの種となつた事は、支那、朝鮮との國際關係であつた。卽ち天智天皇の二年八月に吾國軍韓半島に於て唐羅聯合軍のために大敗し、西海方面に嚴重な防備の必要が論ぜられた。

同三年には對馬壹岐島筑紫國等に防人と烽を置き又太宰府に水城を築き、こゝに政治外交上の中心としての太宰府が定置されたのである。天皇は從來の三韓との古い緣を斷つて、銳意國力の充實に努められた。そして國內制度の整備が實現され太宰府の設置がなされたものである。爾來太宰府は任那の日本府に代るべき外交の政廳として、又九州二島の總括官廳として大君の遠つ御門と稱せられてゐる。

政治外交の中心が存する爲めには、必然的にそれを可能ならしむる經濟的基礎が前提される。

今當時の莊園農を中心として行はれた、この地方の農業生產關係を明らかにすることは充分の餘裕を持たないが、この太宰府を中心として、九州の政治、經濟は統制され、指導せられて行つた事は爭ひ得ない。京よりの指令は凡の地に於て、全九州に命令せられ、又、外國との交涉は全部こゝで一應取扱つた後、中央京の指令を待つの實情であつた。隨つて、文化の輸入に於ては、少くとも全國何れよりも一步進んでゐた事が明らかである。同時にこれは、中央と九州特に北九州が早く交通も開け、商品交換等も行はるべき必然性を有したことを意味するものでなければならない。以來、九州が、外國貿易の中心門戶として、博多、坊ノ津、平戶、長崎、馬關等が、相繼いで重要外國貿易港となつてゐた事情も自ら理解し得る所である。

近世に至つて、九州の政治的中心は筆者の考へる所では豐後國日田にあると信ずる。德川幕府が、九州の中心點であり、要害の地として、こゝに代官を置き、全九州の諸藩の動靜を覗はしめたのである。

德川幕府の獨裁專制政治は、九州に於て日田代官に依つて、實現せられ、諸侯は少くも之に表面上從はねばならなかつた。この事は、この地に於ける自然的諸條件と相俟つて、經濟的發展をも齎らし、こゝに、九州金融の中心地日田町の發展が見られ、諸侯に對する高利貸資本として暴威を振つた「日田金」の生成發展も見られたのである。この點に關しては、拙著「日田金」の研究に詳論して置いた。この幕府を代表する代官（後に郡代となる）、九州諸侯との關係、幕府と代官との關係に相照應して、江戶と日田・長崎、大阪と日田・長崎、京都と日田・長崎と日田等々に特殊密接な幾多政治的經濟的關係を生じ、以て九州の特殊事情を示す基礎となつたのである。特にこの地に封ぜられた大名が何れも外樣大名であつて、幕府が最も注目し怖れこれが壓服に苦心してゐた政治的理由は、こゝに諸產業の發達に於ても特殊な影響を及ぼさねば止まなかつた。鹿兒島藩が早く密貿易をなし、外國の產業知識を輸入して、著しく進步したる產業發展を見たるが如き、佐賀藩に於て幕末に英國の商會と共同して石炭業の經營を行ひたるが如き、何れも幕府と離れたる反抗的諸藩に於ける產業發達の事情を示すものと云はねばならない。

三　自然的地理的諸特徵

或る考へ方によれば、活動する人間自身が既に一の自然であるとも云へよう。しかも彼等の精神力の偉大さの故に、人間は自らこの自然から跳躍してある程度の獨立の生活をなし得る。が併し、この自然的地理的事情と無關係に彼等の經濟生活は絕對に行はれ得ない。

A、土地　人間活動の舞臺たる土地に關して吾々が、極めねばならぬ所は地勢、地質、地域、地位等に關してゞある。

地勢と地質——地勢とは土地の高低起伏、山林原野の分布、河海湖沼の配置狀態等を指すのであるが、九州の地形は、北は英彥山に起つて南は霧島山に至る中央を南北に縱貫する高さ一五〇〇米以上を呈する九州山脈に依つて東西の二部に分ち得る。此の山脈中には久住、祖母、國見、韓國嶽の如き一七〇〇米以上の高峰が諸所に存し九州を氣候的に區分する重要なる役割を演ずる。東半部は祖母山より佐伯灣に至る分岐に依つて、より以北の瀨戶內海流域と、より以南の太平洋流域とに分れる。西部も同樣で英彥山より背振山脈を經て北彼杵半島の中央山地に依つて劃せられた對馬海峽に面する部分と一般に九州に熱帶的乃至亞熱帶式な產業すら發達し得るのは、多くこの潮流と季節風との關係であると稱せられてゐる。

河川としては、北部には遠賀川、那珂川、松浦川等あり、その沿岸に小平野を開くのみであるが、西側には筑後川、矢部川、嘉瀨川、六角川等がありその流域には肥前、筑後の大平野が連り、こゝに有數の農產物が發展する。

土壤は熔岩地帶及び火山灰地帶の多いだけ地味肥え、且氣溫が夏は高く冬は低くしてその較差の大なる爲め米の如き夏季の作物に幸する所が大きい。

海岸線の最も長い事情は交通、貿易、造船業等に影響があるは勿論であるが、尙その外に、水產業の發達に影響の大なるは云ふ迄もない。九州の水產業が久しく重要產業となつてゐた所以も亦こゝに存する。

土壤と關聯して地層の問題は鑛山業に大なる關係を有する。石炭の主要地層を大觀すれば、臼杵より九州の胴體を西南に貫き、八代附近を過ぎて甑島の東に走る所謂臼杵、八代線以北の區域がその地層を有してゐる。そこに有する炭田は、或は古期岩層の山地によつて互に相隔てられ、或は新期の沖積層によつて蔽はれた陷沒地によつて境され、相互の關係を明かになし難いが、各炭田に於ける炭層の層序は極めてよく一致し炭質並にそれに含まれる

こゝに政治外交上の中心としての太宰府が定置されたのである。　天皇は從來の三韓との古い緣を斷つて、銳意國力の充實に努められた。そして國內制度の整備が實現され太宰府の設置がなされたものである。爾來太宰府は任那の日本府に代るべき外交の政廳として、又九州二島の總括官廳として大君の遠つ御門と稱せられてゐる。

政治外交の中心が存する爲めには、必然的にそれを可能ならしむる經濟的基礎が前提される。

今當時の莊園農を中心として行はれた、この地方の農業生產關係を明らかにすることは充分の餘裕を持たないが、この太宰府を中心として、九州の政治、經濟は統制され、指導せられて行つた事は爭ひ得ない。京よりの指令はりの地に於て、全九州に命令せられ、又、外國との交涉は全部こゝで一應取扱つた後、中央京の指令を待つの實情であつた。隨つて、文化の輸入に於ては、少くとも全國何れよりも一步進んでゐた事が明らかである。同時にこれは、中央と九州特に北九州が早く交通も開け、商品交換等も行はるべき必然自然的諸條件と相俟つて、經濟的發展をも齎らし、こゝに、九州金融の中心地日田町の發展が見られ、諸侯に對する高利貸資本として暴威を振つた「日田金」の生成發展も見られたのである。この點に關しては、拙著「日田金」の研究に詳論して置いた。この幕府を代表する代官（後に郡代となる）、九州諸侯との關係、幕府と代官との關係に相照應して、江戶と日田・長崎、大阪と日田・長崎、京都と日田・長崎と日田等々に特殊密接な幾多政治的經濟的關係を生じ、以て九州の特殊事情を示す基礎となつたのである。特にこの地に封ぜられた大名が何れも外樣大名であつて、幕府が最も注目し怖れこれが壓服に苦心してゐた政治的理由は、こゝに諸產業の發達に於ても特殊な影響を及ぼさねば止まなかつた。鹿兒島藩が早く密貿易をなし、外國の產業知識を輸入して、著しく進步したる產業發展を見たるが如き、佐賀藩に於て幕末に英國の商會と共同して石炭業の經營を行ひたるが如き、何れも幕府と離れたる反抗的諸藩に於ける產業發達の事情を示すものと云はねばならない。

三　自然的地理的諸特徵

或る考へ方によれば、活動する人間自身が既に一の自然であるとも云へよう。しかも彼等の精神力の偉大さの故に、人間は自らこの自然から跳躍してある程度の獨立の生活をなし得る。が併し、この自然的地理的事情と無關係に彼等の經濟生活は絕對に行はれ得ない。

A、土地　人間活動の舞臺たる土地に關して吾々が、極めねばならぬ所は地勢、地質、地域、地位等に關してゞある。

地勢と地質——地勢とは土地の高低起伏、山林原野の分布、河海湖沼の配置狀態等を指すのであるが、九州の地形は、北は英彥山に起つて南は霧島山に至る中央を南北に縱貫する高さ一五〇〇米以上を呈する九州山脈に依つて東西の二部に分ち得る。此の山脈中には久住、祖母、國見、韓國嶽の如き一七〇〇米以上の高峰が諸所に存し九州を氣候的に區分する重要なる役割を演ずる。東半部は祖母山より佐伯灣に至る分岐に依つて、より以北の瀨戶內海流域と、より以南の太平洋流域とに分れる。西部も同樣で英彥山より背振山脈を經て北彼杵半島の中央山地に依つて劃せられた對馬海峽に面する部分と更に此連峰と島原半島、天草諸島等に依つて中央山脈との間に劃せられた中央盆地部とに分ち得る。これ等の地形は、云ふ迄もなく、この地の氣候に決定的な影響を與へ、その地に於ける產物にそれ〴〵の變化特徵を與へてゐるのである。海流は黑潮と其の分派對馬海流がある。黑潮本流は屋久、奄美大島間を北東流し其の分派は日向灘、豐後水道を北流し、一部分は遠く瀨戶內海までも流入する形跡がある。

一般に九州に熱帶的乃至亞熱帶式な產業すら發達し得るのは、多くこの潮流と季節風との關係であると稱せられてゐる。

河川としては、北部には遠賀川、那珂川、松浦川等あり、その沿岸に小平野を開くのみであるが、西側には筑後川、矢部川、嘉瀨川、六角川等がありその流域には肥前、筑後の大平野が連り、こゝに有數の農產物が發展する。

土壤は熔岩地帶及び火山灰地帶の多いだけ地味肥え、且氣溫が夏は高く冬は低くしてその較差の大なる爲め米の如き夏季の作物に幸する所が大きい。

海岸線の最も長い事情は交通、貿易、造船業等に影響があるは勿論であるが、尙その外に、水產業の發達に影響の大なるは云ふ迄もない。九州の水產業が久しく重要產業となつてゐた所以も亦こゝに存する。

土壤と關聯して地層の問題は鑛山業に大なる關係を有する。石炭の主要地層を大觀すれば、臼杵より九州の胴體を西南に貫き、八代附近を過ぎて甑島の東に走る所謂臼杵、八代線以北の區域がその地層を有してゐる。そこに有する炭田は、或は古期岩層の山地によつて互に相隔てられ、或は新期の沖積層によつて蔽はれた陷沒地によつて境され、相互の關係を明かになし難いが、各炭田に於ける炭層の層序は極めてよく一致し炭質並にそれに含まれる化石も甚だよく類似する。從つて是等は元々個々獨立の盆地に無關係に堆積したるもので無く、地質學的に同一なる時期に、同樣の地理的條件の下に堆積したものが、その後の地質的變動及び削剝作用の結果、今日見るが如き分布を來たせるものなることを知り得る。勿論併し、その炭質の善惡炭層の厚薄はそれ〴〵存するのであつて、筑豐の地、長崎等には良質且多量の石炭埋藏せられること人の知る如くである。

B、氣候　九州の氣候は大體廣大な地面たる上に、種々な點から多くの異る氣候區域に分け得るのであるが、一般的に大體の區別をすれば (1)內海區 (2)北海沿海區、(3)中央盆地區、(4)南東區、(5)薩南島嶼區の五に區別せられ得ると思ふ。

內海區は大分縣福岡縣豐前の瀨戸內海傾斜面で、降水少く雨天は最も少く風弱く蒸氣の多いのを特色とする。

北西沿海區は門司より長崎に至る對馬海峽傾斜面で福岡長崎を以て代表せらるゝもの、冬期北西信風の卓越につれ裏日本式氣候を呈する所である。

中央盆地區は中央山脈と北西沿海區との中間地域で熊本、佐賀を以て代表される。稍大陸性氣候を有し、氣溫の較差最も大で冬期の冷え込が強い。降水量は割合に少く風が一般に弱い。時に輻射霧の發生を見る。

南東區は宮崎、鹿兒島兩縣下の太平洋傾斜面で氣溫一般に高く、降水量多く、冬期少雨で日照が著しく多くなる。濕度も相當に高く、降雪を見る事まれである。

薩南島嶼區は沖繩と共に寧ろ黑潮區とでも命名すべき所で、黑潮の影響を最も多分に受け亞熱帶氣候を呈して居る。名瀨の氣候要素がそれを明に示してゐる。

以上の九州に於ける氣候を一言にしていへば、溫暖多雨であるが、しかも冬期は平均最低二度以下に下り、夏期最高平均は二十五度以上三十度以上にも達し濕度も八十度以上に達してゐる。斯の如き九州の氣候上の特質はその產業發達に對し、幾多の影響を及ぼさゞるを得ない。之を例へば、九州の夏期は精神的勞働に對し、將又筋肉勞働に對してもその能率が著しく惡い事を見出すであらう。雨量の多い事情は米作に適するを意味するとしても、春秋の氣候が極めて短かく然も激變性に富む事は他の多くの產業に多大の惡影響を及ぼさゞるを得ない。更に此の氣候が經濟活動の主體たる九州人士の氣風に重大な影響を及ぼす要素たる事を考ふるならば、けだし氣候の產業發達に及ぼす影響又、大なりと云ふべきであらう。

第二編　鑛業發達史

第一章　石炭鑛業

一、序　論

「現代は鐵の時代と呼ばれ、そして鐵があらゆる諸多の事物の原料である事は明かである。その堅固さ、耐力、品質の多樣等にあつて、この金屬は大工業の基礎となり、槓杆となつてゐる。而して蒸氣は、その原動力である。併し乍ら石炭は獨り、充分なる量に於て、鐵に對しても蒸氣に對しても支配的力を持つてゐる。そしてかるが故に、石炭は現代を支配してゐる。卽ち現代は石炭の時代である」(Jevonce. Coal question P. P. 1-2) とは、ジエボンスが、一八六五年正に歐洲產業革命の完成期に至れる際に、その名著「石炭問炭」の開卷第一に述べた言である。

實に石炭は、現代大產業の基礎であり槓杆であつた。歐洲に於て比較的最も產業革命開始の後れたと稱せられる獨逸が、幾何もなくして、最も速かに、力強く世界の資本主義國の中に浮び上り、諸強國に打勝つて、近代產業の優越を獲得した最根本的原因を、「血と鐵に非ずして、實に獨逸帝國の基礎を固めたものは鐵と石炭であつた」(J. M. Keynes) と論ずる事は、必ずしも誇張の言に非ざる事を吾々は見出すのである。同時に、何人もこれ等の事情から、石炭が近代產業發達に如何に重大な意義を持つかを容易に理解し得るであらう。

今日、工業上のエネルギーの四分の三は石炭によつて供給されて居り、船舶に、鐵道に、交通機關の主要燃料となり、就中製鐵工業には最も重要な且、直接的な原料となつてゐる。更に最近に於ては、石炭の乾餾作業が著しく隆盛となり、藥品に、染料に、肥料に、軍需品、食料品等に至る迄、多數の化學工業用品製造に、重要な原材料として利用せられつゝあるのである。その用途、工業上の意義、實に驚くべきものありと云ひ得る。

九州の石炭業も亦、九州產業の生みの親であり、特に、吾國炭業界を支配してゐるものが、常に九州炭であつた所から、九州石炭は、日本資本主義發

三池炭礦　文明年間より農民掘り出す
粕屋炭礦　天保年代
唐津炭田　享保年代
北松浦炭田　寬政年間
西彼杵炭田　寬永年代
宇部炭田　享保年代
磐城炭田　安政年間
茨城炭田　嘉永年間
茅沼　安政年間

明かに九州は歷史的にも第一位——否殆んど主要石炭產地は九州であると見られるのである。

更に最近數年間の石炭產額を地方別に比率を以て示すと、次の如くなつてゐる。

地方別出炭比率表

	明治四十年—四十四年	大正元年—五年	大正六年—十年	大正十一年—十四年	昭和元年—四年	昭和九年
福岡縣	六六%	七七%	六一%	五五%	五六%	五四%
佐賀縣	七		八	七	六	四
			四%	八%	八%	五%
						三%